

---

# 狐に化かされた！

縁の下

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狐に化かされた！

### 【Nコード】

N9284N

### 【作者名】

縁の下

### 【あらすじ】

狐憑き 魔法を知る世界では忌み嫌われる化物として生まれた主人公ハクは、命の危機を救われ、二人の少女に恩を返すことを決める。これはそんな青年の物語。 \*舞台は魔法先生ネギま！でオリジナル主人公が活躍するお話です。 苦手な方はご遠慮を\*

## プロローグ

体は走り続ける。

肺は吸い込まれる空気に耐えきれず悲鳴を上げ続け、四肢をひきちぎれんばかりに酷使する。

自らの丈より遙かに大きな木の間を縫うように進み、茂みをかき分け、極力走り易い道を行く。

背後から迫る殺気という名の視線から逃れるために。

どこまで行っても、いくら駆けても視線を振りほどくことができないのでは、そんな錯覚すら覚える。

常につかず離れず獲物が弱るまで執拗に追いかけて続ける狩人。

いや、仮に狩人というのなら獲物に気づかれずに一撃で仕留めるのがセオリーといえる。しかし、背後から迫るものにはそんなスマートな方法を駆使するわけでもない。

殺すことを楽しんでいる。

それは“人間”にとって当たり前のことなのかもしれない。

酸欠で掠れる意識の中、漠然とそんなことを思った。

銀を纏った狐　　狐憑き。

自分はそういう種類であると、教えられた。

母親は唯の人であり、父親を見たことはない。だが、母親のおなかの中にいた頃から自意識が目覚めていたのは確かだ。父親が化物の類だったのか、それとも隔世遺伝のようなものなのか。自分の中ではつきりしているのは、何かが自分と混じり合ったような奇妙な感覚があるということか。

自分が産まれた時、母親は何を思っただろうか。

元氣な赤子が産まれることを期待し、そして裏切られたことに対して。

迫害される身である自分を産み落としたとき、憎くなかったのだろうか。

それはずっとわからない。

母親は自分の為に姿を消し、二人で山奥で暮らしていた。

人の身にもあらず、ましてや化物の類である自分とだ。

母は何を思っただのだろうか、病で倒れながらも笑いながら逝った母は。

「ッ」

敵が投擲した何かが体を掠めた。しかし、その影響が胴をえぐりもう長いこと走り続けることができないことは確かだった。

最後の力を振り絞り、考えることをやめ疾駆した。

体は満身創痍、もはやわずかな気力も残っていない。

いつの間にか開けた視界の先に狐は見た。大きな桜の木と共に舞い遊ぶ二人の少女を。

長い漆黒の髪を片側で結った少女がこちらに気づいた。

「このちゃん、狐や！」

やや興奮した声でこちらを見る純粋な瞳。

もはや逃げる気力もなければ、走る体力もない。初めて見る“人間”の子供。願わくば、静かに休ませていただけないだろうか。

意識は暗く沈んでいった。

## プロローグ（後書き）

初投稿です。シリアス展開ですが、話を進めていったらギャグも入  
れていきたいと思えます。

## 第一話 月夜に惑ふ

目が覚めたとき、自分が布団で横になっていることに気付いた。

(……ここは?)

声に出さずに確認する。自分の胴体には白い清潔そうな包帯が巻かれ、わずかに薬品の匂いがした。

命があることから考え、どうやら誰かに保護されたようである。しかし治療までされているのが腑に落ちない。自分は狐憑きであり、見ず知らずの他人から狙われることはあれ、そもそも保護されるということ事態あり得ないと考える。

「あ、起きてる!」

「わあ、ほんまや」

突然、障子が開け放たれ呆然としてみると、二人の少女が自分の周りに寄って来た。

知らず、自分は威嚇の声を上げ布団を撥ね退けた。

「ひゃっ!」

「このちゃん、大丈夫や」

意識が途切れる寸前、自分の事を見ていた少女であることに気付いた。袴のようなものを着ており、凜とした空気を放っている。まだ幼子であるようだが狐の目には理性的に映った。

狐の威嚇に飛び退って凜とした少女の背に隠れてしまったもう一人の子は、上品な桃色の着物に身を包み、もう一人の少女と同じような漆黒の長い髪だ。違いは結っていないことだろう。

「せ、せっちゃん、大丈夫なん?」

「落ち着いて、な？」

背に隠れて怯えている少女をかばいながら、そろそろと手を差し伸べてくる少女。ひどくその声が心地いい。母以外の人と接するとは初めてだったのに、まるで初めて会ったとは思えない懐かしい感じがした。

ゆっくりと、頭を撫でられた。それはとても優しく、幼子とは思えない温かく大きな手に感じた。

「せつちゃん、すごいな」

「このちゃん、大丈夫やから、触ってみ？」

このちゃんと呼ばれた子も、恐る恐るだが自分に触ってくる。不思議と嫌な気がしなかった。いつの間にか自分が威嚇の声を上げるのをやめていることに気がつく。

「この子、名前なんて言うんやろ？ 名前考えてあげへん？」

体を撫でながら、このちゃんという子が言った。おそらく自分の事だろうと狐は思った。ハクという名を持っているが、化物の類であることを知られればまた襲われるかもしれない。子供二人ならどうにでもなると思ったが、口に出すことはしなかった。

「そつやなあ、シロなんてどう？」

せつちゃんという子がそれに答える。「ええな！」と二人で何やらはしゃいでいる。ギンならわかるがどうしてシロなんだろうとか、まあ別にいいかと思う。

(不思議だ)

ハクは心の中でずっと思っていた。母が死んでから人間に追われ

続けていて、警戒を怠ったことのなかったハクが、二人の前で警戒を解いている。ハクも年齢的にはそう彼女たちと変わらないのだが、精神年齢は高かった。

フツと息をつく。

「なんか、今鼻で笑われんかった？」

「ウチもそんな気いしたわ、このちゃん」

そして二人でまたカラカラと笑っていた。

ハクが保護されてからしばらく時間が経った。今ハクが保護されているのは、京都にある関西呪術協会の総本山というべき場所であり、あの二人の少女の名は近衛木乃香、桜咲刹那というらしい。

ここは悪霊や、人に仇なす魔を討滅する組織であり、京都神鳴流という剣術と鍛え上げられた気で悪を払うようだ。

気とは、自分の中にある生命エネルギーの塊であり、それを利用することで自身を強化したり、その気をぶつけることで相手に傷を負わせたりとその用途は様々である。それを神鳴流では極めようと日々修業している。

ハクも生きる術としてわずかに気を練ることができると、正直この門下生レベルにも勝てるとは思えなかった。もちろん、やりようならあるだろうがハクはこぞって争おうという考えを持っていない。

無論、狐憑きとされているハクが今まで無事であったのは一重に、この総本山の長の一人娘である木乃香のおかげであり、怪我をしていて無害であるとかばいだてしてくれる刹那のおかげでもあった。



（彼女たちが自分を狐憑きではなく唯の狐であると思っ  
ているうちにここから離れよう。これ以上は迷惑をかけられない）

ハクはそう考えていた。もしも自分という存在が化物だとわかつたとき、かばいだてしたせいで二人の立場が悪くなることも考えられたからだ。

むしろ、今こうしている間にも考えた通りになっ  
ているかもしれない。そもそも追手は神鳴流の一人だったの  
だろう。ハクを襲うことをやめてくれたようだが、またいつ狙  
われるかわからない。そんな事情もあることを思い苦笑した。  
彼らは魔に関して敏感である。狐のフリをしていても、す  
でに見抜かれてもおかしくはないのだ。

事実、木乃香の父であり、本山の長である近衛詠春は何  
やら含みを持った目でハクを見ていたのは記憶に新しい。

ハクのこうした考えが出るのは、狐憑きという魔が彼に溶  
け込んでおり、狐と称される魂の情報が彼に流れ込み知識やそ  
れに伴う理性を与えているからである、と彼は漠然と理解して  
いた。

狐憑きという特殊な生まれの為、人と関わるのを避けよう  
という判断である。

寝静まった夜、月が隠れた。

今なら何の迷惑もかけずにここを出ていけるだろう。もち  
ろん、この土地から出た瞬間に、自分を討滅しようとする神鳴  
流の追手がかかることも可能性に入れ、気を引き締める。

いや、どう足掻いても逃げ切れることは叶わないだろう。  
この道場を見て、いかに各個人の練度が高いかわかっていた。

自分の中に緊張がうまれる。

四肢で石畳を踏みしめ、鳥居をくぐり玄関を抜けようとする  
が、足を止めた。

頭に浮かぶのは、あのととき好奇心といえど近づいてきて  
くれた刹那だった。

「助けてくれて、ありがとう」

か細い声で呟いた。その声は月夜に消える、はずだった。

「やはり、あなたは……………」

予想外だった。思わず振り返ると、後ろには相変わらずの袴姿の刹那がいたのだ。

こんな自分に優しくしてくれた人、その人を裏切るように出ていく自分を責めに来たのだろうか。

それとも化物だと黙っていたことを怒っているのだろうか。

「……………わかっていたんですか？」

「ええ」

自分の声が震えていた。どうしてだろうか、見つかったことに焦りを感じているのだろうか。

「銀色の狐、狐憑きと呼ばれている忌み子がいることは聞き及んでいました」

(なら、どうして?)

ハクの中で疑問が湧きあがる。

「見逃してくれませんか？」

「それは……………できません」

無駄だとわかっていながら、そう聞いてしまう。自分は化物だ。逃がしてくれるはずがない。だがしかし、もしかしたら。そんなことを考えてしまった。

彼女ならば、と。

「オン」

一言呟く、銀色の狐の姿から、年相応の少年の姿に。そこには月光を受けながら銀色の髪を輝かせる小さな少年が立っていた。肩くらいまでの髪に、白色の身軽そうな装束を身に付けている。顔立ちは幼いながらも整い、成長すれば女性が放っておかないような顔立ちだ。狐の耳と尾がなければほとんど人間と変わりはない。

「それが本当の姿ですか？」

「はい、黙っていてすいませんでした」

自分の声が冷静であることに安心しながら、刹那の口調はいつものものではないことに気づく。

もしかしたら、彼女は自分を討滅するのかもしれない。

息を吐いた。体を弛緩させる。いつでも対応できるように神経を研ぎ澄ませる。

お互いの間に見えない緊張が奔る。

(戦うしかないのか?)

刹那が口を開こうとしたそのときだった。

「危ないッ!」

風を切る音に反応し、地を蹴り刹那へと飛びついた。驚いた顔をしながらも咄嗟の事で反応しきれなかったのかそのまま押し倒される刹那。

「な、何!」

戸惑った声を上げる刹那は、視線の先に突き刺さる刃に顔を青くした。

黒く光る針のような刃、石畳には投擲物であるクナイが突き刺さっていた。しかもつい先ほど刹那が立っていたところをめがけて。

「誰だっ！」

ハクは声をあげた。見つかっているのならば、最早何をしようとか構わないという捨て鉢な気持ちも多分に含まれている。が、彼を冷静にさせていないのはなぜ自分ではなく、刹那が狙われたのか、という点だった。

木の陰からぬつと姿を現すのは黒装束に包まれた何者かだった。腰には長刀を挿している。顔は白い仮面で隠されており、どのような表情をしているのかはわからない。

ただわかることは、ハクにとって敵であること。

「名乗る名は………ない！」

白刃を抜き放ちながら、突進してくる男。駄目だ、逃げられないなぞ？

今までずっと一人で生きてきた。この足で逃げ続けてきた。

逃げられないことなんてない、さあ走れ、駆ける、御前の足は動きだせば疾風の如き韋駄天ではないか？

「シロ………」

小さい声で、不安に怯えながら服の裾を掴む少女を振り切って、走ればいいだけ、だというのに。

(どうして体はこんなにも重い！)

まるで地面に根を生やしたように、自分の体は動くことを拒否し

ていた。

そうわかった瞬間のハクの行動は素早かった。

全身にある力を捻りだすように集中する。

血液の流れを、筋肉の動きを、神経の一本一本を、それらすべてに通っている“気”の存在を認識する。

「刹那さん、離れて」

優しく、そう呟いた。

刹那の手が離れた瞬間、爆発する勢いで男に突進する。

仮面により表情は隠されているが、男が驚愕していただろう。

「化物め！」

その声が突撃してきたハクに叩きつけられる。

男はハクの特攻に合わせるように刀を振るうが、ハクはそれを股下に飛び込むことで回避。

「破っ！」

素早く回り込み、男の背中に体の捻りを加えた回し蹴りを放つ。

わずかに気で強化された一撃は、子供のものといえどそれなりのダメージとなる。無論、その程度の攻撃でなんとかできると慢心するハクではない。

すぐに次の攻撃の為の気を練り上げ、右手に集中させていく。

「ぐっ、貴様ア！」

振り返った瞬間、男は更に驚くこととなる。

「狐火！」

「ぐああああ！」

視界いっぱい青白い炎が広がる。それが頭に直撃したと思った瞬間だった、炎は男の頭にまとわりつき、振り払っても消えることがない、呼吸をしようとすれば喉を焼き、苦しみ悶えている。

「早く、時間を稼いでるうちに長の所に逃げるんだ」

ハクはすぐに刹那に駆けより、声をかける。刹那の目は驚き、ついでコクコクとうなずいた。

「わ、わかった、うちが助け呼んでくる！」

「違う、助けはいらないんだ。早く逃げて！」

神鳴流剣士の助太刀はハクの討滅をも意味する。ハクは刹那が逃げる時間を稼いだ後は自分もここから去る心積もりでいたので、その刹那の発言に困惑してしまう。

「で、でもハクが……、危ない！」

「ッ！」

白刃がすぐ目の前に迫り刹那ごとハクを斬り殺そうとする男に気付いた。狐火は消え、男の顔が焼ける嫌なにおいがしていた。

死を自覚した瞬間、ハクは刹那を抱きかかえ跳躍した。

「ぐがああああ」

もちろん、間に合うタイミングではなく、背中を深く切り裂かれ、身を焼かれたような痛みが奔る。体の感覚が失われていく。このま

までは二人とも殺される。

「シロ、しっかりしてや！ シロ！」

ハクの腕の中で泣きそうになりながら必死に声をかける刹那を見る。

大丈夫、そう言おうとして声が出ないことに気がつく。

痛みがなくなってきた。致命傷なのだろう。ハクの白装束が赤く染まっていく。

あるとき逃げれば良かったのだろうか。

そうすれば、自分は助かっただろうか。

違う、とハクは思った。

目の前の少女に一度助けられたことを思い出す。

だから正しかったと、そう思うことにする。

もともと独りで生き、独りで死ぬ運命なのだ。ならば、誰かの為に死ぬのも悪くない、そう思う。

「シロ！ 死んだらあかん！」

泣きながら叫ぶ刹那に何も言っておげられない。大丈夫だと言っかわりに、もうほとんど動かない手で頭を撫でる。

大丈夫だから

二度と戻ってこないであろう意識を、ハクは手放した。

## 第一話 月夜に惑ふ（後書き）

続けて、一話目です。シロとハクは同一人物なんですが、わかりにくかったらすいません（汗）



## 第二話 安住の地を求めん

「なんでなん？」

冷え切った声で刹那は目の前の男に問う。刹那の腕の中には自分を庇って意識を失ってしまった少年の体がある。今ならまだ助かるかもしれないが、徐々に冷たくなっていく体はその可能性を否定している気がしてしまう。

「御前と同じ化物だからだよ、桜咲刹那」

仮面は割れ、醜い火傷を負った顔で男は笑った。ひどく歪んだ笑み。本当にこの男は討滅の為に彼を襲ったのだろうか。彼が誰かに迷惑をかけたのだろうか。

彼は確かに自分を偽っていた。狐憑きであることを隠し、しばらく生活していた。

自分もうすうす気づいていた。彼は気付いていないのかもしれないけれど、彼と同じ化物である自分にはわかった。

今は、その姿を現し正体を明かして、自分を助けてくれた彼を助けてあげたい。

強く、そう願う。

「許さん」

底冷えした声。歳は四つを数える幼子が発するにはあまりに殺意が込められていた。

少年の体を横たえ、男に向き合う。

自分の中にある混じりものの血を使って目の前の男を滅してしまいたい欲求に駆られる。

「そこまでだよ、刹那」

「お、長様？」

投げかけられた言葉にはっとする。

近衛詠春、本山の長たる彼が静かに佇んでいた。

男の周囲を取り囲むように、神鳴流剣士が集う。気配も何も感じさせず、あたかもその場にいたかのように。

異常ともいえる事態に男は動揺を隠せない。

「お、長様、ちょうど今化物を討滅するところでございます」

今までの余裕はなく、焦った声で男は言った。神鳴流の剣士たちが向ける敵意が男に集中していることに気付いているのだらう。額から汗が流れおちる。

「化物ですか……？」

「そ、そうでございます。神鳴流たる者、化物を討滅することこそが使命であり義務でありますから！」

詠春の穏やかな声に、男はますます焦った声をあげる。それは幼い刹那ですら背筋が寒くなるような殺気。

「はて、その化物とやらはどこにいるのでしょうか？」

にこやかに、されど決して反論を許さない言葉。男は震え上がった。

「それはここにいる混じりもの二人でございます」

言っではならないと理解しながらも男は口にしてしまふ。いや、してしまつた。この場を言い逃れるためのいくつもの言の葉を用意しながらも、男は本音を口にする。男にとって討滅すべき化物と同じ空気を吸うだけでも嫌悪感を催すと言うのに、それが生きていることが我慢ならないといった声だつた。

「化物などどこにもおりません、ここに居るのは二人の幼子と、それに襲いかかる力に溺れた恥ずべき者だけですな」

びくつと男の体のはねる。かつて英雄と呼ばれたサウザウンドマスターの仲間、近衛詠春が発する威圧感に、それ以上の弁解は通じそうになかつた。

「拘束し、速やかに少年に治療を施せ」

「ま、待ってください長！ 自分はただ化物を……」

「くどいっ！」

詠春の声が夜に木霊する。気合いの一声とでも言うのだろうか、威厳と殺気で男は身動き一つ取ることができなかつた。多勢に無勢である身を地面に組みふされ、拘束される。一刻の猶予もない少年も治療術師によって一命を取り留めていた。

「長様、どうかシロを助けてください、お願いします！」

「大丈夫ですよ刹那、うちの治療術師は優秀ですからね」

そういつて優しく微笑む詠春に先ほどまでの威圧感はなく、包み込むような温かい声でウィンクしてみせた。

穏やかな日常だった。

病に侵されながらも常に微笑みを絶やさない母と過ごす毎日、とても楽しかった。

「ハク、あなたはとても聡い子です。いつか独りになっても生き抜いていくことができるわ」

「そんな、無理です、母様がいなくなったら生きていけません……」

泣いていた。生まれてこのかた涙などと無縁の日々を過ごしていたハクにとって母との死別は現実離れしすぎて実感が湧かなかつた。顔は青白く、もう動くことさえできない母は、最期の時まで笑っていた。

「母様！」

思わず叫び、ハクは飛び起きた。見慣れた和室、敷かれた布団の匂い。何もかもがいつも通りで、どうして自分が生きているのかもわからない。

「俺は、どうして？」

わずかに痛みが奔る背中に顔を歪めながら、ハクは自身に何が起こったのか把握する。あの傷でどうして助かったのかはわからないが、自分はまた命を助けられたようだ。

「目が覚めましたか？」

「詠春様」

いまだ視界がはつきりとしないうち、数回ほど聞いた落ち着いた声に顔を向ける。すぐそばに陰陽師特有の白衣に身を包んだ詠春が正座していた、眼鏡の奥の汚れない瞳に吸い込まれそうな錯覚を覚える。

しかし同時に気付いた、狐憑きである自分がどうして生かされているのか、疑問が湧きあがる。

「……俺を討滅しないんですか？」

「なぜ？」

なぜ、なぜか。人と違うことわりで生き、妖魔とも違う半端者の自分。そんな自分が人の中で生きていくことなど叶うはずがない。そうハクは考えていたからこそ、詠春の問いかけに何も答えることができない。

「俺は……あなたとは違う、狐憑き　化物なんですよ？」

その問いに詠春はわずかに笑って見せる。ひどく穏やかな笑顔、その笑顔に思わず母を思い出してしまう。

「君は化物なんかじゃない」

「……え？」

「確かに、特殊な体質を持っているようですが、君は人に襲いかかったことがありますか？」

「……いえ」

確かに、人に襲いかかることはないが、正当防衛として戦い男の顔に火傷を負わせたことを思い出す。

「でも俺はこの間……」

「事の顛末は把握しています。半端者の神鳴流剣士が君を襲ったことも、あまつさえ刹那をも手につけようとした。本当に申し訳ない」

「そ、そんな俺なんかには頭を下げるのはやめてください！」

そう言っ頭を下げる詠春。自分が責められるならまだしも、謝罪されるなどと考えていなかったハクは困惑してしまう。ハクには人に謝られるなど初めてのことであり、どうすればいいのかわからなくなってしまう。

「いえ、関西呪術協会の長として、部下の不始末は私の責任でもあります。それに、刹那を助けてくれたようですね」

「それは、そうですね……」

「改めて、お礼を言わせていただきます、感謝します。ええと、シロ殿？」

シロと呼ばれていた自身に苦笑する。他人に礼を言われるのも初めてのことでどこか照れくさい。頬をかくことで誤魔化しておく。

「名乗るのが遅れました、俺の名前はハクと言います。木乃香さんや、刹那さんからはシロと呼ばれていましたが」

「ハク殿ですか、なるほど」

「はい、ええと、詠春様、殿などにつけなくて結構です。自分はあなたのように徳のある者でもなく、迫害される身の上ですから……」

自嘲的な言葉に詠春は眉根を寄せる。その仕草がどこか木乃香と似ていて笑いそうになってしまう。

「そのようなこと言わないでください。あなたは充分人として優しい心の持ち主ですよ。木乃香達を見ていて、わかっていますから」

やはりと言うべきか。詠春はハクの存在についてわかっていたようだった。その言葉に今まで自分を偽っていたことがとてつもない裏切りに思えてしまう。

「騙していませんでした。怪我が治ったら出ていくつもりでしたのでそれまでは唯の狐のフリをしていました」

「いえ、人を恐れるのも無理はありません。ですが、これからはあなたを襲うような輩が現れないよう重々気をつけます。ですから」

「?」  
「ですから、出ていかなくて結構です。ここで神鳴流を学んでみてはどうでしょうか?」

「え?」

理解が追い付かない。詠春の懐の広さとか、神鳴流は魔を討滅するんじゃないのかとか、様々な考えが浮かんでは消え、そしてたどりつく。

「俺はここにいても、……いいんですか?」

「もちろん、もっとも木乃香にはハク君として再度紹介することになると思いますが」

一瞬、疑問が浮かぶが、そんなことどうでもよかった。

(ここにもいいのか?)

刹那や木乃香と戯れ遊ぶ自分の姿を想像し苦笑する。まさか自分

が人と関わりを持つとは思ってもみなかった。母以外と接したことがない自分にはこれから先の事が重く感じられたが、それでも、それでもだ。

「ありがとうございます」

涙が流れた。母が死んだ時以来の涙、それは悲しいんじゃない、嬉しい涙。

ここにいてもいい、孤独に生活してきた自分に安住の地ができたことへの安心感からか、ハクの目から涙が止まることはなかった。



第二話 安住の地を求めん（後書き）

はあ、シリアス展開から抜け出せません。そろそろギャグも頑張っ  
ていれていきます。

### 第三話 才があるといふこと

「ハク！ 待ちいや〜！」

「待てと言われて待つやつはない！」

「このちゃん、待って〜」

ハクは走っていた。慣れない袴に身を通し、シロの時にある程度地理を把握した本山の中で。

後ろから迫るのはにこやかな笑顔を浮かべた木乃香とそれをあわてて追いかける刹那の二人。

傍から見たら元気な子供が走りまわっている、という凶なのだがいかんせんハクの必死すぎる形相が鬼気迫るものであるが故に笑えない。

時を遡ること数分前。

怪我を療養していたハクの元に、詠春と木乃香、刹那がやってきて、改めてハクと自己紹介したときに始まった。

「近衛木乃香や、よろしくしてな」

「そ、その桜咲刹那です。 よろしくお願いします」

木乃香は新しい友達が来たことで嬉しそうな笑顔だったが、刹那の方はやや顔を背けながらの自己紹介となった。まあハクの正体を知っているだけあって気まずいのもしれないと思いき苦笑した。

「ハクと言います、二人ともよろしく」

「はあ、ハクって女の子なん？」

ちよっと待て。どこをどう見たら自分が女に見えるのだろうか。

それに関しては異議を唱えさせていたいただきたい。

「いや、性別は男ですが」

「それにしてはえらい顔が可愛らしいなあ」

木乃香が続けて言う。詠春は苦笑いを浮かべ、刹那もチラチラとハクの顔を窺っている。そんなに変わった顔なのだろうか……。

たしかに、今は詠春さんの術によって髪の色と瞳の色を疑似的に黒く染め、狐特有の尻尾と耳は認識障害されるようになっていた。いまだに自分の体をうまくコントロールできないため、そのようにしてもらったのだが、その影響だろうか。

「よし、ハク、これ着てみてや」

「は？」

どこから用意したのか、まるで木乃香が着る様な可愛らしい着物を持ち、怖いくらいの笑顔で迫ってくる木乃香。後ろであわあわしてる刹那、何とか言ってくれ。

「え、詠春様！」

「ハク君、ご愁傷様」

絶対、そんなこと思ってない。あの目は楽しんでる目だ！

こうして屋敷内を走り回る羽目になり、まだ全快とは言えないせいで振り切れない。かついくらなんとなく全容を把握しているからといって、何年も暮らしている木乃香の方が地の利があるだろう。

「いい加減諦めてくれ！」

「一回でいいから着てみてや」

「このちゃん、待って〜」

木乃香、どんだけ着せたいんだ！

それから刹那、どうしてそんなに喜んで走ってたんだ、犬か、犬なのか！ご主人様追いかけてっこ楽しいようわんわんってか！

今までにない経験のせいか頭が湧いてしまった思考しかできなくなるハク。

走りながら、そろそろ休まないときついことに気づく。

（曲がり角のすぐ横の部屋に！）

短い距離を全力で走り、障子をあけて音もなく瞬時に閉める。

「あれ、どこいったん！ ハク出てきいや〜」

「このちゃん、手分けしてさがそ」

二人が走り去っていくのを障子に耳を当てながら確認する。これがあるか、壁に耳あり障子に目あり、いやいや、障子に穴なんて開けてないけども。

「ふう、行つたか」

額の汗をぬぐいながら一息つく。これは決して運動量に比例した汗ではないことを追記しておこう。

それにしてもこの屋敷は一体いくつ部屋があるだろうか、いくら使用人が多数いるとはいえ、部屋が余りすぎではなかるうか。

（ふう、体が熱い。久しぶりに全力で走ったような気がするな）

「はは、なんだか楽しいな」

素直にそう思った。シロの時はあまりはしゃいで遊ぶようなこともなかったし、こうして言葉を交わしながら走り回るなんて初めて

だった。

「ハク、かくれんぼ？」

ぎぎぎと首を回すと後ろに木乃香が立っている。満面の笑みで。なんか着物の数増えてるし！

「いや、そういうのはさ、木乃香みたいな女の子が着るから可愛いわけであってだな」

「いややわあ、ハクってばお世辞もうまいんやなあ」

木乃香の不穏な手の動き、なんだこの言い知れぬ悪寒は。

「どうせうちには似合わないし……」

いつの間に来たのか刹那は部屋の隅で畳にのの字を書き続けている。そんなことしてる暇があったらこのお嬢さんを止めておくれ！

「ハクう、覚悟決まった？」

「ちよ、待て、話せばわかりあえるはず、俺は男だよ？」

「女の子みたいにかわええんだから大丈夫や」

「いや、前提としてだな」

「才あるえ、大丈夫や」

「だから、話を」

「うん、大丈夫」

太陽みtainな笑顔。その中にちよつとだけ黒い何か混じっている気がしたのはハクだけではないはず。

(話聞いてえええええ！)

その後は着せ替え人形よろしく、夕方までずっと木乃香のおもちや

と化し、刹那は復讐と言わんばかりに嬉々として木乃香を手伝っていた。

「いやああああ」

そしてハクの女々しい叫びが屋敷内に木霊した、らしい。

京都神鳴流、その歴史は数百年も続き、魔を討つため過酷な修行をすれども決して表舞台にあがることになかった流派。その奥義は秘して伝えられ、各分家で独自の技が開発され相伝されているという話もある。

「ハク君、準備はよろしいですか？」

「はい」

板張りの床を踏みしめ、竹刀を持って対峙する詠春とハク。その距離は四歩ほど。身長差もさることながら、詠春の持つ雰囲気は呑まれないように意識を集中し続けなければならないハクには、かなりの重労働に感じられる。

二人が何をしているのかといえば、これから神鳴流を極めるのならば、ハクにとって何ができて何ができないのか見極めたいという詠春の申し出によって、試合…もとい試験のようなものを行うというものである。

広い道場の中には、壁際で礼儀正しく正座する刹那がいるだけで、

他の門下生もまだいないようやく陽が昇り始める早朝に始まった。

(すごい威圧感だ……呑まれる)

ハクは唾を飲み込んだ。一瞬の乱れすら隙を与えてしまう。正眼に油断なく構えてはいる。だが、詠春にとってはハクの構えにさほどの意味は感じないのではないだろうか。己より遥かに技量が上の者にとつてハクの隙などいくらでも見つけることができよう。

(勝負は一瞬で)

ハクは心の中で呟く。開始間際に虚をつけばいくらか攻撃を当てられるという計算だ。

「では始めましょうか」

「お願いしますっ！」

一息で踏み込み手元を狙った突き。一瞬詠春の顔が驚いたようだが、それをわずかに体をずらすことでかわす。

続けて回転を加えた回し蹴り。

的確に攻撃範囲を見極め回避される。

わずかな硬直時間、詠春の竹刀が上段から振り下ろされる。

「うっ！」

重い、体がぎしぎしと悲鳴をあげるが両手で竹刀を支え受け止める。

詠春の竹刀を振り払い横なぎに払う。

当たらない。

手を休めるわけにはいかない。ここで詠春と距離を取れば攻め込むことができない。ハクは直感で把握した。

正攻法で勝てないなら奇策を用いるのみ。

思いきり竹刀を詠春めがけぶん投げる！

「なっ」  
「はあ！」

低い体勢から飛び上がる勢いで掌底。詠春は竹刀を避けた動作で硬直している。

（決まるか！？）

そう確信にも似た予感。しかし。

「浮雲・旋一閃」

「え、うわあああ！」

掌底の流れをそのまま利用され、空中で一回転。ついで床に思い切り叩きつけられる。

「いたた……」

「ああ、すいません。少々やりすぎましたかね」

あはは、と笑いながら言うことじゃないと思うんですが…とハクは声にならない突っ込みを入れておく。

「咄嗟のことでしたからついつい投げてしまいました。それにしても竹刀を捨てて掌底ですか、なかなか面白いことしますね」

「……つつ、正攻法じゃ無理だと思ったからなんですけどね」

「はは、なるほど。しかし相手の虚を突くという発想は大切ではありません。今回は剣の経験が多い私に分がありましたし、慣れない武器を手放すのは場合によっては有効に成りえますし」

「はあ」

なにやらうむむ、と考え始めてしまう詠春。彼はきつと理性で戦うタイプなのだろうと勝手に予想する。考え込む姿を見て何やら苦



劣人な気がしてしまうのはなぜだろうか。

「刹那、ハク君をどうみますか？」

「は、はい。　そうですね……動きは良かったと思います」

突然話を振られて慌てて答える刹那。咄嗟の事となるとわたわたするのが刹那らしいとハクは思った。凜とした雰囲気も刹那らしいが、今の姿は年相応といった感じだ。

「私もそう思います。　剣の才はまだわかりませんが、磨けばそれなりの剣士になるでしょう」

「そうですね……」

自分にはさっぱりわからないが、詠春が言うならばそうなのだろう、とあたりをつける。

「ですが、どうして気を使わなかったのですか？　刹那から聞いていますよ」

今の戦いでハクは確かに気を使っていなかった。使おうと思えば使えたかもしれないが、まだ不安定であるためあまり実戦には向かないのだ。襲撃された夜は火事場の馬鹿力という方がまだしっくりするからである。

「まだまだうまく使いこなせないなので、途中で動きが落ちるくらいなら最初から使わない方がマシかと」

「なるほど、しかしその年齢で気を扱えるならば将来有望ですね。

そのうち符術についても指導しましょうか」

符術とは、陰陽師が使う呪術で魔力を使って鬼を召喚したり、傷

を癒したりと神鳴流剣士にとっては補助的手段である。ある意味そ  
ういう小手先の技があるほうがハクは戦いやすくなる、と感じた。

「はい、ぜひお願いします」

迷いなく答えるハクの姿を刹那はじっと見つめていた。

### 第三話 才があるといふこと（後書き）

ギャグになっていれば良いのですが……  
後半は相変わらずです。おかしいところがないかやや心配です。

## 第四話 負けるを嫌ふ

長と模擬試合をするハクの姿をみて思う。彼とはシロの時の付き合い、それも一週間程度の付き合いではある。それが人の姿を取るようになって感じるのは、まるで大人と対応しているような冷静さだ。

刹那は、自分とそう年齢も変わらない少年を見て思う。

どうしてそんなに達観しているのだろうか。

どこか落ち付かない気持ちになる。ともすれば、木乃香に振り回されて年相応の笑顔を見せたり、刹那の前では見せない顔をしたりする。

それが気に食わない？まさか。思考はぐるぐる回る。

「浮雲・旋一閃」

ハクが自身の力を綺麗に受け流され宙を舞う。いつの間にか終わったようだ。突然長にどうだったかと聞かれ焦ってしまう。何も観ていなかったなどと言うわけにもいかず、無難な返事を返してしまった。

ハクはこれからも神鳴流を習得すべく修業を続けることになった。

「負けられへん」

思いが口から零れおちた。

詠春との試合を終えてからは、他の門下生たちと同様に修練を始めることになった。

周りにはハクの年齢と同じくらいの子供はおらず、唯一刹那がいるだけで、他は二回りほど年齢が違う者たちばかりだった。

午前は気を用いない純粹な神鳴流剣術の基本の型を反復する。気を用いないのは、微細なコントロールができないのに気を用いることで他人を傷つける恐れがあることと、ハク達と修練を共にする者たちはまだ気が扱えていないということだった。

そもそも、気を扱えるようになるにはある程度の年数が必要であり、幼少時から使えるものがないのが大半である。

修練が終わると、午後は体を休めるということで木乃香や刹那とともに遊ぶことが日課となった。

いまだに修練の方は慣れないことばかりである。例えば、竹刀を持つということも、ここ最近ではずっと狐の姿であったからついつい前かがみになり、姿勢が悪いと怒鳴られるわ、すっぱ抜けた竹刀が師範の頭にぶつかり死ぬほど腕立て伏せをやらされたりとか、問題が山積みだった。

門下生同士での地稽古では、刹那と組み稽古するのだがあまり結果は芳しくなく、今はまだ一日の長が刹那にある。何しろ稽古中の刹那はあの凜とした空気を醸し出し、なおかつまったくの容赦もない。ハクの体にある何か所もの打撲跡はほとんどが刹那によるものだ。

ハクは少しでも早く強くなりたいと願う。

強ければ何も失わずに済む。

今まで逃げ続けてきた人生の中で確かにそれだけは学んでいた。

もちろん、女の子にやられてしまっているという事実を覆すためにも、だが。

だから、今も誰もいない夜の闇の中で修練を怠らない。

体の中にある力を丹田に集め、それを右手に伝えていくイメージ。筋肉の動き、血液の流れ、神経の通り路、それらが光となって一

点に集中していくのを想像する。

「狐火！」

小爆発のような音が鳴った後、技が不発に終わったことに息を吐く。あのとときのようなイメージが湧かない。やはり火事場の馬鹿力というやつだったのだろうか。

とっさのことではあったが、今まで考えていた技があんな形でも成功していたことを反芻し、ハクは独自に気の修業をしていた。

誰にも見つからぬように夜にこっそりと敷地内の外れで、だが。さすがのハクも安易に本山から出れば、また前のようなことが起こらないとも限らないと考えている。確かに前は敷地内で襲われたが、詠春の口添えがある今、堂々とそのようなことをやってのけるものはいないだろうと思う。

「ふう、やっぱり師がいないと駄目かな……」

額の汗を拭う。かなりの間集中していたが結果は思わしくなく、そう簡単に感覚は掴めそうになかった。軽い身体強化ならばなんとかなるが、気を放出となると勝手が変わり、体から切り離された一部を操作するような、第六感的なセンスを磨かなければならないようだ。

ふと、茂みが揺れた。

緊張が奔る。

（まさか、また目をつけられたのだろうか）

傍に置いてあった竹刀を手に取り中段に構える。目の前の茂みを見据え集中する。

「誰だ！」

「……わたしです」

観念したとばかりに出てきたのは、いつもの姿の刹那だった。それを見た瞬間、ハクはほうと息をついた。

「脅かさないでくれ、本気で焦ったよ」

「すみません、そんなつもりはなかったのですが」

地面に座り込むハクの隣まで歩いてきて同じように座る刹那。何か言いたそうな目でこちらを見てきているので視線だけ向けておく。

「どうして、こんな遅くに？」

修練を、と言いたいのだろう。別に話しても特に問題はないはずだが、昼間の修練では散々負かされていて、でも実は影でも稽古していた、などと言うのはなんとなくだがみっともない。

「……ちよつと寝付けなくてね」

苦しい言い訳かと思いつつもそういつことにしておく。刹那はそれ以上何も言っていないが、疑問に思っているのは雰囲気から察することができた。

「刹那はどうして？」

「え？ わ、わたしは、その別に！」

聞かれるとは思ってなかったのだろうか、目を丸くし、あわあわと手を振り始める。

思わず笑ってしまう、そんな仕草が面白くてついついもっと言いたくなる。

「刹那ってほんと面白いな」

「な、何言ってるんですか、わ、わたしなんて」

「あれ、照れてるの？」

「ち、違います！」

からからと笑うハクに頬を膨らませる刹那。こっちのほうが可愛げがあるなどと思うハクはやはり精神年齢が高いのだろう。

「そんなことより、もう寝ないと明日に響きます。それではおやすみなさい」

一方的にそれだけ告げて立ち去ろうとする刹那。ちょっと言い過ぎたろうか。

「刹那、おやすみ」

そういうと、顔を赤くして走って行ってしまった。どうやらよっぽど怒らせてしまったらしい。頬をかきながら、明日はもう少し控え目にいじってやろうとハクは思った。

夜、偶々目が覚めてしまった。このままではなんとなく眠れそうにない。

水を飲もうと廊下に出ると、辺りの気配を窺いながらどこかへ向かっていく少年の姿を見つけた。

こんな夜更けにどこへいこうというのか竹刀を持ち歩いている。



(まさか、また出ていこうとするんじゃない……)

そう頭に浮かんだ瞬間、刹那は後をつけることにした。

(これは決して彼の事が心配などということではなく、あくまでこのちゃんが悲しまないように最低限の監視をしているだけであって……)

と頭の中で誰に言うともなく言い訳をつらつらと思い浮かべる。

要は自分が気になっていられるだけなのだが刹那はそれに気づいていなかった。

行きついた先は敷地の端の広い平地。手頃な茂みに身を潜め、彼が何をするのか観ていることにする。

まず彼が始めたのは竹刀を振ること。まだまだ型というには甘いが、それとなくそれが神鳴流であることはわかった。

(ああ、そこはそうじゃないって昨日も言ったでしょうに、あ、また違う)

観察しながら不必要なところに力が入っていたり、ときおり手から竹刀がすっぽ抜けそうになっているのを見てそわそわしながら観ていた。

やがて一通りの型を終えると、ついで自然体と言うか体を弛緩させ、瞑想状態に入るハク。

体をほんのりと光らせる。その姿は、先日の焼き直し。

刹那を助けるために敵から守ってくれた時の姿。

知らず頬があつくなくなった気がした。

(どうして、あの時彼は助けてくれたんだろう?)

疑問が浮かんだ。もしかしたら自分も敵になるかもしれないのに。自分だけ置いて逃げれば良かったのに。

確かにあのときは刹那も襲われていたが、ハクにとっては関係なかったのではないだろうか。

「狐火!」

「ひゃっ!」

考えごとに没頭していたせいで、ハクが放った技に驚いた。幸い口を塞いで声は漏れなかった。ただろうが、派手に動いたせいで茂みを揺らしてしまった。

「誰だ！」

いつの間にか竹刀を持ってこちらをきつく見据えるハクの姿。

(うち、何しとるんやろ……)

ため息とともにハクの前に姿を見せた。

#### 第四話 負けるを嫌ふ（後書き）

木乃香が空気だ……。なんとかしないと

## 第五話 思ふは易し

神鳴流を習い始めてはや三カ月となった。初めのうちは素人が竹刀を振り回すだけに見えた型の修練もそれなりのものになり、今は足運びや打ち合いによる隙を探したりなど応用的なこともやれるようになってきていた。

少なくとも、ハクの中では今までの鍛錬では物足りないと感じるようになってきていた。気の扱いはいまだに独りで続けてはいるが、ときおり誰かに見張られているような気がしてそろそろ本格的に詠春に頼んでみようかと考え始めている。気を使っている自分を無駄に警戒させるのは良くないだろうし。

当の詠春ともすれば、座学は教えてくれるが、過去に言った符術や気に関してはまったく触れようとしなない。例えば、戦闘での心構えとして、常に冷静であることが大事であることや、心を乱されることなく、逆に相手の心理を突くことで隙を作り出すなどは役に立つのだが、今はそんなことよりも力をつけたいとハクも子供っぽいと思いつつも考えてしまっているのである。

「符術についても教えてもらいたいなあ」

「符術ですか？」

とある昼下がりに、ハク、刹那、木乃香で本山近くの桜の木の下で遊んでいたときである。季節は夏、もう桜は散り青々とした葉をつけている。身近に川もあり風情を感じさせる景観である。

無意識のうちに考えをこぼしていたハクは苦笑いを浮かべる。木乃香に聞かれなかったのは幸いか。先ほどまで蹴りあげていた鞆を追いかけている。

「ああ、詠春さんに頼んでみようかなってね」

「最近では剣術がやっとな馴染んできたのに他のものに手を出す余裕があるのですか？」

ジロツと睨むような視線で刹那に脅される。不真面目では？二兎を追う者は一兎をも得ずですよ！などと訴えかけているような気がする。

実際、前にも同じようなことを言ったときに刹那に小言を言われたこともあり、彼女の前ではそのことを言うのをやめていたのだが、ついつい最近の鍛錬事情にもう少し加えたいと考えていたため零してしまっただ。

「それに、わたしたちの年齢ではまだ十分に符術を扱えないと思うのですが……」

「さあ、やってみないとわからないもんだと思うけど」

事実として、ハクの気の扱いはそれなりのものになってきている。身体強化ならば、以前の火事場の馬鹿力が出たときのようにスムーズに行えるようになってきた。いまだに狐火の感覚が掴めないのは原因がわからなくて手詰まりであるため、他の観点から考察しておきたいという考えがあるからである。

「ですが……」

「もう、二人ではっかり話さんとウチも仲間に入れてや〜」

尚も続けたそうな刹那を咎めるように頬を膨らませた木乃香が声をかける。その手には先ほど転がしてしまった鞠がある。

「なんだか二人とも随分なかよくなったなあ。せつちゃんも最近ハクにべったりやし」

「なっ、このちゃん！ そんなことないで！」

「そうかなあ？」

意地の悪そうな顔をする木乃香に、慌てて否定する刹那。

（そんなに仲良くなるのが嫌なことなのだろうか、ちよっとへこむな）

「そんなに否定しなくても……」

「あ、いや、別にわたしが嫌っているとか、そういうことではなく「！」

「せつちゃん、ハクにも敬語じゃなくていつもみたいにかたがたに話せばええのに」

確かに、刹那がハクに話すときは丁寧な言葉で会話するが木乃香のときは砕けた話し方だ。そんなことを気にするハクではないが、仲が悪いか良いかは微妙なところになるのではないだろうか。

「違うんやこのちゃん！ もうあんまりいじめんといてや！」

「あはは、せつちゃん怒らんで」

ニコニコと笑う木乃香とは対照的に、真っ赤になって木乃香を追いかけてまわす刹那。あんまり怒ってばかりいると早く年食うぞ、とかまったく見当違いな方向に考えを巡らし空を見上げるハク。

最初に、シロとして助けてもらった時も桜の木の下で遊んでいる二人がいたことを思い出す。

実はあれから一度、シロの姿となり詠春の「野生の生き物だから元気になったから山に帰してあげないと駄目だよ？」という諭しによって、木乃香と刹那、詠春に見送られ裏山に帰っていく、という茶番を演じ、のうのうとハクとして生活していた。

それ自体は、裏の世界について木乃香に教えたくないという詠春の考えがあったためで自分がシロだということを明かすわけにはい

かなかったこともあり、仕方がないのだが、木乃香がシロを飼うと言って詠春に懇願しているときは正直肝を冷やした。

なぜなら詠春の顔が本気で悩んでいたからこそ「やっぱ狐のままじゃ駄目？」とか言われそうな勢いだったからである。

木乃香の涙交じりの上目遣いをやられたら大の大人でも逆らい難いのだろうか。

（女の泣いて怖いよなあ）

とか考えているが、それだけ自分に（シロであるが）情を感じていたということは素直にうれしかった。少なくともハクにとって刹那と同じくらい木乃香も恩人である。特に鍛錬などを行わない木乃香は、刹那よりも弱い。自分ができる限り危険から守ろうと密かに思っているのである。

「こ、このちゃんっ！」

刹那の叫びにはっと顔を向ける。どうしてそうなったのかはわからないが、木乃香が川で溺れていた。

「刹那、何があった！」

「蹴鞠が川に落ちて、このちゃんがそれを取ろうとして！」

大体の事情は把握した。川の流れは速く、近づくことは難しいところにいるが、大きめの岩にしがみついて木乃香が耐えている。

だが、それもいつまでももつかわからない。自分たちと違って木乃香には力がないのだから。

「刹那はすぐに本山から大人を呼んでくるんだ、俺はここで万が一に備えて待機してるから」

「わ、わかった、このちゃん、絶対助けてあげるから！」

そう叫ぶと一目散に駆けだす刹那。刹那の足で呼びに戻って大人が来るまで十分くらいだろうが、その間くらいならなんとか持ちそうではあるが。

「木乃香！ 今刹那が助けを呼びに行っているからもう少し頑張るんだ！」

「あ、うう」

声が届いているのかわからない。常に川の流れに打たれ、必死にしがみついているせいだろうが、何もできないハクは声を掛け続けることしかできない。

「刹那、まだか……」

何もできない自分が歯痒い。ただ助けを待つだけの身であることも、命を助けてくれた恩人に声をかけることしかできないことが。そのとき木乃香の様子が変わった。

「木乃香！」

「たすけ、助けて、ハク！」

着物が水を吸い、木乃香の力だけでは支えきれなくなったのか、木乃香が岩から手を滑らせ流されていく。ハクは瞬時に服を脱ぎ捨て、川に飛び込んだ。

「くそ、今助ける！」

梅雨の影響か、川の水量が多い。ハク自身も川に身を任せながら木乃香のところまで泳ぎ着くが……。



「木乃香、掴まっつて！」

(ぐっ木乃香！ 暴れるな！)

溺れていることでパニックを起こした木乃香がハクを掴み、息を吸おうと必死になっている。水中に押しやられたハクもろとも、このままでは溺れてしまう。

予想以上に必死の木乃香の力は強く、かつ着物の重さがハクに余裕をなくさせる。ハクの息もいつまで持つかわからない。

そのとき座学の時に言われた詠春の言葉が頭によぎる。

(落ちつけ、常に冷静になるんだ)

一度目を閉じ、心を静め開く。

丹田に力を込める。

筋肉の動き、血液の流れ、神経の通路に流れる光を意識する。

(はあああああ！)

全身に巡らせた気。木乃香を抱きかかえ前に進む揚力を得ようともがく。右手で木乃香を抱え、水面から顔を出させ、ハク自身は水中で前に進もうと泳ぐ。

(川の流れが速い、岸まで辿りつけるか？)

水中の負荷のせいで力が拡散されるために思うように進まない。気がめぐつているというのに二人分の揚力を得ることが難しい。

(くそ、あと少し……)

水面を掻きながら、目を凝らして距離を確認しながら思う。

(駄目か？)

息がもう持たない。体が重い。

やはり気を使っても駄目なのか。自分がやってきた修練は無駄だったのか。

嫌な感情が心を締め付ける。肺から空気が漏れ、バタついた足が動きを鈍らせる。

だが、木乃香だけは絶対に離さない。せめてもう少し、助けることは叶わないとしても、時間を稼ぐことができれば、木乃香だけで

も助けてもらえるかもしれない。

(俺は駄目かもしれないけど、せめて……)

せめて木乃香だけでも。薄れていく意識の中でそれだけを考える。(思うだけでは、力がなければ何も守れないのだろうか?)

そのとき確かにハクは悔しいと思った。同時に今の自分では何もできない、と。

ハクが諦めかけたときだった。

「木乃香！ ハク君！」

詠春の声だ。水中の中にいるからかぼやけた判然としない声であるが、聞き間違えることはない。

ああ、助かった、とハクは思う。

そして、また助けられた、と。

## 第五話 思ふは易し（後書き）

次回から少々年数が飛んでいくかもしれませんが。

あとなるべく気をつけて書いたつもりでしたが、説明不足な点もあったので、できる限りこれから話の中で書いていきたいと思っております。

## 第六話 想い裏腹

自身の無力を痛感してから数日が経っていた。

思い出すたびに、自分には何もできないことが胸を締め付け、ハクを苦しめ続けていた。

ぐったりといつの間にか気絶していた木乃香とともに川から引き上げられたときだった。自分の髪の毛が銀色に染まり、おそらく周りにも自分が狐憑きの姿であることがわかったのであるうか、ハクは嫌悪の対象とも言うべき視線を浴びた。

詠春があの場合にしなければ、事情を知らない神鳴流剣士はハクに斬りかかっていたかもわからない。もっとも、詠春から聞かされていたと思うにはあまりにきつい視線だった。

あれからずっとハクは部屋の中に閉じこもっている。建前上は風邪となっているが、周りからのよそよそしい態度や、木乃香を助けてあげられなかったことが今もハクから何かをする気力を奪ってしまっていた。

(守れなかった……)

その言葉が杭のように自身の心に突き刺さる。

助けてもらった恩を返すことさえかなわない自分の身に辟易とする。そしてまたハクは詠春に汚点を与えてしまった。

狐憑きを匿っているということを知られてしまった。

無論、自身の存在に気付いていたものもいただろうが、詠春の口止めがあつたおかげか大事には至らなかったが、今回はほとんど末端の者にも目撃されてしまっている。大勢ではなかったが、それはすぐに噂として広まるのではないか。そう考えてしまう。

だが、それよりもなおハクの心を縛り付けるのは自分の弱さだった。

もっと強くなれば、力があれば。

常々そればかり思うようになっていた。

そしてその力で木乃香を助けられると思った。

否、思っていた。それは少年がみる夢のようなものだったのかも  
しれない。

自分にはまだまだ圧倒的に力が足りていなかった。

誰かを助けるための力が。

「……力か」

「ハク君、入っていいかい？」

はつと顔を上げ、小さく了承の意を告げる。障子から現れたのは、  
穏やかな顔をした詠春だった。やや疲れたような顔であったが、心  
配そうにハクを見つめていた。

「すまない、公務がおして、時間が作れなかった。……あの  
とき、命がけで木乃香を助けてくれたこと、感謝します」

「いえ、俺は……助けられただけです」

すぐに口から言葉が流れる。ハクはとても詠春からの感謝を受け  
取ることなどできないと思った。それは自身への甘えだと、自分は  
詠春に助けられたのだと強く思う。

唇を噛みしめ、悔しさをこらえる。どうしてわざわざそんなこと  
をいうのかハクにはわからない。詠春なりの気遣いなのだろうが、  
今のハクにはきつかった。

「……君も意固地だな、本当に私は感謝しているんだよ？」

「俺は、その感謝の意を受け取ることはできません」

うつむき、答える。これ以上詠春の目を見ていることができない。  
心の中の弱さを覗かれそうで、何も話せない。

「そうか……。なら君が納得するように言い換えることにしようか。君が木乃香を助けようとしてくれたおかげで、ちょうどいいタイミングで木乃香を助けることができたよ。これで少しは父として恰好がついた。ありがとう、ハク君」

ハクは驚いた。そしてなにより、自分はこの人にはかなわない、そう確信した。子どもと大人とか、そういう次元じゃなく、近衛詠春と言う器の広さに感動にも似た何かを感じる。

だから。この人の役に立ちたい。それはごく自然な気持ちだったと思う。

「詠春さん、俺に、符術 陰陽術をご教授願えませんか？ 突然のことですが、前々から考えていました。俺は強くなつて、木乃香や刹那を守りたい、あなたの役に立ちたいと思っています」

それは、恩を返すということ。命を拾われた恩人の世話にならなければならぬのは心苦しいが、将来をかけて恩返しをしようと言本気で思った。

詠春の瞳が揺れていた。本気で困っているのか、眉間に皺を寄せ黙ったまま考え込んでしまう。

「本気ですか？」

詠春の問いにハクは力強く頷く。ここ数カ月、神鳴流を習い続けて色々な話を聞いた。神鳴流を極めるためには血反吐をも吐く辛い修業の先の更に先にある。それを陰陽術と並行して行おうなどと言うのは決して効率的ではない。生半可な覚悟でそれに臨めば、修練の途中で体が壊れるか、心が壊れてしまうだろう。ハクの年齢や体を考えれば、覚悟があっても辛い選択となる。

それでも、ハクは力を望む。それは渴望と言って良かった。そんな自身の気持ちを汲み取り、詠春ならばきつと了承してくれる。

どこか確信にも似た予感を持っていた。だが、その見通しは甘かった。

「それは……駄目、ですね」

「っ!! どうしてですか!」

ハクの予想とは裏腹に、詠春は拒絶の意を表した。詠春ならば必ず承諾してくれると思っていたし、なにより断られることなど考えていなかっただけにハクへの衝撃は大きかった。それは思わず恩人である詠春に食ってかかってしまうほどに、である。

「……二足のわらじを履いて極められるほど神鳴流は甘くない。

どうしても陰陽術と並行して修練したいと言うのなら、神鳴流を破門される覚悟でもう一度私のところに来なさい」

「……わかりました」

詠春からの威圧感に反論はできなかった。ハクは視線だけは逸らさずに、詠春の目を見続けた。

「木乃香の事は本当にありがとう。では、ゆっくり療養してください」

最後にねぎらいの言葉をかけると、詠春は苦笑しながら部屋から出て行った。

詠春のいうことは、わかる。わかるのだが。

俺にはまだ覚悟が足りないと言うことなのですか？

近衛木乃香は心配していた。

川で溺れた時に必死に自分を助けくれようとしていたハクのことだ。彼はそのせいでここ数日風邪をひき部屋からあまり出ようとしなかった。女中に聞いても彼の事をあまり話そうとしないことや、どこかよそよそしい気がして、本当は何か重い病気にかかってしまったのではないか、と子供ながらに心配していた。

「大丈夫なんかなあ」

「……大丈夫、だよ、きつと」

心配の声を漏らす木乃香に、刹那が真剣な顔で答える。もしかしたら刹那は何か原因を知っているのかもしれない。だけど、木乃香を心配させないように何も話さないのかもしれない。そんな風に考える。

何が何でも知りたくて問い正そうと言う気は起きなかった。ほんの少し前の自分だったらそういうこともしたかもしれない。でも、なぜだか今はそんなこととしてはいけない気がしていた。

「お礼だけでも言いたいんやけど……」

「元気になれば、いつでも言えるよ」

部屋の立ち入りを禁止されているために、まだハクとは会ってなかった。そのことが余計に木乃香に彼の事を心配させてしまっている。刹那は軽い調子で答えるが、木乃香にはどこか無理しているような気がした。



「せつちゃんも、どこかわるいん？」

もしかしたら、刹那もどこか病気をしているのでは。そんなことを思う。実際刹那も前よりも元気がない。

「ウチが溺れたんは、自業自得なんやから、せつちゃんやハクが気にすることなんてないんよ？」

「このちゃん……」

なぜだか、ついと言葉が口から零れた。木乃香もなんだか悲しい気分になってしまう。いつの間にか涙が頬を伝って流れおちる。それを見た刹那が慌てはじめて、それがなんだかおかしくて今度は笑ってしまう。

「うちはずっとこのちゃんというから……」

刹那はそういって木乃香を抱きしめた。

次は絶対にうちの力で守るから

ハクとの会話の後、近衛詠春は悩んでいた。

それはハクの処遇についてであった。先日の木乃香が川で溺れたときのハクの姿、銀髪、狐耳、尾を持つ存在　狐憑きの姿を晒してしまったことである。

無論、彼に落ち度はなかった。むしろ、あの川の流れの中で木乃

香を助けようと必死にやれることをやってくれたと思っっている。しかし、ハクの姿を末端の神鳴流剣士に見られることとなるとは詠春も予想外だった。

詠春が公務の為に本山から出ようとしたときに、刹那が息せき切った状況を伝えたのち、すぐに駆けだしてしまった詠春の落ち度だろう。周りの護衛である神鳴流剣士も引き連れてしまったのであるから笑えない。娘の事となり、長としての最低限の責務、彼の保護を怠る結果となってしまう今現状はそのことで頭を抱えることとなっている。

ハクにかけた呪術が無効化されるほどにハクが命の危機にさらされ、潜在能力が術を破ってしまったと考えるのが自然だろうか。時間稼ぎではあったが、結果として今木乃香が生きているのはハクのおかげなのだ。その点に関して詠春は本当に感謝していた。

だから、目の前の問題に頭を抱えている。

ハクが姿を晒したことによる支障。それは彼が狐憑きであることが露見したことから、ある噂が流れ始めていたことである。

曰く、協会の長の娘を誑かす狐のあやかしである。

曰く、協会を乗っ取るために隙を窺う狐憑きである。

曰く、討滅すべきあやかし達からの間者であり、桜咲刹那とも結託している。

おそらくは、ハクのような混じり物を良しと思わない人間が故意に悪評を流しているのだろうが、それに尾ひれがつく形となってしまうのが問題だ。

一つ目と二つ目の問題ならば、ハクにそれほどの実力がいないことや、彼の性格が人の道から外れた者などではなく清らかな心の持ち主であることがわかっていて詠春にとっては戯言にすぎない。

だが、三つめ、彼が間者である疑いがかかっていることはかなり問題だった。間者ということであれば、ハクの身边を調査し、その身を証明する何かがあれば問題ないのだが、ハクにはあいにくそうだった過去は自身の口から語ったものしかなく、白であることを証

明することができないのだ。

何より、刹那にまで飛び火してしまっている。それが問題だった。刹那は、鳥族とのハーフで忌み子として里から追放された身だ。

彼女はその身を誰にも明かしたことはないし、拾ってきた詠春しかそのことは知りえない。もつとも、どこかから情報を探し出し、力に溺れた愚か者がいたにはいたが、すでに肅清された。今刹那がハーフであることを知るのはほんの一握りの信頼のおける部下だけだ。おそらく単純に木乃香の周りにいて、将来出世するであろうことを見越した輩による裏からの情報操作なのだろうが、気に食わない。詠春によつて刹那の身の潔癖は証明できるだろう。だが、新参者であるハクに関しては難しい、そして何よりその身が混じりものであることを証明してしまったのだ。

「困りましたね……」

小さく息をつく。本来ならば、ハクに神鳴流と陰陽術の両方を教え込むつもりでいた詠春にとって、先ほどのハクのやる気は本当にうれしかった。しかし、こうした問題が浮上した今、迂闊に長である詠春がハクと接触することや、彼に力を与えることは決して良作とは言えなかった。

かといって、詠春の権力でそれらの噂を流したものを強引にやりくるめば、内輪もめに発展しかねない。

唯でさえ、関西呪術協会と対立している関東魔法協会との力関係が微妙であるのに、そこへ付け入られる隙を与えればどうなるかは火を見るより明らかだった。

木乃香から初めての友人たちを引き離さなければならぬかもしれない事実。詠春は憤りを覚えずにはいられない。それは長としては間違っているのかもしれない。だが、父親として娘に不自由させてしまうことにどうしても負い目を感じてしまう。

「……これは最悪のケースを考えておかなければいけませんね」

詠春の呟きは風に流れて消えた。

## 第六話 想い裏腹（後書き）

年数飛ぶと言つてそんなことなかった（汗

期待していたかたすいません。

もう少ししたら原作介入に入っていく、予定です。。

9 / 25 重大なミスがあつたので編集させていただきました。

## 第七話 決別の涙

「ハク！ もう大丈夫なん？」

「ああ、心配かけてごめん。木乃香も元気そうであつたよ」

久しぶりに外に出て、午前の稽古をこなすと木乃香に声を掛けられた。今のハクの姿はもう一度詠春から認識阻害の術をかけてもらつて普通の男の子に見えるようになってる。

数日会つていなかったただけだと言うのに、木乃香にはずっと会つていなかったように感じた。木乃香の後ろで刹那がこちらをちらちらと窺っている様子から、どうやら刹那が木乃香に伝えてくれたらしい。

（そうならそうと口で伝えてくれればいいのに）

刹那の遠回しな気づかいに苦笑してしまふ。

「そうなんか、でも元気になつたみたいで良かった。ウチのせいで、病氣になつてもうて、堪忍な」

本当に申し訳なさそうにする木乃香に何と声をかけたらいいのかわからない。ハクがやったのは単なる時間稼ぎにすぎず、それも自分の自己満足だった。そういうことで自分の中で折り合いはついていたので、木乃香の表情にこちらが心苦しくなる。

「気にしなくていいんだ、俺が木乃香を助けたくて、好きでやったことだから」

「そ、そうなん？ ありがとな、ハク」

戸惑つたように頬に手を当て顔を赤くする木乃香。ハクは木乃香

が照れているということは何となくわかったが、どうしてそうなったのかはいまいち理解できなかった。やはり人にお礼を言い慣れていないのだろうか。確かに、自分もまだ慣れない会話をするときは戸惑ったりもするなあ、などと勝手に解釈する。

「いいんだ。あんまりお礼を言われると俺も照れるしな」

「う、うん。わかった、もう言わへん、だからお礼！」

「っ!?!」

「こここ、このちゃん!?!」

ちゅつと頬に触れた感触。ぷにゅと柔らかく温かいものがハクに触れ、離れていった。突然の事に頭が真っ白になる。目の前には顔を熟れたトマトみたいに真っ赤にした木乃香、後ろにはなぜか刹那が顔を赤くしたり青くしたりしながらずつとぶつぶつ独り言をつぶやき始めていた。

「か、勘違いしたらあかんよ！これはお礼なんやからね。つてきやー！」

「ああ！こ、このちゃん待つて！」

なんだか奇声をあげて顔を真っ赤にしながら走り去っていく木乃香、それを困惑しながらも追いかける刹那。きつと恥ずかしかったんだろうな。実際のところハクも少々恥ずかしかった。

「慣れないことはするもんじゃないな……」

ふうと息を吐いた。詠春に見られていたら、一体どうなったんだろうか。

想像した瞬間、背筋が寒くなるハクだった。

夜、随分長いことしていなかったが、いつもの場所で鍛錬を行うハク。

明るい満月に照らされながら、型をなぞるように竹刀を振る。数日の事だと言うのに、竹刀を持つ手は違和感を感じずにはいらなかった。

「少しの怠けでこんなにも違うのか……」

剣を持つということは、自身の体の延長のように自在に操ることが上達への近道とされている。そもそも、自分の体すら扱いかねるハクにとってはその感覚を取り戻すのは一苦労だったが、小一時間ほど振ることで違和感はなくなった。

ついで竹刀を置き、気を充実させる。

あのとき、自分の力のなさを悔いた。

どうしてこんなにも自分は弱い。まだ小さいから、まだ経験が足りないから。そんな頭の中で都合のいい言い訳を思い浮かべながら、そんな自分を否定しようとする心が許せない。

「くそっ！」

集中が切れる。体中汗だくになり、服が張り付いて気持ち悪い。

「あまり無理をしたら体に障りますよ」

「刹那……」



いつぞやは茂みから出てきた刹那。今度は普通に話しかけてくる。その顔は心配するというよりも、怒りをぶつけるような顔だ。声にも怒気が含まれている。

「少しでも強くなりたいんだ。 多少の無理は仕方ないさ」

軽い口調で言ったものの、刹那の表情が晴れることはない。

「このちゃんを護れなかったことですか？」  
「……関係ない」

鋭く核心をついてくる刹那にハクは一瞬口ごもるが、なんとか誤魔化す。

「そんな顔で言われても説得力ありませんよ？」  
「そうか、いつも通りだけだな」  
「いつもの仏頂面に加えて眉間にしわを寄せていてもですか？」  
「うっ」

思わず言葉に詰まる。どうも今日の刹那は機嫌が悪いらしい。ジト目でそんなことを言われたらどう反応していいのかわからない。はぁ、と小さくため息をつく刹那。

「わたしだって、ハクには感謝しています。 わたしの代わりに」  
「のちゃんを助けてくれて」

「やめてくれ……俺は何もできなかった」  
「何もできなかったわけじゃない、やれることはやったの間違いでしよう」

「……」  
「そして力が足りないから、守るための力を欲する……と」

それには何も答えない。刹那が何を言いたがっているのかハクにはわからない。ただ、なんとなくだが、刹那もハクと同じ気持ちなのかもしれない、そう感じた。

「それはわたしも同じ。だったら、お互いに力をつければいいんじゃないか？」

「刹那と俺が？」

「ええ、わたしもこのちゃんを守りたい、今はまだ力が足りない。だけどこれからもっともっと修業を積んで、このちゃんにふさわしい力がある者になりたい」

単純にハクはすごい、と思った。自分の力不足をこんなにも簡単に認め、更に研鑽をつもうという刹那の心持に。

「……俺でも、なれるかな」

「なれる、わたしが保証する」

まっすぐに、刹那の視線がハクの視線と交錯する。その顔に浮かぶのは覚悟。凜とした刹那の顔を見つめる。力強い刹那の後押しのおかげで、ハクにも覚悟が決まった。

「その言葉責任持ってくれよ？」

「も、もちろん」

笑顔でそういうハクに、刹那は照れくさそうに頬を染めて答えた。

「来ましたか……」

「朝早くにすいません、詠春様」

翌日の早朝、ハクは早速詠春の部屋を訪れていた。約束も何も取り付けていなかったが、すんなりと入室を許可される。詠春の部屋は何の飾り付けなど余分なものが一切なく、質素儉約を地で行くような部屋だった。しかしその部屋の在り方が詠春にはあっていると漠然と思った。

「それで、用件は？」

ハクがここに来る用件など一つしかなく、それを知っているが故の質問。

詠春は鋭い視線でハクに問う。

破門される覚悟はあるのか、と。

「やっぱり俺は力が欲しいです」

「それは何のために？」

「守りたいんです。俺を助けてくれた人や、支えてくれる人を。」

「そのために力が必要なんです」

詠春から瞳を逸らすことなく続けるハク。無言の時間はほんの数秒だったが、ハクにとっては時間の感覚がなくなるほどに長い時間に感じられた。

「わかりました……。ハク君、君を神鳴流から破門します」

「そ、そんな！」

予想もしない衝撃に襲われ、ハクは何が起こったのか理解できなかった。

（俺が、破門？）

詠春は覚悟が足りないから俺に修業を許可しなかったのではなく、本当に破門するという文字通りの意味だったとも言っただろうか。ここにきてハクはそのことに気がつき、破門を言い渡された以上もう一度頼み込むことなどできないのか、そればかり考える。

「そんな、俺は、これからどうしたら……」

絶望　力を得る前にすべてを失った。恩を返すこともできない。不思議と詠春に怒りは湧かない。いや、感情がマヒしてしまってそれ以上ものを考えられない。詠春は黙ったままハクを見つめていた。

「何か勘違いしていませんか？」

「え？」

詠春の突然の言葉。どういふことなのだろうか。これが冗談だと言っならば、相当たちが悪い。

「確かに神鳴流は破門です。ですから、ハク君に新しい師匠を紹介しようと思います」

「は？」

待て。何を言っているんだこの人は。ぶっ飛びすぎて思考が纏まらない。

「君には神鳴流は向かないのではないかと思いましたが、ちょっとした知り合いに君の修業を任せようと考えていました。それが今のハク君にとってもプラスになると考えての事でしたが、どうしま

すか？」

「えっと、その人は強いんですか？」

不意に口をついて出た言葉。詠春が推すくらいなのだから相当な実力を持っているのだろうが、見たこともない人物に教えを乞うというのがどうにも腑に落ちない。

「ええ、間違いありません。私とは技は違いますが、間違いなく同等と言つことができる人物ですよ。それに、君に近い存在でもあります」

君に近い存在　その言葉が意味することはつまり……。

「俺と同じ、混じりものつてことですか？」

「平たく言えばそうです。彼女は狐憑きです、ハク君と同じね」

詠春の言葉に動揺を隠せない。

(俺以外にもいたのか!?)

「もつとも、彼女の修業はおそらく厳しいでしょう。それこそ神鳴流を習得した方がまだ優しいと思えるほどに、ね」

ぞくりと背筋が震える。神鳴流など目じゃないくらいの修業の密度。それを乗り越えた先に一体どれほどの実力が身に付くのか想像もつかない。

そして何よりハクと同じ存在に教えを請うと言うことは、自身の能力を遺憾なく発揮できるようになるのでは。正直神鳴流をやめなければならぬことは口惜しいが、自分に合ったスタイルを極めた方がより効率よく強くなれるのではないだろうか。

そこまで考えて、すでに自分の考えがまとまっていることに気付

いた。

「是非、その人の元で修業させてください」

「先方にはもうその旨を伝えてあります。今すぐにも支度してくれば大丈夫ですよ」

根回しが早い。すぐにも修業できるということにハクは心の中で静かに闘志を燃やしていた。

「ただし、本山から離れたところで修業することになり、ここから出ていくことになります。問題ありませんか？」

それは最後通牒というやつなのだろう。どのみち、自身の強くなる道への最短が拓けたのだ。だったら迷うことなど何もない。何もないはずだが。

頭によぎるのは木乃香の姿。

そしてお互いに強くなると誓った刹那の姿。

守るための力を得るために、ここを出ていく。

( やってやる、刹那とは別の道で俺は俺の強さを見つけてみせる )

「はい、未練はありません」

「……そうですか、正直名残惜しいですね。ハク君のことは息子のよう感じていましたから」

そういつて、静かに頭を撫でる無骨な手。温かい。もし自分に父と呼べる存在がいたならば、こういうものなのだろうか。

「今まで……お世話になりました。この恩は必ず返します。いつでも俺のことを呼びつけてくれて構いません。そのときは、絶対に詠春様、木乃香、刹那の力になることをここに誓います」

「ああ、頼りにしているよ、ハク君」

ここに契約は交わされた。それはハクの決意であり、覚悟である。

「だから、泣くのはこれが最後ですから……」

無言でハクを抱きしめる詠春の温かさが、どこまでも優しかった。

## 第七話 決別の涙（後書き）

修業の情景を入れるか、それともそのまま原作に介入していくか悩んでいます……。

ちなみにこの師匠はオリキャラにあたります。あまりオリキャラは入れたくないのですが、今回だけ入れさせていただきます。

あと木乃香、絶対ツンデレて感じじゃないのですが、まだ幼いからこんな感じもあつたら可愛いなつてことで描写しました。納得いかなかったら申し訳ないです



## 第八話 その名は妖気

「ここか……」

本山から大分離れた山奥にその場所はあった。もつとこじんまりとした小屋のような家を予想していたが、なかなか大きい。おそらく神鳴流の道場以上の広さはあるだろう。あそこの道場は三十人が収容されてもなお余裕があり、剣をふるうにも余裕がある空間なのだが、まさにそれほど屋敷は大きかった。もつとも、塀などの囲いは一切なく、なぜか玄関の前に門があるのだが、それはその人の趣味というか嗜好ということと理解しておこう。

もともと人を嫌う性格のようで、詠春とのつながりは一度剣を交えて打ち解け和解したとのこと。そのときに詠春はその人に襲われて貞操の危機を迎えたのは裏話である。

「で、お主は誰じゃ？」

「え？」

突然の事に呆けた声を上げる。冷たい鉄が喉元に当てられ、腕は背中に捻りあげられている。まったく気配を感じることがなかった。これでも何度も命の危機から逃げ回り、人の気配には敏感だったはずの自分が、だ。

(殺される　ー！)

「はあ、今からこんな小便臭いガキの面倒みなきやいけない羽目になるとは、これも惚れた弱みってやつかのう」

「……！　ではあなたが、詠春さんが言っていた優秀な師匠？」

びくびくつと体が震える後ろの女性。

「ふふふ、詠春のやつわかつているじゃないか、ほれ」

ぱつと捻りあげられていた腕を放される。振り返るとそこにはハクと同じような腰ほどまでの銀髪碧眼の女性がナイフを持っている。出るところは出て、引つ込むところは引つ込む。世の男性がみたら卒倒しそうなほどの美女である。しかしその顔は今、だらしないほどゆるみきっている。世の男性が引いてしまうことは言うまでもないかもしれない。

「名乗るのが遅れました、俺はハクといいます」

「話の中でしてやる。ついてくるのじゃ、ガキ」

「ガキじゃないって……いたっ！」

「口答えするたびにゲンコ一発じゃぞ」

(なんつー顔で笑いながら人を殴るんだ！)

恐ろしく妖艶な顔で笑いながら拳骨がまず女性などただのホラーだ。とか現状の理不尽を嘆きながらハクはおとなしくついていく。

玄関を素通りし、すぐに道場のようなところへ案内される。やはり神鳴流道場並の広さを有していた。お互いに向かい合い正座の体勢を取る。

「まず初めに言うておくことがある」

その声は体の芯まで響いた。びりびりと目に見えない気合いが伝播してくるようだ。

「私は狐憑きだ、おまえと同じでな」

「ほんとですか!？」

「この銀髪を見りゃ普通わかると思うのじゃが、良く見ておれ」

言うが早いか、女性の耳が狐のようなふさふさしたものにかわりピンツと天を向いている。正座した後ろの方ではもふもふした物体が左右に揺れていた。もちろん、どちらも銀色だ。

「このようにこれくらい呪術に頼らず自分で隠す術から徹底的に教え込んでやるわ。そしてもう一つ、私は人間が嫌いだ。詠春を除いてな」

「……それは」

どうして、という言葉は続かない。詠春さんからも言われていた、彼女は人間が嫌いだ、憎んでさえいると。その詠春さんだけ例外なのは彼の仁徳の致すところなのか、それともやはり剣を交えたことによる絆なのかは定かではないが。

「だから、私は詠春以外の人間を守ろうと力をつけるお主が嫌いじゃ」

「……」

「どうした、なんとか言ってみるガキ」

どうやら黙っているのが気に食わないのか、ハクに向かって怒鳴りつける。この人の本心ではない、ハクはそう感じた。

「俺は……別に人間が好きじゃなわけじゃない。ただ、俺を助けてくれた大切な人だけを守る力が欲しいんです」

この人を納得させるための言葉なんてわからない。だからただ自分が思う本音を言葉に変える。俺は試されている、この人に教える請えるほどの人格かどうかを。ハクのまっすぐな視線を正面から受

け止め、女性はふうと息を吐いた。

「……生半可な覚悟でそんなことを口にするな、そういうやつは早死にする」

「心配してくれるんですか？ 俺の事を嫌いなあなたが」

「ええい、うつとおしい。話すな、動くな、呼吸するな！」

かあつと顔を赤くするその人からはさつきまでの刺々しい空気が消えていた。きつと根は善い人なんじゃないだろうか、素直にそう思う。

「私の名は、霧島霞じゃ。もつとも、今は名前を呼ぶのを許したのは詠春くらいだ。おまえは私のことを師匠と呼べ」

「わかりました、師匠」

言葉に詰まる師匠。何やら「私が師匠と呼ばれる日が来るとは」とか「ちよつといいかも」とか思考がダダ漏れになっていることをハクは華麗にスルーした。

「じゃあガキ、早速修業をつけてやる」

「いきなりですか！ なっ!?!」

先ほどまで眼前で正座していた姿が一瞬で掻き消えた。首筋に重い一撃。

「これが瞬動じゃ。ってありや気絶しちゃったか。これはいじめが……もとい鍛え甲斐があるのう」

フッフと声を漏らすその笑みは、妖艶ながらも恐怖をかきたてるトラウマをハクに埋め込むことになりそうだ。

掃除、洗濯、食事、もろもろ家事全般当番表と書かれた紙を見て  
絶句する

掃除 ガキ

洗濯 弟子

食事 もう書かなくてもわかるじゃろ

「……師匠、これは？」

「なに、教えを請う身としてその対価をもらうにすぎん。 気にするな」

「あなたは働くことをやめたニートですか、って痛い！」

「口答え」ゲンコ」

にやあといやらしい笑みを浮かべる師には何を言っても無駄だと悟りを開いた。

「さて、これからの修業の内容だが、これからお主には そうじ

やな、必殺技でも使ってもらおうかの」

「はあ、必殺技ですか？」

「そうだ、御前がこれと思った一撃を私に見せてみる」

反論すればどうなるかは先ほどのやりとりで身をもって知っていたので、ハクはおとなしく自身の体に気を巡らせていく。

気を集中させる場所は右手唯一点。この数カ月でものにできるには至らなかったが、それでも六割近い完成度だと思いう技。

「狐火！！」

思い切り右手を突き出し、青い炎の塊を飛ばす。都合五メートルほどの飛距離の後に霧散した。

「ど、どうですか」

一瞬の気の燃焼による疲労で肩で息をつき、汗を大量にかくハク。師匠はそれをずっと見て、パンつと膝を叩いた。

「ふっ、道理で詠春が私に任せるわけじゃ」

「それはどういう？」

得心が言ったように笑みを浮かべる。彼女の中で疑問が解決したらしいが、ハクとしては何もわかっていない。今の技についての考察を述べるのだろうか。

「今、御前が使ったのはなんだ？」

「え、それは気ですけど」

まさかそれすら知らないのだろうか。いや、馬鹿な。最初の邂逅で師の実力は十二分に理解している。それに詠春さんと渡り合った実力と言うならば、気に関しても深い知識があるに違いない。

「喜べ、記念すべき弟子一号、お主が使ったのは気ではない、ましてや魔力なんて代物とも違う」

「……ちよつと待ってください、この世の常識を一言で片づけないでください。それじゃなんですか、俺は超能力とかUMA生物のような特殊な生態が持つ力を使ったとでも？」

「何いつとる。狐憑きなんてUMAみたいなもんじゃろうが」  
「言われてみれば……。って、それで一体どういうことなんですか？」

独りで不敵な笑みを浮かべるのはやめてほしい。ハクには何一つ事情が理解できていないのだから。

「そうじゃな、いわゆる妖気と呼ばれるものじゃ」  
「師匠が持つてる腹黒いオーラではないんですか」

ゴソツ、鈍い音に次いで頭に痛みが奔る。冗談だったのに、痛いよ。

「ごほん、えー妖気とは、人や生物が持ちつる気とは別種のエネルギーであり、かつ魔力などと呼ばれる世界の力を借りる代物とも違う。じゃが、もっとも近いエネルギーでもある。まあそれらの力と使い道は同じようなものじゃが、今まで生きてきてこの力を持つのはお主が二人目じゃ」

「えっと、その記念すべき一人目は？」

「ここにおるじゃろう」

やっぱりそうかー、などと口にはしない。そもそもそんな力があるなんて聞いたこともない。ただのこの人の与太話じゃなかるうか。

「ん、今私が嘘をついているとも思ったか？」

「めっそうもない」

読心術の心得でもあるのか。ひやりと汗が背中を伝い落ちていく。表情はポーカーフェイスを装いながら続きを促す。

「詠春から聞いたが、詠春の施した術を無意識で解呪してしまったのだろうか？　それがお主が妖気を持つ証じゃ。この妖気は、気とも魔力とも相性が良くての、自身の力がそれを上回れば妖気に転換される特性がある、じゃが、自身の妖気が別の気や魔力より小さければ掻き消える。さっきのお主の技のようには」

「じゃあ俺の狐火は、大気中の魔力にかき消された、と？」

「そういうことじゃな。まだまだ放出系の技なぞ、ガキの御前には早いわ」

「で、その妖気でできることとできないことはなんなんですか？

師匠の言い方からは何か含みがあるのですが……」

「ほお……」

このとき師である霞はハクの頭の回転に舌を巻いた。もつとも、自分と同じ狐憑きなのだから、そうであることはなんとなく理解していたがこの年齢でその境地にいることはまず及第点であると思っ

た。

「うむ、お主の考える通り。一つ、妖気で魔法使い、武芸者の気と魔力を打ち消すことができる。二つ、陰陽術や西洋魔術のような魔力を用いた魔法攻撃はできない。三つ、神鳴流剣術とは相性が悪い」

「……あの、デメリット多すぎませんか？　てか、デメリットしかないじゃないですか。一つ目なんて、相手の魔力と気を上回る量を使わないといけないんですから格下にしか通用しませんよ。それに魔法は使えない、神鳴流は使えないって……」

「簡単な符術程度だったら、まあ使えるようになるじゃろうが、神鳴流はそもそも対魔戦を想定して造られた技じゃしなあ、気を扱えないのならば使えないのは当然じゃろう。まあ妖気も似たような理屈じゃから扱い方は違えど、似たような劣化技は使えるじゃろうが」



「それじゃ一体どうやって戦えっていうんですか！」

「あほか、そこは自分で考えて戦うんじゃないよ。それにまだ四つ目もある」

「そんなに不利な点ばかりあったら何もできねええええ！」

ハクはもう自身の無力差に絶望しそうになっていた。半ばやけくそ気味に叫んだ代償として拳骨をもらっておとなしくなる。

「たわけ。神鳴流剣士の使い手である詠春と私がやり合って生きていることを忘れたか？ これだからガキは……。ふう四つ目じゃ、この妖気は少々特殊でな、うまく使いこなせばかなり役に立つんじゃない、そのメリットと比べたらデメリットなぞ吹き飛ばぞ……。いいか？」

話を聞いて驚いた。そんなことができるなら自分でも詠春さんに太刀打ちできるようになれるかもしれない。ハクは純粹に驚いていた。

「……そんなことが!？」

「フフ、まあそれはこれからじっくり修業の中で叩きこんでやろう、覚悟しておけ」

自身が高みに上り詰めるためのきっかけを得られたことが、ハクにとってこれからのように作用するのは、まだわからない。だが、一つだけ確実なのは、狐憑きの少年ハクとその師匠たる絶世の美女霧島霞との出会いは運命であったということだろうか。

## 第八話 その名は妖気（後書き）

次回一話挟んでくらいからようやくと原作に介入！って感じに頑張ります。オリジナル要素として妖気なるものとか、出てますが、チート能力というわけではないです。

あと、気と魔力に関しては独自解釈となっていてしますので、致命的な間違いではない限りはそのような認識でよろしくお願いします

## 第九話 鬼の目にも

「ハク……行っちゃうんか？」

まだ幼い木乃香が目には涙を溜め、詠春にすがりつきながら言う。刹那はいない。一緒に強くなろうと誓ったのに、それを裏切るように出て行ってしまふハクを許せないのかもしれない。

「今までありがとう、木乃香。また会えるから、さ」

「そうだよ木乃香。ハク君は新しい親の家で暮らすんだ」

建前上、ハクのこととは神鳴流破門で別の師匠のところに行くのだが、念のため木乃香には養子になるということで説明されていた。それを詠春が優しく諭している。

「詠春さん、お力になれることがあったら、いつでも呼んでください」

「はは、ありがとう。君の師匠は本当に優秀だけど偏屈なところがあるから、くれぐれも気をつけてね。それでは、また。ほら木乃香も」

師匠のくだりは声を潜めて。木乃香に別れの挨拶を促したとき、木乃香は涙を必死にこらえながら笑っていた。

「ほな、またなハク」

「ああ、刹那にもよろしくね」

最後にもう一度刹那と話しておきたかった。詠春との話がついた後、すぐに刹那にそのことを話してから、出立までの一週間、とう

とう口をきくことがなく、ハクは本山をあとにした。

「う、夢か……」

顔を触れるとわずかに濡れたような跡があった。泣いていたのだろうか。いや、もう泣くことはやめたのだ。不甲斐ない自分に戻るの嫌だ。

起きてすぐに体をほぐす。時刻はまだ太陽が昇らない早朝。ハクの一日の始まりは早い。

霧島霞　もとい師匠の元で修業を始めてもう九年が経とうとしていた。

ハクの体はやや人よりも早い成長速度ですでに身長は平均日本男児以上となった。肩ほどまでだった髪は腰ほどまでに伸びており（それから伸びなくなった）、それを紐で簡単に纏めている。今の彼は、銀髪碧眼ではあるが、狐耳と尻尾がなく日本人とは到底思えないが一応人間に見えた。もっとも、顔の造形は中性的で女性を思わせることもあるが、立派な男子である。

まずは道場でいつも通りの型をこなす。武器も妖気も用いない純粹な武術。といっても師匠直伝なので特にこれといった名前がなかったので仮に霧島流とハクはしていた。

一通りの型を終えると、いつもよりは早いがそろそろ朝食の支度をしようと思いつく。本来ならこれから武器の型に入り、その後妖気の訓練もするが、今日は特別な日だった。

「やっと終わったか、馬鹿弟子、飯を作れ」

「はいはい、まったく老人は早起きだからへブツ」

「お主はほんとこの九年で何を学んだんじゃ」

「はあ、師匠へのささやかな反抗心ですよ」

「まったく、石頭になりおつて、殴った手が痛いわ」

「それも師匠の教えの賜ですね」

寝起きなのか、気崩した寝間着姿の師匠が現れるが、ハクはまったく動じることもなく軽口をたたく。最初のころは、ただでさえ美人であるのに色々なところが見え隠れしてしまうような格好をされて幼いハクも動揺を隠せなかったが、この人がわざとやってほしいことに気付くと強かに対応できるようになった。そして、彼女の姿はここ九年でまったく変化がなかった。月ごとに髪形を変えるとかいう謎の習慣はあったが、狐憑きというのはどうやら長命で、肉体の最盛期を長く保てるらしい。

「ほら、できましたよ」

「ん、相変わらずだな」

「どうせならお世辞の一つでも言ってみせたらどうなんですか？」

「生意気言つでない、おいしそうだな、とでも言つと思つか」

「あなたにはそこまで期待していませんアブツ」

一日五回は必ず頭を殴られるのも最早悪しき習慣、もとい師弟のコミュニケーションである。そんな師弟関係嫌だ、とハクは常々零すが、内心悪い気はしていなかった。

その関係も今日で終わりだ。

それに関してはわざわざばかりにさみしさが無いわけではない。九年という年月は、ハクにとって人生の半分以上を占めるし、なにによりこの人は師匠であると同時に親でもあった。

(いや、どちらかというところのかかる子供かな)

「むっ、何やら師匠に対して礼を失したことを考えおったな？」

「めっそももない」

「……ふん、まあいい……」ごちそうさま」

「……師匠、今なんて？」

「二度は言わん」

「今日は槍が降るのか……」

ゴンツと鈍い音にハクは小さい卓に頭を突っ伏した。何しろ、師匠がハクの料理に対してごちそうさまを言うのは初めてだったのだから、驚きと嬉しさが照れ隠しで出てしまったからなのだが、ハクはその余韻に浸ることはなかった。

「で、いつ行くんだ？ 麻帆良学園とやらには」

仏頂面で答える師匠。やや頬が赤くなっていると言うことは自分でも慣れないことをしたと思っっているんだろうか。ハクはそれに微笑んだ。

「何を笑っている気色悪い」

「はは、いえいえ。もう荷物はまとめてありますから、すぐに出ます」

「そうか」

短く答えて師匠は自分の部屋に下がっていった。なんとなく声を掛けづらかったのは、やはり別れが辛いからなんだろう。ハクは今までの師匠との思い出を振り返る。

朝目覚めたら崖から突き落とされるわ、熊の大群と戦わされるわ、滝を泳ぎきれとか無茶な要求をしてきたりとか、いいかこれは組み手だといいつつ詠春にあしらわれたことを憂さ晴らしにばこられたりとか。うん、最後が一番きつかったよな。

「あつれーいいことねえな」

それでも、一言も言わなかったがご飯はおいしそうに食べてくれたし、病気の時は慣れないながらも看病してくれたこともあった、なにより、ずっとハクの修業を見ていてくれた。

どうしてか、嫌なことよりも良いことの方がずっと多かった気がする。

いつの間にか、荷物の整理は終わっていた。大きめの青いスポーツバッグに必要なものを詰め込み、少々堅いが紺のスーツに身を包む。これらの生活用品は詠春が手配してくれたものだ。彼にまた色々之恩が溜まってしまっている。

「この件で少しは返せるといいけどな」

彼 詠春から直々に依頼が入った。前々からたまにはあるが化物退治の手伝いをさせてもらうこともあったが、今回は麻帆良学園で長期の仕事をして欲しいということ。詳しくは向こうの学園長が説明してくれるそうだ。

おそらく、最近人手不足だと言う麻帆良学園の警備の増強の為だろうが、あそこには木乃香と刹那も通っているらしい。そのの秩序を間接的にでも守ることができれば、過去に誓った『守る』ということを少しでも実行できるならば、最後までやり遂げて見せる。期間は言い渡されていないが、そろそろその後の身の振り方を考えるべきかもしれない。

師匠にも先日、もう教えることは残り少ないと言われていた。あとは日々自己で鍛錬し、能力を伸ばして自身が得意とすることをやっていくしかない。

「行くのか」

玄関に立つと、師匠が出てきた。なぜだか淡い桃色の着物姿。凝った刺繍が施されていて、それが何より師匠の色っぽさを倍増させている。

「一体どうしたんですか、ずばらな師匠が珍しい」

「ふん、弟子の門出を祝うときくらいはな……」

どこか哀愁漂わせた顔で言う。

(困ったな、こんな師匠の顔見たことないぞ)

「……お世話になりました。俺には勿体ないくらいいい師匠でフベツ！ って、最後くらいきち、んと」

「まだ、修業は、終わっていない。恩を返したら、帰ってこい。」

特別に私の苗字を名乗ることを許してやる

「ありがとうございます。霧島白、名に恥じない働きをします」

何も言うことはない。唯、あとは言葉だけではなく態度で、行動で示すのみ。あなたの弟子はここまで成長しましたよ、と。声を出さずに涙をこらえきれなくなってしまった師匠の視線を背に受けて、霧島白は修業を終え麻帆良学園に出立した。



## 第九話 鬼の目にも（後書き）

いつか彼らの修業風景も入れていきます。今は物語の都合上、修行内容を伏せてある感じですが。いよいよ次回から原作介入します！

## 第十話 それも仕事の内

麻帆良学園都市。日本最大の学園都市と呼ばれ、いくつもの学校がその広大な敷地の中にあり、その中でも奥のエリアにある女子校エリアにハクは赴いていた。

途中見えた一体何メートルあるのかわからない巨大な大樹ですらもこの敷地の一角として存在し、いかに敷地が広大であるかを窺わせた。

そのうちの学校の一つ、麻帆良学園本校女子中等学校である学園長室で、ハクは今から仕事の内容について聞く予定だったのだが。

「……迷った」

産まれてこのかた、滅多に山から下りることがなかったハクには、田舎の村ならまだしも、建造物が建ち並ぶ都市となるとまったく土地勘が湧かなかつた。なんとかかんとか女子校エリアにいることはわかるのだが、肝心の本校中等学校の場所がわからない。

と、向こうの方から走ってくる女性の姿にそれを追いかける数人の男の姿が見えた。

「すみません！ 助けてください！」

「へっ？ ちょ！」

ぱっと突然背中に隠れる謎の女性。着物姿がよく似合う大和撫子という言葉がぴったりあてはまりそうな雰囲気を持っていた。と、その姿を追いかけたのか、数人の黒服姿で黒いサングラスといういかにもな人たちが目の前に現れ、ハクに向かってガンをくれている。一瞬で変なことに巻き込まれたことにハクは頭を抱えた。

「むっ！ 貴様、その方をどうする気だ！」  
「ああ、いえいえ俺は通りすがりの者でして……」  
「嘘をつけ！ 思いつきり抱きつかせておいて、言い逃れしようというのか！」

チラツ、と視線を向けると、確かにその女性は思いつきり手を腰に回しハクを抱きしめている。女性は顔をこちらに向けて「たすけて」と囁いた。身長はハクの方が高いため自然見下ろす形になる。その囁きに思いつきりため息を吐く。

（こんなことしてる場合じゃないんだが）  
ハクは早急に相手を説得し、この何だかわからない騒動を鎮静化しようとする。

「ちよつと、待て、これは誤解だ」  
「うるさい、こいつを捕えろ！」

強引に体を押さえつけようと襲ってくる男たちをひよいひよいと女性を腰にひっつけたままかわす。

交渉する余地も無し。ならば選択肢は一つ。

「ええい、めんどくさいっ！ 失礼！」  
「ひゃあ！」  
「なっ！ あいつは人間か！」

着物姿の女性を素早く両腕に抱きかかえ、逃走する。うしろからまてえという声が虚しく聞こえるくらいの速度でみるみる黒服たちを突き放す。

「ひゃー明日菜よりも早いわ〜！」  
「舌噛みますよ？」

随分遠くまで走った。これなら当分見つかることもないだろう。ゆっくりと女性を地面に降ろす。

「はあ、これで問題ないかな？」

「ええ、助かったわ。陸上部かなんかなんですか？」

「……まあそんな感じですよ」

加減はしたつもりだったがかなりの速度だったために答えを曖昧にする。が、目の前の女性を見てハクは驚愕した。

（まさか木乃香？ なわけないか……）

「ん？ どうかしました？」

「いやいや、なんでも。まあどうかしたかと言われれば色々疑問は湧いてくるのだけれどね……」

（黒服との追いかけることかどこの三流ドラマだよ！ ドラマなんてめったに見ないけどな！）とか。

そこで遠き日のテレビを購入したはいいものの、電波が届かないためにレンタルしたものしか見れない日々があったのを思い出した。結局それに苛立った師匠が叩き壊してしまったのだが、そんなことより。

「あ、助けた恩として、こちらも今助けてほしいんだけど……」

そこでハクは仕事でここに来たことと迷ってしまったことを簡潔に言った。

「へ、仕事で来たって、バリバリのキャリアウーマンだったんですか、かっこええな」

「……俺は男なんですけどね」

「ええ！？ ごめんなさい、あんまり綺麗やったからウチ勘違いして……」

「よく間違われるから気にしないでください」

「？ なんがお兄さんの顔どっかで見たことあるような」

「あゝ、気のせいでしょう。ところで道の方を教えていただけませんか？」

さつと話題転換。確実に木乃香だ。この京都弁っぽいようなそででないような特徴的なしゃべり方に、長くカラスの濡れ羽色のような髪、柔らかい目元などまんま木乃香が成長した姿だ。着物を着て大人びた雰囲気だったからわからなかったが、話すことで理解した。今はまだあまり関わらないようにしておきたい。もともと、今の自分は銀髪であるからわかりはしないだろうが。

道だけ聞くと、すぐに礼を言っ立去ろうとするが。

「あの、ウチ近衛木乃香って言います！ あなたのお名前は？」

「……霧島といます。道案内感謝します」

若干上ずった声で聞いてくる木乃香。案の定という思いと、久しぶりに見た懐かしさから一瞬呆けてしまいが、簡潔に言うとハクは歩き出した。嘘は言っていないんだ、嘘は。

立派な櫛の扉を前にして、ハクは姿勢をただし、身だしなみを整えて軽くノックした。中から入室の許可を得ると、ゆっくりと入っていく。中には高級そうな革の椅子に腰かけた老人だった。何より

目に付くのはその頭の骨格なのだが、あまり見ないようにしようと密かに心に誓う。

傍には短髪で無精ひげを生やした男性が立っている。穏やかな雰囲気ながら、かなりの手練であることを感じ取る。

「失礼します。この度、関西呪術協会の長である近衛詠春殿より仕事を承った霧島白と申します」

「ふおおおお、聞いた通りまじめそうな若者じゃのう。わしが、この学園の学園長近衛近衛右門じゃ。しかし、一応男と聞いているのじゃが……」

「俺は男です……」

こちら相手は人間と聞いていたのですが、頭蓋からひょうたんが飛び出しているあなたは何者ですか。とは口が裂けても言えない。

「冗談じゃ。それで、ハク君。君にして欲しい仕事と言うのは他でもない」

「学園の警備ですね？ この辺の土地勘はまだありませんが、これから下見して把握し、すぐに仕事に支障がないように行動する所存です」

「いやはや、やる気があるようで結構じゃのう。ならばもう一つ仕事を頼んでもいいかの？」

「はい、俺にできることなら何でもおっしゃってください」

（そつだ、長期の仕事と言われ、学園の警備だけにとどまるはずはない。きつと学園を狙う機関や組織を潰す際に俺のような所属不明の人間を使うのだから。この学園長もこつ見えて食えないお方だ）

「どんな危険な仕事であろうと、必ず俺は達成して見せます！」

ふつとニヒルに笑いながら今から下される任務に対しての意気込みを表現して見せるハク。それに何やら邪悪な笑みを浮かべる学園長。しかしその笑みにハクは気付かなかった。要は仕事を任されることに浮足立っていたのだ。

「……しかし、君に任せるのは心苦しいのう」

ふう、やれやれこんな若造に任せらるかと言わんばかりの態度。それはハクの使命感を余計に掻きたてるだけに他ならない。ハクはこの人はなんと器の大きい人なのだと思った。見知らぬ赤の他人である自分の身を案じてくれるとは。

「必ず学園長先生の期待にこたえます！」

(つく、相手は余程の使い手達なのだろう。俺みたいな未熟者にはまだ荷が重いかもしれないが、霧島霞の一番弟子として俺はきちんと役目を全うしてみせる)

拳を握りしめ熱い視線を学園長に送るハク。横の男性はなぜか苦笑いしているが気にならない。

「良く言った！ ワシはハク君の熱意に感動した！ ならば安心して、ネギ先生の補佐をお願いできるのう」

ふおおおおお、と高笑い。背筋を伸ばし、声も高だかに宣言していたハクはその言葉に一時停止。脳内再生。停止。活動再開。なぜだか嫌な悪寒が止まらない。

「……ネギ先生の補佐とは？」

ちよつと前に詠春から聞いた話では確か、英雄サウザウンドマス

ターの息子であるネギが、麻帆良学園の教師を始めたと言っていたことを思い出す。その人物の護衛、ではなく補佐。

「うむ、教育実習生から新任教師として今年から赴任する十歳の子供先生があるんじゃないが、いかんせん担任を任せるには荷が重いかも知れんでの。副担任として色々と助けてあげて欲しいんじゃない」

「子供？ ってことはそのおもり？ いやいや、そもそも子供がなくて先生を……裏の任務は？ 謎の組織との対決は？」

「はて、何の話じゃ？ そうそう、それから女子寮の管理人として生活してもらってから、前任の先生に話を聞いてうまくやってくれればよいからの。何かわからないことがあったら、こちらのタカミチ先生に聞くといいぞい」

「よろしく、霧島先生。麻帆良学園へようこそ」

ハクに向かってにこやかに笑って見せる。しかし今ハクはそれどころではなかった。あまりに未知の体験過ぎて頭は真っ白である。（おっと、ちよっと待ってくれ、何がどうなってる。修業を終えて新しい任務が子供のおもりであまつさえ女子寮の管理人！？）

「嘘だあああああああ！」

ハクの人生トップ3に入る絶叫が麻帆良学園に虚しく響き渡った。



第十話 それも仕事の内（後書き）

ハクがキャラ崩壊していると感じる方もいるかもしれませんが、彼は基本こんな感じで、たぶんどんどん影響を受けて変わっていくと思います。

しばらくたぶんギャグっぽい感じで続くかと……。うまく書けてれば良いのですが

## 第十一話 通ふ心（前書き）

普段の文字数の二倍くらいです。

## 第十一話 通ふ心

「皆さん、こんばんは。新しくこの学園で警備員、本校中等部女子寮寮長、および、3-Aのネギ先生の補佐として、副担任に就くこととなった霧島白と申します。新人ゆえに至らぬ点もあるかと思いますが、そのときはよろしくお願いします」

見上げれば頂上が見えないような巨大な大樹 麻帆良学園の名物でもある世界樹の傍にある広場、通称世界樹広場にハクを始め、学園都市に散らばる魔法先生、魔法生徒が集合していた。彼らは、魔法世界などから派遣された“魔法”などの超常現象を理解している、つまり裏側の世界の住人であり、今回新しくこの仕事に就くこととなったハクの顔合わせということで、学園長が呼びだしたのである。

ハク以外のものも軽い自己紹介を済ませていく。その中で、ずっと気になっていた少女が紹介を始めた。

「……桜咲、刹那です」

「ああ、よろしく」

小さく動揺するが表情には微塵も出さない。

何も変わらない。小さい頃の刹那がそのまま大きくなったようだ。いや、もっと女の子らしく育っている、色々。片側に結った黒髪は基本スタイルなのか、そのせいか張りつめた雰囲気も若干やわらげられている気がした。もっとも、こちらを射抜くような冷たい視線でなければもっと良かったに違いない。ハクのことを気づいていないのだろうか、いや、彼女はハクが狐憑きの時に銀髪であることを知っているはずだ。

（わざと気付いていないふりをしているのか……それとも知らない

ものだから警戒しているのか)

真相は聞いてみないことにはわからなかった。

集会は順調に進み、一通りの自己紹介を終えた。

「うむ。ちなみに警備員と広域指導員は兼用であるからの。と  
いうことじゃ、みな、よろしく頼むぞい」

学園長がそう締めくくる。このとき、関西呪術協会からの派遣と  
いうことではなく、学園長が推薦してきたということで紹介して  
もらったのが功を奏したのか、大半のものは受け入れムードであるが、  
こちらに対して敵意というか警戒の視線を向けているものもいる。

(神鳴流の葛葉刀子先生と……刹那か)

すらっとしたスタイルにややきつめの目が印象的な魔法先生葛葉、  
そして先ほど言葉を交わした刹那である。

葛葉はおそらく自分が狐憑きという特殊な生まれであることを知っ  
ている可能性がある。だから警戒の視線を向けてくるのもうなずけ  
るが、刹那から発せられる敵意は理解できない。

(確かにあれから連絡を取ることもなかったけど……前途多難だな)  
自分の正体がばれることへの懸念があることに小さくため息を吐  
く。

「ところで、彼の実力はどれほどなのですか？ 学園長の紹介です  
からそれなりの腕なのでしょうが、彼の名前は初めて聞くものでし  
て」

と、肌が黒く眼鏡を掛けた真面目そうな先生の一人、ガンドルフ  
イーニがそう切り出す。今から同僚として学園を守っていくのであ  
ればその実力を知っておきたいというのは当たり前のことだろう。  
それなりに活躍した人物ならば名を知っていても当たり前だが、ハ  
クの場合は最近霧島と言う名をもらい、それまでは師匠と組んで依

頼をこなしていたために知名度はまったくと言っていいほどなかった。

「ふお、そうじゃのう。　ハク君、誰かと手合わせしてもらっても構わんかね？」

「……いえ、ですが」

その言葉を予想していたとはいえ、あまり展開は好ましくない。元々自身の力を他人に見せるつもりはなかったため、この事態は正直まづかった。自身が異形の者であることがばれるのは好ましくない。昔なら自分だけにふりかかる火の粉を払えばいいが、今は師匠という存在がいることも露呈してしまうかもしれない。もっとも、彼女ならそのへんの刺客などには負けはしないだろうが。そう考えると、自分の考えが浅いことに小さく息を吐く。

「随分と余裕そうだねハク君」

昼間、学園長室にいたタカミチが話しかける。それほど余裕はないのだが、彼には自分がどう映ったのだろうか。

「まさか。　ここの魔法先生は優秀だと聞きます。　ならば実力など測るのは無駄だと考えていただければ、余分な時間を割かなくて済むと思いませんか？　生徒にとっても夜遅くまで付き合わせては可愛いそうでしょう？」

至極もつともな意見のようであるが、まさかこの提案が呑まれるわけではない。戦力の分析は正確に行っておかなければ有事の際にいらぬ面倒が起る可能性もある。暗に自分は戦いたくはないと述べたつもりだったが、何人かは今の言葉に憤りを覚えたようだ。

「そんな逃げ口上が通用すると思っっているのですか？」

「……桜咲さん、ならどうする？ 君が俺と戦うのかい？」

「ええ、構いません。もとより使えぬ人材ならば、雇用する意味もない」

案の定とでも言うのか、先ほどの言葉で刹那の中の敵意を爆発させてしまったらしい。おかげでやりやすい、と内心思った。見知らぬ者が相手となるよりは、神鳴流を使うという情報があるだけましなのだ。

「ふおおお、手厳しいのせっちゃん。ではこの勝負受けてくれるかね、ハク君？」

すでに愛刀に手を掛け、気を充実させる刹那。表情はポーカーフェイスのつもりだろうが、目からあふれ出る殺気は尋常じゃない。ハクはそれを身に受けて動じずに学園長の言葉に対応する。

「そうですね、彼女を軽くあしらえば合格と言うことでしょうか？ 学園長も人が悪い」

それには答えずに笑みだけで答える学園長。おそらく最初からこのつもりで関係者を集めたのだろう。詠春の推薦とはいえ、自身で見極めなければならぬという責任だろうか。面白そうだからというも理由に含まれていそうである。

「どこからでもかかってこい」

「私は刀を使いますが、無手で構わないのですか？」

そう言って野太刀を構える刹那。忠告しているつもりなのか、挑発なのか。いやそのどちらでもあるだろう。余程自分の剣の腕に自

信があるのか。

(いいだろう、その自信打ち砕いてやる)

いつしか、敵意を向けられ続けて自分の中に苛立ちのようなものが湧いていたことに気づく。傷つけるつもりはないが、勝負には勝たせてもらおう。

最低限の肉體強化を施す。あまり強すぎると気とも魔力ともわかないものに気付く者がいるかもしれないと警戒したからだ。もっとも、強化なぞしない生身でも十分戦えるだけの身体能力をハクは備えている。狐憑きの特性故か、通常の間人よりは遥かに優秀な身体だった。

「二度は言わん 来い」

瞬間、ブチツと何かが切れたような音ともに刹那が斬りこんでくる。

それは怒涛のような勢い。威力、速度、手数ともに申し分ない。

並みの相手ならばそれこそ一太刀目で斬られ、その先の剣舞を見ることが叶わない。

それほどまでに刹那の技術は高かった。しかし。

ハクはその剣閃を的確に見切り最小の動きでかわす。

それは死線の中で身につけられた洞察力であり、経験であり、思考力の高さである。

戦いの中で決して相手の能力を侮らない、自身の能力を驕らない。手首の返しを、相手の目線を、重心を、それらを予測し、当然のようにかわす。

「っく！」

「どっした、当たらないぞ?」

刹那の顔に浮かぶ焦り。

決定的な瞬間はすぐに訪れる。

連撃の中、わずかに大振りの一撃。

明らかにできた隙を見逃さず蹴りを叩きこむ やめだ。

ハクはその身に宿る妖気を出力し、右手人差し指一本に集中させる。

瞬間、ハクは気で強化されたはずの刹那の愛刀夕凧を、指一本で受け止めて見せる。

「なっ、そんな馬鹿な！」

刹那はもちろんのこと、周りの観衆ですらその事実には驚愕する。

刹那といえば、神鳴流剣士の中でも、まだ子供ながら相応の実力を持ち麻帆良学園でも上位の実力者だ。

そんな相手の一撃を指一本で止める。

これがどれほどの事であるのか、ほとんどの者が息を飲んだ。

「タカミチ君や、君にも同じ芸当ができるかのう？」

「……どうでしょうか。咸卦法を使ったとしても指の骨で止まればいい方ではないでしょうか。それを考えると彼……とんでもないですよ」

「ふおふおふお。タカミチ君を以てしてとんでもないとな！これは相当な逸材じゃのう！」

そんな会話が聞こえてくる。潮時だろう、ハクはゆっくりと刹那の刀をどけて話しかける。立ちすくむ刹那は無視した。今は早くこの茶番をおわらせない。

「皆さん、これで俺の実力はわかっていただけましたか？」

「ま、待ってくれ。一体どうすればそんな芸当ができるんだ！」

タカミチ君ですらできるかどうかかわからないのに、君くらいの年齢



の子がどうやって!？」

ガンドルフィーニがそう声をあげる。みながみな、ハクの方に注目する。

「それは気の練度の差でしょう。今回、桜咲さんは自身の剣技が通じないことに焦り、本来の立ち筋とは違う振りをしてしまった…そして精神の集中が乱れた気は、たやすく俺の一点に集中した気に阻まれた、とこんな感じでしょうか。もちろん、受け止め方にもコツはありますが。これが葛葉殿の一閃だったら、俺の指は今頃地面に転がっていたでしょう」

すらすらとあらかじめ用意していたかのような説明を述べる。本当のカラクリは別にあるが、それを話してしまつては妖気の説明も必要となってくる。多少は説得力あるように虚実を織り交せて、さも当然のようにふるまふことで例えそれが真実でなくとも、未知の出来事の真実を見抜くことは難しい。

もっとも、学園長だけは意味ありげな眼でハクを見ていたが、今のを一度で見抜かれるほどハクは生ぬるい修業をしたわけではないつもりだ。

「ま、まだ勝負はついていない!」

「いや、もう充分じゃ。みな、お疲れ様じゃ。解散してよいぞ」

戦いの熱気が冷めやらないまま、先生、生徒と関係なく今の事実について話し合っている。みなが解散していく中、ハクはじつと立ち尽くしたままの刹那を待ち続けた。

学園長が帰り際「送ってやりなさい、手は出しちゃだめじゃぞ?」と言っていたので思わず殴打しそうになったが、さっさと帰ってほしいので黙ってうなずいた。

やがて広場にはハクと刹那だけになった。

「久しぶり、刹那」

「やはり……あのハクなんですな」

「なんだ、やっぱりわかっていたのか」

その言葉で（わかっていて俺を殺すつもりで殺気をぶつけてたのか）とある意味傷ついたが、刹那の不意の言葉に少々、いやかなり戸惑った。

「………忘れたことはありませんから」

「え？」

反射的に聞き返してしまっただが、「なんでもないです」と恥ずかしそうに呟く刹那にこれ以上の追及はしなかった。ほとんど口ばくに近かったのだが、ハクの五感はかなり鋭いため、音を拾うことができたのだ。

何より、今の一言で一気に刹那の敵意が失せたことを感じて安心した。

「良かった、刹那。もう怒ってないんだな？」

「べ、別に、お、怒っていたわけじゃない」

慌てたように否定する刹那に、つい昔に戻ったような懐かしい気持ちになる。あの頃も今のようにあわあわしてたな。

「だってすごい殺気で俺に斬りかかってきたしな、本当に俺を殺すのかと思っただわ」

「あれは……、いえ、否定はしません」

「な………」

その言葉に絶句する。ハクが二の句を継がないでいると、刹那はそれこそ先ほどよりも真摯な、しかし力強い瞳でハクを見据える。ハクは無意識のうちに刹那の瞳を食い入るように見つめていた。その真剣な表情に、言葉をはさむことができなかつたというのもある。

「ハクは……あなたは、お嬢様を狙う刺客か？　もし、そうならば……わたしは、自身の全身全霊を以てあなたをここで討つ。例え相打ちであろうと、お嬢様へ危害を加えるつもりならば容赦はしないと思え」

吹き荒れる気の圧力。それは先ほどまでの比ではない。やはり無意識のうちに力を抑えてくれていたのだろうか。でなければハクと途中で思考を切り替えてから、ああ易々と刀を受け切ることはできなかつただろう。

「何を思つて俺が命の恩人であり、俺の世話を見てくれた恩人の娘でもある木乃香を狙わなければならない？」

「その可能性があれば、この場で斬るだけだ」

言つて、愛刀夕凧に手を掛ける刹那。

（おいおい……どうしたら信じてもらえる！？）

「だから、そんなつもりは一切合財、粉微塵もない！　命の恩人の桜咲刹那に誓つて！」

「わ、わたしはあなたに恩を売つたつもりなど！　第一助けたのはお嬢様であつて……」

（ああ、だから違うんだ。おまえも十分俺を助けてくれたんだよ）  
ハクの中で答えが出た。なぜだかわからないが、彼女に知っても

らいたいと思った。自分がどれだけ感謝しているのかということ、九年越しに伝えたいと思ってしまった。

「最初に俺を見つけたのは刹那、助けたのは木乃香、世話してくれたのは詠春殿だ。だから、俺には助けてもらった恩がある。むしろ俺がみんなを守りたいと思っている。刹那の事もだ。わかった？」

（ああ、柄じゃない、こんな自分で思ってるだけでいいのに……）  
一気にまくしたてて、急に気恥しくなって頭をがしがしと掻く。  
刹那と言えば、突然いつぺんに言われたせい、ぽかんと口を開けて、ついで笑って見せた。その笑顔は花が咲いたようで、可愛いと本気で思った。

「……わかりました、わたしはハクを信じることにします」  
「あ、ああ。わかってくれたならいい……。それより随分遅くなった。俺も女子寮住まいだから送っていくよ」  
「ええ、では行きましょう」

先ほどまでの態度ががらりと変わって、ハクとしてはどうにも落ち着かなくなってしまうのは、刹那だけではなかったようで、やや赤くした顔を見られないように俯き加減で歩いていた。

「ところで、わたしの剣はどうやって受け止めたのですか？」  
「それは企業秘密、な」

いたずらっぽく笑いかけて、誤魔化す。いつか刹那にはきちんと話しておこう。でもそれはもう少し先。お互いにもっと信頼できる

よづになったときにも話そう。

刹那があわあわと顔を赤くしたのをきっかけに、ハクは帰り道の間ずつと刹那をからかい続けた。

「ふん、じじいめ。何やら面白そうなやつを連れて来たじゃないか」

「マスター、計画をもう一度検討しなおしますか？」

「構わん。多少のリスクなぞ、十五年の悲願の為に乗り越えて見せよう」

刹那と打ち解け、警戒をすっかり解いたハクは遥か頭上の世界樹から観察していた者たちに気付いていなかった。

「この真祖の吸血鬼、エヴァンジェリンがな」

金髪をなびかせる美少女と、その従者の存在に。

## 第十一話 通ふ心（後書き）

刹那登場！そしてエヴァもやっと出てきた！作者としてもやっとここまで来たか…と始まったばかりなのになぜか感動しました。

今回のハクが使った技は霧島流のオリジナル技です。そのうち解説をはさむときがあるのでそのときにまた説明をば。ふざけんな、そんな技あるか！とか叩かれるの怖いですが（汗 とりあえず頑張ります

9 / 29 誤字修正

## 第十二話 暗闇の邂逅（前書き）

意外にも多くの人が自分の作品を読んでくれていることに感動。  
どこかが矛盾していたり表現不足がある描写もあると思いますが、  
どうかお付き合いください。

## 第十二話 暗闇の邂逅

桜咲刹那はずっと怒りを感じていた。

それは、幼いころに交わした大切な約束を裏切られたと想像していたことか。それとも、常に共にあることが当たり前となった日常が、唐突な別れを一方的に告げられたことへの虚しさからか。

ともかくも、それからひたすらに神鳴流を極めるための鍛錬に余念がなくなった。大切な人を守るのは自分だけだと考えていた。彼はもういない、ならば自分がやるしかない。ずっとそう思っていた。

いや、思うことにしていた。

本当は分かっていた、これは彼への甘えであり、自分の弱さであることを。

だから頭から離れない。

あの月夜の晩、初めて彼が人の姿となり自分と会話したときのことを。あるうことか神鳴流の剣士に襲われ、刹那を庇って背中に深い傷を負った彼を。

彼は強かった。弱く震えていた刹那を見捨てればいくらでもやりようはあった。

そのときすでに、刹那と彼の間には決定的な差があった。

それは悔しくもあり、だけど嬉しかった。

木乃香とは違う優しい他人。詠春とは違う頼れる他人。刹那の近くにはいなかった新しい大切な人。

だから、別れという事実が辛かった。

自分が強くなって木乃香を守るために鍛錬する。そんな綺麗ごとを並べながら、結局自分は彼がいなくなった事実から目を背けていた、逃げ込みたかった。

悲しくて、切なくて涙を流しそうになった。

そんな想いを抱えながら、麻帆良学園に入学した。



木乃香を決して危険に晒さないために常に護衛していた。彼女には自分のようになってほしくない。そう思って近くにいなながら遠い存在になるようにした。

それが最適だとそう思い、今まで適度な距離を保って護衛してきた。

しかしどうだ。

また、自分は彼と出会った。

「どうして今頃現れる……！」

それは純粹な怒り。忘れない、癒されたい、今まで抱えていた気持ちが爆発した。

彼は飄々とした態度で刹那の目の前に現れる。あまつさえその場にあった魔法関係者に向けて挑発ともとれる発言さえする始末。

「……桜咲さん、ならどうする？ 君が俺と戦うのかい？」

まるで自分の事など忘れてしまったかのような素振り。許せなかった。

木乃香を守ると、共に強くなると誓った男が、今更現れたことか、今まで連絡一つ寄こさなかったことか。

知らない、わからない、理解したくない。

だから刹那は彼に刃を向ける。

私と戦えと心で叫ぶ。

今までの怒りをすべてぶつける。

しかし彼は刹那の実力を遙かに上回っていた。

だから余計に虚しくなる。

力の差が埋まっていなかったことに対してか、誇りをずたずたに引き裂かれたからか。

「久しぶり、刹那」

放心した刹那に話しかける彼は、懐かしいくらい憎らしいくらい昔のままだった。

その笑顔も向ける言葉も。

ああ　自分はただ彼ともう一度会いたかったんだ

気づきたくなかった、もう会えないと諦め、怒りを溜めこめば自分の中で折り合いがつく。そう思っていた。

けどすべてがどうでも良くなった。

最後の懸念　いや、彼との約束を確認する。

もしも、刹那とともにいなくなった九年の間で彼を変えてしまった何かがあるならば、木乃香に危害を加える何者かと同じ存在になり下がったならば。

「その可能性があれば、この場で斬るだけだ」

彼はそれに応えてくれた。それは刹那が予想しうる遙か斜め上の答えであったが、それがどうでも良くなるくらいに、どうしようもないほど優しい答え。

(また、一緒にいていいんだ……)

だから刹那は願う。

一時でも長く、彼といたい。

一時でも早く、肩を並べられるように。

世界樹広場での会合から少々の日数が経った。それまでにハクは

あらかたの地形を把握し、警備員の仕事をそつなくこなせるようになっていた。

もつとも、この一週間ほどの間に三回ほどの襲撃があったのが笑えない。貴重な図書館島の蔵書を狙う輩や、この学園に在住する何者かを狙った者などここを狙う者はなかなか大勢いるらしい。

(やれやれだな……)

本日の警備は終了しようと家路を向かうとき、それは起こった。ぴくつと今は人間の形と同種の耳がその音を拾い上げる。

「悲鳴かつ！」

ハクが気付かないうちにどうやら侵入者が現れていたようだ。基本的に見回りをしている際、学園に張り巡らされた結界を管理している学園長から連絡があり、現場に赴くスタンスとなっていたために油断していた。

聞こえてきた悲鳴は一つ、女生徒によるものである。何かがあればそれは学園の、ひいてはハクの評価に関わる。

(それに、もしも木乃香だったら……！)

全力疾走。妖気を脚部に集中し、韋駄天の如く駆ける。背景は幾多の線のように流れて行き、数分もかからぬうちに現場に到着した。木の根もとに倒れている女生徒と、それに覆いかぶさる黒い塊を見つけ、思い切り蹴り飛ばすが。

「なっ！」

ハクの蹴りを予測していたのか、その黒い塊だったものは大きく飛びあがり、見事に蹴りをかわして見せる。

相手をけん制しながら、女生徒の状態を見る。少なくとも木乃香などの知り合いでなかったことに安堵した。

女生徒の首筋から二つの血の点が浮かび上がる。それはまるで吸

血鬼に血を吸われたかのような傷跡。一瞬何かの冗談かと思った。

「まさか、この学園に吸血鬼なんてレトロな人種が紛れ込んでるなんてね」

「フハハハ、この私を以て唯の吸血鬼だと？ 侮るなよ、霧島白」

その言葉にハクは表情を硬くする。どうして自分の名前を知っているのか。事前に調査されたとしてもここに来たのは一週間前。そう簡単に身内の情報が漏れるものなのだろうか。ただでさえここには貴重なものが多いのだからその情報の守りが薄いはずがない。

「それで、あなたはこんな夜更けに何の用ですか？」

「ふっ、なあにちよっと献血してもらっただけだ。そう殺気を向けるな、鬱陶しい」

黒いローブに身を包んだ小柄な何者かは、ハクの殺気をうけて平然としていた。ハクは夜目が利くほうだが、あのローブに何らかの認識障害がかかっているのか、表情が読み取ることができない。

（今の身のこなしといい、雰囲気といい、こいつは厄介な相手かもしれない）

だが、まずは何より情報が必要だ。一筋縄ではいきそうにない相手に、ハクは警戒していた。愚鈍な召喚された鬼などなら蹴散らすだけで済むが、相手はどうやら本体。何の使い魔も用いていないことから、目的は直接聞いた方が早いだろうと踏んだ。

「献血……ね。 どうか、わたしがそれに協力してあげようか？」

「そうだな……。 基本的には女の血の方が美味であるが、その美しさなら男の貴様でもさぞかし美味いであろうな」

（こいつ、俺が男であることを知っていたのか）

ハクの容姿と言動に惑わされることなく、相手はハクを男だと断定した。中性的で整った顔立ちのハクを一目で見極めるのは、難しい。本人にとつては悲しいことだが。しかしそれがわかったことでより一層、相手がなんの計画性もなく事を行ったわけではないことがわかる。少なくとも学園結界を突破して学園長に気付かれない輩だ。相当用意周到な準備があるのだろう。

「で、あんたは何者だ。　ちょっとくらい教えてくれよ高貴な吸血鬼さん」

聞きようによっては馬鹿にしたような口調ではあったが、相手はその言葉に反応した。

「ふん、いいだろう。　こちらばかり知っていてはフェアではない。私は真祖の吸血鬼、闇の福音、人形遣い、不死の魔法使い、禍音の使徒、その通り名はどれも本物だぞ？」

くくく、と笑いをこらえきれないとばかりに、不気味な声をあげる吸血鬼。しかし、ハクにはどれも聞き覚えがない。

(な、なんてイタイやつ!?)

そもそも魔法界の常識に触れることがなかったために通り名などというものとは無縁であったために、自身でそう名乗る相手が出て来てもかわいそうな人を感じてしまい、ある種肩透かしのようなものを食らったような状態になる。

「あゝ、すまん。　わからん上にちょっとイタイぞ……………」

「な、なんだと！　貴様、この私を侮辱するのか！」

「侮辱と言つか、真実と言つか……………」

ハクの言った言葉が余程応えたのか、肩を震わせている。

「フッフ、ああ決めたぞ、霧島白。力を取り戻した時の最初の標的は貴様だ。今日はここで引いてやるが、次会う時までには首を洗って待っている」

「その必要はない。今すぐおまえを捕えればいい話だ」

女生徒を寝かせたまま、ハクは相手と向かい合う。力はぎりぎりまで抑制し、最低限の力で。相手も力を抑えているのだろう、こちらが先に全力を出して手札をみせることなどしたくはない。

相手はすつと懐に手をやると何かを取りだし、互いがぶつかるように投げつけてきた。

(フラスコと試験管?)

それを反射的にかわす、が

フリーゲランス・エクサルマティオー  
「氷結・武装解除!」

「西洋魔術!？」

試験管内にあつた液体が急激に氷を纏い、救助者たる女生徒に向かっていく。

ほんの一瞬の出来事、少女を庇うように反転し背中を向ける。

全力で妖気を集中。

防御術式は間に合わない。

「ぐっ!」

歯を食いしばり衝撃に身を備える。しかし、数秒経っても攻撃らしい衝撃は襲ってこなかった。背中を見ると、スーツが凍りつき砕ける瞬間だった。

向き直ってもそこに先ほどまでの吸血鬼の姿はなく、自分がまんまと騙されたことに気づく。西洋魔術師とは杖などの魔法媒体を用

いて魔法を使う。それは陰陽術と近い形態だ。それがフラスコや試験管なんてものに入った液体を媒体に用いるものがあるなどという知識を知らなかった自分の落ち度。偏った知識しか持たぬ自分に苛立った。何より、裏をかかれたことがハクにとって悔しかった。

「……まさか狐が化かされるとはね」

肩をすくめてそう呟く。辺りに気配がないことからしてうまく逃げられたようだ。相手の言葉を鵜呑みにするわけではないが、まずは事を終わらせるために女生徒を保健室に運びこみ、学園長に報告に向かうとしよう。この日、学園警備について初めて味わった敗戦の味は苦々しかった。

## 第十二話 暗闇の邂逅（後書き）

前回の刹那の心情、とあの人との戦いです。

次回は副担任としてハクが3 - Aに行きます。久しぶりのコメディ回の予定です。



## 第十三話 読めない空気

「と、以上が先ほど起こった事件の詳細です」

一連の吸血鬼に関する案件を話すと学園長は困惑した表情を見せて、しきりにあごひげを撫でている。一体どのくらいかけてあの長さまで伸ばしたのかは非常に興味がある。今はボロボロのスーツに変わり動きやすいジャージ姿を保健室で借りてきていた。その時に知ったが女生徒は佐々木まき絵といい、これから受け持つ3・Aの生徒だった。

「そうかの。報告御苦労じゃった。この件はワシに任せてくれれば問題ない、下がって良いぞ」

その言葉にハクは驚いた。てつきりハクは見つけ出し、敵を倒すのだと思っていたからだ。決して、ハクを下がらせて良いことなどない。何せ直に相手にしたのはハクなのだから、その学園長の意図がわからない。この件は決して軽いものじゃないはずだ。

「……いいんですか？ 外部の者の犯行だとしたらこれで終わるはずがない」

「今回の件はワシに任せてくれ、と言ったのじゃが聞こえていたかの？」

反論は許さぬ。無言の視線がハクを射抜く。そこまで言うからには何かしらの裏を取っており、かつこの事態は外部……ハクの知らない身内で処理したいと言つことなのだろう。納得はできないが、頷くしかない。

「すみません、出しゃばった真似をしました」  
「ふおおふおお、いやいや。本当に大丈夫じゃ、ハク君は仕事を全うしようとしてくれただけじゃしものう」

朗らかに笑いながら答える学園長。しかし頑として譲れないこともハクにはある。今回は知らない他人がわずかに血を吸われただけで済んだが、万が一、あの場に自分が居合わせなければ佐々木は干からびたミイラになっていてもおかしくなかった。これが木乃香や刹那の身に降りかかると言うのなら、ハクは黙って見過ごしているわけにはいかない。

「ただし、次にまたこれに関する事態に自分が関わった時は、全力でこれを殲滅します。それだけは譲れません。では学園長、失礼しました」

鳩が豆鉄砲を食らった顔とは言い得て妙だな。まさにそんな顔をしていた学園長を尻目に、ハクは肩をいからせて学園長室を後にした。

「はあく、なかなか我が強いというか、芯があるというか……。あまり無茶すると真祖の吸血鬼といえど死んでしまっくんじゃなからうか」

すでにハクがいなくなった部屋で学園長は小さく呟いた。

昨日で春休みが終了し、新学期が始まる。

それは新しく派遣された青年の苦難の日々の始まりでもあった。

青いスーツにワインレッドのネクタイを締めた少年。特徴的な赤毛に、まだ幼い印象を受ける顔立ち。イギリス人ということだが、なるほど日本人的な観点から見てもなかなか整った顔立ちである。だが、今その顔は緊張でやや強張っていた。

「は、はじめまして、今年から3 - Aの担任を務めさせていただきます。ネギ・スプリングフィールドといいます！」

「はじめまして、ネギ先生。今年からあなたのクラスの副担任を任された霧島白といいます。何かあったら頼ってください。俺はネギ先生の補佐という立場ですから」

そういつて、頭をぽんぽんと叩く。その行動に緊張が薄れたのか笑顔で返事を返すネギ。

現在、3 - Aのクラス前の廊下でのやり取りである。ハクはタカミチにここまで連れられて来たはいいが一人で入るわけにもいかずネギを待つて、互いに挨拶をし、ネギも事前に聞いていたのだろう、今のようなくだりとなった。

「それでは、今からクラスのみんなに紹介させてもらいますね！

ここで少々お待ちください」

「……ああ」

正直気乗りしない。今まで大勢を相手にしたことなど、戦闘以外では一週間前の世界樹広場以来の経験だ。基本的に師匠との一対一で会話してきたというスタイルは、大勢とどうコミニケーションを取っていいのかわからないという不測の事態を招いている。

(こればかりは慣れるしかない……か)

これも経験だ。そう割り切るう。

中から一昔前に流行ったようなセリフとともに元気な声が聞こえてくる。さすがは中学生。無駄に元気が有り余っているようだ。もつとも、ハクの実年齢も詳しくはわからないがそれに近いはずなのだ。まったく同じ輪に溶け込める気がしない。

「それでは、どうぞ入ってきてください！」

ネギの声に、引き戸をスライドし教室に踏み込む。

瞬間、めまいがしたような気がした。

(う、人に酔いそう)

唯のヘタレ思考だった。柄にもなく緊張しているらしい。先ほどまで自分に相対して緊張していたはずのネギは活き活きとした表情でこちらを見ている。

(ああ、さっきまで君の事を幼いなあと考えたことは訂正しよう。君はすごいよネギ……)

なんて若干悲観的になってみる。

そしてクラス中の視線を浴びながら壇上にのぼった。

(さっきまでの元気はどうした、なぜ沈黙しているっ！)

教室内からしーんという文字が読み取れそうなほど静まり返っていた。みなが啞然とした顔をしている。せいぜい舐められないようにしなくては、第一印象は大事だ。

(やはり第一声はフレンドリーにか？それとも厳しくいかないと駄目なのか？ええいままよ！)

自身の中で方針が決まらぬまま、いざハクが口を開こうとした瞬間。

「……女の人？」

「ちがーう」

すでに第一印象が終わった瞬間だった。思わず棒読みで突っ込みを入れてしまった。

「これからこのクラスの副担任となる霧島だ、以後よろしく頼む。そして男だ。以上」

無愛想ここに極まれり。クラス中が再び沈黙した。いたたまれない空気。結局素のままの自己紹介となってしまった。

(これ以上俺にどうしろというんだ！)

慣れない事態に冷や汗が止まらない。口を真一文字につむぎ、視線は泳ぎっぱなしだ。

無論、ハクはポーカーフフェイスを貫いていると思っただけ。助けを求めるようにネギに目くばせするハク。ネギは苦笑しながら、場を纏めようと口を開こうとした途端だった。

「しつもん!!」

「へ?」

「霧島先生はこの出身ですか?」

と、まるで新聞記者のように体を前のめりにし、メモ片手に質問してくる女生徒。新聞部と書かれた腕章を付け、目を爛々と輝かせている。何この子怖い。

「きよ、京都の生まれだが」

若干、その勢いにたじろぎながらも返答を返すハク。これがどこの国の人という風に聞かれていたが答えに窮するところだったが、まあ質問の意図はそのようなことを聞いていたのだから、答えた言葉もあながち間違っていないから問題ないはず。

「京都の人って銀髪碧眼なの？」

「さあというか日本人ではないでしょう」

「てか、女の人じゃないってどういうこと」

「あれが男だったら私はなんなの!？」

などとクラス全体でどよめきが起こる。その質問を皮切りにあれよあれよと津波のような言葉攻めが始まった。

ハクは思った。ああ、やっぱりロクなことにならなかった。このクラスに馴染むなんて途方もない砂漠で針を探すほうがよっぽどマシなんじゃなかるうか。

半ば放心とも思える状態で事態を傍観することにする。どうせあの落ちつき払ったネギがこれを收拾してくれるだろうと思っていたが、その考えは甘かった。

「あ、あわわ、皆さん落ちついて〜！」

目をぐるぐる回しながら言葉の波に哀れにも呑みこまれていくネギ。ちよつと待て。

この現状をどうにかできるのが自分だけだというのに頭が痛くなつた。

「ちよつと、みんな落ちついて……」

「みなさん！ お静かに！」

ハクが覚悟を決めて、場をいさめようとしたときだった。金髪のいかにもお嬢様と思われる女生徒が、自分の机を叩き、声を張り上げた。クラスはそれでも収まらないがさつきよりは人の声が聞き取れるようには鎮静化された。

「まったく、うちのクラスはこれだから……。失礼しました霧島

先生。わたくしは雪広あやか、このクラスの委員長です。どうぞ、自己紹介の方を続けてください」

続けてくださいと言われてもこれ以上話すことはなにもないのだが、事態を収めてもらっておいてそう言われるとこのまま終わりにくい。

「あはは、ありがとう、その委員長」

「いえいえ、お気になさらず。これもネギ先生の為、うふふふ」

まったくどうしてやりにくい。ハクは小さく呟いた言葉が耳に入っ  
って、頬がひくひくとひきつった。

ネギの方を見ると、ようやくクラスが落ちついたことに心底安堵しているようだ。確かにこのクラスでは補佐が必要になるかもしれない。などと余計な思考をしてしまう。

「あゝ……君たちとは歳も近いので、何かあったら俺に相談してくれ。それとネギ先生をあまり困らせないようにな」

「……………はい……………」

「元気だけはいいんだな、ホント……………」

どつと疲れを感じる。ともかくも、これで自己紹介は終わった。とりあえずこの教室から出よう。ここは魔窟かなんかに違いない、  
比喩抜きで。

「では、ネギ先生。残りのHRは任せました」

実際、ネギの補佐として副担任と言う肩書をもらったが、何をしろとかいうのは具体的には聞かされていない。もちろん、ハク自身も学校の授業と言うものに興味があるためネギが授業をするときに

後ろで眺めていたりしようかと考えていたが、あいにく今から始まるのは身体測定。授業に興味はあるが女子中学生に興味はない。

「はいお疲れ様です霧島先生」

お互いに苦笑しながら教室を後にしようとした。  
だが。

「っ!?!?」

ハクは反射的に教室の隅、廊下側の一番後ろの席を見据える。長い金髪の人形のような整った顔立ちの女生徒と視線が交錯する。

一瞬、背筋が寒くなるような殺気をその少女から感じた気がしたが、少女からはまったく力と言うものを感じない。唯、こちらをみて満足げに笑っている姿が非常に印象的だ。なにせ笑った顔と言うのが、なぜだか可愛らしいというよりは戦慄するような笑顔だったから。

「……ネギ先生、気をつけて」

「え?」

このクラスには厄介なやつが混ざっていますよ、なんて言葉はネギに届いたかどうかはわからない。

その後ネギが教室から慌てて追い出されるのを見て早めに立ち去って良かったと思ったハクだった。



(むっ、ハクが困っている。なんとか助けてあげたいがわたしにはあいにくどうにかするような術を持ち合わせていない。それにしても情けない。わたしとあれだけの勝負をしておきながら、なんだあの体たらくは、まったく。これでは負けたわたしがバカみたいだ。あゝなんだかなあもう)

刹那は教室の喧噪のなか一人で百面相していた。それは平時ならば考えられないくらい珍しい出来事なのだが、幸いある一人を除いてそんな刹那の様子を見ているものはいなかった。

「せつちゃんせつちゃん、なんだかあの人ハクに似てへん？」

「ひゃああ、お嬢様！」

(お嬢様、いつの間に！余程ハクのことを気になっているのか、とどうかどうして彼は自分の事を伝えていないのか、真偽のほどは確かじゃないが近い、近いです。とりあえずそのお顔が近いです！)

突然の出来事に盛大なまでに刹那はテンパっていた。普段からあいさつはされても最低限の会釈くらいしか返していなかった刹那はその木乃香の行動に驚いたのだ。

「みなさん！ お静かに！」

(委員長、助かった。たまにはいい仕事をする)

「席に戻ってください」

「ん……そうやな」

声が震えそうになるのをこらえ、いつものポーカーフェイスで対

応じた。

（なんとか席に戻ってくれた。良かった。しかし、久しぶりに話した。いや話してしまったというか、成行きだったからしょうがない。でも、どうしてあんな暗い顔をしていたのだろうか……）

刹那には事が収まる最後まで何もわからなかった。

第十三話 読めない空気（後書き）

ギャグというものがわからない……。難しいです。

## 第十四話 歓迎は騒がしく

「……歓迎会？」

怪訝そうな声を上げたのはハク。今は職員室に戻り、普段の日程や今後の予定の確認などの雑事を行っていた。そんな折り、礼儀正しく現れたのはあまり人間には見えない いや、ロボットというらしいのだがいかんせん馴染みがない存在。普通に生徒として通っているのだから別に悪い印象は受けない。顔も普通の人以上に可愛らしいのだがいかんせん無表情だ。

「はい。ハク先生が赴任されるにあたって我がクラスで放課後に催されます。それに参加していただきたいのですが」

至極丁寧な口調だ。淡々と説明だけ受けているとなんだか説教を受けているような気持ちになるが、言っていることは友好的なことだ。ここは好意を受け取って参加するべきなのだろう。今朝の自己紹介ではほとんどまともに生徒と交流できなかったわけだし、これから副担任としてやっていくならばそれは必要な措置だ。

「わざわざ生徒のみんながやってくれるんだ、断る理由がない」  
「そうですか」

つとめて優しい口調で言っただつもりだったが、目の前の女生徒絡繰茶々丸が冷たい声色で答えた。ハクはその表情の変化のなさに驚いていた。

「どうかしましたか？」  
「いや、その」

「私がロボットで珍しいからですか？」

ああと得心が言ったように手をポンと鳴らす。妙に人間くさい動作だ。だが相変わらず顔は無表情。どうしてだろうか、とロボットに関して詳しい知識がないハクは疑問に思った。

「すまない、俺はロボットというのがどういうものかよくわからないんだが……、どうして無表情なんだろうと思ってな」  
「？」

何を言っているんだと言わんばかりの視線。それにはやや感情がこもっていたような気がした。

(あまり顔に出さない性格なのかもな、刹那とは似てるけど違う) ついついお節介のつもりなのか、踏み込んだことを聞いてしまったかと思う。

「そんなこともなかったか、いや忘れてくれ」

「はい、ではまた放課後にお迎えにあがります」

「ああ、頼むよ」

一人わかったような顔をしているハクに、茶々丸はなにとも言わずに会釈をして職員室を出て行った。

「霧島先生！ 麻帆良学園へようこそ〜！」

盛大な掛け声とともに出迎えられたハクを待ちうけていたのは、  
- Aの生徒たちだった。まだ大半の生徒の顔と名前は一致してい  
ないが、ある程度の確認は昼間のうちに済ませてある。

それにしても、活力というか元気があるというか。想像以上のパ  
ワーを秘めた生き物。女子中学生と言う図式がハクのなかで確立さ  
れようとしている。

(一体どこにそんな力がっ！)

と、どこぞの悪役が吐き捨てそうなセリフを恥ずかしながら考え  
朝の二の舞になった。

しばらくたったのち、まだ歓迎会と言う名の教室にいるわけだが、  
ハクの顔色は優れなかった。

(う、人に酔いそうだ)

ただでさえ慣れない環境、大人数が食べや飲みやの大騒ぎであり、  
先ほどようやく主役への質問攻めから解放されたところだ。ハクで  
なくとも精神的な疲れがたまることだろう。今はそこから『ネギ先  
生、教員採用おめでとう会』へとシフトし、もみくちゃにされてい  
るネギを輪から外れた椅子に腰かけながら眺めていた。

「だらしのない先生、この程度でへばっているのか？」

皮肉を含んだ言葉に、ハクは声の方に視線を向ける。

「……君は」

「ふん、自分の受け持つ生徒の名前も知らんのか」

金髪の長い髪、洋風人形のような顔立ち、体格は小柄で小学生く  
らいに見えないこともない。しかし何より、今朝ハクに向かって殺  
気をぶつけてきた女生徒。

(名前は確か……)

「悪いな、まだ赴任したばかりで慣れていなくてね、えーキャサリンだったか？」

「違うわ！」

鋭い突っ込みが入った。今は今朝のような敵意がないのか、若干警戒した風ではあるが状態は普通であることにひとまず安心しておく。

「すまんすまん、あーじゃあクリステイ？」

「おまえ本当にワタシの名前を知っているのか、コラ」

「えーあー、俺の貧弱な知識だとあとはキティちゃんくらいしかわからないんだが、どうだ？」

「オーケー、よくわかった。貴様がワタシをコケにしていることだけはひしひしと伝わってきたから安心しろ」

小さい肩を震わせている。しまった、どうやら怒らせてしまったらしい。しかし今までこれほど大量の人の名前を覚える機会がなかったハクにとつてはいささかきつかった。それに加えて横文字の名前なんて使われた日には、いくら最低限の教養のために英語を習得していようとあまり馴染みがあるわけではないのだ。そういうこともあり外国の名前と言うこと以外は思いだせなかった。

そして、何を思ったのか目の前の女生徒は、ビシッと人差し指をハクの鼻先に突きつけてくる。目は逆三角形につり上がり、口は三日月のように開かれている。

「いいか、貴様が次にワタシの名を知ったとき、それは恐怖に狂って命乞いをするときだ、わかったか！」

「……なんだ、アニメの見すぎじゃないのか？ もう中学生なんだ

からそういうこと俺以外に言うのはやめておけよ」

「イタイ子を憐れむような目で見るなああああああ」

(み、耳元で絶叫するな、三半規管が異常をきたすだろうがコラ)  
顔を怒りで真っ赤にして、地団太を踏みながら絶叫する金髪美少女にハクは頭を抱えた。

「わ、わかった、わかったから叫ぶのはやめろ。 みんなが君に注目してるぞ」

指摘してやると、少女は顔が赤いままにはっとした顔をして周りを見ると、何事かみんなが囁いている。よほどこの子が大声を上げるのが意外だったらしい。

(俺からしたら全然そんな感じの騒がしい子と言う印象しかないのだが)

ほとんど初対面で絶叫されれば誰だってそう思うか、とハクは思わないおす。

「フンッ、この屈辱忘れんぞ！ とにかく覚えておけ、行くぞ茶々丸」

「はい、マスター」

歯を剥き出しにして怒鳴り散らした後、まるで従者を連れる貴族のような振る舞いで茶々丸とともに教室から出て行った。今朝の殺気も勘違いなのだろうか。いや、そんなはずはない。今は要注意人物ということで把握しておくしよう。

残されたクラスメートはまたいつの間にかネギで遊び始めている。(やっと一息つけるな……)

はあと見た目よりもずっと年老いたため息とともにぐったりと椅子に体を預けた。



「あの霧島先生？」

今度は誰だ。ハクは気だるげに顔を上げる。

「近衛……さん」

「ウチのこと覚えてたんや〜嬉しいわ〜」

それは忘れられるわけではない。なんてことは口にしなかった。まさか赴任する先に木乃香がいるなんてことは一言も学園長から聞いてはいなかった。今朝は緊張していてクラスを見渡す余裕がなかったが昼間、名簿を見て確認した時は驚いていた。

「……まああんなことがあればね」

いまだきあんなドラマがやっても流行らないからな、貴重な体験だった。

「そんな〜そんなに女の人と間違えたこと怒ってるんですか？」

「そつちじゃないわ！」

頭のネジが外れてるのか、木乃香の考えは読めない。これが天然と言っやつなのか。知らないけど。

「あのときは満足にお礼も言えませんでしたから、もう一度話しかかったんです」

「そんな気にしなくていい。俺も困っていたところを助けてもらったんだ。ギブアンドテイクってやつだよ」

「はあ、でもウチほんとに困ってたんです。ウチのおじいちゃんに興味でお見合いさせようとしてきて、それであんな恰好でお見合

い用の写真撮らされるとこやったんです。だから助かりました！」

そんなに何度もお礼を言われるようなことじゃない。ハクは困り果てて頭をがしがしと掻いた。それにしても学園長、この歳でお見合いって何考えてるんだ。相手も相手だが、まだこんな年齢なんだからどう考えても権力や財産目当てのやつらだろうことはわかってるだろうに。

「いいんだ、あんまりお礼を言われると照れるしな」

そう言って笑って見せる。ハクのその表情に木乃香は一瞬驚いたような素振りを見せた。その態度にハクは疑問を感じた。

「どうした？」

「あ、いえ。何でもありません」

慌てたように取り繕う木乃香の様子をおかしく思いながらも、時間を確認してそろそろ良い時間であることに気づく。

「さて、そろそろ会を閉めようか」

「あ……えっと」

どうかしたのだろうか、何やら先ほどとは違った暗い顔をしている木乃香を見てハクは怪訝そうな顔をする。しかし、待っても口をつぐんだままだ。このままずると遅くなれば、ネギともどもハクも何らかの処罰を受けてしまう。

(仕方ない……)

「ああそうだ。何か困ったことがあったら相談してくれ。お見合いに関しても、俺から学園長に口添えしてもいい」

今すぐに話すのが無理ならば、あとから力になってあげればいい。そう考えた。木乃香の顔が幾分ほころんだ。良かった、素直にそう思う。この子はいつでも笑っている方が、見ているこっちも気分がいい。久しぶりのはずなのに、その根本は変わっていないことに気がついて思わず微笑を浮かべる。

「ほんま！ はあゝ霧島先生って優しいんやね〜」

これはたぶんお節介と言っやつだ。自分にできることなら何でも。そうすることで自分が満たされる。勝手に恩を返したつもりになっただけなんだ。だけど。

(それで言ばれるなら、やっぱり悪くないな)

心の中で静かに思った。

「気に食わん、まったくもって全然これっぽっちも面白くないっ！」  
「そつでしようか」

廊下を歩きながら、小柄な女生徒エヴァンジェリンは文句を零す。それを諭すかのようにつき従うのは茶々丸。

「ああ、大した力も感じない。まるで一般人のような気の量だ。  
あれでどうやって桜咲の刀を受け止めたのか」

いまだに火照った顔で、エヴァンジェリンは今間近に見た敵の戦力を分析していた。戦って見ないことには敵の実力の正体がわからない。その事実が腹立たしいことこの上ない。

自身の長年の経験に該当しない力の持ち主。もしもこの間の勝負を見ていなければ、ただの勇敢な一般人程度の認識しか持たなかったかも知れない微弱な気。

そしてなぜかこのタイミングで副担任に赴任したというのが、エヴァンジェリンにとって怒りが収まらないもう一つの原因。必ず何か裏がある。

「一度あのじじいと話をする必要があるな……」

エヴァンジェリンは酷薄な笑みを浮かべそう呟いた。

## 第十四話 歓迎は騒がしく(後書き)

結構話の進み具合遅いですかね(汗

なるべく心情描写などをしていきたいので、どうかご容赦願います。  
もし何か意見などございましたら感想の方へお願いいたします。

## 第十五話 現る吸血鬼

歓迎会からの帰り道、木乃香はぼんやりと考えごとをしながら帰宅していた。

似ていた。何もかもが、彼の笑顔が、仕草が、あの雰囲気すらも。そして何より、あのときの言葉。

彼はいつでも謙虚だった。お礼を言われれば照れて困った顔をする。だから気になった。

もしかしたらと思った。

いや、でもそれは結局そうであってほしいと木乃香が思いこもつとしているのかもしれない。あの別れ以来彼から何の連絡もない。もう木乃香や刹那のことなど忘れて普通に学生生活を送っていることだろう。

そうだ、今自分が気にしている副担任は、彼よりも年齢が上だと考えるのが自然だ。それにあんな綺麗な銀髪碧眼じゃなかった、黒髪に黒い瞳だったはず。

だから余計におかしく感じる。心はそのまま彼のようで、でも体はまったく別の者。

似ていると考えればそれまでなのに、だけど頭から離れない。

(名前……直接聞けばよかったかな)

今更ながら後悔する。でも、言ったところで、同じ名前だった所で、きつと優しく否定されただろう。事が真実か虚実であるかはどうであれ、だ。

会いたいとずっと思っていた。それが子供ながらに初めてできた男の子の友達だからか。

それとも自分を助けてくれたから。

(助けてくれた あのととき)

幼い時に溺れた川で彼が必死になって自分を岸に運ぼうとしてくれた。子どもの力でどうにかなるはずがなかったと今でも思う。

なのに彼は助けようとしてくれた。結果は大人に助けられたけど、でもそのことは今でも忘れられない。

(そのときのハクの姿は鮮明に え?)

まるでそこだけでもやがかかったみたいにはつきりしない。思いだせない。

なぜだかわからない。なぜ、どうして?

「キヤアアアアアア!」

はっと思考の海から現実に戻ってくる。傍にいるオッドアイを持ったツインテールの少女、親友の神楽坂明日菜がその悲鳴にいち早く反応する。

「本屋ちゃんの声!」

「ま、待ってアスナ!」

木乃香は駆けだした親友を慌てて追いかけた。

綺麗な桜が咲き誇り、風にその花を散らしている。  
通称桜通り。

最近、夜になると桜通りで吸血鬼が出没すると言う噂が流れていた。もともと、貧血で倒れてしまった生徒の話などから生まれたものだ。ある意味核心をついているところがこの噂の怖いところだ。

「警備の日でもないのに何やってんだか……」

歓迎会から解散した後、ハクは念のため桜通りを生徒が通らないように監視することにした。昨夜は気付かなかったが、確かに自分が交戦した場所も桜通りにほど近い場所だった。犯人がそれを意図していることなのか真偽は定かではないが、今の時間、このあたりを警備しているものはいないはずだ。

（もしもあの吸血鬼が麻帆良の警備状況を把握しているなら必ず警備の穴をついてくるはずだ）

ハクはそう考えていた。事実、犯行があつたのはハクが警備を終えたときだ。人間の耳では拾うことができない悲鳴の距離。ハクはこの考えが確実と言えないまでもかなりの確率であると判断する。

（それにしても夜桜と言うのも綺麗だな）

桜を見て、遠い昔の出来事を思い出す。が。

「キヤアアアアア！」

「くそ、また後手に回った！」

呆けていた意識に喝を入れ、瞬時に声がした方へ走りだす。

素早く身体能力を強化、速度が上がる。

現場に着くと、そこにはクラスメートを抱きかかえたネギと、あの騒がしい女生徒がいた。黒いローブを身に纏って、まるであのときあいつのように。

「エヴァンジェリンさん！ どうして僕と同じ魔法使いのあなたがこんなことを！」

「この世にはいい魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよ、ネギ先生。良かったな、応援が来たぞ？」

「え？」

エヴァンジェリンの言葉に誘導されるように後ろを向くネギ。口元で笑みを浮かべながら魔法の触媒を取りだすエヴァンジェリン。



「馬鹿か！ 目を逸らすな！」  
フリーゲランス・エクサルマティオー

「氷結・武装解除！」

女生徒を抱きかかえた状態で魔法がネギに直撃する。幸い、あの魔法に殺傷能力がないことがわかっていたから別段気にしない。氷の塵が辺りにもうもうと立ち込めるなか、あいつが空を滑るように現場から離脱しようとしていた。

「逃がすか！ ネギあとを……」

「宮崎さんを頼みます！」

「は？ ちょっと待て！ おい！」

言つや否や杖にまたがり、ものすごい勢いで後を追っていくネギ。  
(くそ、どう考えても役割が逆だろう！)

目の前が見えていないネギに苛立ちながら、仲間の可能性を危惧してその場にとどまり、裸同然となってしまっている宮崎に上着を掛ける。

「あ、あんた、霧島先生なんで!？」

「さて、それは誤解だ、神楽坂」

タイミングが悪いことこの上ない。今まさに半裸状態の宮崎を抱きかかえようとしていたところで現れた女生徒、明日菜の顔が怒気を孕んだもの変わる。

「！ 霧島……先生？」

「こ、近衛！ 助けてくれ！ 誤解なんだ」

身の危険を感じ、駆けつけてくれたもう一人の女生徒、木乃香に

助けを求め、が。

何やら良くない笑顔

邪悪な笑いを浮かべる木乃香。

(マテ、俺が何をシタ?)

「アスナ、やつちゃって」

「オーケー!!」

「ええ、ふばあああ!」

見事な助走からのシャイニングウィザード(空中飛び膝蹴り)を顔面にめり込ませてきた。これ普通の人を受けたら軽く死ねるな、とか思った。

「と、トリップしてる場合じゃない。 神楽坂、近衛、あとは任せろ。 説明はあとでするから、御前らはさっさと寮に戻れ」

「逃げる気なの!」  
「ちがーう! ああ、もうあとで説明するからいいか、後任せたからな!」

近くに別の警備 木乃香を守る護衛の存在を感じ、あとは任せろ。なぜその護衛から殺気を向けられているのかはわからんが。

痛む頬をさすりながら、ネギ達が向かったであろう方向に全力で走る。大分余分な時間を食った。

遠くで派手にドンパチやってるのが見える。魔法の秘匿はどうした。まあそれもこの学園の結界による認識阻害の影響で季節外れの花火程度にしか思われないのだろうが、納得はできない。

互いにどこかの校舎の屋根に降り立つ。今はにらみ合い状態だが、事態はどう転ぶかわからない。そこに二人目が降り立つのを見て、ハクは焦った。

足に妖気を集中 瞬動!!

瞬動の類は気や魔力で身体強化し一点に集中させることで可能だ。

ならば妖気でできない道理もない。事実、一番初めに俺を師匠がノックダウンさせたのは瞬動後の手刀だ。

「ふん、ようやく来たか」

「うわ〜ん、霧島先生〜」

不敵に笑う金髪少女と、無様にも羽交い絞めにされているネギ。しかし、羽交い絞めにしているのは少女ではなく、緑色の変わった髪色をした長身の女生徒絡繰茶々丸だった。

その姿を見て頭が痛くなったのは言うまでもない。

学園長に宣言したあの言葉が脳裏をかすめ、意識を引き締める。

「そいつを放してやれ」

できるだけ威圧的に、視線に敵意をこめて言う。茶々丸の方はその視線で一瞬体を反応させるが、もう一人の女生徒はそれを笑って受け流す。

「言っじゃないか、ワタシが誰だかわかったのか？」

「3・Aのやかましい女生徒ってくらいしか知らん。 さっさと帰って寝ろ、ただでさえ悪い発育がもつと悪くなるぞ」

皮肉をこめてそう言ってやる。彼女のことを魔法生徒としてあの会合のときに呼ばなかったのは学園長のたくらみか、はたまたこの生徒がサボったのかは定かではないが、関係者らしい。手加減は無用だろう。

「ぐっ、貴様、言わせておけば……」

ぎりぎり歯ぎしりの音が聞こえてきそうだ。相変わらずネギの

方は自力で脱出できなさそうだ。じたばたしているだけで茶々丸の腕はびくともしない。一体どういう体なんだ、ロボットって。

「このぼつやには責任があるんだ、おいそれと放してやることはできん。この厄介な呪いを解くためにはな……。 どうしてもというのならば、ワタシが吸血し終わってからにするんだな」  
「どういうことだ？」

呪いを解くのに人の血液が必要と言うことなのか。だとしても、それは人に危害を加えていることに他ならない。

「ふん、黙ってそこで見ている。 妙な真似をすると、うっかりぼつやが吸血鬼の仲間入りしてしまうぞ？」  
「くそ……」

暗に眷族とすることを仄めかす相手に、ハクは何もできない。

そういつて、ネギの首筋にかみつこうとする吸血鬼。

(あれを使うしかないか)

ハクが気付かれないようにすつと手を動かそうとした瞬間だった。

「コラー！ この変質者どもー！ うちの居候に何すんのよっ！」

必殺のシャイニングウイザードがまさに吸血する寸前だった吸血鬼にクリティカルをかます。 気のせいかな魔法障壁を無効化したような気がするが、弱い魔力では防ぎきれない威力だったと見るべきか。 吸血鬼の方は「あぶあばばば」などとギヤグみたいな声をあげて吹っ飛んだ。

「よくもワタシの顔を足蹴にしてくれたな、神楽坂明日菜！」

「あ、あんたたちうちのクラスの！ まさかあんたたちが今回の事

件の犯人!？」

ちらつとハクの方を窺って冷や汗を流す明日菜。ああ、そうだよ俺は殴られ損、いや蹴られ損だよ。

「つち、今回は分が悪い、退いてやる。だが次はないぞ！」

「ってちよつとここ八階！」

典型的な悪役の言うセリフだよそれ。という突っ込みは届かず、言うつや否や建物から飛び降りた。呆けから復帰し、追いかけてよとするが、何やら煙幕のようなものを張られて方向感覚が狂う。敵の魔力を探ろうにも四方すべての感覚が遮断されているためそれもできない。

「認識障害の煙? くそ用意周到なことだ！」

結局、悪態ばかりついて成果がなかった。いや、とりあえず存在と目的だけ確認できたから良しとしよう。煙が晴れると、ネギがアスナに抱きついて泣きことを零していた。というか、今の物怖じしない明日菜の態度を見て、ハクは気付いた。

「もしかして……魔法ばれてるのか？」

ぼそつと呟くように問いかける。普通ならば「は?なに言っちゃてんの?」的な反応が見られると予想したのだが、見事にそれは裏切られた。

「え!? それじゃあ霧島先生もネギの関係者?」

驚いた声を上げる明日菜。それは肯定という意味だ。

(いやいや、ちょっと待てよ。ネギ、御前が来てからまだそんな年月経ってないだろ！)

「こんなんのお守りなんて嫌だあああ！」

一番の厄介事かもしれないネギに当分頭を抱えることになりそうだ。

## 第十五話 現る吸血鬼（後書き）

若干コメディっぽい感じですが。ネギま！を読み返していると、どうにもシリアスな感じじゃないので、書きわけ？が難しいです。

ハクが今後どのような態度を取っていくかは、まだわかりません。

第十六話 過去、在りし日の風景（前書き）

話の通り、過去の話です。

楽しんでいただければ幸いです。



## 第十六話 過去、在りし日の風景

ぐうぐうぐう。

地響きもかくやという腹の音が静かな空間にひびを生じさせた。

「こんの馬鹿弟子が！」

「あだあああ！」

今日も今日とて鉄拳とも言える様な拳骨を頭にもらってハクはうめき声を上げた。

辺りは家から離れた竹林のなか、精神集中のためにぎっくりと斜めに伐られた竹の上に指一本で逆立ち修業という名の拷問（だとハクは思っている）を受け、時刻はすでに夕刻を迎えていた。

今日一日を自身の中にある妖気を引き出すための訓練とせずと集中していたハクだが、いい加減体が食事と休息を欲し始めていた。

師匠の元で修業を初めて一年あまり、基礎修業に始まり、基礎修業で終わる毎日ばかり。ハクはいい加減飽き飽きしてきていた。

「師匠、いつになったら技を教えてくださいませんか？」

鈍い音が鳴る。ハクの頭には記念すべきこぶが鏡餅のようにつかっていた。

「馬鹿もの、基礎もまともでできずして技を習得できるわけなからうて。基礎も不満を言わぬように鍛錬する心がなければ、応用の技の修業で音をあげるに決まっておる」

「むっ、言わんとすることはわかりますが……」

なお納得がいかないと言う目で師匠と言われる妙齡の美女 霧島霞こと師匠を見つめる。ここのとこ毎日毎日、修業が終わり際になると技をせがむようになってきている。朝からくずくず文句を言わずに、言い渡された訓練をこなしてから言うものだからその点律義というか、真面目というか。

そんなハクの態度に師匠は嘆息した。

「……仕方ない、一度だけ技を見せてやろう。だが、これを見てもう一度技を教えて欲しいとは言わぬだろうがな」

「ほんとですか!？」

ハクはその言葉に目を輝かせた。自身の妖気を使った技というのがどういふものなのか興味があつたし、なおかつ一年間我慢してきた甲斐があつたというもの。

「ああ、だが」

「だが？」

にやりと満面の笑みで師匠は何事かを言おうとする。ハクはその笑顔はまずいと直感で悟つたが、恐怖よりも好奇心が勝る結果となつた。結局黙つたまま先を促した。

「主がこの技を受けるんだ」

「え、そんな見たこともない技をですか!？」

「うるさい、黙れ、つべこべ言わずに構えろ」

問答無用に構えを要求してくる師匠。その様子を見てハクは疲れ切つた体に鞭打つて妖気を体全身に巡らせて両手を前に、防御の型を取る。

「手加減はしてやるが、容赦はしないぞ」  
「それってどっち……」

と、辺りに立ち込める静寂が張り詰める。

(耳鳴り? いや、違うあれは)

腰を落とし、両の手を右に落とし溜めを作る。

左手は拳を、右手はそれを支える掌底の握り。

ハクは目を見開いて技の特性を見抜こうとする。

(妖気は左手に収束している、あの右手はそれを漏れ出さないようにさらに妖気で形をとっているのか?)

師匠はその様子を見て口角を釣り上げる。師匠、それは悪役の笑い方ですよ。と小さな突っ込み。

「準備はいいか?」

「いつでも」

短く答える。ハクの方も準備はできていた。狐火を使う要領

もつとも、今は狐火を使うことを禁止されている。で両手に妖気を集中させることで打撃なら受け止め、放出なら弾き飛ばす。もつとも基本的な防御の型。しかし師匠が自身の技の名にこだわらないせいか呼び名はない。ハクは独自にこの構えをこう名付けていた。由来は、師匠の名前と、防御の技であること、そして流れる水のように攻撃を受け流すことから。

【霧島流、後の型 流水の構え】

その構えを取った瞬間、師匠の拳が消え、暗い、漆黒の光がはじける。

漆黒の光球はまるで散弾銃のようにハクに襲いかかる。

数は一つが二つに、二つが四つに……計十六発もの弾丸が手のひらから繰り出されている。そのどれもがものすごい勢いで迫ってくる。

る。

迎撃しろ　！

本能のままに腕をふるう、一つ目を叩き落とし、二つ目を弾き飛ばし、三つ目を両の手で受け止め、四つ目をかわそうとするが

「ぐあああああ」

気を失いそうなほどの連撃、衝撃がハクの体を襲う。だがぎりぎりのところで踏みとどまりながら、すべてを受け切ろうと気概で立ち続ける。

「ふう、なかなか予想以上の根性だのう」

その言葉が聞こえた瞬間、ハクは地面に倒れた。

目が覚めるといつもの天井で、布団の中で眠っていた。体の節々が悲鳴を上げている。これは生意気言った代償か、明日の修業は辛くなりそうだ。

「目が覚めたか？」

すっかりいつもの寝間着　白と青の花が咲いた浴衣を纏っている師匠が軽い声で言った。

「……おかげさまで」

「なんじゃ、不機嫌そうじゃのう。　手加減したと言っても容赦は

せずに技を出してやったじゃろう」

にやりと妖艶に笑う。思わず言葉に詰まりそうになるが、そこは慣れた。

「なんとなくはわかりましたが、どうやってあんなに大量の弾丸み  
たいな光を出すんですか」

「はは、あれはお主の狐火とやらの応用みたいなもんじゃ  
「狐火の？」

それにしてはまったく別の技に見えたのだが、どういうことだろ  
うか。

「なあに、簡単なことじゃ。一発の弾丸を複数に打ち分けるんじ  
ゃ」

「確かにそれは簡単そうですね……ってめっちゃ難しいですから！  
そもそも妖気を安定させて固定するのすら難しいのに！」

そうなのだ、狐火のときのように大量に妖気の塊を炎の気として  
昇華し放つのはなかなか難しい。さらにその動作に複数に打ち分  
けるなどという作業が加わるなどできるはずがない。

「じゃから、そのための基礎修業じゃろう。腕を加速させる妖気、  
左手で妖気を打ち出す溜めの準備、右手でそれを固定させ、瞬時に  
放つ技術 三位一体の技じゃ」

さらっと説明されても、それに至るまでの道のりが相当険しいと  
思うのはなぜだろうか。

「そもそも、勘違いしてるようじゃが、これはすぐにでもやるうと

思えばできる」

「俺にはまだそんな速度で拳を振れませんよ……」

「馬鹿か、確かに振りだす速度も必要だが、ある程度妖気を溜めてあとは打ち出すイメージが必要なだけじゃ。難しく考えるな」

と言われても、なかなか難しい。狐火の要領で溜めを作り、いや、それより小さい奴をイメージすればいいのか。

「それでもかなりの威力でしたよ？」

「私の技の中には更に決定的な威力の技もあるわい。そもそもこれは牽制で使うようなせこい技じゃ。相手の出方を窺ったり、相手の攻撃を無効化するようなな」

「無効化ですか……」

そうじゃ、と行って神妙に頷く師匠。腕を組んであくらをかき、そんな動作をするものだから似合わない。

「痛い……暴力反対！」

「師匠を笑うものにそのような人権は存在せんわ。話を戻すと、妖気とはそもそも前にお主に言ったが、気や魔力を上回れば霧散、つまり無効化できると話たろう？」

「ええ、ですから差し引きして上回った分がこちらの攻撃力で、相手の気や魔力の攻撃は無効って感じになるんですよね？」

「まあ。と、これが本来の技の使い道。まあ私が使う技は攻撃にも防御にも使えるんじゃないが、純粋な妖気の防御力はないに等しい」

妖気の特徴として、身体能力を底上げしたり瞬動を使ったりなどの部分は他の気や魔力と変わらないが、対魔のような気の攻撃特に神鳴流の奥義や、呪術師の魔法などに対する防御力はない。

つまり、防御するためには技を繰り返さないといけないという手間がある。

「ふむ、まあそういった者とも対抗できる手段として用いることもできるということじゃ。もっとも、この技は数が出せれば面で攻撃するような性質になる。威力は小さくても確実に相手に何発か当たるんじゃ。一対一でもかなりの威力にはなるぞ、さきほどお主をノックダウンさせたようにな」

いや、でもそれは師匠の技の練度が高かったからじゃないんでしようかね。と思っただが、殴られたくないので黙った。

「やり方は、狐火よりも綿密に妖気を練る必要はない。粘土遊びのような感覚じゃ」

「はあ、粘土遊びですか。想像はできませんが」

「そうじゃ、適当な大きさにちぎってそれをぶつけるイメージが肝心じゃ」

そういつていつの間にも用意したのかお茶で一服する師匠。ハクも布団から起き上がり体をほぐす。

すでに家の中は暗い、月夜の中。お互いに狐憑きということもあり夜目が利くから普段月が出ない日以外は明かりをつけることはない。

「気づいたか？」

「はい、三ですね……」

小さくやりとりする。屋敷の正面に扇上に三人の気配を感じ取る人ではない、召喚された鬼の類だろう。

「未熟者が、九じゃ、裏手に六体もおる」

うつ、と恥ずかしさに言葉を詰まらせるハク。素早く気配を押し殺す。

「正面、やれるか？」

「……俺はあなたの弟子ですよ？」

ふつと小さく笑って散開。障子を開け放ち夜闇に身を投げ出す。師匠は一瞬のうちに見えなくなった。

おそらく正面に来てるやつらは囷だろう。師匠もそれを把握してか自然と裏側の六体を片付けに行った。

（まだ俺のことに気づいていない！）

扇形に展開した三体の内、右はじに位置する鬼に狙いを定める。ハクとの体格差は軽く見積もって四倍。かなりの質量を有するだろうが。

「オオ

！！」

奇襲。腹を抉るような掌底で厚い筋肉を貫き、引き抜く手で骨を砕きつつ抜く。

鈍い咆哮をまきちらし鬼は還された。

「鬼さんこちら」

その声に気付いたもう一人の鬼が鈍重な動きで襲いかかる。鬼の首を足に込めた妖気の手でブーストさせ弾き飛ばす。

残り一人。

「いないっ！」



首を巡らせた瞬間　ぞっとする悪寒とともに前転して飛び下がる。

虚空に煌めく銀の一閃に冷や汗が止まらない。

鳥族の一人だろうか、長い刀を持ち、素早い動きですぐにハクの視界から消える。

(くそ、早いな)

一撃をかわし、また消える。その繰り返し。次第にその攻撃の間隔が短くなってきた。明らかにハクのペースを掴んできていた。どっから来るのかわからない、だったら一撃でもいいから当てる。

左手に溜めを作り、右手で覆う

それは先ほどの焼き直し、師匠が行った技の工程を見よう見まねで再現する。

一刀がハクの頬を掠める。技に集中しているせいで満足な回避はできないが、今までの攻撃を予測し最低限の動きだけでそれをかわす。

止まることない動きが、一瞬だけ止まったその瞬間を相手は見逃さない

「死ねえ！」

鋭い突きが背後から襲いかかる。

だが、ハクの顔を見て凍りつく。

一瞬の隙はその実、技を放つための足場作りに他ならない。

【霧島流、後の型　散弾掌!!】

師匠には程遠い三つの暗い光の弾丸が相手の刀を粉碎し、体を滅多打ちにする。

だが、なお敵の体は前進をやめなかった。

(しまった、技の硬直でっ！)

殺気だった細い瞳。鋭い爪が喉もとに迫る。

【霧島流、後の型

散弾掌！！】

無数の爆発的ともいえる数の弾丸がハクの目の前で展開される。

あまりの光量に目を開けていられないほどの凄惨さ。

その光の濁流に飲み込まれるように鳥族は消えうせた。おそらく体が粉々になる寸前に還されたのだろう。

この瞬間、これ以上の技があるのかと全身が震えた。

「名前のセンスはいまいちだが……やればできるじゃないか」  
「し、師匠」

不敵に微笑みながら腕を組んだ師匠の姿を見て、ハクは安堵した。腰を抜かしたようにへたり込むハクを見て、師匠はため息をつく。

「ふむ、しかしこんな相手も倒しきれんとはの……。よし、明日からは更にきつくなるので、心してかかれ」

そういつてウィンクしてみせる師匠。その容姿のせいで一瞬ドキッとするがこれだけは言っておかねばならない。弟子として。

「師匠、その年齢でウィンクって恥ずかしく……ぎゃあああああ

地獄行きのような特訓に更に冥界行きが加わったのは言うまでもない。」

## 第十六話 過去、在りし日の風景（後書き）

次回、エヴァンジェリン編に戻ります。

今回ようやく技の紹介ができました。うまく表現できればいいのですが。

この先使っていくに当たって必要な描写かな？と先の話を書いていて思ったので、過去話を入れさせていただきました。誤字脱字・意見は感想の方へお願いいたします。

第十七話 無益な戦い（前書き）

文字量増量版です、ご注意ください

## 第十七話 無益な戦い

吸血鬼が現れた夜。魔法ばれの事の顛末をネギから一通り聞いたハクはため息をつきながら、とりあえずその場では解散とした。明日菜に関してはこれ以上関わらないように嚴重に注意をした。だが。

「いまのところ危険もないし、大丈夫です」

と突っぱねられた。すでに危険はあつたはずだが、彼女の中でこれは危険の内に入らないらしい。なんとも強気と言うか、危機感がないというか。

もちろん、強制的に記憶を処理することができるとは、ハクにはそのような魔法は使えない。そうすると学園に報告しなければならず、ネギは本国に強制送還されオコジヨ刑務所に入るとかなんとか。

だからその件は保留としておいた。この学園内に居る限りは確かに滅多な危険はない。そのうち機会があつたら打診してみても記憶を改ざんすれば被害は最小限に抑えられるかもしれない。

すでに手遅れの可能性もあるが

「それは俺が考えることじゃない。生徒とはいえ、知らん他人だしな」

そうこぼすが、気分は晴れなかった。

翌日、ネギの様子はおかしかった。明らかに元気がなく追いつめ

られたように「パートナーか……」と呟いていた。おそらく、昨夜の相手が一人ではなく、茶々丸を連れていたことに関係するのだろう。

あまり良い傾向ではない。クラスメートもその妙な雰囲気当てられてか心配そうにしていたが、それもほんの刹那の時だった。すぐにネギが人生のパートナーを探しに来ただのとんでもなく飛躍した発言を言い始め、場が混沌としていた。

そんな様子を見届けた後、ハクは屋上へと向かった。

案の定、そこには昨日の吸血鬼騒動の原因がうたたねをしていた。いや、うたたねをしていたのは予想外ではあったが、その場にいたということは予定通りだった。この情報は、朝倉和美と言う生徒から聞いたもので、何でも情報に関して麻帆良でも右に出るものがないとか。

「よお、吸血鬼」

「……貴様か、今はやり合う気はない失せろ」

眠たげな視線でこちらを一瞥すると、すぐにまどろみに身を任せようとする。

「……もう人を襲うのはやめろ」

「ワタシには関係ないな」

淡々と返事をする相手に確かに敵意はない。しかし交渉の余地もなさそうな無愛想ぶりだ。

「今すぐにもお前を拘束することもできるぞ」

「昼間、ワタシには吸血能力も魔力すらもない。一介の女子中学生にすぎないワタシを襲ってお楽しみと言っわけか？」

「冗談を言いに来たわけじゃない。それに興味ない」

「むっ、嫌味な奴め、ワタシとて好きでこんな体なわけじゃ……」

何やら呟いているが関係ない。

ハクは視線に殺気を込める。もちろん、この少女にはいともたやすく流されることはわかっているが、そうすることで牽制とする。

昼間の彼女からは確かに何も力が感じられない。しかし、妙な大物の雰囲気だけは持ち合わせているから何かしらの秘策があってもおかしくはない。

「そう警戒するな、しばらくは人を襲わん」

「それをどうして信じられると思うんだ？」

やれやれと言わんばかりに肩をすくめる目の前の相手に苛立ちを覚える。しかしそこで感情を爆発させても碌なことにならないのはわかっているからハクは抑えた。

「なんならじじい……学園長にワタシのことを報告すればいいだろう。それとも、そうすると都合が悪いことでもあるのか？」

底意地の悪い笑みを浮かべる。都合が悪いか否かで言われれば、確実に報告した方がよさそうではある。だが、学園長がこのことを知らないわけがない。身内に吸血鬼という存在を野放しにしておくわけがないのだ。彼は一連の事件に関してすべて把握しているだろう。それをわざわざこちらが出向くことで余計な制約を設けられるのは気に食わない。

たとえば、学園長に何らかの思惑があったとしても、だ。

(俺は自分で正しいと思う行動を取る)

「別にない。これは俺が勝手にやっていることだ。……生徒に手を掛けるのはやめろ」



「気に食わんな、それが人に物を頼む時の態度か？」

「俺だつて強硬手段は取りたくない。が、やむを得ない時もある」

これが最後通牒だと言わんばかりの圧力を掛ける。しかし、それに対して返ってくるのは押し殺した笑いのみ。

「何がおかしい？」

「くくく、結局おまえがワタシの名を知っているのかどうか急に気になってな」

こいつはいきなり何を言い出すのか。不審げに思ったが、事前に調べないわけがない。いい加減名前をチェックしておこうと判断し、昨日帰宅してすぐに確認した。

「エヴァンジェリンだろ？」

「その名前を知つてなお、ワタシに交渉事を持ちかけ、あまつさえ殺そうとするか。よほど肝が据わっているのか、はたまたただのバカなのか。興味深いな」

「別に、何の力も持たない肩書だけのガキに褒められてもな。それにこれは交渉じゃない、おまえの返事は初めからイエスしかないんだからな」

元々、自分で見たことしか信じない主義だ。それに真祖の吸血鬼などあまり馴染みがない。まだ自分が相手にしてきた鬼たちの頂点に立つと謳われるリョウメンスクナノカミなどの、有名な鬼の類の方が強大な力を有しているということがわかりやすい。もっとも、これだけは師匠が教えてくれたから、という色眼鏡も含まれているが。

それにこれは交渉と言うには初めからおかしい取引。別にこちらは交渉事を持ちかけるまでもなく、昼間の力がないうちに拘束する

ことができるのだ。むしろエヴァンジェリンにとって破格の条件とさえいえる。

「はは、なに今の魔法使いたちはワタシが力を持っていようといまいと畏怖の存在として見ているからな。おまえのその対応が新鮮だったのだよ」

「……返事を聞かせろ」

「ああ、生徒たちには手を出さん。だが、向こうから手を出してきた場合にはそれは保証しかねるがな」

まあいいか、魔法を使うような危険な存在にわざわざ首を突っ込む輩なんぞ、今のところは神楽坂くらいだ。彼女にだけ目を光らせていれば大事にはならないはず。

と、ハクは急に疑問に思った。

(どうして俺はこんなに甘い対応をしているのだろうか)

問答無用に排除すれば懸念事項が解消されると言うのに、何をためらっているのか。

さらに自分が大切にするものに危害を加えぬように手を回すような真似までして、学園長というオーナーの意志から離れた行動をしている。

自分のしている行動がわからない。

「ん、どうした先生？」

「……話は終わりだ、俺はもう行く」

「なんだもう行くのか。二者面談はいい暇つぶしになったぞ」

皮肉を言っているのか、不敵に笑って見せる姿をみて、まったく食えないやつだと思う。それが一瞬だけアノ人と被る。

「これも年の功ってやつか？」

「おい、コラ、今なんて言った」

「別に、精々昼寝して背が伸びるように祈ってる」

「な、馬鹿にするなあああ!」

そういつて屋上の鉄扉を閉める。ぎゃあぎゃあ恨み事を叫ぶエヴァンジェリンにしてやったような気持ちになったのは、散々イライラさせられた代償と言うことで受け取っておこう。

(さて、次だな……)

残念ながらもう一人の問題児、茶々丸の方はすぐには掴まらず、翌日へと持ち越しとなった。もっとも、すでに大本であるエヴァンジェリンに約束を取り付けており、その従者のような振る舞いをしていた茶々丸に、同様の約束事を取りつけるのが有効であるのかどうか(いざとなったらエヴァンジェリンの意向で反故にされる可能性を考え)を判断しきれない。

しかし、そうすることで抑止力となれば僥倖。いざとなったら自分が手を出せばことはそれで足りるとハクは思っていた。

その取り決めがあったことをネギに伝えておけば、わずかなりとも事態は好転したかもしれないのに、だ。

茶々丸は茶道部にいるという話を聞いて、四苦八苦しなからなんとか辿りついてみればすでに目的の人物はおらず、無駄足を踏んで

しまったことにハクは今日何度目かのため息をこぼす。

そもそも、一対一の会話をするために生徒を呼びつけるには格好の場所をハクが知らなかったことと、学校の授業が終わってすぐに尋ねられなかったのが痛い。もちろん、雑務に追われていたわけだが、後回しにしても行くべきだったと今更ながら後悔する。

茶道部員から茶々丸が行きそうな場所について心当たりを聞き、すぐに歩き出す。

風が通り過ぎると耳に心地いい葉擦れの音。雅な竹林があり、この場所は風情があった。

妙に山にいたときのことを思い出す。おそらくこの環境があそこの森に近い雰囲気だったからだろうか。

「さて、行くっ」

いつの間にか止めてしまった足を動かす。

竹林が切れ、いつもの建物群が目につき始める。茶々丸がよく通っていると言う教会までは、目の前にある川に沿って行けばおのずと見えてくる、はずだ。

目的の場所に着くとそこには泥だらけの姿で、野良猫たちに餌を与えている茶々丸がいた。一体何があつてあんな姿なのかは窺い知れないが、彼女の良心的な行為に心が温かくなる。その行動はかつて、自分が助けてもらったあのときのことを彷彿とさせる。

優しそうな笑顔で猫たちを眺める姿は、彼女が本当に人間なのではないかと思うほど儂く綺麗なものだった。

しばしその姿を呆けたように見つめていたハクだが、目的を思い出し、話しかけようとしたときだ。ある二人の姿が現れたことで、ハクは咄嗟に身を隠した。

「……こんにちは、ネギ先生、神楽坂さん」

茶々丸が猫の餌を片付けながら立ち上がる。先ほどまでの笑顔はなく、いつもの無表情へと戻っていた。

彼女の前に立つのは、赤毛の少年先生とその保護者のような女生徒の二人。何やら話し合いをしにきたという雰囲気とはやや違う。

しかし、いくらネギが幼いとはいえ、分別は弁えているはずだとハクは考え、しばらく様子を見守ることにした。

「油断しました……でもお相手はします」

「茶々丸さん……。あの、僕や、僕の生徒を狙うのはやめていただけませんか？」

ネギがどことなく申し訳なさそうに提案する。いや、不安に思っているのだろうか。

だが。

「申し訳ありません、ネギ先生……。私にとってマスターの命令は絶対ですので」

「うう、仕方ないです」

待て、何をやる気だ。ハクは身を隠しながら冷や汗をかいた。

(よもやこんな明るいうちに戦うつもりか?)

最悪の予想はネギの詠唱によって見事に再現されることとなる。

「行きます！ 契約執行十秒間、一ネギの従者、ミニストラ・ネギィ・カグラザカ・アスナ神楽坂明日菜」

瞬間、明日菜が魔力を纏い普段の身体能力以上の力で茶々丸に襲いかかる。

互いに致命傷を与えるようなことはしていないが、茶々丸は予想以上に明日菜に翻弄されているようだ。

(これは……、ネギは手を出さないのか?)  
一瞬の淡い希望。しかしそんなことはあり得ないといつても良かった。

これはネギが仕掛けた戦いだ、手を出さないわけがないのだ。  
そこへ後ろで控えていたネギが、いつの間にか呪文詠唱を終える。  
ハクは面食らった。

あの誰かを傷つけることを嫌いそうな、それこそ虫を殺すのもためらいそうなああの少年が、平然と魔法を放とうとする事実。  
自分の生徒を手につけようとする姿に。

「待て！ それは駄目だ！」

「光の精霊十一柱、集い来たりて、敵を射て！ 魔法の射手・連弾・サギタ・マキカ  
セリマス・ルーキス光の十一矢！」

ハクの叫びは届かない。

ネギの周囲に浮かんだ光の球が、突如ベクトルを持って茶々丸へと襲いかかる。

上から下から、左から右から、それは狙い違わず茶々丸へと加速していく。

茶々丸が何事かを呟いた。

でもそれは耳に入らない。

(間に合うか？ いや、間に合わせる！)

思い返せばいつもいつも自分は後手に回っていた。

「たまには先手を打たせろっ！」

瞬動で茶々丸を突き飛ばす。一瞬驚きの顔でこちらを見る茶々丸の顔。しかし意識は危険を示す攻撃に向けられたまま。

足りない、全然まったくフルパワーに及ばない。

練りきれない妖気の量に打ち止め。

何千何万と繰り返した型に入る。

左手に溜めを

妖気の塊がうまれ絶えず明滅。

視界の中でゆっくりと迫りくるように感じる魔力の塊。  
妖気とは、その量の大きさが魔力や気よりも大きいか拮抗するこ  
とで無効化できる。

右手で覆う

しかし、その量が足りなければ消える道理はない。  
今の状態で出せる量はせいぜいが六発分。

打ち出す腕はトリガーとなる

まったく足りないし、直撃はシャレにならない、だが

「駆け抜けるっ!!」

【霧島流、後の型

散弾掌!!】

瞬間、ハクの拳から暗い六つの光が弾丸のごとく駆け抜けた。

鼓膜を突き破らんとする爆発音が周辺に響く。  
辺りを粉塵が覆い隠し、直撃したであろうハクの姿は発見できない。

「ちょっと！今のつてもしかして！」

爆発が起こった中心地とは外れたところで呆けている茶々丸。それを見つけた明日菜が、パニックになったような声をあげる。

ネギは今、自分がやったことに気づいて愕然としていた。直前で魔法の矢を自分に切り替えようとしたが間に合わずに直撃させてしまった。

「そ、そんな、僕は、違う、直前で、狙ったのは」

自分だ。

だが、その言い訳がつむがれる前に、はつきりと声が聞こえた。

「………違わない、ネギが狙ったのは人間だよ」

（まあ、人ではないか、狐憑きだし）

などと自嘲の笑みを浮かべる。

立ち込める粉塵の中、無傷とは言い難い恰好で立つハクの姿。

スーツは見るも無残なボロボロな姿で、頭からは地面の破片か何かで切れたのか流血している。

体は爆発の影響で踏ん張り切れずに後ろへと吹き飛ばされ、致命的な負傷は奇跡的に避けられていたが、魔力や気に対して何の護りもない彼は相当な痛手を負っていた。

あの瞬間、都合十一発の魔力の矢を打ち落とす六発の妖気の塊を、



収束させた拳から弾丸のように放っていた。本来の技の特質は、数を出し、相手の放出された気や魔力を消しさりながら残ったものが当たればいいという牽制技だが、護りに特化させ、あえて分散させることで爆発を誘導し、妖気が足りずに練り切れなかった分を爆発の反動で回避するという荒業だった。

その際、一発一発が魔力の矢と匹敵する量であることが最低条件であり、十一発出すだけの妖気を瞬時に練ることができなかったことから、六発が限度であったこと、これらを見切ることが条件だったが、長年培った技の練度と勘でハクはなんとか乗り切った。

もつとも、直撃を避けられなければ妖気を纏っていない体は、紙屑同然に貫かれていてもおかしくない賭けだった。彼には魔法障壁や物理障壁を張るような魔力が存在していないのだから当然だ。どれだけ妖気で体を強化しようと、魔力耐性はほとんどないのが妖気の特性なのだから。

が、うまい具合に魔力の矢が誘爆を引き起こしてくれたおかげもあり、分の悪い賭けの確率が上がったことも助かった要因の一つだろう。

「違う、違います、僕は」

ネギの打ちひしがれたような姿を見て、ハクは思う。十歳ならば当然の反応。自分のように最初から生死を賭した逃亡生活を送った死にそんな修業をこなしてきたわけじゃない。

ただ、自身に降りかかるであろう火の粉を先に消してしまおうとしていただけ。

そう考えても納得はいかない、十歳でも許されないこともある。

だが、それはハクにも良く分かる。やりたくなくてもやらなきゃいけないと思う強迫観念。追いつめられた思考の未故の決断か、はたまたそれは誰かに示唆されたことか。

「気に食わないが……。別に俺は君の行動をとやかく言うつもりはないよ」

その言葉にパニックに陥っているネギは動揺した。どういう意図があつてそのようなことを言うのか理解できなかったからだ。

「そんな、だつて僕はあなたを傷つけた！ 殺してしまうかもしれないなかつた！」

ネギはハクの実力を知らない。もちろん、麻帆良学園のどの人物も本当の実力は知らない。それはどんなものにも勝てるかもしれないが、どんなものにも負けてしまうという不確かな実力である事。だから焦る。だから戸惑う。もしかしたら自分が殺してしまったかもしれないという恐怖に吞まれる。

そんな自分が恐ろしいと思つてしまう。

「……だけど俺は死んでない。おまえみたいなガキにやられるほど、弱くない。馬鹿にするな」

半狂乱で叫ぶネギに、よく通る声で宣言する。体が声を出しただけでびりびりと震えたが、我慢。

ほとんど強がりにも近いことを言っているようにネギは感じた。だが、その目を見て、青く澄みきった瞳を見て気付いた。冷静になつていく自分。今何をすべきか。その考えに至つたネギの行動は早かつた。

「ごめんなさい、すぐに治癒魔法を！」  
「頼む……」

呼吸は荒く、地面に膝をつくハク。

その姿を見た明日菜は絶句している。自分の弟分のようなネギの魔法が、今までこれほどひどく人を傷つけたところなど見たことがなかった。

その事実にはただ放心する。

「……神楽坂、これがおまえが首を突っ込もうとしている世界だ。

それでも、まだおまえはついてくるのか？」

「わ、わたしは、こいつが心配で……」

「自分がいつ死ぬかもわからない、そんな世界でネギよりも力がな  
いおまえが心配したところで、足手まといだ。……もう関わるな」

ハクはネギの治療魔法に身を任せている。出血は止まっていたが、  
爆発による衝撃が思いのほか体に響いていた。

明日菜はハクの言葉に何も返すことができない。何も考えられない。  
い。

ただ唇を噛んで黙ったまま立ち尽くしていた。

その姿を黙ったまま見つめていた茶々丸はハクの元に歩み寄る。

「すみません、霧島先生……私のせいで」

本当に申し訳なさそうな顔をする茶々丸にハクは苦笑した。

「気にしなくていい、勝手にやったことだから」

「……ありがとうございます」

そういつて茶々丸は立ち去った。なんとも淡泊な反応だ。しかし、  
彼女にとってこの場に敵意はないとはいえ、居づらいと言うのは確  
かだ。

傍で治療を終えたネギが立ちあがる。治療といっても切り傷やス  
リ傷などの軽傷部分だけ止血したようなものだ。

ハクも痛む体をおして立った。  
いつまで待っても口を開かないネギに、軽いため息をついた。

「反省しろ、少なくとも自分の意志で行動できるようになるまでな」

(俺もあまり他人の事言えたもんじゃないけどね)

何しろ、今の一連の行動が自分の感情と結び付かない。

敵のはずのエヴァンジェリン、茶々丸。

なぜかハクは彼女らのことを敵と断じることができないでいるからだ。

答えを保留させる。その為の行動だったと結論付ける。

教会の広場の隅で様子を窺っている小動物　フレットだろう

か？を睨みつけ、ハクはその場から立ち去った。もののけの類だろう、ネギがこんな凶行に及んだ原因かもしれないが、この様では逃げられる可能性が高い、放っておこう。

茶々丸がいなくなり、目的がなくなった。とんだ事態に巻き込まれたが、家に帰って本格的に手当てをしよう……。。

## 第十七話 無益な戦い（後書き）

と、吸血鬼編も後数話ほどで終わります。（予定）

反省は少々説明がわかりにくいかもしれませんが…。

色々と修正しながら試行錯誤しましたが、

後々手直しが入ってしまう可能性も含みます。ご容赦ください。

いつの間にかお気に入り登録が100件に！

ユニーク？も1万を超えたので嬉しい限りです。よくわかってい

ない作者

皆様、拙い作品ですが読んでくださってありがとうございます。

以下はお知らせです。

本日月曜日から作者の学業の都合で、今までのように毎日更新ということが難しくなる恐れがあります。というか難しいです（汗

今よりも更新ペースが落ちてしまうことと思いますが、

時間がかかっても更新は続けて行くつもりです。

道路で狐を見たとき、山で狐に化かされたとき、動物園で狐を見たときなどに思いたして（なんとという限定条件）読んでいただければ幸いです。

誤字脱字・意見のほうは感想へお願いいたします。

## 第十八話 迫る大停電（前書き）

今回も文字量増量です。ご注意ください

## 第十八話 迫る大停電

彼女 神楽坂明日菜は魔法という力に興味を持っていた。

それは好奇心であり、未知のものへの憧れだったのかもしれない。そして何より、傍にいる少年が危ないことをしないようにという保護者的な意味合いもあった。

だから衝撃的だった。

魔法使いと名乗る少年の魔法が炸裂した時、粉塵の中から傷だらけの青年が現れたとき。

彼女は今まで誤解していた。

魔法とは、絵本のような優しいものばかりではない。

魔法とは、現実にも人を殺してしまうかもしれない術であることを認めたくはないが、認めざるを得なかった。

迷い、困惑し、ネギにも何も言えなかった。

魔法を知ってしまった自分がこれからどうすればいいのかわからない。

もう関わるな

副担任である彼にそう言われ、考える。自分の道はどうすることなのか。

「アスナ？ 朝からどうしたん？ せつかくの休日なのに、ネギ君もどこかへ出て行ってまうし……」

ルームメイトの木乃香に言われはつとする。心配掛けるほどひどい顔をしていたのだろうか。事実、木乃香は明日菜の顔を覗き込み心配そうな顔をしていた。

「……ううん、何でもない、大丈夫。　ちょっと外に出てくるね」

何も浮かばない。今はただすっきりしたい。そう思って体を動かすことを選択する。

「……何かうちにできることがあったら相談してな？」

その言葉に何も返せなくなる。自分が迷っていることを打ち明けられたらどれほど楽だろうか。でも、それは木乃香ですら巻き込んでしまうことになる。

それだけは絶対にはいけないと、駄目だと思った。

「だいじょーぶ！　戻ってきたら案外ケロツとしてるから！　私は

こーみえてバカレツド……って言ってるって落ち込むわ！」

「ふふ、そか、気をつけてな？」

空元気にも近かったが、そんな明日菜の様子をみて木乃香も笑顔を浮かべる。それだけで救われた気持ちになる。どんなときでも傍で支えてくれる人がいることのありがたさを感じる。

ああ、とそのときなんとなくわかった。

「私は、そういう風になりたいのかも」

まだ曖昧なままの答え。はっきりしない考えの中、少しだけ軽くなつた足取りで明日菜は外に踏み出した。



彼 ネギ・スプリングフィールドは悩んでいた。  
一人になりたい。今はただその一心で麻帆良学園の裏手にある山を滑空している。

自分の持つ力は何のための力なのか。

自分の意志はどこにあったのか。

わからないままだ。

「うわああ！」

無様にも木に衝突し、深い水の中に落下する。杖から投げ出されたことで、自身の杖を無くしたことに気づき焦る。

「つ、杖は、杖がないと魔法も」

魔法も使えない。そのことに気付いた時、自然と涙がこぼれそうになる。

この深い山から帰るには杖がないと、魔法がないと何もできない。先生としてやっていくためにわずかながらも、いや、かなり魔法に頼ってしまつた部分もある。

「……僕は、魔法がないと何もできないの？」

自分の意志で本当に今まで魔法を使つたのだろうか。

もっと自力で解決できる問題もあったのではないか。

一度、魔法に頼らないと誓ったとき、図書館島の出来事は本当に自力だったのだろうか。

そして。

あのときも？

決して言い訳するわけではない。例え、使い魔のオコジヨに助言

を受けていたとはいえ、実行に移したのは自分。

あのとき、弱気だった自分を殴りたい。きちんと意志を持っていた。生徒を傷つけないと思っていたのに。

だけど、自分が被る不幸を回避したいために、魔法を使った。

（僕は……なんて弱いんだ）

憔悴しきった体で水から這い上がった時、長身の忍者のような服を着た女生徒、長瀬楓と出会った。

ハクは世界樹広場で行われる会議に出席していた。

ネギにやられた傷　自分の未熟さのせいでもあるが　はこの数日ではほぼ完治していた。

現在、広場に集っているのはネギ、エヴァンジェリン、茶々丸を除く魔法関係者たち。一様にみなが学園長の言葉に耳を傾けている。学園長は相変わらずの作務衣姿と頭だ。頭はしょうがないけど。

「皆も知っているじやろうが、明日は学園都市のシステムメンテナンスがある。時刻は夜八時から深夜十二時の四時間じゃ。この間に結界の力がかなり弱まってしまふ……。元々、学園の電力も用いておる特殊な結界ということは皆も知っておるだろうが、このとき以下の一点は守って欲しい」

そこで学園長は言葉を切った。ハクは嫌な予感しかしない。今まで学園長を避けてきただけに、その予想はハクの思ったとおりだった。

「明日エヴァンジェリンが自身の呪いを一時的に解く。それをネギ先生だけで相手にさせ、他の者の手出しを一切禁ずる」

その言葉に動揺が奔る。「あの闇の福音が!?!」「あの少年がどうこうできるはずが……」「いや英雄の息子だぞ、何か秘策が」

口々に騒ぎ立てる姿を見て、ハクは学園長へと視線を向ける。

顔に笑顔を貼り付け、みな反応を俯瞰している。

(何を考えている?)

皆の動揺の具合からして、やはり闇の福音などと恐れられているエヴァンジェリンの実力は相当なものなだろう。下手をしたらネギが死ぬ恐れもあるかもしれないのに、誰も反論を口にするものがない事態に苛立つ。

(だがここで余分な口を出すと更に厄介な制約を出されるかもしれない)

自然とハクの頭の中でネギの為に動くことを考え始めていた。

エヴァンジェリンが人を殺すことは想像したくはない。今まで自分が接したエヴァンジェリンという少女は、怒ることこそあれ、そこまで残忍な性格をしているようには思えない。

もっとも、彼女が魔力がないことで自重し、自分を押し殺していったのならその限りではない。だが、今のハクにはそれを判断するだけの人を見る目と、そうと判断に足るだけの経験と勘が不足していた。

「何やら不満を持っておる者もいるようじゃが、この件はワシが預かる。皆は明日の警備に備えて準備をし、万全の状態で侵入者を迎撃し学園を守ってくれ」

確かに、学園の結界が弱まるのを好機とする者も多くいるだろう。それを迎撃するための人数が潤沢とは言い難い。そこへエヴァンジェリンを相手にするための魔法使いを投入することは、この学園が

墮ちる、ひいては関東魔法協会の陥落を意味する。

ネギだけの被害で、学園は助かる。

そういう考えなのだろうか。

(エヴァンジェリンの狙いはネギだ。ネギを相手にしている間はこちらに手を出すことはないだろうが……)

その考えが合理的ではあるとわかるが、納得できるものではない。解散を申し渡され、ハクは学園長を一瞥すると家路についた。

休日が終わった翌日の早朝、エヴァンジェリンが住むと言うログハウスの前にやってきた。色々と考えた結果、エヴァンジェリンと話をつけておいた方が、ハクにとって益となると考えたのだ。

「いいところ住んでんなあ、てつきりもつと趣味の悪いおんぼろの屋敷だと思ったのに」

「そうですね、僕も驚きました。素敵なお家ですね」

「お、おう。ネギ先生、おはよう」

「おはようございます、霧島先生」

突然背後から声がかかり振りかえるとそこにはすつきりした顔のネギが立っていた。念の為か杖を持ってきている辺り、彼もエヴァンジェリンに用があるらしい。

と、ハクがいたことにやや戸惑っているようで、ちらちらと様子を窺っている。

それに苦笑する。この間のことを気にしているようだ。

「怪我の方は大丈夫だ」

「そ、そうですね。……良かった。あの、本当にすみませんでした！」

今までのよわよわしい様な年相応の顔でほっと息をつくネギを見て、ハクもなぜだか安心する。この数日で彼の身に何かがあったようだ。

「気にしていないし、とやかく言うつもりもないと言っただろうに」

呆れた声でそう言うとネギは申し訳なさそうな顔をする。

「いえ、そのでも本当にすいまフベツ！」

「うっさい、口答えしたら拳骨な」

「そ、そんな理不尽な！」

「だったらそんな理不尽を撥ね退ける」

「む、無理でフガツ！」

ニヤリと笑って見せる。もちろん手加減はしている。師匠のように強く殴ったらネギが気絶しかねない。そんなやり取り。自然に接することができて良かった。今までそれほど親しく接したことはなかったから、なんとも奇妙な縁だとも思う。

痛みで泣きそうな顔になっているネギの頭をなでてやる。それに笑顔を浮かべるネギを見て、やはり変わったように思う。

「男子三日経てば剋目してみよ、か」

「え？」

「何でもない、それよりエヴァンジェリンに用事だろ？」

ハクの場合は少々ネギがいると都合が悪いが、二人でログハウスの中に入っていく。一瞬、誰かが自分たちを見たような気配を感じ

る。

後ろにはネギしかない。怪訝そうな顔をするネギに何でもないと告げ、改めてノックをして入る。出迎えはなぜかメイド服を着こなしていた茶々丸だ。

「担任と副担任だ。家庭訪問に来た」

「……そんな口から出まかせを」

隣でネギが呆れているが、用事があることに変わりはないから問題ないだろう。

「おはようございます、霧島先生、ネギ先生。マスターに何かご用でしょうか？」

「ああ、ちよつとな」

「ふんっ、ワタシが弱っているのを見越して来たか。魔力が十分でなくとも貴様ら如きくびり殺すのはこの身だけでも十分だ……」

生意気そうな声に顔を向ける。二階の手すりに腰かけながら挑発的なことをのたまうエヴァンジェリンがいた。その姿を見て、言葉を聞き、違和感を覚える。

「マスター、ベッドを出ては……」

茶々丸が心配そうな声を上げ、うるさいと声を上げた瞬間手すりから滑り落ちる。それを危ういところでハクが受け止めた。

「なんだ、風邪ひいてるのか？」

「ええ！？ あの伝説の吸血鬼が！」

「ちなみに花粉所も患っております」

茶々丸が静かに補足し、ネギが驚きの声をあげる。エヴァンジェリンの顔を見れば赤く、額に触ると予想以上に熱い。茶々丸に案内されてすぐに二階のベッドで横たわらせる。

「うるさい、気やすく触るな……」

声にもいつもの覇気がない。これは本当に重症みたいだ。ネギはネギでなぜか慌てているし、茶々丸はマイペースに薬をもらってきますと言っ出て出かけてしまう。

(なぜ俺たちに丸投げするんだ茶々丸！)

そんな心の声は届かず、仕方なくネギと二人で四苦八苦しなから看病する羽目になった。

「き、霧島先生、エヴァンジェリンさん汗かいてびっしょりですよ！」

「着替えさせてやってくれ」

「ええ！ 僕がですか!？」

適当な着替えだけ探し出してネギに渡す。恨めしげな目でハクを見るネギを、はくと拳に息を吹きかけ、言うことを聞かせる。

なんか楽しい。

理不尽だとか言いながらもネギは素直に言うことを聞いていた。もしかして根に持っているんじゃないかと呟いていたのでそろそろやめておこう。

「そういえば、ネギはエヴァンジェリンに何の用だったんだ？」

話題転換、ハクの用事は明かせないが、もしかしたら似たような用件かもしれない。

「……僕と、勝負してもらおうと思ったんです」  
「……勝負？」

その言葉は想像の範囲外。どうしてそうなったのか、だが、ネギの瞳は揺らぐことなくハクを見据える。

「はい、僕は今まで自分に、いや、周りに甘えていました。だから、今度は僕一人だけの力で……。先生として、魔法使いとして決着をつけたいんです！」

「……そうか」

ハクは肯定も否定もしない。ただその決意を見て何も言う気が起きなかった。ネギは言外にもう誰も魔法に巻き込まないと言っているのだ。だったら、やれることだけ手助けしてやればいい。それをわざわざ水を差してこの場で手伝ってやるというのは間違っている気がしたからだ。

もっとも、こうなることも学園長のシナリオには織り込み済みなんだろう。気に食わないような妙な気分になる。

「や、やめろ……サウザウンドマスター……」

「サウザウンドマスター！ それって僕の……」

うなされているエヴァンジェリンの寝言にネギが血相を変えてベッドに近づいた。何をする気だろうか。杖をにかけて魔法の準備を始めた。

「今からエヴァンジェリンさんの夢にお邪魔してきます！ 霧島先生もきますか？」

「なんでさらっとプライバシーの侵害しようとしてんだおまえは！

……俺は遠慮しておく」



ネギを止めるような無粋な真似はしないが、特にあの英雄と無関係な自分がエヴァンジェリンの夢を視るのは筋違いだと考える。

（それにバれて怒ったときのエヴァンジェリンを見るのも面白そうだしな）

ただ最低なだけだった。

夢を見終わったネギは興奮していた。エヴァンジェリンの姿が大人大だったが、幻術でやっぱり子供でした！とかいう報告をしている最中、エヴァンジェリンは起きあがり、紆余曲折あつてネギはなんとか勝負の旨を伝え、果たし状を渡し終わった。

「ネギ、もうすぐHRだから先に行っていてくれ。俺はまだ用事が終わっていないからあとから行く」

「え、でも……。いえ、わかりました！」

拳骨のジェスチャーで反論させない。そんなに痛かっただろうか。まあ良しとしよう。エヴァンジェリンは先ほどの怒りからまだ落ちつかないのか、鼻を鳴らしてネギが出て行くのを見届けた。

「それで、貴様は何の用だ？」

「いい家だな、なかなかセンスがある」

「雑談しに来たのか貴様は……」

疲れたと言わんばかりにベッドにもぐりこむ。元々症状が良くないたわけではないのだ。怒りで辛さを忘れていたんだろう。

「せつかく人が褒めてんのに。まあいい。用件は、ネギとの決闘に俺も混ぜてくれ」

「は？」

「は？　じゃないだろポケ吸血鬼。花粉症で頭までやられたか？」  
「何を言っているのかわかっているのか？　ワタシは手加減などするつもりは一切これっぽちも一欠けらもない。要するに自殺志願者でいいんだな？」

驚いた顔の後にはなぜか恍惚とした表情を浮かべるエヴァンジェリン。もちろん、結界から解放された時の自分を想像しているのだろう。おそらくハクがそうなることを事前情報で知っていることなど知らないから出る言葉なのだろうが。

「まるで自分の力が戻るような口ぶりだな？　エヴァンジェリン」

核心をつかれた言葉に、はっと気づいたような顔をする。ほんと彼女の感情は表に出やすいらしい。

「ふん、関係ないだろう。貴様には散々コケにされた借りがある。精々楽しみしているがいい。招待状はこちらから送ってやろう」  
「そりやどうも、用は済んだからもう行くわ」

それだけ言うと、ちょうど茶々丸が薬を持って帰宅したところだった。

「霧島先生、マスターの看病ありがとうございました。後日ネギ先生にもお礼を」

「ああ、気にしなくていい。ネギの奴は相応の報酬をもらっていたしな。それじゃ俺はもう行くから」

「はい。それではまた学校で」

淡々と会話が進むが、どこか茶々丸の表情が柔らかいのは気のせいだろか。まあ気にするほどのことではないか。ああ、最後に一つ

後ろの金髪少女に言うておこう。

「ああ、そうだエヴァンジェリン。家のセンスは褒めたが、服のセンスはないな。お子様パジャマだし」

「うるさいわああああ！」

罵声の限りを浴びせてくるエヴァンジェリンを背にハクは退散した。

さて、これだけ自分勝手に行動していて目をつけられないわけがない、とハクは思っていたのだが案の定と言うべきか。

「……それで、あなたは何をしているんですか？」

「いや、まあやむにやまれぬ事情というか、色々なしがらみのようなものがだな」

目の前で憤怒を体で表す刹那に、もはやハクは先ほどエヴァンジェリンをからかっていた時ほどの余裕はない。何しろ目の前の刹那から伝わるオーラのような威圧感にハクの額から汗が止まらないのだ。

彼女はネギを尾行していたらしい。まったく本人はそれと気づいてない様子だったし、ハクのことをつけられたわけではなかったのだ。気付いていなかった。どうやら学園長の差し金らしい。

あのとき、ネギと外にいるときに一瞬だけ感じた視線は刹那だったのだ。

「それが学園長の意向を無視してまでエヴァンジェリンと接触する理由なんですか？」

「……学園長の意思に逆らう？ はて、俺にはわからん」

嘘はつきたくないが、嘘のようで嘘ではない。確かに手出しは禁止されていて、この件に触れるのはおそらくタブーだろう。仕方がないのでエヴァンジェリンに手を出させて正当防衛ということにして、混ざってしまおうと考えたのだが。

まあ、これも屁理屈でしかない。エヴァンジェリンがハクの交渉事を学園長に話せば処罰は免れないだろうが、その場では文句を言っただけで乱入されることもないだろう。

「もしも、あなたが警備に加わらなかつたせいで、お嬢様に危害があった場合、どうするんですか？」

固まる。まあ普通考えればそうだろう。ハクがしようとしているのは、どうしようもないほどのお節介で、本来の自分だったならこんな面倒くさい事は関係ないと割り切つて、木乃香の護衛を刹那とこなし、学園長の依頼である学園の警備を遂行していたはずだ。

それが複雑な経緯があつたとはいえ、自身の考えを変えてまで戦いに参入し、あまつさえ本来の役目を果たさないというのだから本末転倒であると考えるだろう。

しかし、それでも今のハクには頼れる人がいる。

「そこは刹那が護つてくれるんだろう？ それとも、敵を討ち漏らすような半端な仕事をするつもりなのか？」

「っ！ それは、わたしだって護衛のために全力を尽くしますが！」

嬉しさと怒りがないまぜになつたような複雑な顔を浮かべる刹那を見て、ハクは微笑んだ。そうだ、刹那は信用に値する。もちろん、

彼女をも護ろうとする対象として見ているハクだが、よほどの実力者が来るならば、それ相応の実力を持った魔法先生が加勢に入らねば、だつたら負けるはずがない。

「なら安心だろ」

「それは、そうですが……でも、もしわたしが倒れたら……」

（やけに弱気だな）

自身の力を驕らないのが彼女のいいところではあるが、今日はそれにもまして弱気が混じっている。

「そのときは呼んでくれ、すぐに駆けつけるから。この耳があればすぐだよ」

そういつて一瞬だけ銀色の体毛で覆われた狐の長い耳を見せ、消す。人に見られたらまずいが、この朝の時間、生徒は学校だ。だからこそ刹那の存在は予想外だったわけだが。

「っ……無理はしないでください。いくらあなたが強いといえど、あのエヴァンジェリンさんですから……」

「ああ。もつとも、ネギ先生に全部見せ場を取られるかもしれないけどね」

笑って答える。こちらは問題ない。手加減も何もなく全力でやればいいだけ。実にシンプルだ。

言葉に詰まりながら刹那はいなくなってしまった。おそらく教室に向かったのだろうが、ハクはその姿を見届けて歩き出す。

「さて……どうするか」

若干の不安を残し、大停電が迫る。

## 第十八話 迫る大停電（後書き）

次回吸血鬼編最終回（予定）

ちよつとまだ未定で先が見えませんが、

うまくまとまれば…吸血鬼編が終わるような

終わらないような…

今まで自分が書いた文を読み返すと、描写が浅い部分や、

わかりにくい点などがあり、非常に恥ずかしい（汗

機会があつたら加筆修正したいと思えますが…たぶんないかも…

誤字脱字・意見などは感想までお願いします

第十九話 違えぬ意志（前書き）

一日空いてしまった…。

ですが、文字数増量版分×2の量です。

ご注意をば



## 第十九話 違えぬ意志

大停電に備えて、ハクは自身の体の状態を把握していた。

数日前の傷は妖気で体を活性化させ、休養することで快復した。

一通りの無手の型を通し、具合を確認するが動きに問題はない。

そしてもう一つ、自身の無手以外の攻撃手段であるソレを、麻帆良学園裏手の山で試す。

「久しぶりに使うから不安だったが……何事もない。やはり自分の一部みたいだな」

そう豪語する。木々が密集した森の中で、自在にそれを扱い目標的を切り裂き、破壊し、跡形もなくす。すべてを壊したと判断すると、大きく息を吐いた。

全身から妖気の気配が霧散していく。あまり大きな力を使えば、魔法先生たちに気づかれるかもしれない。自分の技を隠しているハクにとってそれはあまり好ましい展開じゃない。しかし、この間技を使ったことで茶々丸には気づかれてしまう恐れはあったが、あときは緊急事態だったから仕方がない。

あの爆発でうやむやになってくれていればいいのだが。とそんなことを考える。

「さて、とりあえず午前はさぼったから、午後は行かないと。副担任といえど、無責任すぎるし……」

授業をしない身とはいえ、生徒たちの暴走を食い止めなければならぬ。そう考えると何とも頭が痛くなる話だが、ハクはこれから起こる戦いよりはいくらかマシであると思っていた。

学園長室で近衛近衛右門は深いため息を零した。

ゆつくりと上質な革椅子に腰かけ、これから起こることについて  
思索を巡らす。

どう頑張っても、どう転んでもネギがエヴァンジェリンに勝てる  
見込みは薄いということ。しかし、それを可能にするための布石は  
盤石。いざとなれば学園結界の復旧を早くすればいい。その影響は  
後々に響くことになるが、ここで英雄の息子という惜しい才能を散  
らすよりはマシであろうという結論にたどりつく。

もつとも、近衛右門はエヴァンジェリンがネギを殺すことは万一  
にもないと考えての今回の作戦である。外部からの侵入者にも手を  
回さなければならぬ現状、放つておいても害がないものにそう何  
人も派遣してしまっわけにはいかない。

自分の思惑から外れてしまった者も何人かいたが、その不確定要  
素も考慮したうえでの集会、圧力、密偵。

そこまで考えて自重の笑みを浮かべる。それは決して人に見せる  
ことがないような、暗い笑顔。いつものように他人に見せる笑顔は、  
作り物ではない。だが、こうして一人物思いに耽ると、ついついそ  
ういった笑みを浮かべてしまうことが多々あった。

この老人、近衛近衛右門という男が、実力のみでこの日本の半分、  
関東を治められるはずがない。あらゆる手段、戦術、謀略などを駆  
使し、人心を掌握し認めさせ、それに裏付けされた実力、実績を示  
すことでこの地位にこぎつけた。

だが、そんな自分でも未だに人としての純粹な心を貴ぶ気持ちや、  
それにできる限りの力添えをしたいと願う心もある。根は善人でよ  
り多くのものの平穩を望む姿こそが近衛右門の生き方だった。

最近は何のせいも、むしろ打算的な計略を巡らせるよりも、自身

が見抜いた心を信じることに重きを置いてきた。それでも、と近衛右門は思考を続ける。

霧島白。自身が信じた者、詠春からの紹介でかなりの実力を持つ青年。

「……とても興味深い」

それは、ほんの数か月前にやってきた英雄の息子とはまた違った意味で、だ。

彼が放つ雰囲気や言動、行動。人を寄せ付けない冷めきつた態度を取ると思えば、自然と他人の中に滑り込むような心を持つ。

それらは一貫性があるようで、まるで矛盾している。それに事前に詠春から得た情報とも多少誤差がある。

それがどのように転ぶか。今回の件で、これからの麻帆良学園にとって有益となりうるかどうか判断させてもらおうじゃないか。

「副担任に……木乃香にふさわしいかどうか試させてもらおうぞい」

近衛右門の表情は窺えなかった。

呟きの瞬間、部屋は漆黒に包まれたからだ。

大停電が始まった。

「……こちらは放送部です。これより学園内は停電となります。学園生徒の皆さんは極力外出を控えるようにしてください……」

耳障りなノイズとともに、学園都市全体に流れていた放送が途絶える。

暗闇に堕ちた街の中、ネギはエヴァンジェリンとの決戦に備え様々な魔法具に身を包んでいた。その種類は豊富で、中にはアンティークと見られがちな魔法銃なども所持している。

果たし状に書かれた決闘の内容は魔法での戦い。だが、平時で魔法使いの戦いを行うことなどできるはずがない。

そこでネギが考えたのは、生徒が出歩かざるが故の大停電の日だった。

時間指定などは特にしておらず、場所は向こうが決めることになっている。

エヴァンジェリンを打倒するための作戦として、様々な魔法トラップを考えたが、この広い麻帆良学園の中で、どの場所で戦うかもわからないというのにやみくもに罠を張るのは非効率的だ。それに万が一無関係の人間を巻き込んだ時に対処することができない。

純粋な実力勝負となってしまうことは致し方ない。だが、ネギの実力でどの程度までやれるのか。精々彼女の性格である高慢なところから、隙を突く程度くらいしかないだろう。そう考えただけでいかに自分が無謀なことに挑もうとしているのかわかる。

彼女は六百年もの間、吸血鬼として生きながら殺されることになかったほどの実力。

たかだか十歳のネギに勝ち目があるかというそれは絶望的とすら言える。

「このために……色々準備はしたんだ、きっと大丈夫」

おもに気持ちの整理であるが、それでも自分を信じる。自分の力だけでなんとかしてみせると決意する。傍目から見たら、実力が圧倒的に伴わない慢心であることはわかっていた。だが、自分の意思

で行動することに意味がある。

ほんの少しの勇気が本当の魔法だと、自分に言い聞かせた。

まもなく、ネギの元に強大な魔力が降り立つ。気配を探るまでもないほどの存在感。身体は全力疾走した後のように汗をふきだしている。

「やあ、ぼーや。 迎えに来てあげたよ、ぼーやの大好きなお姉ちゃんと一緒にね」

聞こえてきた声と、捕らわれた明日菜の姿にネギは愕然とした。

学園から電気が消え失せたとき、いくつかの気配が学園内に侵入したのを感じ取る。

だが、それらはどれも平時と変わらない程度のレベル。数は多いが、本日の警備はいつものローテーションではなく、フル動員だ。なんとかなるだろう、とハクは考える。

現在、ハクがいるのは女子寮近辺。この辺りまで侵入者が来ることはないであろう配置だ。いまだにハクに信用を置いていないからの配置なのか、それともなんかしらの思惑あつての配置なのか。ただ、今から戦う相手が決まっているハクにとっては願ったりかなつたりの場所だ。ここならいくら離れても他の 警備の者に負担がかかることはない。

(それに周辺には刹那がいる)

彼女は木乃香専門の護衛だ。手が空いているときは警護をしているが、今回は彼女自身が木乃香の護衛を優先したいと申し出たとのこと。

全幅の信頼とはいかないまでも、刹那の腕は確かであることを知っている。それは成長して手合わせしたことにより顕著だった。もとより才能の塊であると言われていたほどだ。そこにあの性格が加われば、この実力もうなずけると言うもの。

ならば、あとは相手が来るのを待つのみ、ということだったが。

「ハハハ、ここにいたのか霧島先生」

心底楽しそうな高笑いが聞こえる。こんな笑い方をするものは一人しかいない。声が聞こえた方向、空中を睨みつける。だがその瞳はすぐに驚きに見開かれる。

「なっ、馬鹿な……」

「フハハハハ！ この力に驚いて声も出まい！ 貴様が今まで侮っていたことをこれからじっくりと体に教えてやろう！」

魔力を迸らせる女性。だが、ハクの心当たりの人物とは噛み合わない。

「で……どちらさま？」

「ワタシだワタシっ！ エヴァンジェリンだ！」

そこにはまさに、あのエヴァンジェリンが成長し美女となった姿があった。肩にはなぜか不気味な人形を乗せている。

魔力が戻ったことにより身体も元に戻ったのだろうか、それとも幻術の類か。今はそれよりも、彼女の従者である茶々丸が肩に背負

っているモノのほうに気がなった。

まるで人のようなモノ。

しかしぴくりとも動かない。顔は見えない。こちら側に制服姿の下半身を向けている状態。

「……エヴァンジェリン、生徒を襲ったのか？」

「ははっ、まさか。眠っているだけだよ、今はな」

含みをもったセリフ。頭に血が昇っていくのがわかる。こういうときこそ冷静に物事を判断しなければならない。一度息を吐き、心を静める。

「今すぐその子を放せ。俺たちの戦いには関係ないだろう？」

「なあに、貴様とネギ先生の勇姿を他のものにも見せてやるうと思つてな。これはほんの計らいというものだ。観客は……ワタシをこけにしてくれたばーやの同居人」

すつと、茶々丸が無表情のまま肩に載せていた生徒の脇を持ち上げ、その顔を月光の元にさらす。夜目が利くハクにはそれがよく見えた。

「……木乃香!？」

「ああ、そうだ。ワタシに勝てたら観客を解放してやるう、賞品があつたほうがやる気が出るだろう？」

「 黙れ」

虚空に影が堕ちた瞬間、エヴァンジェリンを断ち切る銀閃が奔る。突如として現れた女剣士の一撃、決して軽くはない。

いや必殺の一撃とも言えるそれをたやすく二本の指で挟み取る魔

女。

動揺したのは、他ならない攻撃を仕掛けた刹那だった。

「な、に」

「はっ、現れたな桜咲。　だが、貴様は今宵の宴には呼んでいない、ここで退場だよ！」

「がっ！」

なんとという力か、エヴァンジェリンは刀ごと刹那を地面に叩きつけた。受身を取った刹那だが、今ので実力の差が如実に示される。

（刹那では無理だ）

相性が悪いというレベルではなく、ただエヴァンジェリンが強すぎる。正直予想外だ。今の一撃でも当たらないと言うのならば、ハクの攻撃とてそう易々と当てられるはずがない。すぐに立ちあがる刹那だが、今のカウンターでかなりの負傷が見られる。しかも。

「いけ、我が従者茶々ゼロ、遊んでやれ」

「ケツ、ヤット暴レラレルゼ」

突如話しだした不気味な人形が握る鉞。体のサイズは三十センチほどだろうに、自身の身長や重さよりも何倍もの鉞を軽々と振り回しながら、刹那へと突撃してく。

「つく、使い魔の分際で！」

「ケケケ、サア存分二殺シ合オウゼ！」

浮遊した身体を滑らせながら、下から上からと、普通の攻撃とは違うリーチを活かした戦いに、刹那は苦戦していた。

「お嬢様をお願いします！」



「才喋リシテイル余裕ガアルノカ？」

激しい金属がぶつかり合う音ともに、刹那は女子寮から離れて行く。あの音では女子寮の誰かに目撃されてしまう可能性を考えたのだろう。

それをエヴァンジェリンは悠々と眺め、睨み続けるハクに声をかける。

「さあついて来い。ぼーやがワタシの分身を追って来ている」  
「……言われなくともついていってやるよ」

木乃香を人質に取られたこと以上に、それを易々と許してしまっただ自分に腹が立つ。

空を駆けるエヴァンジェリンに合流する形で、別のエヴァンジェリンを追ってきていたネギが現れる。すでに戦っていたのか、いたるところに負傷が見られる。分身は茶々丸に何かを渡すと霧散した。

（魔力で作られた自身によく似た分身？）

しかしそれを気にかける余裕はない。疾駆する身体には余裕があるが、常に魔法攻撃を警戒しながら一定量の妖気を保たなければならない為、決定的な隙だけを窺いながら走り続ける。

「余興は終わりだよ、ぼーや！ 今度はワタシ自身が相手をしてやるろう！」

「エヴァンジェリンさん！ 明日菜さんを返してください！」

「ネギ先生！ 神楽坂も掴まったのか！？」

突然掛けられた言葉にネギは軽く驚きながらもハクに叫び返す。ハクの声は空中を奔る風の音にも負けない声だった。それでは先ほ

ど茶々丸が受け取った何かは、神楽坂ということか。

「霧島先生！ そうなんです、他にも誰か掴まっているんですか！？」

「おいおい、誰が話すことを許可した？ 『魔法の射手・連弾・氷サギタ・マギカ・セリエス・ケラキアリスの十七矢！！』」

「うっ、『魔法の射手・連弾・雷の十七矢！！』」  
サギタ・マギカ・セリエス・フルグラリス

エヴァンジェリンの放つ氷の矢と、ネギの放つ稲妻の矢が風を切り裂き互いにぶつかり合う。

「くそっ、空中戦闘では手が出せない！」

ハクの独白にも近い声を拾って、エヴァンジェリンは不敵な笑みを浮かべる。

「ほお？ ならば手加減して地上でやってあげようではないか」

エヴァンジェリンはそういうとネギを牽制しながら、学園都市の外部とを繋ぐ連絡橋に降り立つ。重厚な造りのただっ広い橋の上で、ハクとネギ、エヴァンジェリンと茶々丸がにらみ合う。ここならば多少の衝撃にもびくともしないだろう。

「そんな、木乃香さんまで……」

「今すぐその二人を放せ。二人は関係ない」

「ほお、関係ない……か。近衛の方は関係ないだろうが、果たして神楽坂の方はどうか？」

不敵に笑うエヴァンジェリンを見て、ネギは肩を震わせる。ハクが口を開こうとしたとき、意外にもネギから言葉がつむがれる。

「……アスナさんの記憶は、僕が責任を持って書き換えます。僕はこの件が終わったらどんな処罰をも受けるつもりですから」  
「……っ！」

その言葉の意味がどういふことなのか、瞬時に理解する。下手をすれば偉大な魔法使いであるマギステル・マギへの道すら、自分の夢すら危うくなってしまいかもしれないというのに。

それだけネギが自身の行動の迂闊さを悔いていたということなのだろうか。

「はっ、その心意気だけはサウザウンドマスターの息子と思えるな。だったらワタシを打倒し、その責任とやらを果たして見せろ！」

二人の体が茶々丸の手を離れ、十字の恰好で学園と外部とを隔てる川の上、空中に停止する。

二人を橋の上から遠ざける姿をみて、エヴァンジェリンが当分は二人に危害を加える気がないことを悟り、攻撃の為の手段を思考する。

「こちらは正真正銘悪の魔法使い闇の福音と、その従者絡繰茶々丸ダイク・エヴァンジェル。そっちはまだ半人前の甘ちゃん魔法使いと半端な実力でワタシを侮辱した愚か者！ 勝ち目は随分と薄いなあ？ フハハハ！！」

高笑いして上機嫌そうなエヴァンジェリン。

エヴァンジェリンの敵意、殺気も十分寒気を感じさせるほどのレベル。魔法使いとしての裏付けされた実力と生き抜いてきた確かな自信。それに加え、魔力で強化された明日菜への奇襲をさばく格闘技術と身体能力を誇る茶々丸。

ネギはそんなエヴァンジェリンに吞まれてしまっている。表情は

青ざめ、歯を打ち鳴らしている。

その様子を見て取ったからか、敵は確実にこちらを侮っていた。

だが、ハクはふつと笑って見せる。こういうときこそ余裕をかま  
す。

「ご高説をどうもありがとう、エヴァンジェリン。だが、その慢  
心がおまえに敗北を招き寄せることになるぞ？」

「ハハハ！ 随分と粹なハツタリをいうじゃないか！ 慢心とは強  
者のみが至れる至高の感情だ、弱者にはわかるまい！ 行け茶々丸  
！」

「Yes , Master」

ゆらりと茶々丸の身体が動く。

暴風にも似た音と共にネギの眼前に躍り出る茶々丸。まっすぐ迷  
いのない拳がネギを打つ寸前、ハクがその腕を取り、重心を払って  
エヴァンジェリンに投げ返す。

一瞬の攻防。

ネギは茶々丸のその行動にほとんどついていけてなかった。

「ほお、なかなかやるようだな？」

エヴァンジェリンの声は耳に入らない。今のほんの刹那のネギの  
動揺をハクは視界の隅でとらえていた。

「どうしたネギ。責任を取るんだろ？」

「……僕は」

それは迷いなのか、ためらいなのか。ハクはネギが答えを出すま  
で見つめ続ける。それほどの余裕はないが、向こうも待っていて

いる。その慢心が命取りだがこちらにはありがたい。

「……自分の意志で。　僕がやるんだあああつ！」

吠える。魔力すら纏った叫びが空気を震わせ、ネギを中心に風を巻き起こす。先ほどの茶々丸の暴風のような勢いが、今のネギの前ではかすんでしまうほどの乱気流。

(これが英雄の息子……いや、ネギの本気か)

「霧島先生、エヴァンジェリンさんと戦います。　前衛で僕が魔法唱える間の時間稼ぎをお願いします！」

「ああ、了解した！」

もうネギの顔は見ない。決意は固まったのか、ネギの視線に映るのは敵と認識したエヴァンジェリンと茶々丸のみ。

体内に眠る妖気を活性化させる。気力、体力ともに充分すぎるほど。

(出し惜しみはしない、最初から全力で行く)

例え第三者に地力を見抜かれてしまっても、強大な力を秘めたエヴァンジェリン相手に、加減ができないということはわかりきっている。

「来い、愚か者ども。　今宵のワタシは少々気が荒いぞ？」

「　心配するな、もう来てる」

「なっ、チィっ！　茶々　」

ほんの一息、エヴァンジェリンが気を逸らしたと同時に瞬動での奇襲。

後衛であるエヴァンジェリンへ攻撃をかける。

首を飛ばしに行く空中回し蹴り。

鈍い音を響かせながらぶつかった衝撃で橋の欄干まで吹き飛ばされたモノ。ハクはその姿を見て舌打ちする。

「くそつ、なかなかの動きだな茶々丸」

「損傷軽微。戦闘に支障ありません」

淡々と状況を判断する茶々丸。立ちあがり再度攻撃を仕掛けてくるが。

『光の精霊二十九柱……魔法の射手・連弾・光の二十九矢!!!』  
サギタ・マギカ・セリエス・ルーキス

「至近距離魔法弾接近……回避します」

ネギの魔法攻撃がハクと茶々丸を寸断しエヴァンジェリンへ向かっていく。

ネギが生んだこの隙に、必殺の一撃を練る。

左手に溜めを、右手で覆い

「やるじゃないか、ぼーや!」 『闇の精霊二十九柱……魔法の射手・連弾・闇の二十九矢!!!』  
サギタ・マギカ・セリエス・オプスクーリー

進む魔法のぶつかり合い。エヴァンジェリンの裁量によって同等の魔法が互いに互いを消滅させる。

打ち出す腕はトリガーとなる

「手加減してる余裕なんてあるのか? 【霧島流、後の型 散弾掌  
!!!】」

「チッ!!!」 『魔法の射手・連弾・氷の二十四矢!!!』  
サギタ・マギカ・セリエス・ケラキアリス

放たれた渾身の暗い光は変わらず二十四。

かなりの至近距離で放った一撃にすぐさま対応してくるエヴァンジェリンの魔法の矢。

一つ、二つ、四つ、八つ。

次々と放たれた魔力の塊と妖気の塊が打ち消し合い、食い合い消滅。

十六、二十を数えたとき、変化は訪れた。

「慢心したな エヴァンジェリン!!」

「なんだとっ!」

弾幕を超えて迫る光は四つ。

繊細なコントロールによる妖気の調整によって放たれた本命の四発は、氷の矢を食らいつつも目標へ接近する。

「魔力障壁前方へ全力展開!! なっ、障壁が食い破られただど!」

「ネギ追撃しろ!」

決まった エヴァンジェリンの魔法障壁を突きぬくことはできなかったが、その障壁の無効化、防御力の無力化は果たす。

(ここでネギのとどめの魔法が入れば!)

「うああああ!」

「ネギッ! がはっ!」

意識を向けた方角からネギが吹き飛ばされてくる。

ハクはそれを受け止める形で、勢いを殺しきれずに支柱に激突した。

技の硬直からの無理な軌道修正によって満足に受け身を取れない。

肺から息が漏れ出し、一瞬意識が持って行かれそうになる。

「茶々丸、よくやった。あははは、面白い、面白いぞ貴様ら！まさかこの闇の福音を一度とはいえ追いつめるとは！」

ダーク・エヴァンジェル

魔法同士の激しいぶつかり合いによって生じた爆煙の中、悠々と姿を現す茶々丸とエヴァンジェリン。

ハクがエヴァンジェリンに向かう間、茶々丸がネギを襲っていたのだ。

「マスター、残り時間二十分十四秒です。お急ぎを」

「チツ、もうそんな時間か。いいだろう、そろそろ仕舞いにしようか？」

「まずいまずいまずい。」

ネギは茶々丸の一撃によって半分意識が持って行かれ、身体から力が抜けてしまっている。額から流れる血がネギが受けたダメージの大きさを物語っている。万が一あのまま支柱に激突していたら命が危うかったかもしれない。

目は泳ぎ、握った拳にはほとんど力が入っていないように見える。

「お前は充分良くやった……少し休んでろ」

「い、嫌です、僕は……まだ、やれます」

ネギを押しつけて休ませようとするが、支柱を支えに無理やり立ちあがるうとする。

そのたびに身体はふらふらと揺れ、もはやネギが戦える状態じゃないことは目に見えていた。

「ほお、気合だけは一人前だな。しかしやめておけ、このまま続



ければ間違いない死ぬぞ？」

エヴァンジェリンの言うことはもつともだ。最早ネギに戦う力は残っていない。それなのに、だというのに。

「僕は、まだ、負けていない！ 決着をつけましょうエヴァンジェリンさん！！」

「ふふ、いい覚悟だ、ぼーや。茶々丸、邪魔なあいつを抑えておけ。あいつにはワタシの障壁を破る妙な技がある。水を差されてはかなわんからな」

「Yes, Master」

エヴァンジェリンの前に立ちふさがる茶々丸。本当に負傷もないのだろうか。服は戦闘で擦り切れ丸い関節が露出している。

「霧島先生……これは僕のがまます。だけど、力を貸してくださいますか？」

背中越しに伝わる声に、ハクは手を振るだけで応える。

(最初から貸している、ならば最後までやり通すだけだ)

#### 妖気浸透率、四割

懐から取り出したのは白銀に煌めく、一メートルはあるう刀身。だがそれには柄というモノが存在していない。

しかしハクの手が傷つくことはなかった。いや、傷つくことはあり得ない。

それを半身で構え、相対する茶々丸を視界に収める。

「おいおい、そんな馬鹿でかいもんをどうやって今まで仕舞ってい

た!？」

「さてね? そんなことよりも、自分のことに集中しておけよ、エヴァンジェリン」

自身の一部のように手に馴染む。今まで身体に流れていた妖気の通り道に新たな血管が追加されたかのようにその流れを変え、循環させていく。

### 妖気浸透率、七割

得体のしれない武器に警戒しながらも、茶々丸が動きを封じに襲いかかってくる。

それは連打というよりも猛打。後の配分など考えない怒涛の攻め。ハクはいなし、見切りかわし続ける。

茶々丸にとっておよそ予測可能な動きの範囲。

茶々丸の感情に焦りというものはない。

だが、彼女の直感のような言い知れない感覚が攻め続けるように身体に命令を下す。

しかしそれも長くは続かない。彼女のスタミナはほぼ無尽蔵であるにも関わらず、だ。

精密な演算の元に叩きだされた軌道をなぞる攻撃。

だが、一撃一撃を行う度にわずかな齟齬が生じ始めている。

原因は唯一つ 唯一の誤算。

『損傷軽微 戦闘に支障はありません』

全体の一割にも満たない損傷。それが技のキレをほんのわずかに落としてしまった。

「甘いよ茶々丸」

「っ!!!??」

一瞬の思考による乱れを読んだカウンター。  
避けるのではなく、茶々丸の動きに自身の動きを乗せる。

【霧島流 後の型、流水の構え】

それは中国拳法の八卦にも良く似た円の動き。

攻撃を乗せたベクトルを取りこみ、足掻かせる間もなく地面に叩きつける。

刃でありながら、盾

「詠唱か!?!」

声に出さないエヴァンジェリンの動揺。ほんの数秒にも満たない時間の中で、茶々丸の猛攻を防ぎあまつさえ突破する。更にその硬直もなく何らかの攻撃手段を講じるハクの動きは称賛に値する。

エヴァンジェリンは大幅にハクへの認識を改めざるを得なかった。しかし、茶々丸の生み出したその数秒で彼女の魔法は完成された。

218

『来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ常夜の氷雪、闇の吹雪!?!』  
ニウイス・テンベスターズ・オブスクランス

闇の上位魔法に属する、背筋を凍らせるような凍てつく波動に、視界を覆うような暗黒がハクに向かつて殺到する。

瞬動。上空へと大きく飛びその一撃を後衛であるネギが受け止める。

『来たれ雷精、風の精。雷を纏いて吹けよ南洋の嵐、雷の暴風』  
ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンス

わずかなタイムラグで発動されたネギの魔法。

おそらく同等とまでは行かないまでも、ハクが攻撃をするための時間を生み出すだけの魔力量を感じた。

盾でありながら、刃

互いの魔法が激しくぶつかり合い、頑強な連絡橋を地震のような振動が襲う。

だが、魔法に一日の長があるのはエヴァンジェリン。ネギの魔法はすぐに破られ、ネギの眼前に闇の吹雪が迫る。

エヴァンジェリンが笑みを浮かべる。

内心で舌打ちする。ハクの顔に焦りがうまれる。

穿ち、払い、突き通す

ハクがエヴァンジェリンの元へ到達するわずかな時間が足りない。虚空瞬動を使つては正確に技の狙いが定まらない。

その一瞬、大きく息を吸い込む音が聞こえた。

「ネギいいいいい！」

「うおおおおお！！！」

目が覚めた明日菜の叫び。

呼応するように、ほんのわずかで押し切られるはずだった魔法が息を吹き返す。

「馬鹿な！？」

三位一体の型

【霧島流、攻の型 閃光一千！！】

暗い光を帯びた刀身が横なぎに振られると同時。

存在していた刀身が極薄の糸状に裂き別れ、視認できない細さでエヴァンジェリンの魔法を飲みこみ始める。

あまつさえエヴァンジェリンの魔法障壁は撫でるだけでもろく崩れ去った。

「すべて、かき消される、だと！」

「これが僕の意志だあああ！」

大幅に威力を削ぎ落とされた上位呪文。しかしその勢いと気迫は初撃を遥かに上回る。

雷の暴風に呑み込まれ、エヴァンジェリンは橋から投げ出された。あとにはもうもうと立ち込める粉塵に、激しい魔法のぶつかりあいで抉られたコンクリ。

「……やったか？」

ふわりと地面に降り立つハク。だが、無様にも地面に膝をつき、肩で息をする。

最早満身創痍と言っても過言ではない。それほどまでにエヴァンジェリンの魔法は強力で、魔法障壁は強固だった。ほぼすべての妖気を絞り出して、魔法を相殺、防御力を無効化した代償なのだ。

「うっ、いつ……。まさかここまでやれるとはな、ぼーや、それに霧島！！」

エヴァンジェリンが負った傷は深い。だが彼女は空中で持ち直し、かなりの火傷だったものをものの数秒で再生して見せる。

橋の上には満足に動けないハクと、気絶に近い状態で地面に手を

付いているネギのみ。

おそらく、ネギにはもう声が届いていないだろう。

「……おいおい、不死の肉体は反則だろ？」

「黙れ、遊びはこれで終わらせてや……る！？　ちや、茶々丸！」

「マスター戻ってください！！　復旧が予定より十七分二十七秒も早い！」

学園都市に光が戻っていくのに比例するように、急速に抜けて行くエヴァンジェリンの力。

かろうじて浮遊しているが今にも落下しそうだ。

「どういうことだ！？」

「結界の復旧によりマスターの魔力は一般人と同程度までランクダウンするということですよ！！」

茶々丸はすぐさまブーストを吹かして、エヴァンジェリンの反対側に明日菜を回収する。

木乃香の姿はまるで、あのと時の分身のように霧散していく。

「エヴァンジェリン！？」

「ふん、約束は違えていないだろう？」

それはあの屋上でかわした約束のことが

落下していく闇の福音と名乗る女。肉体はすでに少女と化し、先ほどまでの敵意も殺気も何もない。

ゆっくりと死への落下を開始する。

（なぜあんな顔をしていられる。なんでおまえは笑っていられるんだ）

欄干から手を伸ばす、届かない。

跳躍。今も落下を続けるエヴァンジェリンに飛びついて左腕で身体を抱く。

数十メートルの高さからの落下による空中浮遊。水面に叩きつけられれば今の満身創痍の状態では目に見えている。

「死ぬ気か!?!」

「んな気はない!」

エヴァンジェリンの言葉に反射的に返す。

(諦めるはずがない。まだ俺は何もできていないんだから!)

握りしめていた銀色の刀身だったもの、自分の髪の毛になけなしの妖気を通し、延長させ手すりに巻きつける。

「ぐあああ!」

最早握力はないに等しい。妖気だけを器用に操って、髪の毛を自分の右腕にぐるぐると巻き付けた状態による延命作業。

ぎしぎしと軋みを上げる骨、筋組織。

この状態での妖気の使用をただだけで、身体を裂かれるような苦痛が襲う。

エヴァンジェリンの攻撃を打ち消し、魔力障壁を消すだけでかなりの量を消費されている。それを二度、しかも間を開けることのない連続使用で一時的なガス欠状態だった。

「放せ! 助けられるくらいなら死んだ方がマシだ!」

「うるさい! 黙ってる! そう簡単に諦めんな!」

左腕に抱える重さを強く抱く。放したら二度と会うことはなく、  
皮肉を言いあうこともなくなる。  
それだけは、どうしても許せない。

「そつやって貴様も偽善に浸るのか!? 助けられたものがどんな  
気持ちでいるかも知らないあいつのように!!」

どうしてこんなにもこいつは悲痛な叫びをあげるんだ。さっきま  
での高慢な態度は、不敵な笑みはどうしたんだ。  
どうしてそんなに悲しそうに涙を流すんだ。

「……俺にはわかるよ」

「何もわかるはずがない! 勝手なことをぬかすな!」

助けられたものがどんな気持ちか。それは本当に救われた気持ち  
でなければ嘘なんだ。

(俺がそうだったように……)

だが言葉が出てこない。ハクが救われた気持ちだったように、エ  
ヴァンジェリンがまったく同じものを感じたかどうかはわからない。

「マスター! 霧島先生!」

「茶々丸、助かつ!」

するりと腕から零れおちる重さ。  
ほんの一瞬気を抜いたその瞬間。  
エヴァンジェリンが落ちる

「掴まれエヴァ!!!」



手を伸ばせと願う。

目が合った。

（ああ、そうだよ、高慢なお前にはその顔が似合ってる）

適度な重さを感じながら、ともに茶々丸の手で救出された。

## 第十九話 違えぬ意志（後書き）

吸血鬼編、次回エピソードです（予定）

終わるとか言っておいて、かなり長くなってしまいました（汗  
分割して投稿しようかと思ったのですが、キリが悪いので  
二日分という感じです。

ちなみに、まだ明日菜との仮契約は半端なままです。

色々と疑問が残ったままですが、次回で解消されるかと…

吸血鬼編が終了したら、ほんとに忙しくて更新遅くなります（汗  
あらかじめご了承ください。

誤字脱字・意見は感想までお願いいたします。

## 第二十話 決意と責任

「……どうして助けた？」

満身創痍の状態でエヴァンジェリンを救出しようと奮闘し、結果は彼女の従者である茶々丸に助けられたハクはその質問の意図がひどく滑稽に思えた。

「助けたも何も、俺の方が助けられた。礼なら茶々丸に言ってくれ」

思えば、自分はいつも人に助けられてばかりだ。木乃香のときも決して一人では救えなかった。第三者の力添えがあったからこそ今自分はここにいて、ハクはそう思うと未熟な自分がものすごく小さい存在に思えた。

「ワタシはさつきまでおまえを本気で殺すつもりでいたのだぞ？ そんなやつを助けるなんて頭のネジが飛んでいる以外に考えられん」  
「さてな、だったら俺は頭のネジが数本なくなってるのかもな」

そう言って、疲れを見せない顔で笑って見せる。せつかく生きているのに、暗い顔をされたのであつては助けた甲斐がない。なおもエヴァンジェリンの表情は硬いものだったが、フツと笑顔を見せる。

「ああ、それも数十本くらいな」  
「ひどい言い草だな」

苦笑するように呟き、エヴァンジェリンに歩み寄る。

「な、何を見ている！」

「いや、あのときはまだ吸血鬼化していたから怪我が治癒していったが、もしかして元に戻ったら傷も残るかな、と思つてな」

「それは、ワタシを心配している……のか？」

「まあな」

短く返すと、エヴァンジェリンは急にしおらしそうに顔をうつむけて何かを考えているようだ。

「ワタシは悪の魔法使いだ。それを助けると言つのがどういふことかわかっているのか？」

唐突とも言える問答。しかしハクはそれに対してすでに答えを用意できていた。いや、この戦いの中で固まったのかもしれない。

「おまえは約束を破らなかつた。まあ神楽坂をさらつたのはやりすぎだが、傷をつけたわけでもない。だったら、おまえの中の“

悪”の定義は俺の言葉で否定する必要がない」

「何を甘いことを言っている？ 今回の件だけを見てそんなことを言っているのなら、貴様はワタシを過小評価しているぞ？」

不敵に笑いながらそんなことをのたまうエヴァンジェリンを見て、ハクは頭を抱えた。

「今より前のことなんてわかんないさ。だけど今は否定する必要がないってだけのこと。これから先におまえが俺の大切としている物に手を出すなら……そのときは容赦しないってだけだダーク・エヴァンジェリン闇の福音」

最後に脅しかけてエヴァンジェリンから離れて行く。魔力を使いはたして気絶しているネギを介抱する神楽坂の元へと向かった。

「バカモノが、最後まで容赦などしていなかったくせに。 いや…  
…だからこそ信用できるのかもな…その言葉を」  
「マスター？」

隣で控える茶々丸がそう問いかけても、エヴァンジェリンは反応せずじつとハクの方を見つめていた。

「ネギは大丈夫だ、魔力を限界まで使って、強制的に身体が意識を手放したんだろう。 命に別状はない」

冷静に淡々と現状だけをハクは明日菜に伝えた。

明日菜は戦いが終わってからエヴァンジェリンを見向きもしないで、ネギにつきつきりて声を掛け続けていた。今ネギは明日菜の膝の上で気絶している。

ハクの言葉を聞いて少しだけ柔らかい表情を見せる明日菜。本当にネギがしんぱいだったのだろうか。

「神楽坂、おまえエヴァンジェリンの元へ行つて、ネギと戦うのをやめさせようとしただろ？」

「ど、どうしてそれを知ってるの!？」

少し考えればわかることだ。おそらくエヴァンジェリンの目的は、少しでも戦いを楽しむことだったのだろう。本気でハクとネギが挑んでも勝ち目は薄い。ならばお互いがその本気、限界以上を引き出す条件としての人質を取った。

だが、木乃香がエヴァンジェリンが作った幻だったとして、明日菜が実体だったのはおそらくちょうど良く明日菜が現れたからじゃないだろうか。捕えられたのは停電の前の夕方頃か、それくらいから明日菜の姿を見ていなかったからというのが理由で判然としないが、推理はできる。

だから、エヴァンジェリンは約束を違えたわけではない。ただ降りかかる火の粉を払うのではなく、利用したのだ。

「まあ、そのことはいい。で、これからどうするんだ？ おそらく、神楽坂が魔法を知っているということは一部の魔法先生に知られているかもな」

おもに学園長に、だが。彼ならこの事態をみすみす放っておくようなことはしないだろう。常に監視の目を光らせ、万が一にもネギがやられそうなら何らかの策を練っていたに違いない。

明日菜はハクの言葉を受けても動揺した素振りは見せなかったが、その代わりに優しく笑って見せた。

「私は……、こいつを助けてあげたいんだと思う。茶々丸さんを襲ったのは、確かによくないことだった。霧島先生が助けてくれなかったら、きつともっと深いショックを受けていたと思う。でも、それはほんとのネギじゃない。いつとも一人で抱え込んで、周りに迷惑かけないようしたり、十歳のくせに背伸びした行動して見せたり……だから」

まっすぐにハクを見つめる明日菜の視線。それを確かに受け止めてこれ以上何を言っても無駄だと思わされる。

「だから、私は魔法から、ネギから離れたりしない。うん、決めたの」

「そうか……俺からはもう何も言わない」

はっきりとした意志を見せた以上、そこには第三者が口をはさむ余地はない。たとえそれが彼女にとって悪い選択肢になるうとしてもだ。そうなるかどうかはこれからの明日菜の生き方に左右されるのだ。

「話は済んだか？」

「エヴァちゃん……」

「勝手に略すな神楽坂明日菜！」

そこにエヴァンジェリンがゆっくりと近づいてくる。話が終わるのを待っていたのだらうか。腕組をしながら悠然と言い放ったが、最後ので台無しだ。

くいつと顎で茶々丸に何かしらの指示を出すと、茶々丸はネギの upper body を起こし、何やら衝撃を与えた。

「ちょっと、けが人になにすんのよ！」

「アホか貴様、よく見てみる」

ゆっくりとネギの目が開いていく。意識を取り戻したらしい。

「うっ、明日菜……さん？」

「ネギ！ 大丈夫なの？」

「ごめんなさい……僕のせいで……」

まだはっきりとしない意識の中でネギは明日菜に謝罪した。その言葉にどれだけの意味が込められているのか、ハクに推しはかることができなかったが、ネギが言っていた責任を思い出す。

(消すのだろうか、決意を固めた神楽坂の記憶を)

それはわからない。だが、あのときのネギの覚悟は本物だった。自身がマギ・ステルマギの道から遠のこうとも、それを行動に移すような意志が確かに存在していた。

「僕は……責任を取ります……国に帰って、魔法がばれたこと謝らなきゃ……」

弱弱しく声を出すネギを明日菜は何も言わずに抱きしめ、頭を撫でた。

ネギはしばらく呆然とし、気絶しながらも放そうとしなかった長い杖を明日菜に掲げようとする。

「いやよ!」

ネギを強く抱きしめながら、明日菜は叫びにも似た声を上げる。

「勝手に現れて、勝手にいなくなるなんて嫌よ! その方がよっぽど無責任なんだって、どうして気付かないの!」

「……明日菜さん」

ネギは困惑している。自分が迷惑を掛け続けていたと思いこんで一人で自問自答して、明日菜の意志を確認していなかったことに今更ながらに気付かされている。

「私を巻き込んでおいて、そう簡単に引き下がれると思わないで! あんたは私と木乃香のルームメイトで、弟みたいな存在で、そして担任の先生なんだから!」



今度こそ、ネギの手から杖が落ちる。嗚咽が混じった明日菜の言葉にはネギの意志を叩き折るほどの力が秘められていた。

「ありがとう……明日菜さん」

ネギはそう言って、涙をこらえていた。

「ふん、これが青春というやつか」

「なんでおまえはそんなにひねたことしか言えないんだ」

いつの間にか少し離れた所から、エヴァンジェリンとともに様子を窺っていたハクだったが、その呟きに反論を返さずにはいられなかった。

「ところで、どうしておまえはまだここにいるんだ？」

当然の疑問をぶつけると、なぜだか照れたように頬を染め、視線をハクから外した。

「……近々、おま……ハクの元へ用を伝えに行くことがあるだろう。それまで首を洗って待っておけ」

くるつと踵を返し、学園へと戻っていくエヴァンジェリン。一瞬虚をつかれて言葉を返すのが遅れたが、色々とまずいことになっていくことに気づく。

「ちょっと待て、なんでおまえが俺の名前を知っている？ いやい

や、というか名前で呼ばれると色々まずい。せめて貴様がおまえくらいにしておいてくれ」

「うるさい、ワタシの勝手だろう？ それともクラスの連中に言いふらしてやるうか？ 良い名前なのだから恥じることはないだろう」

違う、激しく誤解なのだ。自分の名前を世界樹広場で堂々と名乗ってしまったことを今更ながらに激しく後悔する。せいぜい名前を使うのは学園長くらいのものであったし、他は霧島の性で呼ぶように言っていたため安心していた。

名前で呼ばれると木乃香に気付かれるかも、という不安を抱えているのだ。だったら徹底的に隠ぺいしておけばよかったのだが、そのときは赴任先が木乃香のクラスとは思っていなかったのだから仕方がない。

「名前を恥じたことはないが、まずいんだ。こつちもワケアリの身でな、名前を知っているのは魔法関係者くらいだ。あまり使わないでくれないか？」

背中に冷や汗をかきながら、弱みを握られないようにふるまう。半分ほどで半分嘘。それをどう取ったのかエヴァンジェリンはこれまでにないくらいの笑顔を浮かべる。

「ほお、“悪”の魔法使いであるワタシに交渉事を持ちかけると言うことは、それ相応の代償を用意してもらわねばならんなあ？」

「これは取引などする価値がない。呼称を変えるだけの簡単なものだ。俺とコミュニケーションを取るつもりがあるならやめておけ。それは俺にとって逆効果だ」

平静を取り繕ってポーカーフェイスで応じる。しかし冷汗はもはや滝のようなレベルで放出されている。



「ふおおお、これまた律義じゃのう……それが本心からのものであれば、じゃがの」

学園長の言葉にぴくりと眉をひそめる。やはり、この老人は知っている。陰でエヴァンジェリンと接触していたことを。

「まあ、事態は丸く収まっておるし、ワシから出るのは芳いの言葉だけじゃ」

「……ありがとうございます」

内心の動揺を押し隠し、礼を述べて退出しようとするハクを、引き留めるように学園長は口を開いた。

「ああそれと、これは別件としてじゃが、引き受けてくれるかのう？」

「もちろんです、俺にできることなら」

そうしてハクは後悔することになる。このとき内容を聞かずに依頼を受けてしまったことを。

## 第二十話 決意と責任（後書き）

吸血鬼編終了です！

次回からはオリジナル展開を交える予定です！

書きたいことは決まっていますが、時間がない（汗  
もっと早くから書き始めておけば良かったと思う日々。  
これからも読んであげてください。

あと、感想などがありましたらいただけると作者のやる気に  
つながります（笑

誤字脱字・意見は感想までお願いします。

## 第二十一話 穏やかな一日

「ええ天気やなあ」

「そうだな……」

状況はよくわからない。

ここは茶道部が活動の為に使うはずの和室。ハクのような芸術に疎いものが理解できないような可憐な花が添えられていたり、一見価値があるような掛け軸は学園長自作の物だったり。

（駄目だ、うまく頭が回らない）

その純和風の部屋で、ハクの対面に座り庭を小窓から眺める美少女。女性らしさというよりは可愛らしさを重視した桃色の着物に身を包んだ近衛木乃香。

彼女は用意されたお茶を飲みながら、さきほどからさし当りのない会話を求めてくる。

だが、ハクにはそれに答える気の利いた言葉を返せずにいる。

（もう一度言おう、状況はよくわからない）

心の中で念仏のように唱え、すべての元凶である人間とは思えない頭部を思い浮かべ、ため息をつく。

何やら深刻そうな雰囲気呑まれ、二つ返事を返したのは昨日のこと。

そしてあれよあれよという間に事態は最悪の方向へ転がっていき、なぜだかわからないが木乃香とお見合いをする羽目になっている。

「先生、やっぱり迷惑やった？ ウチとお見合いなんて」

「いや、迷惑とかそういう問題以前だと思っただが……」

悲しそうな顔をされてもこちらも困っている。前に学園長に口添えしようと言っておいてこの体たらくでは、木乃香といえど情けなく思われても仕方がないとハクは思った。

「例えそうだとしても……ため息なんてつかれたら寂しいやん」

「それは……あゝなんでもない。気にしないでくれ、決して近衛が嫌とかそういう話ではないんだ」

「そうなん？」

立ち直ったようで明るい笑顔を向けてくる木乃香。それを見て安心してハクはつい口を滑らせる。

「ああ、ちよっとした問題が解決したばかりで新たな問題を抱えていると言うか、なんとというか」

「やっぱり嫌だったんやな……」

「ま、まてだからそれとこれとは話が違ってだな！ 近衛のことは、その」

一転して顔を俯かせ、声も一段と落ちてしまった木乃香を見てハクは動揺する。こちらは昔からの顔見知りで久しぶりに接するといつても、昔のように無邪気になれるわけでもなく、かといってどのような距離で接することが正解なのかまったくわからなかった。

「その？」

だから自分がいつものペースを取れなくなっていることに気づく。木乃香はいたずらを思いついた子供のように無邪気に笑い、続きを促す。ころころと変える表情にハクは戸惑い、だが温かさを感じる。そこには過去の、ハクを助けてくれた優しい少女の姿が変わらずにあるから。

「……優しい人だと、思っている」

「あはは。先生は人をおだてるのが上手やなあ、柄にもなく照れてしまったやん」

そういつて笑いながら頬に手をあてる木乃香。確かに顔を赤らめているが、幾分こちらのほうが余裕がない。ハクは木乃香のその仕事に顔が赤くなるのを感じた。

「別に、本心からの感想だ。気にしなくていい」

「気にしなくていいだなんて、そんな冷たいこと言わんといて。ウチも先生のこと優しい人やと思ってるんよ？」

覗き込むようにハクの瞳を見上げる木乃香。自然、上目遣いでハクを見るかたちとなり、その漆黒の瞳を見つめてハクは動揺した。実際の年齢はわからず大人びてはいるが、ハクの歳は木乃香に近いから。だからどうしても意識してしまうこともある。

（これが刹那だったら……いや、それでもそう思うかもな）

一瞬だけ思考を別に飛ばすと、木乃香が口を開く。

「むっ、今誰か他の人のこと考えた？」

「いついや」

その瞳の逡巡を感じ取ったのか、木乃香が追及する。ほんの一瞬のことだと言うのに、普段ほわほわしているとは思えないほどの鋭い観察力だった。

「なんてな、別に気にしてないよ」

「あはは……」



乾いた笑いを浮かべるハクに対して、木乃香は先ほどよりも少し落ちついていた。これから何か真剣な話をするように、改めて正座をしないおす。その雰囲気を感じ取って、ハクも向き合い正座した。

「まだ先生に肝心なこと聞いてませんでしたね？」

「肝心なこと？」

何か重要な用件があったのだろうか。そこでハクは一つの可能性にいきつく。

（まさか、魔法の件がばれたのか！？）

だとしたら、学園長がハクに木乃香のお見合いを依頼したのもその為の伏線だろうか。どこまで話していいのかもわからない。いや、ましてそもそもそれなら話がおかしい。魔法の事ならば自身の口から伝えた方が。いやいやそういう問題ではないはず。詠春さんからも言われている通り魔法のことは木乃香には一切の秘密のはずだが……。

様々な可能性を検討し、しかし答えは出ない。いきなり悩み始めたハクを見て、木乃香のほうはやや面食らっていたが、やがて声を発する。

「先生のお名前はなんですか？」

（なるほど、名前名前、ナマエ？）

思考停止。もう一度反芻し、再生。

「名前？」

「そ、だっってお見合い相手の名前知らんなんて格好つかへんでしょ？ それに一応副担任なんやし、苗字だけじゃさびしいやん」

そういう問題なのだろうか。とにかく名前か、それは言ってもい

いのか明かすべきなのか。もともと徹底的に隠そうとしていたわけではなかったために、ばれるのも時間の問題だ。それに木乃香の記憶の中のハクは黒髪黒目、名前がわかったところでその人物を特定するなどできるはずがない。

「霧島……霧島白という」

やっぱりだ、木乃香はそう思った。

目をつむりながら、神妙な顔つきで名乗った青年の姿を見て、木乃香は納得する。あまり知られたいことではないのかもしれない。でも話してくれた。

まだわからない。本当にあの頃の彼なのかは漠然としすぎていて判断がつかない。お互いに成長していることもあるし、そもそも同じ年くらいだった子が学生でなく教師をやっているのもあまり納得がいかないが、そこは十歳の少年が教師をやるくらいなのだから彼が例え十五歳近くの少年だとしても問題はないはず。

「ハク……ウチのこと覚えてへん？」

だから聞いてみる。例え彼の姿が変わって、銀髪碧眼だったとしても、木乃香が見間違えるはずがない。そう確信を持つ。彼の雰囲気、性格がそれを裏付けていると思う。それは本当に一縷の希望のようなもので、この学園で出会えたことが小さな奇跡そのものなのだ。

だから聞く。理想の答えを聞くために、身を乗り出し、彼の顔の

間近にすぐ自分の顔を寄せる。その瞳に吸い込まれそうになりながら、自分のことに気づいて欲しいと言う願いを込めて。

動揺はすぐに後悔へと変わった。

言わなければ良かったと思ってももう遅い。ハクは口を開けることができないでいた。身分を隠すことでこちら側の事情に触れてしまわないように守る。それも仕事の一部。万が一にでもハクに近づいたことで木乃香に危険が降りかかってしまうような事態は、絶対に避けなければならぬ。

だったら答えは決まっている違うと答えればいい。

「俺は……」

俺は知らない。そう答えればいいのか。いや、この場の言葉の意味では覚えていると言われて、どう答えるのが正解なんだろうか。どんな答えを返したところでさらなる追及があるかもしれない。しかし何事もなく終わるかもしれない。

（何をぐだぐだと考えている）

思考が纏まらない。袋小路に迷ったように明確な答えを打ちだせない。

故に言葉は出ない。

どれほどの沈黙が続いたのだろうか。

わからない。

否定の言葉を紡ごう。それで終わり。

だが、否定した瞬間に、二度と木乃香の傍へは戻れないような、そんなためらいがうまれてしまう。

ほんの目の前で期待と不安でハクを見る瞳に、揺らいでしまっただったら。

「俺は……近衛のことを」

「おい、邪魔するぞ。　すぐに来いハク」

突然の闖入者とその従者が、張りつめていた雰囲気を一気にぶつたぎった。

ハクの首根っこをむんずと掴むのは茶々丸。それを見届けて傲岸不遜に和室の外へと引っ張っていく指示を出すエヴァンジェリン。

「マテ、あまりのことに俺も思考が追い付かん」

「大丈夫だ、すべてはワタシが把握している。　それに遣いを寄こすと言っただろう？」

不敵に笑っている場合じゃないぞエヴァンジェリン。これは一応学園長が組んだお見合いなんだ。一応何らかの形を持って終わりの結末を見せないとまずいはず。なのだが。

「なに、あのじじいなら黙らせてあるから安心しろ。　近衛もこんな茶番に付き合わされて時間の無駄だったな、こいつは借りて行くぞ」

「こちらの都合はすべて無視ですかそうですか」

「ふん、元々、こんな小娘相手にお見合いも何もないだろうに。

あのじじいも何を考えているやら、大体　」

突然、木乃香に見せつけるように振り返り胸を張るエヴァンジェリン。そこには残念ながら何も確認はできない。

「こいつはワタシのモノだからな」

まるで後ろから爆発のSEが聞こえてきそうなほどの自信と発言。その言葉に納得できないのはハクである。

「おいこら、この間まで敵対していたくせに何を勝手言ってるんだ」  
「なに、ちょっと実験に付き合ってもらっただけだ、特にどうこうしようということなど　いや、色々ハクは興味深いからな、たくさん付き合ってもらっことにしよう」

なぜか途中から黒く嫌な笑いを浮かべ、思ってもないようなことを言いだした。ハクはというと、茶々丸が首根っこを掴んでいるわ、突然の展開についていけないいわで借りてきた猫のようにおとなしくしていた。

「ちょっと待ってくれへん、エヴァちゃん。　ウチにはまだ大事な話が残ってるんやけど、ウチの未来の旦那になるかもしれへん人を持つていかれたら困るんや」

「だ、旦那!?　な、何言って」

「ほお、旦那とな?　こんな妙な髪の色した女顔が好みのタイプか?　ならばホストでも困って生活すればいいだろう、箱入り娘のお嬢様なんだからな」

「エヴァちゃんにはわからへんやろうなあ、外見しか気にしないよ　うなお子様やし、空気は読めへんし」

「こ、小娘……言わせておけば!」

「はん、少なくともエヴァちゃんよりは色々成長してるもん。  
とにかく邪魔せんといて!」

ちらつと自分の特定の部位を見て、エヴァンジェリンの平原を見る木乃香。

確かにそうかもだが、はっきり言ったら可哀そうだろうに。

「おい！ 茶々丸、この生意気なガキを黙らせる！」

売り言葉に買い言葉となつて、最早收拾がつかない事態となつていく。今にも掴み合いを始めそうになつた二人を見て、ハクは深くため息をついて、頭を抱えた。

「ちよつと二人とも落ちつけて」

「誰のせいだと思つてる（んや）！！」

「ぶはっ！」

（ああ、空が眩しい）

ハクは綺麗に弧を描きながら庭に着弾した。

第二十一話 穏やかな一日（後書き）

京都弁が難しい（汗

えせ京都弁で我慢してください

もう少しオリ展開が続きます！

誤字脱字・意見は感想までお願いします。

## 第二十二話 仮初めの契約

エヴァンジェリンの介入により、急遽見合いは中止になった。

茶々丸の機転？により、その場に煙幕だけ残して連れ去られたハクは、今はあの小さな人形だらけのログハウスに拉致されていた。

「……で、一体何の用なんだ」

不機嫌そのものといった声でハクがエヴァンジェリンに抗議する。あの場で答えを言わなくて済んだことには助かったかもしれないが、これは問題を先送りにしたにすぎない。結局木乃香の中で、ハクが幼いころに接した少年という認識が強まったかもしれない。なるべく彼女の近くにおらずに、遠くから見守るスタンスを取りたいハクとしては、これ以上仲が良くなるような事態は避けたかった。

「なんだ、本当にあの小娘と結婚でもしたかったのか？ だとしたら邪魔をして悪かったな。悪気はないが謝っておこう」

まったくもってこれっぽちも反省の色を見せないエヴァンジェリンの態度。もともと捻くれたやつだと思っただけだが、ここまで横柄な態度を堂々ととるとは。ハクは怒りを通り越してあきれてしまった。

「そういうつもりはさらさらなかったけどな、強引に連れてこられたら誰だって不満を感じるだろうよ」

「別にいいだろう、面倒事から解放してやったのだから。むしろ

こちらが礼を言っただけで欲しいくらいだ」

「こいつは……骨の髄まで自分至上主義だな」

「ふん、悪の魔法使いとして当然の矜持だろう？ 欲しいものはど



んな手段を用いても手に入れるのだ」

茶々丸が奥から盆とカップを持って来た。向かい合うテーブルに、高級そうなティーカップが置かれる。香り立つ紅茶は、そういったものに疎いハクでも貴重なものであることがわかった。

「……昨日は手に入れ損ねましたけどね」

「ぐっ、茶々丸余計なことは言わなくていい」

「了解です、マスター」

「まったく、誰に似たんだか」

おまえだろう、という突っ込みはやめておいた。話が脱線していくのは目に見えている。紅茶に口をつけ喉をうるおす。口の中にほどよい苦みと甘みが広がる、やはり高級なものを使っているのだろうか。

「それで、用件はなんだ？」

単刀直入に切り出す。特にこのあと用事があるわけでもないが、手短に済ませたい。こいつと一緒にいるとなんかしらの厄介事に巻き込まれそうな予感がするからだ。

「ふむ、まずは貴様の能力が魔法でもなく、気でもないということから説明してもらいたいのだが？」

一瞬の動揺を感じ身体が反応する。そのほんのわずかな心の動きをエヴァンジェリンは見逃さない。

「やはりな、貴様は何者だ？ 本当に人間なのか、それとも人外か何かか？」

「それを聞くことがおまえの用件なのか？」

鋭く低い声でエヴァンジェリンを牽制する。正体を明かすようなことはしないし、特性を見抜かれることもある程度は予想の範囲内だった。だからといって簡単に話すつもりもない。ハクは席から立ち上がる。

「まあ待て、今はそのことについて詮索はしない。少し手を貸して欲しいのだ」

「手を貸して俺にメリットがあるのか？」

「そうだな、メリットがあるような条件を提示すればいい。もっとも等価交換が原則だ。ワタシに手を貸すという以上の要求はこちらも呑めないがな」

優雅にティーカップを傾けながらエヴァンジェリンは言った。

そもそも目的が分からない以上、手の貸しようがないのではないだろうか。

「内容はなんだ？」

「それはお前が引き受けてくれたときに話そう」

「……それではお前の等価交換とやらの基準がわからないのだが？」

「ワタシが判断するのだ、問題ない」

問題大有りだろう。等価交換とやらは互いに価値を知らないと成り立たないとハクは思った。

「霧島先生、私の方からもお願いします。マスターを助けてあげてください」

「助ける？」

茶々丸はいつもの無表情ではなく、どことなく寂しそうな顔を  
して言った。

助けるとはどういうことなのだろうか。それほど事態は切羽詰ま  
っているのだろうか。

ハクはエヴァンジェリンに視線を移すが、彼女は何を言うわけ  
もなく紅茶を飲んでいる。

(強情なのか、人を頼ることが下手くそなのか……)

「……わかったよ。引き受けるが学園から出るような用は駄目だ  
ぞ。日常にあまり支障がないような内容でなければ手は貸せない。  
それと条件の方だが、内容を話してもらって吟味してから決める。  
それでもいいか?」

「注文の多い奴め……ああ、構わんさ。ただし、ワタシの望みが  
叶わない場合はそっちの条件は無効だぞ?」

「俺もそれでいい。で、手を貸してほしい事とは何のことだ?」

自分を悪の魔法使いと例えるこの少女。真祖の吸血鬼、闇の福音  
など様々な通り名を持っている彼女が言うほどのことなのだから、  
よほどの面倒事なんだろう。片手間に終わらせられればそれでいい  
が、学園から出て行くとなるとまずいからな。

先の大停電の一件によりエヴァンジェリンの存在を狙うものが出  
てきたとか、そういうことなのだろうか。十分あり得るがあの威力  
の魔法を打ちだす魔法使いをそう易々と倒せると考えるやつはあま  
りいないだろう。もっとも、結界の復旧で弱体化していることがば  
れればその限りではないが。

なんにしてもここは麻帆良学園だ。まず結界を抜けるところから  
綿密に作戦を練り、裏に手を回すなどの工作も必要となるだろうが、  
そこは学園長がなんとかするだろうし。

では、彼女の依頼とはなんだ?

「……ワタシの身体が普段は結界で弱められていることは知っているな？」

「ああ、一般人と同程度か、少量の魔力を持っているだけだろう？」「そうだ、学園結界が破れるか、学園都市から離れれば魔力は回復できる。しかし、『登校地獄』というサウザウンドマスターにかげられた呪いによって、ワタシはこの学園から離れることができない」

「それがネギを襲う理由だったな。自身の呪いを解呪しよう。もっとも、あれはネギから挑まれた決闘だったから別に何も言うつもりはないが」

「まあ誰かさんのおかげでそれは失敗に終わったがな」

「詰めが甘かったんだろう？」

「ふん、何とでもいえ。だが、その戦いで一つの可能性に気付いたんだ」

エヴァンジェリンは意外と冷静だった。それほどまでにこの依頼が重要なことなのだろうか。

「可能性とは？」

「お前の力を利用して呪いを解呪することだ。お前の力はどうやら魔法や気のような使い方もできるが、それらを相殺する力もあるらしいからな。でなければワタシの魔法障壁があんなに簡単に破られるはずがない」

（簡単ではなかったがな）

心の中で訂正を加えておく。あれはほとんどハクの全力にちかい戦い方だった。もっと効率よくやればうまくいっただろうが、対魔法使いの経験は多くはない。現状戦い方を模索しているようなものなのだから。

「そこでワタシがかけられた強引な呪い『登校地獄』を解呪するた  
めの媒介として、お前の奇妙な力の出番だ。これはやつが強引に  
つむいだ術式のせいだ。妙な魔力の糸や線、塊となってワタシにま  
わりついている。これを一本一本剥がすために力を貸せ」  
「理屈はわかるが、そんなことできるのか？ それにお前をここに  
縛り付けておくための呪いなんだから、俺の一存でどうにかでき  
るもんじゃないだろう」

至極当然な疑問が浮かぶ。エヴァンジェリンにとってはうつつと  
おしいものなのかもしれないが、学園にとっては真祖の吸血鬼が自由  
になるよりは目の届くところでおとなしくしてもらおうほうがいい  
だろう。

「なに、構わんさ。ナギは、サウザウンドマスターは三年経つた  
ら解呪しに来ると言った。しかし十五年間も待たされた。もう  
それだけの年月この都市に縛られたのだ。あいつも文句は言え  
ない」

エヴァンジェリンにしてはしおらしい。年相応の小さな少女のよ  
うな態度。言葉はしりすばみに小さくなっていき、最後はほとんど  
呟きのような音だった。

(弱気な顔すんなよ)

ハクは小さく肩をすくめた。

「惚れた弱みか？ エヴァンジェリン」

あえて挑発的に、口元を釣り上げて言い放つ。

「ばっ！ 違うわこの男女！」

「おまつ、言っている事と悪い事があるだろうがこの幼女！」

「なんだとっ！ 貴様のようなロリコンに言われたくないわ！ ああ寒気がする！」

「てめえ！ 俺はロリコンじゃねえ！ そもそも年齢だって生徒とほとんど変わらない！」

不味い、しゃべりすぎた。しかし、エヴァンジェリンはその言葉に衝撃を受けたようだった。

「な、なんだと、なんでそんなやつが教師をやれているんだ！ いやあのぼーやですら教鞭を奮っているのだ、ということは間違いではないのか、いや」

「マスター落ちついてください。話が進みません」

「うっ、っち、覚えておけ……」

茶々丸の制止により無駄な時間を過ごさずに済んだ。もっとも、エヴァンジェリンに元の調子が戻ったので良かったでしょう。これで今のがうやむやになってくれればなおよいが。

「それで？ 内容を聞いたんだからやつてくれるんだろう？」

「……まあな、それくらいだったらいいだろう。条件は そうだな、何でも一つ言うことを聞く、というのはどうだ？」

「な、なんだと！？ そんなお前の奴隷みたいなものじゃないか！ ふざけるな！」

「おいおい、悪の魔法使いにしては狭量だな？ たったそれだけのことでこの学園都市という縛られた土地から解放されると言うのに、この条件くらいはおまえの器なら充分受け入れられると思ったのだが」

ここぞとばかりにニヤリと笑って見せる。エヴァンジェリンはうなりとも齒軋りともとれるようなうめき声をあげている。

「……いいだろう、ただし、成功しなければその条件は呑めんからな！ いいな！」

「わかったわかった。それで何をやるんだ？」

「ふむ……解呪するにあたって、その……おまえの不思議な気？をワタシに送る必要がある。それはやれるか？」

「解釈は任せる。本当は気かもしれないし、魔力かもしれないがな」

もうほとんどばれていっているようなものだが、妖気の正体をばらすわけにはいかない。それによって俺以外のあの人の元へも余計な厄介事を招くかもしれないのだから。

「秘密主義もそこまでいくとドン引きだな」

「うっさい、黙れ。他人に渡すなんてやったことないから何ともいえん」

実際、ハクの技のほとんどは魔法のように万能ではなく、戦いのみ特化されたものだ。こういった呪いの解呪などは自分の身に降りかかったものだったら、全身に妖気を纏うことで打ち消すことも可能かもしれないが、他人にそれを渡すのは試したことがない。

「ワタシの方で術式が組める。あとはそれに匹敵する鍵であるサウザンドマスターの家系の血が、または新たな媒体が必要なのだ。そして、あのぼーやの血を奪うことは失敗した、あとはおまえのあの力だけが頼りなんだ」

「切羽詰まってるご悪いが、どうしようもないぞ？ せめてそっちで方法を確立してもらわんことには」

「別に……方法なら、ある」

眩くようにそっぽを向いて答えるエヴァンジェリン。どことなく顔が赤くなっているのは気のせいだろうか。

それよりもハクは彼女の言葉に妙な引っかけかりを覚えた。あたかもすでにハクの力の正体を知っていそうな口ぶりだ。まるで妖気の特徴が魔法や気を打ち消すと言うことに気付いているかのような

「むぐつ!?!」

突如襲いかかる未知の感触。柔らかい何かが、ハクの唇に触れている。熱が伝導され、ハクの中で何倍にも膨れ上がっていく。

(なんで、こいつが、俺に!?!)

突然の展開に理解がおいつかない。エヴァンジェリンはハクに押し掛かるようにテールから乗りだし唇を奪ったのだ。

すると、淡い光が床から放出されていることに気づく。

光に二人が包まれ、それが収束していくと同時に、エヴァンジェリンは唇を離れた。

「喜べ! こんなことまだ誰にもしたことないんだからな! おまえがうだうだ言っているからこちらからパスを繋ぐしかなかったんだ!」

「それと口付けとどういっつながりがあるんだ?!?!」

「バクティオー仮契約という魔法使い同士のパートナー契約だ。これ意外に手はなかった! だから、その、勘違いするなよ!」

早口にまくしたてているが若干支離滅裂だ。

だが、ある程度は理解できた。そういうことか。しかし頭の中で納得できても鼓動の早さが収まらない。一瞬でもこの少女にドキッとしてしまった自分が情けない。

「……ああ。 ってかそれならそうすると先に言え! 驚くだろう



「がっ」

「うっ、だってそれはその……言ったら断られるかもしれないじゃないか」

「マスター声が小さいですよ」

「ちゃ、ちゃちゃ茶々丸！ 余計なことは言っな！」

しりすぼみに消えて行った言葉はしつかりとハクの耳に届いていたが、エヴァンジェリンが耳まで真っ赤にして従者をしかりつけるのを見て、ハクも恥ずかしいから聞き返すのはやめた。

手元に浮かび上がったカードを見る。

「これは？」

「仮契約の証だ。　パクティオーカードとも言う。　それを使って念話や、主人の元へ従者を瞬間移動させることもできる」

「なるほど……俺が風呂に入っているときとかには呼ぶなよ？」

「アホか貴様！　こうしたのも苦肉の策だ！　別におまえをパートナーにしてどうこうなど考えておらん！」

「それを聞いて安心だな」

ふうとあからさまに息を吐いてみせる。正直ハクも動揺している心を落ちつかせるために、あえてエヴァンジェリンをからかったのだが、やはり相手が混乱しているのを見ると自分は落ちつくなどハクは思った。

「まったく……他にもアーティファクトという魔法具が使用できるが……今はそれどころではないな。　さっそく解呪の儀式に移るぞ、力を放出しろ」

「そんなサクツと説明されてもわからんが……、まあ俺は魔法には疎い、悪の魔法使いに任せるとしよう。　いくぞ？」

全身に押さえつけていた妖気を順々に開放していく。それは足先から指の先、頭のとっぺんまでを駆け廻り、全身を満たしていく。どこまで高めればいいのかわからない。だが、サウザウンドマスターが掛けた呪いであるということから中途半端な量で解呪できるとは思えない。

ハクは更に妖気の量を上げ、質を高めていく。

「む、かなりの量じゃないか……予想よりもうまくいきそうだな。これより詠唱を開始」

エヴァンジェリンの言葉は届かない。

高められていく集中。

練度を上げていく妖気。

ただそれだけを愚直なまでに続ける。

次いで抜けて行く。それを補うように練りあげる。

この工程の繰り返し。

どれほどの時間そうしていたのか

「おい、もういいぞ！」

「ん……ああ、了解」

呼吸は荒く、全身をぐっしりと濡らすほどの汗がまとわりついてきた。そして集中から解放されたために疲労感が押し寄せてくる。窓の外を見れば、明るかった空がすでに沈みかけて黄昏時へと変わっていた。

「どれだけかかった？」

「なに、ほんの二、三時間というところか。これ以上はお前の身が持たなさそうだったしな。自分の身体くらい自分で管理してく

れ、まったく」

ぶつぶつ言いながらも心配してくれているのだろうか。もっとも、彼女の場合はいまのところハクだけが頼りなのだからしょうがないかもしれないが。

「すまない……それで解呪はうまくいったのか？」

「……半分ほど成功で半分ほど失敗といったところか。腐ってもサウザウンドマスター、強引な術式を魔力で補ったせいで、おまえの気でも正常稼働するように治せただけだった」

「というと？」

「この学園から離れて生活することはできんが、許可が下りれば外出することができるようになったところか」

「そうか……役に立てなくて悪かったな」

全身の疲労からか、そんな言葉しか浮かばない。しかしその言葉にエヴァンジェリンは驚いていた。

「なっ、別に、おまえが気にするようなことではないわ！ これは取引だったんだ、半分は失敗だったとはいえ、半分は成功だ、そっちの条件も厳しいものじゃない限り受けてやろう」

どうしてそんなに慌てて返事をするのか、疲れたハクには考える気力すらも湧かなかったが、少しだけでも力をかせて良かったような気になった。

「そうか、良かったな」

「だからそんな顔して笑うんじゃない！」

「パクティオー仮契約以外にも方法はあったように思いますが……ん？ マスタ

ー顔が赤く」

「茶々丸！ おまえの突っ込みはいちいち癪に障るぞ！」

こうして、ほんのひと騒動を交えてハクの一日が終わった。

## 第二十三話 困惑する想い

「ナギが生きている……か」

なんとなく眠れない。窓に腰かけて月を眺めていたエヴァンジェリンは、今日聞いた話を思い起こす。

放課後、いつも通りお気に入りのカフェテラスでネギから聞いた話。

それは自分が追い求め続けた男が生きているという話だった。

そのときのエヴァンジェリンは確かに浮かれたのかもしれない、嬉しさを感じたのかもしれない。

『光に生きてみる』

「そうすればおまえの隣を、共に歩けたと言っのか？」

届かない月に手を伸ばす。それは求めても手に入らなかった男を重ねたのか。エヴァンジェリンにはわからない。

『そしたらそのとき、お前の呪いも解いてやる』

「勝手なことばかり言う。 ついにワタシの前に姿を見せなかった癖にな……」

この身体は今、強引な術式による『登校地獄』ではなく正常な効力を発揮するものになった。どう変わったかといわれると、今まで強制的にこの学園都市に縛り付けられていたのが、それがどうい

う経緯であれ責任者の許可が下り、学業の一環だと認められれば外に行くことができるようになったことだ。

そして、外に行けば自分の魔力は戻るだろう。そうすればほとんどただの呪いと化した『登校地獄』も、ネギの血をわずかに提供してもらえばそれを鍵として解呪できる。

そこまで考えてため息をつく。

解呪してどうするのか、あのどこにいてもわからず自分のことを忘れてしまったかもしれない男を探しに行くのか。

仮に見つけたとしても、ナギは自分の物にならないだろう。あれはなかなか強情だ。それに下手をすれば自分のことなど忘れて平気な顔で忘れていたと言いそうだ。

「そんな奔放なところもヤツの魅力の一つなんだろうな」

出会ったころの懐かしく優しい記憶を思い浮かべる。

一筋の滴が頬を伝って流れおちる。

ナギが死んだと聞かされ、その死を受け入れたエヴァンジェリンにとって、今回の朗報はいいものとはいえなかったのかもしれない。初めて自分を受け入れてくれた人。

不器用ながらも優しくしてくれた人。

それらを回想し、慈しみ、そして吹っ切れる。

「さよならだ、ナギ」

届くことのない手は静かにしまわれた。

「で、なんでこんなことしてるんだ刹那」  
「なんでも何も、私がしているのは護衛です。それ以上でもそれ以下でもありません」  
「だったらなんでこんな一昔前のコメディドラマにありがちな、電信柱に隠れて尾行する必要があるんだ？」  
「それは……、あ！ ほらお嬢様たちが動きましたよ！」  
「はああ……」

時刻は正午を少し回った頃。今現在、ハクと刹那はというと、都心にほど近い街に繰り出した木乃香とネギを尾行していた。

そもそもなぜそんな経緯になったか

「ハク！ 大変ですお嬢様が一大事です！」  
「木乃香がどうした!？」  
「いいからついてきてください！」

なんてことを必死の形相で言うものだから、休日返上して駆けつけたと言っのに。

「……まさか、ネギとの仲を疑って出張る護衛って」  
「なんですか、先ほどからぶつぶつと」

不満顔で見上げる刹那を見返して、また盛大なため息をついた。

「こいつに悪気はないんだ、そう悪気はない」

呪文のように繰り返す。ただ刹那は木乃香のこととなると少々周りが見えなくなるだけなんだ。

「むっ、何やら服屋に入りました。 私たちもあとを追いますよ！」  
「はいはい、わかったわかった」  
「返事は一回！」

妙に気合いの入った刹那を見て、ハクは頭を抱えた。

二人が入っていったのは女性服専門店。男のハクが入っていくには抵抗があったが、その容姿のせい、特に奇異な視線を受けることなくすんなりと入れた。

(別に悲しくなんてないさ……)

ネギを連れだつて、木乃香は服を見繕っていたりしている。女の子向けの服を選び、それをネギが評価しているようだが。

「なんか、木乃香のイメージと違うな」

「ハク、お嬢様は何を着ても似合うのです」

「……刹那、なんかキャラ違くない？」

「気のせいでしょう、それにしてもネギ先生……十歳の少年ながらお嬢様に目をつけるとは、さすが英国紳士！」

「いやいやいや」

手を振って否定しておく。どう見てもあの二人はいいとこ姉弟と  
いったところだろう。

と、ハクも目に付いた洋服を試してみる。

「刹那、おまえもこういうの着てみたらどうだ？」

「え？ な、何を言っているのですか！ わ、私などが着てもこういう類のものは似合いませんから」

「そうか？ いつも制服ばかりだからたまには私服を着るのも似合うと思うんだが……」



今も休日だと言うのに制服姿で過ごしている刹那。小さいころも基本的に袴姿しか見たことがないハクにとって洋服を着ないのは、年頃の女の子としてどうなのだろうとか考えなくてもない。実際、クラスの女生徒たちは休日になればそれぞれがそれぞれのおしゃれを楽しんでいる。

そういうハクもスーツ姿のままなのだからあまり人の事は言えないのだが。

「あわわ！ あ、ほらお嬢様たちがまた移動しますよ！」

「ん？ いや、別に危険な気配も感じないし、刹那は服を買った方が……」

慌てて話題を転換させようとする刹那を引きとめようとするが、刹那は若干赤くした顔で、キツとハクを睨みつけてきた。

「い、い、か、ら！ ほら、早くしてください！」

「い、い、だ、だ、だ！ 髪を引っ張るな、髪を！」

「男子なら男子らしくもつとさっぱりした髪形にしたらどうですか！ 大体ただでさえ女子のように見られる容姿だと言うのに」

「どうして俺は休日にこんな小言をもらわなきゃならんのだああ」「静かにしてください！ ……今度は喫茶店で休憩ですか、行きますよ！」

もはや引きずられるような形で振り回されるハク。そこにはおよそ副担任の射弦など欠片もないのだろう。

そんなこともありつつ、二人が入って行った店に到着する。店内は落ち着いた内装で、静かな音楽が耳に心地いい。

「ネギにしては気の利いた店だなあ」

「お嬢様を選んだのではないでしょうか？」

「まあネギにしては敷居が高そうだし……っておい刹那、出ないか？」

ハクは店内に入ってすぐにこの場から逃走しようと考えたのだが。

「ハク、こつちです、あまりじつとしてると見つかってしまいますよ！」

小声で怒鳴るといふ高等スキルを使って席へと強引に座らされるが、落ち着かない。おそらく刹那は木乃香にしか集中していないのだろう。

(カップルだらけじゃねえか！)

どうしてあの二人はこんな店に入ったのか。まさか本当に二人はそういう関係なのだろうか。そう考えるとなんとなく複雑だ。

「……いや、別にそんなことはないか」

「どうしたんですか？」

「何でもない……ってアレなんだ？」

木乃香とネギのテーブルに運ばれてきたもの、なぜか一つの容器に二つのストローがついた飲み物。

「一度こういうことしてみたかつたんよ、ネギ君がいてくれて丁度よかつたわ」

なんて呑気な声を拾いあげる。ハクはしかし冷汗しか出てこない。

「おまたせしました」

いつの間にか注文した覚えがない品物が運ばれてくる。奇しくも

それは今木乃香達が飲んでいるものと一致していた。

「むっ、まだ注文していないのですが」

「本日はカップルサービスデーですので！」

(そんなサービスいらねええ！)

全力で突っ込みたくなりそうなのをなんとか我慢する。刹那は刹那でようやく店内にカップルが多い事に気づいたらしく、ぎしぎしと角ばった動きをしている。

「あ、あはは、何をカップルなどと！ 私はお嬢様の護衛、それ以上でも以下でもない！」

「ちょ、店員さんが怯えてるだろうが！ 冷静になれ刹那！ ここで騒いだら今までの苦労が水の泡だぞ！」

乾いた笑いを浮かべて暴走しかけた刹那をなんとかなだめすかし、木乃香達が店から出るのを待った。休憩だったのかほんの三十分ほどで店から出て行く。

「煩惱退散！ 煩惱退散！！ 煩惱退散！！！」

その間刹那は壊れっぱなしだった。

しばらく木乃香達を尾行し続けていると、何やら怪しい三人組が、木乃香達の買い物邪魔していた。

しかもあれは。

「クラスメートのチア部三人組じゃないか……」

ハクは厄介事が増え、余計に気が重くなった。  
ただでさえ、今。

「つく、あの三人組め！ お嬢様の買い物邪魔するなど許さんぞ  
！」

「ええい落ちつけ刹那！ あいつらはクラスメートだああ！」

抑えていないと今にも暴走しそうな刹那をなだめているのに必死  
だった。そのうち気まで使いだすかもしれない。

しかし、木乃香達の買い物にしてはやたら趣味が違つような気が  
する。それにダンベルなんてどうするんだらうか。

色々買って、目的を達成したのか、今は人気の少ないところで木  
乃香とネギの二人きりで、ネギは疲れたのか木乃香の膝を枕に寝入  
ってしまったようだ。

「ふう、何事もなく終わりそうですね、ハク」

張りつめていた気を緩め息を吐く刹那。もともとそんな心配はし  
ていなかっただろうが、本当に護衛としてついてきたのかは怪しい  
ところだった。

（ただ単に、木乃香に対して過保護なだけか）

「ああ、ネギもまだまだ子供だからな。刹那が心配するようなら  
とは何も」

「そ、そんなお嬢様！？」

ハクにも刹那にも予想外の出来事が起こった。木乃香が寝ている  
ネギの唇を奪うように接近していくのだ。

「ま、まさか本当にネギと木乃香はそういつ」  
「ハク？」

自分で思っていたよりも随分と衝撃を受けた。

まだ木乃香には他にふさわしい者が現れるとかそんなことを考える。だが、息を呑み、動くことができない。刹那がハクを不安げに見ているが、その視線にも気付くことなく、ハクは木乃香を注視していた。

「やっぱやーめた！　いくら子供でも寝てるよこの唇を奪うのはアカンな」

カラツと笑っている木乃香を見てほつと息をついた。その後、一部始終を同じように見ていたらしいチア部の三人組や、なぜか明日菜や委員長であるあやかまで出てきて、明日菜に誕生日プレゼントを渡している。

「ははっ、なるほどな。　神楽坂の誕生日プレゼントを選びに来ていただけか」  
「随分と安心しているようですね……？」

静かに呟くように刹那は言った。その声は先ほどまでと違って明らかに落ち込んでいた。

「……刹那？」  
「いえ、別に何でもありません……ええ、何でもないです」  
「なら構わないんだが……　っ！？」

ほんの一瞬、背筋に言いよつのない寒気が奔る。

「刹那、ここから離れるぞ」  
「……わかっています」

どうやら今は刹那を気にかけている余裕はなくなっただけらしい。狙いは木乃香ではなく、殺気は明らかにハクと刹那に向いていた。周囲の気配を探り、他に敵らしきものがないことを確認。一般人を巻き込むような真似はしないだろうが、最悪ネギもいる。時間稼ぎくらいはしてくれよう。

二人は身体に気を纏いながら殺気の根源まで駆けた。

木乃香達からは大分離れた広場の一角にそいつは居た。

悠々とベンチに腰掛けてこちらを見るなり笑顔で手を振ってくる。

(嫌な雰囲気だ)

ハクは敵の第一印象から厄介なイメージしか浮かんでこなかった。これまでにない、暴力的な凶暴性ではなく、智謀による悪事得意とするタイプのような。

「こんにちは、神鳴流剣士に今話題の魔法先生のお二人さん」

金髪におとなしめの髪形、細く切れ長な目をした男。黒い袴のようなものを纏って、飄々と声を掛けてきた。体格は痩せ型、武者のように体格に恵まれなかったのだろうか、恐らく魔法使いの類だろう。

殺気はない、敵意もない、あるのは少々の警戒心といったところか。先ほど感じた重圧は本当にこの男から発せられたものなのか、それすら疑ってしまう。

「おやおや、あいさつしたのに返してくれないのかい？ 冷たいねえ」

「誰だ、貴様！ 何が目的だ？」

刹那が怒鳴り声を上げる。相手に敵意はなくとも、刹那は木乃香に降りかかる害であるならば斬って捨てるだろう。今は彼女の愛刀夕凧は所持していないが、懐に小太刀を携帯している。

「はは、友好的ではないと思っていただけどこまでとはね。いやはや、今日はほんの挨拶だけだよ」

「友好的でない？ 初対面の相手に向かって何を言っている」

当然の疑問。刹那が相手の注意を引いている間に、ハクは静かに身体の中の妖気を活性化させていく。

「いやあ、ボク個人じゃなくて組織の話なんだけどねえ。それとお兄さん、物騒なことはやめましょ、今日はほんの挨拶なんだから」

ハクは内心で舌打ちした。気取られたということはそれなりに高い実力を持っているということ。そんなやつが出張ってくるような組織と対立するような厄介事を抱え込んだ覚えはハクにはない。となる。

「麻帆良……関東魔法協会と対立した組織か？」

「ご名答！ これから近々、面白い事をやらかすんでね、その前の偵察ってわけ」

ハクが答えるとさも楽しそうに男は笑った。真意はわからない、むしろどうしてハク達の前に姿を現したのかも。

「そんなに情報をぺらぺらとしゃべっていいのか？」

「これはちよつとしたサービスだよ。もしかしたら君たち二人は仲間になるかもしれないからね？」

「仲間……ね、冗談もそこまでいくと笑えないな」

「本当にそうかな？　ボクと同じく人間からも、化物からも虐げられてきたというのに？」

「おまえは……誰だ？」

その言葉を受けてもハクは平然と聞き流した。もしもこちらの情報を掴んでいるなら致し方ない。だが、わざわざこちらから敵に情報を与えてやるような真似はしない。

だが、一つだけ推測は立つ。この男も何らかの化物の類であるということ。

「それを答えるのは今じゃないし、仲間に引き入れるのも今じゃない。　また近々お目にかかるとするよ、京都でね！」

「待てっ！　『神鳴流奥義・斬岩剣！』」

男の行動に素早く対応したのは刹那。懐の小太刀を抜き放ち、気を練り上げた奥義をぶつける。男がついさきほどまで立っていた地面は決られ、もうもうとした砂煙が巻き起こる。

あとには誰もいない。おそらく転移符か何かを使ったのだろう。

「周囲に気配はない。逃げられたな」

「くっ、何者なんだあいつは！」

「……さて、な」

ハクの頭の中から、男の言葉がこびりついて離れなかった。





## 第二十三話 困惑する想い（後書き）

PV150000、ユニーク150000越え！

いつも『狐に化かされた！』をお読みいただきありがとうございます。す。

これからの展開はオリキャラも交えて、少々違うものにしていきたいと思っております。作者の時間ができ次第の更新ということ而定しませんが、これからもよろしく願います。

## 第二十四話 不確かなモノ

謎の男との邂逅の後、ハクと刹那は木乃香の身の安全を確保しつつ麻帆良学園に戻った。その間お互いに会話はなく、張りつめた緊張感だけが漂ったまま学園長に報告へ向かう。

「……ついに西が動き出した、というわけじゃな」  
「ですが、これは詠春さんの意志ではないのでしょうか？」

学園長が深刻そうに呟くのを聞いて、すぐさまハクは問い返した。あの詠春が何の目的で争いを望むと言うのか。わかっただけでも、確かめたかった。

刹那はどうやらしゃべる気はないらしく、真剣な表情のまま黙りこくっていた。

「無論じゃ。これは西洋魔術師を良しとしない日本古来の魔法使による反抗活動じゃろう。もっとも、嫌がらせはずっと続いてきたが、どうやらその問題も佳境に迫って来たようじゃな」

「……それはどういう意味ですか？ 学園長」  
「おそらく、向こうもこちらに対抗し、圧倒しうるだけの戦力が整ったか、はたまた手に入れる手立てができたか。今までの拮抗状態が崩れるということじゃ」

拮抗状態が崩れる。それがどういう意味か瞬時に理解し、事の重大さが伝わってくる。

「まさか魔法使い同士の戦争が起きる、と？」  
「可能性もある、ということじゃ。しかし、それには先だって手を打った」

特徴的な笑いをあげながら、学園長は笑顔を浮かべる。その笑顔の真意はわからないが、それほどまでに安心できる策なのだろうか。

「三日後の修学旅行先は京都じゃったな？ そのときにネギ君に親書を持って行ってもらうことになっているのじゃ」

「そんな！ 敵かもしれない人物との接触があったというのに、三日後などと悠長なことを言っている暇があるわけがない！ 和平の証として親書を届けるのならば、俺がすぐにも本山に行ってきた！」

ハクはあまりに余裕を持った学園長に怒りを覚える。この老人は先が見えていないのか。戦争が起こるかもしれないと言うのに、なぜあの少年に親書を運ばせるのか、それも問題の渦中に生徒たちを行かせるなどと言語道断。場所を変更すべきか、問題が解決するまで延期にするべきだ。

「君が行ってどうなるというんじゃ？ 戸籍も偽の物、ましてや西洋魔術師でもない。そんな君がどうして東の親善大使として役割を果たすことができる？」

「それは……たしかにそうかもしれないですが。だったら、高畑先生やガンドルフィーニ先生だっている。そちらの方々に直に行ってもらったほうがいいに決まっている！」

自身の潔白や、所属が曖昧なのは百も承知だった。ならば、他に信頼が厚く、ある程度の実力を有した者が行くのが筋というものではないだろうか。それを十歳の少年が訪れると言つことならば、逆に反乱分子を刺激しかねない。そう考えた。だが、学園長の答えはまたもハクの予想を裏切る。

「それも意味がないのじゃよ。それに高畑君は優秀だが決して偉マ大な魔法使いというわけではない。ガンドルフィーニ先生もそうじゃ。そんな半端者を派遣するわけにもいかんじゃろつて。無論、ワシが出向くのも無しじゃ。そこまで下手に出た交渉なぞ意味がないからのう。ここまで言つてわからぬ君じゃあるまい。」

「……英雄の息子という肩書を利用することですか？」

「ご名答じゃ。例えどんなにネギ君が幼いとしても、その肩書は大きい。絶大といつてもいいじゃろつ。そうすることで日本以外の魔法組織にも噂が回り、西はこれ以上の事をしようとするれば必ず目に付くようになる。要は、ワシらだけでなく、世界を巻き込んで監視しようというのじゃ」

「そこにネギの動向が監視されるかもしれないということは考慮しないのですか？」

「彼はもともとそういう運命じゃ。すでに探られていてもおかしくはない、もっとも危害を加えようとするのなら、ワシら保護者達も黙つてはいないからのう」

つまり、ネギはどれだけ窮地に立たされても麻帆帆良学園というバックが支える限りは、身の安全が保障されていて、西にだけ決定的な圧力を掛けられる、ということか。

「納得してもらえたかのう？」

「……」

問いかけには応じない。沈黙が場を支配するが、今まで黙っていただけの刹那が口を開いた。

「無論、警備は万全の状態ですよ？　いくらなんでも、少数の魔法先生と、わたしのような生徒のみだけでは全

員の安全は確保しかねます」

「ふおおお、なに強力な助っ人を用意してあるから心配しなくとも大丈夫じゃ」

「ふん、まるで自分が用意したかのような言い草だな、じじい」

学園長が言い終わるか言い終わらないかのうちにエヴァンジェリンがノックもなしに学園長室に入ってくる。そこでニヤけながら入ってこなければ、まあまあ様になったものを。

「なっ、真祖の吸血鬼が、どうして？ あなたは呪いで学園から出られないはずでは」

当然の疑問が刹那からエヴァンジェリンに向けられる。ハクは内心焦りを感じた。

（まさか、エヴァンジェリンのやつ。俺の助力を話したのか？）  
視線をエヴァンジェリンに向けるが、不敵な笑みで返される。

「ワタシがただただ十五年の月日を遊んで過ごして来たとも思っていたのか？ 呪いの解呪とまではいかなくとも、弱めることくらいやってやれないことではない。それ相応の対価も必要となったかな」

チラッとハクの方を盗み見る。見るな、あの老人は意外と鋭いんだぞ。ハクの心の声が聞こえたかはわからないが、学園長は特に疑いのそぶりもなく、話を続けた。

「ふおおお、あの強引な呪いをどうやって弱めたのか……非常に気になるところじゃが、彼女が臨時の助っ人じゃ。修学旅行を学業の一環として、学園長が許可する」

「これは当然の権利だ、じじい。まあ旅行の片手間に雑魚を蹴散らせばいいのだろう？ 簡単な仕事だ」

「馬鹿な……この人を信用すると言つのですか学園長。一度は生徒を襲つて問題になつたはずですよ！」

予定調和のような会話を繰り返す学園長とエヴァンジェリンに難色を示したのは刹那。非難がましい目でハクを見ているのは、おそらくそれに関わっていたことを知りながら何の反論もしないからだろう。

しかし事情が事情だけにハクも特に異論はない。エヴァンジェリンとハクの中での件についてはもうケリがついているのだから。

「……こいつは、俺が監視する。何か怪しい素振りがあったらすぐに学園長が許可を取り下げればいい。そうすればこいつは呪いの副作用で動けなくなるだろう」

「しかし……」

もつともらしく言っているが、これは気休めでしかない。そもそも『登校地獄』にそこまでの拘束力があるわけではないだろう。それもこの間までサウザンドマスターによる強引な呪いという形だったからだ。一度外に出て魔力を取り戻せば、あとはエヴァンジェリンの知識と魔力でどうとでもなってしまうはずだ。

「そうだな。一応そういうことにおけ、じじい」

「ふむ……、まあエヴァの呪いが弱体化した件は余計な混乱を招かぬように黙っておるのじゃ、よいかね？ ハク君、せっちゃん」

「俺は構わない」

「……わかりました」

いまだに納得できていない様子の刹那だが、学園長からそう言わ

れては従順な刹那は黙るしかない。ハクはエヴァンジェリンが来ると言うことで大分安心できたのだが、それは言わない方がいいだろう。

「ククク、久しぶりの外だ。 寺社仏閣巡りは嫌いではないぞ、当日はどこへ行くこうか」

「緊張感ないのな、おまえ」

エヴァンジェリンだけは別の事に想いを馳せていたようだが、致し方ないだろう。

「ネギ先生、ちょっといいか？」

「あ、霧島先生、なんででしょうか？」

ハクは翌日、教室にいるネギに会いに行った。もちろん目的は京都で起こるであろう事件についてである。周りに生徒がいるのであまり大っぴらな会話はできないため、廊下の隅の方に連れて行く。

「……親書の件だが、本当に大丈夫なのか？」

その言葉にネギは顔をしかめた。おそらく自身が信頼されていないであろうと思ったのか、不満そうである。

「僕だつてやる時はやりますよ。 それと、前のようにネギと呼んでくれて結構ですよ。 そのほうが僕としても気安いですから」



「まあ、ああ、わかった。この件は俺も担当することになった。  
届けるのはネギに、俺はそのフォローだ」

簡潔に用件を伝える。ハクが親書を渡したのでは意味はない。それくらいハクとて承知の上だが、協力関係を伝えることで意思の疎通を明確にしておこうと言つものである。

「大丈夫です、学園長からそのように聞いていますよ」  
「ぬかりなさすぎて腹が立つな……」

一瞬だけあの長い頭を想像してこめかみを指で押さえる。ハクは頭痛を覚えた。

「それと、その……今までバタバタして言えなかったのですが、エヴァンジェリンさんのときは本当にありがとうございました、茶々丸さんのときも」

言いにくそうに、俯き加減でネギは言う。ハクはすっかりとその件について頭から抜け落ちていたことに今更ながら気付く。

「いや、あれは俺がやりたくてやったことだ。ネギが気にすることじゃない……。神楽坂はあれからどうしたんだ？」

同時に懸念していたことも思い出す。あのとき覚悟を決めたはずの明日菜のことはネギに任せっぱなしだったが。

「いまのところは何も……。やはり、問題になりますよね？」

窺つような視線。ニュアンスからして自分の立場を危惧していると言つよりは、明日菜への危険を心配している感じ。

「……決めるのはおまえと、神楽坂だ。不安ならきちんと守ればいい、その為の魔法だろ？」

くしゃくしゃと乱暴に頭を撫でてやる。弟がいたらこんな感じなんだろうか。兄弟というものがいないハクにはわからない。

「はい！ 僕、頑張ります！」

「ああ、しっかりしてくれよ？」

予鈴と同時にネギは教室に戻り授業を始めた。同時に、自分を待つ気配に振り返る。

「それで、お前は俺になんか用なのか？」

「別に用と言うほどのことはないが、暇だから少々付き合ってもらおうか？」

なぜかたったいま授業が始まったはずなのに、腕を組みハクの前に現れた生徒。もつとも、仮にも教師に向かってこんなことをいう生徒はごく一握りだろうが。

「俺はお前の暇をつぶせるほど面白い人間ではない、よって断る」

「つれないな、ワタシの唇を奪っておいて」

「ば、ばかか！ 奪われたのは俺だろうがっ」

思わず声をあげてしまい、しまったと思ったが若干遅かった。

現在は授業中、静かな廊下。そんなところで声を出せばどうなるかなど、火を見るより明らか。

教室から聞き耳をたてている気配がする。というかスライドドアに耳を張り付けているのか、ドアがとたんにぎしぎしと軋み始めた。

このときばかりは本当にハクは呆れた。

「わかった、どこへなりとも行くから、早く行くぞ！」

「最初からそう言えばいいのだ」

教室の中からネギが生徒をたしなめる声が聞こえてくる。ドアは自重に耐えきれそうにない。

急いでエヴァンジェリンを両腕で抱え、その場から離脱する。

自然、お姫様だっこのような形になる。

次に動揺したのはエヴァンジェリンだ。

「なっ！ 貴様、軽々しくワタシに触るな！」

「んな悠長なこと言ってる場合じゃないんだ！ 屋上で話すぞ！」

ハクが廊下を駆け抜け、階段を昇り始めると同時。何かが倒壊する音と、生活指導員の新田先生の怒鳴り声が聞こえてきた。

「それで？ 何の用だったんだよ、わざわざあんな嫌がらせまでしやがって」

「大した用……というほどでもないんだがな」

屋上に太陽の光が燦々と降り注ぐなか、エヴァンジェリンは風に髪をなびかせている。

その風景は実に絵になっている、と思うが決して口に出すようなことはしなかった。

「この間の、仮契約の件だが、そのときにお前に有益なモノが出たかどうか気になってな」

ひどく怯えたような、不安げな声で聞いてくる。それほど重要なことなのだろうか。西洋魔法に疎いハクにはわからないことではあるのだが。

「有益なモノ？ ああ、アーティファクトってやつか。別に何も出なかっただろう？ それともあのカードのことか？」

「なっ、まだ出してないと言うことか！？ …… はああ、無駄に心配したこちらがアホみたいではないか……」

突然驚いたと思ったら今度は深いため息を吐く。今日のエヴァンジェリンはいつにもまして表情がころころと変わる気がする。

「なんだよ急に、大体出すと言われても何の説明も受けていないんだが？」

「うっ、す、すまん。すっかり失念していたようだ」

「は？ 今なんて言った？」

慌てたように、顔を赤くしたエヴァンジェリンから出た言葉に思わず耳を疑う。おかしい、聴力には自信があるどころか人の数倍はあるはずなのにうまく声を拾えなかった。気のせいだろうか、そんな感情すらハクは抱いてしまう。

「う、うるさい！ ワタシにだってミスというものはある！ 今から説明するから耳の穴かつぼじってよく聞いとけ！」

「……いちいち表現が古いうえに態度がでかいんだよなあ」

「いいか、仮契約したときに出たカードは契約の証。これの機能は前に言ったな？」

「ああ。 てか突っ込まないんだな」

「そして、説明していなかったがこのカードにはもう一つの機能、アーティファクトという魔法道具を呼び出すことができる。これは契約した者同士に発生する付随的なおまけだが、これ目当てに契約するものも多い。今の魔法界ではその……少し変わった風習で契約を結ぶものもいるがな」

エヴァンジェリンは目を泳がせながら言葉を濁した。無論、結婚を前提とした契約をする風習があるなどと、口が裂けてもエヴァンジェリンの口から説明はしたくないという気持ちがあった。決して自分がその風習に則ったわけではないというつもりだったからだ。

「ほお、それでどうやって呼びだすんだ？ やはり詠唱が必要なのか？」

「そんなかったるいものなぞ必要ない。ただ来たれ！<sup>アテアット</sup>と言えはい。しまうときは去れ！<sup>アヘアット</sup>」

「そんな簡単なのか……もっと魔法は小難しいものだと思っていたんだが」

「魔法にも色々あるということをこれからは常に念頭においておくんだな。そうすることで柔軟な対応が可能だ。もっとも、お前の力すら凌駕するような道具が現れる可能性は高いぞ？ 何しろワタシがお前の主となったのだからな」

どうだとも言わんばかりにエヴァンジェリンが胸を張っている。

「……アーティファクト、ね」

「どうした？ さっさと出してみる」

先ほどの自信満々な表情から一転し、怪訝そうな顔を浮かべるエヴァンジェリン。

ハクとてそれを使ってみたいという気持ちがないわけではないのだが、どうにも腑に落ちない。

「いや、このカードは俺には必要ない」

「なぜだ！？　アーティファクトがあれば更に強さの幅が広がるかもしれないのだぞ？」

驚きと戸惑いを含んだ声でエヴァンジェリンはハクに詰め寄るが、ハクは頑として揺らがない。

「この力は仮の力だ。　自分本来のモノじゃない。　いつか誰かがエヴァンジェリンと本契約を交わしたら、なくなってしまうだろう？　そのとき、俺がこのアーティファクトに頼りきりになったら、その力を含めてそれが霧島白だと認識されていたらどうする？」

「そんな、そんな不確かなことで力を捨てるのか？」

確かにそうだ。　今このアーティファクトがどんなものかわからない以上、それにハクが依存してしまうかどうかとも、それほどの名声を上げるほどの力が手に入るともわからない。　失ってしまうというのが大前提の話。

「そうだ。　俺は自分だけの力でやっていく。　仮契約はエヴァンジェリンへ協力するための不可抗力だったんだ。　何もその後も続けて行くわけにはいかない。　エヴァンジェリンだって、ああするしかなかったんだ。　だったら問題ないだろう？」

平然と言つてのけるハク。　睨みつけるような視線を向けるエヴァンジェリンを見つめ返している。

力が手に入らないと言うことは惜しい。　だが、それ以上に自身を形成している師匠の技が、そんな道具だけの力で覆されるはずがな

いという自信なのかもしれない。

わからない。本当の真意はハクにもわかっていない。ただ、これを使うわけにはいかないという、どうにも揺るぎそうにない気持ちだけがあつた。

「……勝手にしろ。それはオリジナルの複製だ、記念にとっておけ」

俯いたままのエヴァンジェリンはそのまま踵を返して屋上から出て行くとする。ハクは手元にあるカードを見て、必要ないと判断したのだが。

「いや、別にこれはお前にかえ」

「うるさい！ それから、エヴァンジェリンなどと他人行儀で呼ぶ必要はない、愛称のエヴァでいい。……ワタシは別に、仮契約したことを後悔などしていないし、問題だとも思っていないんだからな！」

早口でまくしたてながら、乱暴に扉を閉めてエヴァはいなくなる。

「俺には……自分の力だけで十分だ」

いなくなったものへか、それとも自身へ向けたものかはわからない。

決意とも、強がりともとれる言葉を呟いた





## 第二十四話 不確かなモノ（後書き）

次回から修学旅行編へ！

原作とは違ったモノが書けるといいのですが……（汗）

この作品を評価してくださった方、お気に入り登録してくださった方、本当にありがとうございます。

これを作者の糧として、次回も頑張ります！

## 第二十五話 刹那、揺れる

あつという間に二日という時は過ぎた。

最終点検とばかりに体調を万全に整えながら、型の確認などを行って向かえた当日である。

敵がどんな妨害を働くのか予想は難しいが、生徒が巻き込まれる事態も含めハクは気が重かった。

「おはようございます、霧島先生」

「……おはよう、ネギ。どうやら元気そうだな」

「へ？ あつ、はい！ 日本の古都である京都と奈良なんてとてもすごそうじゃないですか！」

顔を輝かせて言うネギ。早朝は先生だけ早く集合するのだが、すでに何人かの生徒も集合場所である駅に集まりつつある。ネギに付き合わされたのか、そばで明日菜と木乃香が苦笑している。

（まあ、ネギの年齢を考えれば楽しみではあるよな）

そう考えて思わず笑みがこぼれる。

「ああ、楽しむのは結構だが仕事の方もきちんと頼むぞ、ネギ先生」  
「も、もちろんですよ！」

そういつてハツとした表情を浮かべたネギを見る。

ハクが来たこの一月の間にもネギは成長できたのだろうか。少なくとも、ハクの目に映るネギはまだ子供だ。だが、自身の責務を果たそうと必死に頑張る姿があったのを知っている。

だから、せめて一日くらいはゆっくりとネギに観光でもさせて、息抜きをさせてやりたかった。もっとも、それこそ学園長に言ったように危機が去ってから、つまり親書を無事に渡せてからになるわ

けだが。

「そうか？ まあ、俺がついてる。あまり気負わなくていいからな」

「あはは、頼りにしていますね！」

ネギが笑顔でそう答えるのと同じ時。

「おいおい、ワタシを忘れてもらっては困るぞ」

「おはようございます、ネギ先生、霧島先生」

「おまえはどうしてこう毎度毎度……」

どうしてこうもタイミングを計ったかのように現れるのだろうか。長く柔らかな金髪を携えたエヴァが、意地の悪そうな顔で声を掛けてきた。そのそばにはいつも通り、従者の茶々丸が丁寧なあいさつをしてくる。

「ど、どどど、どうしてエヴァンジェリンさんが！」

「落ちつけ、ネギ。そりゃ生徒なんだから当たり前だろう？ 大丈夫、今は心強い味方だ」

ネギに後半は囁くように告げる。ネギと同様に、明日菜の方も二人を見て驚いたらしい。そこに恐怖や憎しみが無いのは、すでに打ち解けたからなのだろう。そこにあるのは純粹な驚きだけだ。

「そうだぞ、ぼーや。旅行を邪魔するやつは誰であろうと容赦するつもりはない、大船に乗ったつもりでいるんだな」

「泥船じゃなけりゃいいんだがな」

「いちいち水を差すんじゃない！」

ハクの突っ込みに躍起になってぽかぽかと殴りかかってくるエヴァを見て、辺りに緊張感がなくなった。

ハクに向けられる冷たい視線があること以外は、だが。

生徒の点呼を終え、全員が乗り込んでいく。

その際、エヴァがハクに囁く。

「……おい、あのときの武器は持ってきたのか？」

「ん？ ああ、俺の“銀髪”のことか？」

そうだ、と短く告げるエヴァに、そつと懐から銀色の髪束を見せやすくしてしまう。

エヴァとの戦いの際に使用したものだ。これは、万が一素手ではどうしようもない相手に遭遇する事態を見越しての武器。

また、絶対の防御壁としての役割を果たす命綱としての防具。

それはハク自身の身体の一部。そうすることで、まったく別物である物体に妖気を流すよりも遥かに効率が良く、またその妖気独特の特徴から様々な用途がある。以前の鋼系のような使い方や、刀としての使い方、色々だ。自身の身体を変化させて、擬態するのと同様にこの銀髪の形は変幻自在だ。といっても長さや強固さは妖気に比例するので無限と言うわけではない。

基本的にハクは素手が主流であるから、防御と攻撃を兼ねた必殺としての鋼系の使用が多い。それ以外はどうしても門外漢で、きちつとした型を習得していない為に甘いのだ。もっとも、奇襲という面では使用機会も多々あるのだが。

「“銀髪”って、やはりあれはお前の髪の毛か」

「ああ、あれがしっくりくるんな。それがどうかしたか？」

「いや、愚問だったな。忘れる」

どこかさびしげな顔を浮かべるエヴァを不審に思う。

(もしかして、このまえのアーティファクトのことと何か関係あるのか?)

一瞬、二日ほど前のことを思い出す。だが、その思考は後ろから掛けられた声に遮られた。

「どうしてあなたはそんなに平静でいられるのですか?」

「おはよう刹那、考えすぎだ、何も問題ないぞ?」

「……ならば良いのですがね」

おそらくエヴァのことを言っているのだろう。エヴァは刹那の事を一瞥すると興味を失ったのか視線を逸らす。

刹那は、先ほどからずっとハクに殺気とも敵意ともつかない視線を送ってきていた。不満たらたららしい。どうにもこの間の一件謎の男の襲撃からずっとぴりぴりしている。やはり敵が関西呪術協会の一派ということもあって怒りを感じているのだろうか。

そう考えているうちに、エヴァと茶々丸、刹那、ザジの班が新幹線に入る順番が回ってくる。

だが、開口一番エヴァがやってくれた。いや、学園長が、というべきか。

「ネギ先生、ワタシは身体が病弱だ。よって霧島先生に付き添いを頼んである。班員とは共に回ることはできないだろう」

「ちょっと待て、そんなこと聞いていないぞ?」

「おや、聞いていなかったのか? あのじじ……: 学園長には確かにそう申告しておいたが?」

自然とこめかみを押さえるハク。麻帆良に来てから心配ごとをかかえることが多すぎる。

ハクはすぐに機転を利かせることにする。

「……そういえばそうだったな。ネギ先生、桜咲とザジは別の班に入れてもらえないか」

「えっ、ああ、わかりました。では桜咲さんは明日菜さんの班に、ザジさんは委員長さんの班で構いませんか？」

後ろでまだ控えていた明日菜とあやかがそれを承諾した。そこで刹那の思わぬ班入りに木乃香が嬉しそうに顔をほころばせる。

「あ、せっちゃん……。一緒に班やなあ」

一瞬だけ木乃香に目を合わせ、会釈だけを返す刹那。するとすぐにみんながいる席とは反対側に歩いていってしまう。

その刹那の態度に違和感を覚えずにはいられない。

昔のように仲が良い二人を覚えているだけに、なんとかならないのか思考してみるが良い手は浮かんでこない。

ハクには刹那のしようとしていること 離れた所から見守り、魔法という裏の世界に関わらせないようにする配慮がわかるからだ。遠くで見守るのは自分の役目なのではないか、それが当然のように思われる。

また昔のような自然な関係に戻って欲しいと思った。

麻帆良に来てからほとんど二人が話しているのを見たことがない。それを今の態度を見て確信し、しかしどうすることもできないことがもどかしく感じる。

「やっぱり、嫌われてるのかな……」

落ち込んだ木乃香の声を聞き、ハクは静かに呟く。

「そんなことはない。いつかちゃんと仲直りできるさ」  
「……そうならええな。ありがとう、ハク先生」

泣きそうな顔で笑いかけられる。少しでも励ますことができたの  
だろうか。そのまま言葉を探し、しばらく木乃香の顔をじっと見つ  
めてしまっていた。

「えっ？ ハクって霧島先生の名前なんですか？」

「あ、ああ。そういえば名乗ってなかったな」

「なんでそれを木乃香が知ってるわけ？もしかして二人ってその  
……わけあり？」

ネギの疑問にのっかるように明日菜も追及してくる。もともと、  
木乃香に知られてはいけないと自分の中で決めていたが、すでにば  
れているので敢えて隠す必要は感じていなかった。

しかしなぜだか背中から嫌な汗が出てくる。ああ、エヴァがもの  
すごい勢いで睨みつけているからだろうか。そういえばエヴァには  
なぜ名前を隠すのかなどの説明は一切していない。ここで名前を公  
表したのは失策だった。

ハクはこのままではまずいと判断。

「いや、別にそういうわけじゃなくてだな……」

「ふん、近衛相手に鼻の下を伸ばしてお見合いしていただけ……と  
いうことだよな？」

「お前は何をっ！そもそもあれはだな……！」

「うそ！ そうなの木乃香!？」

「え、あゝそうだよ。途中で中止になったけど……」

驚愕する明日菜に歯切れ悪く答える木乃香。エヴァに至ってはニ  
ヤニヤとタチの悪い笑顔を浮かべている。それを聞いた明日菜がハ

クに掴みかかってきた。

「どういうことよ霧島先生!?!」

「だから、学園長がだな、く、苦しいぞ神楽坂!」

とても女子中学生とは思えないような馬鹿力で絞めあげられ呼吸が苦しくなっていく。無理やりほどここともできるが、ハクも慌てていてそこまで頭が回らない。

「へえ、木乃香さんとお見合いを、お似合いですねお二人とも! あとせっかくですので、これからは霧島先生を名前で呼んでも大丈夫ですか?」

「……あんたってほんとマイペースね」

「ごほ、ああ、構わない」

青い顔をしながらごほごほと咳き込むハク。拍子抜けしたのかなんとか明日菜から解放されて、一息つきながらネギに返答する。

女子中学生に窒息死させられそうになるという未曾有の危機を救った小さな英雄に感謝した。

やっと落ちついて座席に座る頃には、3-Aの連中は好き勝手にカードゲームに興じていたり、お菓子を食べながら雑談したりとやりたい放題だった。

窓際に茶々丸、エヴァ、ハクという順で座り、その座席が一番後ろ。大まかに生徒たちの行動を見るには最適の位置だった。



「まったく、余計な事をしてくれたなエヴァンジェリン」

「遠慮するな、本当のことを言ったまでだ」

「鼻の下伸ばした覚えはないんだが……」

そう言っても取り合ってもらえそうにない。ハクは小さくため息をついた。

「それとワタシのことはエヴァでいいと言っただろう。ながったるいな」

「こう言っていますが、マスターは照れているだけですのお気にふあふあふあふ」

「ふふふ、どうやらこの馬鹿ロボに誰がマスターか再度教育する必要があるらしいな」

むによーとエヴァが茶々丸の口を引きのばしている。ロボといえど、あそこまでいけばほとんど人間のようなものじゃないだろうか。

「それよりも、おまえの名前を教えても良かったのか？」

「その件は……大丈夫だ。もう心配いらない」

若干の後ろめたさがあったが、正直に説明するわけにもいかずはぐらかす形になった。

「話したくないのなら無理には聞かん」

「助かるよ、エヴァ」

察したのか、それ以上つっこんでくることはなかった。その気づかいはハクにとってはありがたい。

「ふんっ！ おまえがそんなに素直だと不気味だ！」

「マスターは感謝されることに慣れていないので」

「茶々丸？ おい、故障か？ それともわざとなのか？」

今度は頬をひっぱり始めたエヴァ。照れ隠しなのだろうか、なんと微笑ましい。

「二人とも、敵がどう出るかわからないんだ、京都に着いたらよろしく頼むぞ？」

「はっ、このワタシが遅れをとるとでも言うのか？」

茶々丸の顔で遊びながらエヴァが答える。茶々丸はされるがままにあーとかうーとか唸っている。なんだあれ、ちょっと可愛いぞ。

「その慢心がこのあいだ敗北を招いたこと、もう忘れたのかエヴァ」  
「うぐ、あれは予定よりも結界の復旧が早かったんだ！」

「ふう、まあそういうことにしておくか。警備に関しては期待しているからな」

「ば、ワタシは自分の為にしか動かんからな！ 肝に銘じておけ！」

言葉に詰まったり、急に顔を赤くして怒ったり忙しい奴だ。彼女としても、せつかく外に出られたんだ。警備などにかまけないで觀光したいのだろう。だが、目的が達成され安全を確保するまではそういうわけにもいかない。

（そつえば刹那はどこに座ったのだろうか？）

ハクは一通り座席を見渡してみるが、刹那の姿はない。なるべく彼女には木乃香の近くにおいて護衛していて欲しいという気持ちと、傍にいて昔のような仲に戻ってくれたらという気持ちがあった。

「少し刹那を探しに」  
「むっ、待てわずかに魔力を感じるぞ」

その言葉を聞いた瞬間、すぐさま身体を戦闘態勢に持っていく。席から立ち上がり妖気を満たす。まさか車内で仕掛けてくるとは考えていなかった、なんて言い訳が通じるはずがない。

ついで次々にあがる悲鳴。ハクはその光景に愕然とした。

「か、カエル？」

車内を埋め尽くさんとばかりにそこから中からカエルが湧いてでてる。それを見てエヴァがあからさまにため息をついた。

「はああ、こんなことの警備だったらワタシらが出張る必要もないだろう。オイ、あとはぼーやにでも任せておけ」

見ればネギが必死にカエルを捕まえ、生徒たちの混乱を鎮めようとしていた。エヴァは早々に協力することを放棄している。

(この先もこういつた嫌がらせだけならば楽なのだが)

ハクはむしろこの出来事をきっかけに警戒心を強くする。これは裏を返せばいつでも自分たちを狙えると言う向こうからの宣言なのだろうか。

「親書がつっ！」

叫びがあがると同時、ネギの手元から親書が奪い取られていく。燕の姿をした式神。

すれ違いざまに妖気のコモった一撃を与え、力を失った式神は紙切れに還る。

「す、すいません、あれほど言われていたにもう盗られそうになるなんて……」

「気にするな、それより他に変わったことはないか？」

ネギは今ので安心したようだが、ハクはそうは思わない。まさか敵が今のだけで親書を奪えると思うのなら甘い。そんなことで容易に安心できるわけなどない。

「それは、どういうことですか？」

「……少しは頭を働かせようネギ。今ので敵が本当に親書を奪えると思っているのか、そんなわけではない。派手に騒ぎを起こしているこちらは陽動の可能性があるってことだ」

「そういえば、さっきから刹那さんが見当たらないような　あつ、ハクさん！」

ネギがそう言うや否や、ハクはすぐに駆けだした。

「まったく……ハクは何を考えているんでしょうか」

桜咲刹那ははっきり言ってイライラしていた。この学園に彼が来た当初は、刹那が絵に描いたような強さで、そして頼りになるはずだったというのに。今の彼はなぜだかわからないが、何かが気に入らない。

一人で座席に座りながら窓の外を眺める。流れて行く景色がぷつりと途切れ、自分の顔が映し出される。トンネルに入ったようだ。

「それもこれもあの闇の福音の一件からだろうか？」

むすつとした表情の自身の顔を見つめながら呟く。木乃香を守るために戦うと決めてくれたと思っていたのだが、真実はネギの決闘に手を貸したかったことらしい。もつとも、彼も本気で木乃香がさらわれて焦っていたとのことだが、実際、さらわれたと思っていた木乃香は部屋で眠らされていたのだから夕チが悪い。頭に血が上って気付かない自分にも非があった。だが、ハクの行動は木乃香だけを守るというよりは、まるで周りを助けようとするかのようだ。

「優しいのかもしれませんが、誰にでも優しくすればいいというわけでは……」

それはあのエヴァンジェリンを助けたことにも該当する。今現在、あの真祖の吸血鬼はハクに好感を持っているようだ。学園長室で警備に関しても彼は何も言うことなくむしろ肯定してさえいた。

「彼の背中を守るのは、わたしでは役不足なのだろうか……」

そこまで口にして黙る。彼はすべてを救うつもりなのだろうか。だから自分や木乃香すらも守る対象として戦っているのだろうか。

それは決して幼いころに交わした約束とは関係なく、頭を振ってその思考を追い払おうとする。だが、最近のことが頭をよぎる。

「……でも、あのときのハクの表情は」

護衛の為といいながら彼を連れまわし、その終わりに彼が見せたあのときの表情を思い出す。聞くところによれば彼は木乃香とお見

合いをしていたらしい。

「ならばそういう感情を持つのも……だけど」

遠い昔の誓いを思い起こす。お互いの未熟のせいで主を危機に晒してしまったこと。それを悔やみ、ともに強くなると約束した時のことを。

「どうして、こんなにわたしは……っ！」

自問自答しても答えが出ない袋小路。

この悩みを解決する術を刹那は知らない。

ふつとわずかな魔力を感じ、思考を切り替える。素早く目を走らせその根源を探った。それは3-Aがいる車両よりも前方。だが、不自然なのは刹那に向かって誘うように流れてくることだ。  
(ハクに知らせようか……いや)

「わたしはだれにも頼らない、独りでお嬢様を守って見せる」

できる限り自然な歩みでその場を離れた。

心臓の鼓動が聞こえてくる。大丈夫、平常心は保っている。

三両ほど前に移動した自由席の車両。

そこにあの男が立っていた。薄い笑顔を浮かべ、軽くこちらに手を振っている。

「こんにちは、また会ったね」

「わざわざ人払いの札を張って、何の用だ？」

車両の中にいるのは刹那と、あの日に自分たちと敵対を宣言した男が立っている。その距離は十メートルほど。踏み込んで断ち切るにはややリーチが足りないかもしれない。夕凧は持つてきているが、目の前の相手が発する謎の雰囲気、不用意に斬り込むことをためらわされる。

「君を助けに、だよ。君はあんなところにおいていいような存在じゃないからね」

「どつという意味だ」

気味が悪い。刹那は正直にそう思った。

感情を感じさせない能面のような顔から発せられる声に、ただ嫌悪感しか生まれてこない。

だがそれでも今は情報が欲しい。こんな相手など独りでどうとでもして見せると強く思うことで嫌悪感から意識を引き離す。今の刹那は目先のことにとらわれて、冷静になりきれなかった。

「そのままの意味さ、君は人間じゃないんだから、ボクらと一緒に来るべきだ」

漆黒の瞳、暗くて深い男の瞳に吸い寄せられる。

あのとさのような言葉。まるで自分の存在が何であるか知っているとでもいうような口調。

声を聞くだけで怖気が奔る。

目を見るだけで身体が震える。

今日の自分はどうかしている。

未知の相手に恐れを抱くなど。

しかし逆に、その言葉を聞いて、自分が何を思い悩んでいたのかまったくもって馬鹿らしくなってくる。

(そうだ、わたしは化物だ。何を思おうと、何をしようとなわたしには手に入れられない、得ることができないものだというのに) いつの間にか、叶うことのない夢を見ていたことを自覚する。

「貴様の戯言など関係ない この身はとうにお嬢様の為に捧げた剣だ」

そうだ、自分は剣。  
それ以上でも以下でもない。  
ただ守るための存在。

ほんとうに？

「へえ、立派だねえ。 だけどそれって本心？ ボクには虚勢にか映らないよ？」  
「虚勢、だと？」

一瞬の動揺を見透かしたように、くすつと小さく笑う男。  
小さな、ほんの小さな波紋が刹那の心の中に広がる。

「そうだ。 手に入らないものを諦めたフリをして、それでも手を伸ばしてしまう。 君はそのお嬢様が邪魔なんだろう？」

「……そんなはずがない、わたしにとってお嬢様は大切な存在だ！  
今更何も迷うはずがない。 いや迷う必要がない。 これは刹那のなにかにある絶対の定義。 侵されることのない聖域のような思考。 だから、刹那は揺るがないはずだった。」

「何も妬むことがないと？ 何も得られないと、奪われてしまうとわかっていても？ 本当は見返りを求めているはずだ、自分の功績



に見合っただけの幸せ……それなのに君は何も求めていないというの？」

「違う、わたしは……そんな考えで守っているわけじゃっ」

そうだ、違う。何かを与えられることがないのは当たり前だ。これは自分の定めたルール。生きる理由なのだ。それが揺らぐことなど、それを妬むことなどあつてはならない。

男の言葉に惑わされてはいけない。そう思う傍らで、男の言葉は尚も刹那の心の隙を突く。

「悩んでいる？ はは、ほら、ほんとに羨ましい。何もかも持っている彼女が妬ましいんだよ、君は」

「違う、そんなことはないっ」

光に生きて、学友たちと楽しそうに過ごす木乃香の姿が浮かぶ。ついで自身の血反吐が出るような修業風景が浮かび、最後にハクと楽しそうに過ごす木乃香の姿が見える。

そして理不尽に何もかも失っていく自分の姿を想像する。

刹那は呼吸を乱し、目の前で視界が揺れるのをこらえる。

身体が拒否反応を起こし始める。まるで集中していることができない。

がくりと膝をつき、頭を抱えてイメージを払いのけようと頭を振る。

できない、何も変わらない、脳裏をよぎる映像に絶望していく。

「違う、違う、違うっ！」

「違わないさ。……だけど安心して、ボク達なら君に与えてあげることができる、君を救ってあげられる」

「うるさいっ、黙れ……」

「さあ、手を伸ばして、仲間になると誓っただけさ」

生理的に受け付けられない、そう思っていたはずの音が、なぜだか今は受け入れられる気がしてしまう。

妙に甘ったるい声を聞きながら、苦しみ、叫びを上げる刹那にはそれが救いに思えてくる。細く、とても男のものとは思えない手を取ろうと、手を伸ばしかけ

「刹那っ！ てめえ、齒ア食いしばれ！」

ドアを蹴破り流れ込む銀の閃光。

ガラスが割れるような音共に、車両に張られていた結界が崩壊した。

薄い笑みを張り付けた男の顔に、ハクの拳が突き刺さる。

だが、男は吹き飛ばされることもなく、あざ笑いながら陽炎のように霧散し消えた。

『急ぐことはない　ゆっくり考えておいてください』

「刹那、しつかりしろ！」

それは刹那の頭にだけ響き、そして気を失った。



## 第二十五話 刹那、揺れる（後書き）

オリキャラにより原作とは少しずつ道が逸れていきます  
原作とは違った面白いものにできればいいのですが（汗

最近、投稿する期間が空きつつあって申し訳ないです。

さらに遅くなる可能性もありますが、一週間に一本は最低でも更新  
していくつもりです。

それと、感想をいただけると作者の活力につながります！  
読んでくださってありがとうございます

## 第二十六話 迷ふもの

「……命に別状はない。これはどうやら厄介なことになったようだな」

刹那をすぐに抱きかかえて運び、エヴァに診てもらった結果である。現在は自分たちの座席近くに刹那を横たえていた。

「ああ。悪いな、俺には怪我以外の原因を見抜くことはできないからな」

外傷がないのに意識を失った刹那に、何か魔法的な呪いをかけられているかどうかの確認であった。陰陽術のようなものには多少通じてはいるが、ハクは基本的に魔法関係には疎かった。

「その辺の知識を仕入れておかないと後々痛い目にあうぞ？ 今回はワタシがいたから良かったものを」

「重々承知している。手が空けば努力する」

「ふ、ふん、余計なことだったようだな」

ハクの真剣な表情と淡々とした言葉を受け取り、それ以上の忠告をエヴァは取りやめた。

すでにハクは、エヴァとの戦いから暇をみて魔法や、薬による洗脳の類は知識として仕入れているが、実際の症状は今まで診たことがない。だから、今回は魔法使いとしては最高峰のエヴァを頼る結果となった。特に外傷もなかったが、“あの”刹那が何の傷もなく気絶したという事実がひどくハクを動揺させていたのだ。

「それで、その刹那さんは？」

「大丈夫のようだ。生徒のみんなには貧血で倒れたと説明している。ネギがそんな顔をするると他の生徒が不安がるだろう？」

自身の不手際と感じたのか、ネギは不安げに尋ねてきた。

あれからしばらく、刹那の容態を気にかけて木乃香や、よく刹那と警備の仕事を共にこなす龍宮真奈が来たり、生徒が勝手に騒ぎ出したりとあったが、それ以上の問題は起こらなかった。

もちろん、万全を期して新幹線内に不審人物がいないか確かめるのは先決だったが、これ自体はハクの落ち度でもある。

(まだ目的地ではないという油断……すっかり麻帆良の平和な雰囲気にあてられたか)

「何事もなくて良かったです。こつちも特に被害はありませんでしたが、気をつけます」

「はっ、ぼーや如きが気をつけたところで、敵はその警戒網をくぐりぬけてくるだろうよ。せいぜい自分たちの生徒のお守りを完璧にこなすんだな」

ネギの態度に苛立ったのか、エヴァは不機嫌を隠そうともせず言い放つ。その言葉に黙ってうなだれるネギを見て、茶々丸がうろたえていた。

「マスター、そこまで言わなくても」

「黙っている茶々丸。この件に関しての反論は許さん」

びしゃりと茶々丸の言葉を封じるエヴァ。いつものふざけた対応ではない威圧を込めて従者を従わせる。

「今回の事は俺にも責任がある。それよりもこれから充分に警戒

することが大切なんだ、力を貸してくれエヴァ」

ネギを庇おうというつもりは一切ない。

ただ、自分の不甲斐なさに怒りを感じていただけだった。

エヴァはその言葉に毒気を抜かれたのか小さくため息を零す。

「……相変わらず甘い奴だ」

エヴァはそう小さく零した。

しばらくしたのち、車内に京都到着のアナウンスが流れた。

気絶したままの刹那をホテルへ送った方がいいという諸先生方の忠告を受けたが、刹那一人の時を狙って敵が現れたこともあり、迂闊に一人にすることはできないと考えたハクは、言い訳として「もし目を覚ました時に一日目がホテルだけの思い出は寂しいでしょう？」などと言って誤魔化した。

もつとも、それだけならば誰かが看病する話へと移行するのだが瀬流彦先生という魔法関係者にも口添えしてもらってそういう運びになった。

「うっ、ここは……？」

「大丈夫か刹那？」

刹那が目を覚ましたことにほっとしながら、ハクは安否を確かめる。やはり本人に聞かないことには落ちつかなかった。

「……特に異常はありません。ここは？」

しばらく焦点があわないように頭を振っていた刹那だが、ハクが傍にすることに気付き返事を返してくる。淡々とした返事ではあったが、ハクは安心した。

「ここは清水寺だ。今いる場所はその駐車場のバスの中というわけだが、大丈夫そう良かった」

「ご心配をおかけしました。それでは行きましょうか」  
「待った、一体あの場で何があった？」

焦ったように立ち上がり出て行くこととする刹那を制止させる。  
刹那が襲われていたとき、薄い笑みを張り付けたようなあの男がいたはずだ。

あれはまやかしかったのか、それとも本体が転移魔法を使ったのかわからないが、ハクの一撃ですぐに消え去った。

そしてその直後に倒れた刹那。どんな状況だったのか、何をされたのか、知りたかった。

「それは……」

「どうした？」

極力ハクの顔を見ないようにか、言い淀み不自然に視線をずらす刹那を不審に思う。

「特に、何も」

「何もって……そんなはずないだろう？ 仮にもおまえがやられるくらい」

「ですから、何もありませんでした」



ハクの言葉を遮り、なぜか強い口調で返す刹那。その気迫にハクは言葉を返さなかった。

だから、ただ頷くことにする。刹那の方もこれ以上追及されるのを拒んでいる。何があったのか窺い知ることはできないが、彼女なりに考えてのことなのだろうと、ハクは腑に落ちないがこの場では納得することにした。

「わかった、身体の方は本当に大丈夫なんだよな？」

「大丈夫です、これ以上心配されても……迷惑だ」

「……そうか、すまない」

なぜだろうか、ハクに向ける言葉には刺々しさがあった。思わずハクは謝ってしまった。おそらく彼女の癪に障ることを言ってしまったのだと思う。

「では行こうか。木乃香も随分と心配していたようだぞ？ これをきっかけに仲良くしてみてもどうだ？」

先ほどから漂う重い空気を払うようにそう話題を振ってみる。実際ここに到着してからそう時間は経っていないのだから今から行けばすぐに集団に追い付けるだろう。エヴァがついているとはいえ、ハクとしても不安があることには変わらない。先ほどのようにまた誰かがやられるかもしれない、それはエヴァがついていようと変わらなかった。

「……またお嬢様、ですか」

「え？」

「何でもないです。先に行きます」

そういつてバスの外に出る刹那。どうしてか一瞬追いかけるのを

躊躇わせれた。

清水寺に着いたときの生徒の勢いはネギ一人では御しがたいものだった。

「わわわ、皆さん落ちついて行動してください！ くれぐれも一般の人に迷惑をかけないように！ って、クーフェイさん！ 早々に身を乗り出して飛び降りようとししないでください！ あああ、超さん、肉まんを販売するのはやめてくださいよ！ その双子のお二人は柱に落書きするのは絶対にやめて！ 重要な文化財なんですからマツキーとか取り出さないで！」

学校内でも元気が溢れるばかりの生徒たちであったが、旅行独特の空気からか最早やりたい放題というか、常識がないというか。ネギはそれだけで目を回しそうだった。

ただでさえ、ハクという頼れる人がいない今、生徒を守りかつ生徒たちが楽しめる旅行をさせてあげられるように引率しなくてはならないのだが、そこまで手が回るかどうか。

清水寺でのすべての生徒の行動を見ていることはできない。だから周りに魔力を感知できるように常に気を張っておく。

みながみな、思い思いの場所に散っていく。ネギは大体他の生徒の位置がわかるように見晴らしのいい場所で景色を眺めていた。

「もっとゆっくり観光でこれたら良かったんだけどなあ」

そう一人で呟く。だが、ネギは教師であり、生徒たちのお守りと護衛、親書を届ける関東魔法協会の魔法使い代表という立場がそういったことを許さない。もともと、自分にできるのは本当に少ししかないと思うが、できる限りのことはしたいと考えている。

「ここは風情があつていいな、この景色だけでも来た価値があると  
言うものだ」

「エヴァンジェリンさん、茶々丸さん」

そののんきな声に振り返る。それはつい先日、激しい戦いを繰り上げた人物たち。最初はどっしり目的でついでくるのか不安に思っていたが、今では味方であると言うことなのでむしろ頼りにしているくらいであった。

万が一があつても彼女がいればなんとかなる。そう思わせるだけの力が彼女にはあつた。

「で、調子はどうだ、ネギ先生？」

「皆さんが元気すぎることに困っていますが、今のところは特に何も。でも良かった、エヴァンジェリンさんがいれば敵もそうそう妨害できませんからね」

「本当にそうでしょうか？」

「え？」

無表情の茶々丸の問いに、思わず疑問で返すネギ。それにエヴァは皮肉げに笑って見せる。

「おいおい、もう忘れたのか？ 新幹線の中で何が起こったのか、ワタシですら感知できぬ妨害を働いてきたのだぞ？」

「そ、それは」

エヴァの的を得た意見に言葉が出てこない。

あれほどの戦闘を繰り返す魔術魔法を使い出し抜いたという事実、それはネギの警戒心や焦りを加速させる。

「もしもの場合の話だが、内側に敵がいることも想定しておいた方がよさそうだ」

「そんなっ！ 皆さんを疑うなんてできないです！」

「なに、警戒することとはただ敵が来るのを待っただけじゃないんだ。いろいろな可能性を考慮しておいて損は」

そこでエヴァの言葉は途切れた。微弱ながら魔法の力を感じたからだ。

「魔力を感知っ！ 先に行きますエヴァンジェリンさん！」

「人の話は最後までっ、はああ、先が思いやられるな茶々丸。この程度の魔力だ、大したことにはならんだろうに」

「とか言いながら心配しているマスターはやはりお人よしなふんに」

「ふふふ、この口か？ この口がそんな戯言を抜かすのか！？」

どんな状況の中でもエヴァンジェリンと従者は変わらなかった。

現場に駆け付けたネギの目の前には、落とし穴に落ちた委員長のあやか、新体操部のまきえなどの生徒がいた。おそらく魔力を発していたのは落とし穴の中にいた両生類たちなのだろう。恋占いの石という名物が付近にあるので、願掛けとして目をつむっていて気がつかなかったのか、それとも人為的に魔法で穴をあけたのかは定かではないが。

「お二人とも大丈夫ですか？」

「イタタ、ごめんごめんネギ君」

「うう、誰がこんなものを……許しませんわ」

自分がその敵と関わっていると知ったら彼女たちはどう思うだろうか。今回も特に被害はないようだが。

ネギは小さく自身のスーツの膨らみに話しかける。

「これも囿、と考える方が自然だよ、カモ君」

「ああ、同じやり口かどうかはわからねえが警戒するに越したことはないぜ兄貴」

懐から現れたのはオコジョ妖精のカモだ。以前、茶々丸を襲わせたのも彼であるが、その後もネギの傍で使い魔をやっていた。しかし、カモは絶対にハクのいる前で姿を晒すことはなかった。それは茶々丸の時の件で警戒されているのがわかっていたからである。

「どうかした、ネギ君？」

ネギの真剣な表情を見て取って、まきえが心配そうに尋ねてきた。しかし、ネギが返答する前に隣で恨み事を呟いていたあやかが、ネギの顔を見るや騒ぎ出す。

「そ、そんなにわたくしのことを心配なさってくれるなんてっ！ネギ先生は教師の鑑ですわ！ い、いえもしかして、これはわたくしだけに向けられた思慕の念がそうさせる、ぶふあ！？」

「何を好き勝手ほざいてるかこのシヨタコンがああ！」

華麗に跳び蹴りをくらわせる明日菜。そこでまた騒動が生まれて

しまつが、ネギにとってこれはちょうど良かった。またわずかながらの魔力を感知したからだ。

「明日菜さん、ここは任せます！」

「はあ、やっぱりこれも厄介事なのね……」

彼女には普通に旅行を楽しんで欲しいと言う気持ちもあったが、魔法関係のことはできうる限り事情を話しておくことにした。もちろん、開示する情報も選んではいたのだが、今回はもしかしたら被害が及ぶ可能性も考えてやんわりと妨害について話は通してある。

一般人の目がある今なら余程の異常事態が起こらない限り、生徒たちに危害が加わることはないだろうと判断した。

「あなたという人は……人の恋路を邪魔するものは馬に蹴られますわよ!？」

そんな声を背中に受けながら、ネギは駆けだした。

一方ハクの方は、快復した刹那を連れて清水寺に来たものの、会話と言うものを交わすこともなく重い沈黙に支配されていた。

いまのところ生徒たちの方は何事もないようで、元気そうな様子だ。ネギの姿が見当たらないのがやや不安ではあるが、エヴァもついているので問題はないと考える。

となると差し当たった問題はむっつりと黙りこんだ刹那であるのだが。

「刹那」

「なんでしよう?」

会話をしようと声をかけるが、まったく言葉が浮かばない。軽い冗談でも飛ばせればいいのだが、ハクにはそういったスキルが不足している。

「あゝ、いや、久しぶりの京都は懐かしいか?」

「懐かしさを感じる余裕などありません」

「そ、そうだな」

会話終了。

なんとかしたいとは考えるが、やはりうまくいかない。

(わ、わからん、どうすりゃいいんだ!?)

少しずつ刹那と距離が開いていく。何の解決策も浮かばないままハクは現状に流されそうになる。実際、刹那との距離はかなり空いてしまった。このままではバラバラになるかもしれない。それは不味い、まずいのだが。

「うう、どうすればっ」

「あ、ハクさん!」

嘆きが声に出ていたハクはそのいつもの少年の声に目を見開いた。救いの英雄ここに現る。彼ならこの空気をどうにかしてくれるかもしれないという淡い期待を抱いた。

「この辺で魔力を感じたのですが何かありませんでしたか?」

しかし予想に反してネギの声は真剣で、周りに気取られないような囁きだった。その言葉を受けてハクも周りに集中してみるが特にこれといった気配はない。

「この辺に不穏な気配はないように感じるが」

「おかしいな……引き続き周りを警戒しますね、何かあったら連絡を」

「ああ、わかった」

そうだ、刹那なら何か気付いているかもしれない。

ハクの中にちょうどいいきっかけが生まれた。

やや距離を開けてしまった刹那を追いかけて話しかけようと肩に手を置いた。この流れならなんとか自然に会話ができるだろうという打算を込めて。

だがそれも失敗に終わる。

振り向いた刹那の顔を見て異常に気付くが、時すでに遅しというべきか。

「あー刹那？」

なんとというか、刹那の顔は不自然なまでに赤い。その赤みは首筋にまで達しており、口から発する臭いに頭がクラクラする。

「うつるさいろらあああ！」

「ふあああああ！」

呂律の回らない刹那に綺麗に投げ飛ばされました。



目が覚めてから刹那はずっと考えていた。

ボク達なら君に与えてあげることができる、君を救ってあげられる

その言葉を投げかけられた時、どうして自分はその手を取ろうと  
してしまったのか。

疑問は尽きない。あの男はまるで刹那の心の闇を抉りだすように、  
何もかもさらけ出そうというように言葉をぶつけてきた。

だから焦った。

自分が何をされたのか、状況を聞いてきたハクの言葉に。

心配そうに自分の顔を覗き込むハクの瞳を見て、まるで自分の考  
えを見透かされているような

(違う、迷ったのではない、話す価値など……なかったんだ)

仲間に引き入れられそうになった。ただそれだけを言えばいいの  
に、断って見せたといつものようにそっけなく伝えればわかっても  
らえるのに。

そうしようとしなかった自分がわからない。

素直に伝えない自分の気持ちが見えてこない。

バスから出て、隣を歩くハクの話などろくに耳に入っていないし、  
今は会話をする元気もない。

話すたびに彼は困った顔をするのだが、やはり自分では木乃香の  
ようにうまくはできないのだろうと勝手に考える。

目下、刹那の中での絶対のルールが揺らいでいた。

何があるうとも揺るがないと思っていた一つの真理が崩れそうに

なり、思いのほか衝撃は大きかった。

（お嬢様を守る　わたしはそれだけの存在のはずだ）

拾われた詠春の恩に報いり、こんな自分のことでも分けへだてなく接してくれた優しい少女への恩返し。

それが現状刹那が生きる理由。

その未来に彼女の隣を歩く自分は存在しない。

刹那にとって木乃香はまばゆい輝きを放つ光。自身はその光を守る影の部分。

（だというのに、わたしは今更何を望んでいる？）

起きがけに青年に尋ねられたこと、木乃香と仲良くなることを望んでいるのだろうか。

それとも、自分の意志とは関係なく、ましてや神鳴流など魔法など知らぬ学生生活を満喫したいと考えているのだろうか。

そこで木乃香が笑う姿、光に生きる姿がフラッシュバックする。

（違う、少なくともわたしは自分の生き方に誇りを持っていたはずだっ！）

今までの苦勞が、ただの無駄骨だったなどと想像したくもない。

たかだか十四、五年の歳月で、そのすべてを否定することは自身の存在をも否定してしまう気がした。

（人とは違うこの身で、それすらも否定すれば）

その先は考えない。考えてはいけない。

(悩むな、戦いしか知らぬ者に迷いなどいらぬ。今は任務に集中してさえいればいい)

意識を戻すと、目の前には音羽の滝があった。学業・健康・縁結びと効果があるらしいが、今の刹那にはさほど興味がない。どれがどの並び順かはわからなかった。

もしも、青年が隣にいたならばどう反応しただろうか。そんなことを考えた。

先ほどから喉が渴いていることに気付き、そしてその水を口にする。

そこから先はよく覚えていない

## 第二十六話 迷ふもの（後書き）

結構難産でした……

ちよつと今回は微妙な出来だと思えます（汗

色々と表現やら展開が難しいですが、頑張つて書いていくんでこれからもよろしくお願いします。

読んでくださつてありがとうございます！

## 第二十七話 黒の接触

「まったく、この茶番みたいな罠に振り回され続けて散々だな」

「そう言いますけど実際何が起るのかわからないわけですし、きちんに対応しないと……」

そう文句をいうのはエヴァ。それをなだめるようにネギが少々慌てて補正する。

「そうやってこちらをイライラさせて緊張状態を保たせるのも、向こうの狙いの一つなんだろう。まんまと術中にはまったな、エヴァ」

「うるさいぞ、そんなことはわかってるが一向に相手を探知できないことにムカついているのだ、ワタシは」

現在ハク達がいるのは本日宿泊するホテルであり、誰にも話し合いを聞かれるわけにはいかない為、ハクとネギの部屋で行われている。

ちなみにこの場にいるのは、ハク、ネギ、エヴァと茶々丸のみ。

刹那の事は関係者であることをネギは一応知っている。それとなくネギの方も気付いていたらしいが、確信はなかったらしい。ネギ曰く、気付いたのは新幹線で刹那が襲われた時だそうだが。

「そして大事な大事なお姫様を守るナイト殿は酔いつぶれて眠っていると。何とも先が思いやられるな」

「あれは……あれも敵の罠だったんだ。まさかあその水が酒に変わる魔法など予想できなかった。匂いもしなかったしな」

「ふん、上善水じょうぜんすい如ごとだったとでも？ あんなに自棄酒するとは思わなかったがな」

刹那の飲みっぷりに言っているのであろう。実際、あれを水のよ  
うにぐびぐび呑んでいる姿を見たら、その酒の名前が出てきても仕  
方がないのかもしれない。今刹那は、明日菜の様子を見てもらいな  
がら眠っている。

エヴァはどこか皮肉げではあるが、内心それほど怒っていないの  
だろう。ニヤついた口元を見るに面白いおもちゃが見つかった子供  
のようだ。

「マスターはお酒にはうるさいので」

「ワタシはワインの方が好みだがな」

「どうでもいいわ、それより今後の方針だが」

会話を元に戻そう。「どうでもいいだと……」「マスター落ちつ  
いてください」などと慰め合う主従の姿が見えるが無視。

「相手を探知できない、現状それが一番厄介な点だな。 エヴァ、

そついった魔法はあるのか？」

「ないこともないが、気配を消すだけならまだしも魔法を使ったと  
きの気配すらないという魔法は難しいだろう。 使用後に及ぼした  
影響は魔力の余波が残っているのは、わかるがな」

敵の厄介な一面、隠密性だ。 実際ハクたちがやられたのは、あの  
場で更に数件。 それに自分たちの居場所を正確に把握していること  
から言つて、このホテルにすでに潜伏されていてもおかしくはな  
かったが、エヴァと茶々丸に先回りしてもらい、念入りに魔法の痕跡  
を調べたのでとりあえずの安全は確保できた。

さらに、このホテルをエヴァによる簡易的な結界を敷いてもらっ  
たことで万全の態勢である。 それすらも抜けてくるような相手であ  
ると言つのならば、苦戦を強いられるのは必至だろう。

「何を不安に思っているかは知らんがな、徹底的に敵が戦いを仕掛けてくるのなら夜だ。昼間のようにどこで他人の目が光っているかわからないうちに勝負を掛けてくるのは初回の不意打ちくらいのものだろう」

「そうだな……」

その忠告に渋い顔をして見せるハク。刹那のことを言っているのだろうことは理解できたが、どうしてそのときに自分を頼ってくれなかったのだろうか、今更ながら疑問に思った。

「ホテル内で戦闘、なんてことにはならないですよ？ さすがに「相手も馬鹿じゃない、そこまで派手に動こうとは思わないだろうが、外から何らかの攻撃を加えてくることも考えられる。はたまた、昼間の時のように隠密行動による嫌がらせをしてくるか」

ネギの質問に冷静に答えていくが、有効的な策が打ち出せずにいる。

「ふう、考えても仕方がない。今はエヴァの結界があるから、襲撃が判明した場合はすぐに知らせてくれ」

「ワタシだけでなく、ここには優秀な従者もいるのだから安心しろ」

「はい。ホテル内に従業員も気付かないような小型カメラを設置させていただきました。随時監視を徹底しますので、不審人物が映り次第報告します」

「……いつの間になんかものを仕掛けたんだ？」

「バッチリ温泉、各個室にも配置済みです」

「……オーケー、非常時だから今回は目をつむるが、事が済んだら茶々丸と個人のプライバシーについて小一時間ほど話し合うことにしよう」

個室がどこまでの個室なのかは聞かないほうがのちのちの為か、  
と思ったのはハクだけではないはず。ネギの苦笑いを見れば一目瞭  
然だろう。

さりげなくとんでもないことをやってのけていた茶々丸の評価を、  
ハクは大幅に見直した、良い意味か、悪い意味かは別として。

コンコン、とノックの音ともに、現れたのは委員長のあやか。

「先生方が入るお風呂の時間帯となりましたので、呼びに……って  
エヴァンジェリンさん茶々丸さん！？ ネギ先生の部屋で一体何を  
しているんですか！」

「ふうやれやれ、うるさいのが来たな」

「うるさいとはなんですか！ こんなうらやま……いえ、とにかく  
部屋に戻ってください！」

今にもハンカチを取り出して噛みちぎりかねないので、エヴァも  
茶々丸も腰を上げた。

「刹那と木乃香の事を任せていいか？」

「任せるも任せないも、敵が来たら声を掛けるから関係ないさ」

そういつて二人は部屋から出て行った。「うふふ、ここで何をし  
ていたのか根掘り葉掘り聞かせてもらいますわよ！」とか、何やら  
説教じみたものを食らいながらであるが。



「いい湯だな」

「はい、これなら毎日でも入りたいですよ」

露天風呂、あれからすぐに二人で準備して入りに来たのだが、広いのなんの。人が泳いでもまだまだ余裕そうだ。

「もう朝からいろいろ大変でしたね」

「はは、まだ旅行は始まったばかりだし、肝心の目的を果たしていないぞ？」

ぶくぶくと口元だけ温泉に沈めて泡を吹くネギ。頭の上でこちらを警戒している使い魔のカモ。

ネギと同室でその存在に気付かないわけではない。というよりも最初から近くにいたことには気づいていたのだが、敢えて接しようとは考えていなかった。だが、ネギから紹介されて今ここにいるわけだが。

「カモ君、そんなに怯えなくても大丈夫だよ？」

「まさかこのオレッツちがびびってるっても!？」

めちゃくちゃ動揺しているらしいのは伝わってくる。声もどこか震えているので、これ以上カモに話しかけるのはやめておきたいところだが、一言だけ言っておこう。

「カモといったな？ 二度とネギに余計なことを吹き込むなよ？」

余分なことを実行させるようなら殺すっ！という勢いで睨みつけて、カモは自分の口から泡を吹いている。気絶しなかっただけマシだろうか。ネギはまだ幼い故に他人の考えに流されやすい節がある。これは仕方がないことでもあるが、それだけに純粹さにつけこんだ

非情なことだけはさせたくないとハクは考える。

もつとも、これはもう片付いた件　茶々丸を襲わせたことなので、ネギの前ではあまり口にしたくない。話題を変えよう。

「明後日の京都での自由行動、そのときにうまく親書を届けられればいいと思うのだが」

「そうですね、本当だったら僕個人で旅行前に行くのがベストだったんでしょけど」

単独で京都に向かうにも、ネギ一人ではリスクが大きいのだろう。今はちょうどいい護衛の魔法先生もいない。だが、この旅行でならエヴァという強力な助っ人や、今は所属不明の扱いとなっているハクという存在が堂々と同行できるという理由があった。

「さてな、学園長の考えだ。この旅行に合わせたのも意味があったことだろう、ともかく今は温泉で疲れを癒すでしょう！」

「はい！」

ネギの返答を聞いて、ゆったりと空を見上げながら湯に浸かっていた。が、不意に物音を察知する。静かなこの場には、ネギとハク以外はいない。

「ネギっ、く、まずい！」

「え？　うわ、ちょっとハクさん!？」

ガラガラとスライド独特の音を響かせて浴場に入ってきたのは明日菜と刹那の二人。無論、彼女らは一糸纏わぬ姿なわけだが見とれている暇はない。ハクはネギを抱えて岩場に身をひそめた。

「まさかこんなありがちな出来事に遭遇するなどっ!？」

「ハクさん……隠れないでこちらが先に入っていることを伝えれば良かったのでは？」

ネギの冷静な一言で自分の失態に絶句した。

「なぜ先に言わないんだネギ……」

「言わせる間もなくハクさんが行動しちゃうからですよっ！」

無性にネギをいじめたくなっただが、非常事態なのでやめておく。

意外な組み合わせではあるが、明日菜には刹那の事を看ているもらったので、恐らくその付き添いなのだろう。だが、今は教員の入浴時間のはず、いや、それ以前に男女の風呂は違うはずなのだが。

「旦那、これが混浴ってやつですよ」

「うるさい黙れ下等生物が」

小さく悲鳴を上げるカモに同情している余裕などなく、この現状をどう打破するか頭を巡らせる。

「僕、ちょっとのぼせてきちゃいました……」

「今は我慢してくれ」

そうこうしているうちに、二人がお湯に身体を沈めた。刹那の方はまだ若干フラフラしていたようだが、そんな状態で風呂に入っても大丈夫なのだろうか。

「桜咲さん大丈夫？ あんまり長湯は駄目だからね？」

「うう、すみません神楽坂さん、声をもう少し小さくお願いします。」

その、頭に響くので……」

というやりとりが聞こえてくる。明日菜には簡単な事情は伝えてあるし、他の生徒たちも今朝刹那が具合が悪い事を知っていたので、不審がられることはなかったようだ。

「それにしてもまさか桜咲さんも魔法関係者だったなんてね、」

「こんな状態では……ただの足手まといですよ。いえ、最初からわたしは足手まといだったのかもしれない」

刹那の独白が聞こえてくる。

彼女が初めて見せる弱音。そこまで刹那を追いつめる原因が気になった。

まだアルコールが抜けきっていない影響なのだろうか。ハクは岩場に身を張りつけながら耳をすませた。

「そんなことないよ、それに私たち中学生なんだからしょうがないって」

明日菜の気楽な声。確かに明日菜にとっては自分は足手まといかもしれないが、刹那の立場からしたら足手まといでは困ると考えているのだろう。それは至極当然な考えだった。

「わたしは、護らなくてはいけない立場なんです。例え、どんなことがあっても、絶対に」

「桜咲さん……」

刹那の言葉に重みを感じたのか、それとも掛けるべき言葉が見つからなかったのか、明日菜はただ刹那を見つめていた。

「こんなわたしが一人で足掻いたところでどうにもならないのしようけど……」

「だったら……、一人でできないんだっただらさ、頼ってもいいんだよ？ 立場なんて気にしないで。ネギだって、ハク先生だって、そう考えると思うけどな、私は」

優しく語りかける明日菜に、ハクは感謝した。  
だが、続く刹那の言葉は辛辣なものだった。

「あなたにはわからないでしょう。自身の力で誰かを護ったことがないあなたでは、ね」

「私は……」

「すみません、こんなこといってもどうにもなりませんね」

先ほどまでの雰囲気とは一転し、二人の空気が重い。

それは刹那によるところが大きいのだが、いつもの明るさや優しさをさせる明日菜ですら言葉を失っていた。

ともかくこの場から離れようと行動しようとしたとき、声が頭に響いた。

『敵だ、ツチ、してやられたぞ、近衛が捕らわれたすぐに来い！』

エヴァからの念話だ。憎々しげに吐き捨てるその声に我に還る。がばつと立ち上がり、お湯をかき分けて走り出す。

「近衛がさらわれた！ ほら、ネギ行くぞ！」

「ふ、ふあい」

「なっ、なんで二人ともここにいんのよっ！？」

「あなたは何をやっているんですか！？」

「俺たちの方が先に入ってたんだ、不可抗力だよ！」

完全にのぼせてしまっているのか、ネギの身体を引っ張り起こして駆けだす。二人の女子の姿は目に入れぬように、されど返事だけはきちんとしておく。あとで誤解は解いておかないと社会的に抹殺されかねない、立場的に。

「ともかくそんなことは後だ！ 神楽坂と刹那はホテルで待機してくれ、俺とネギ、エヴァで近衛を取り戻す！」

どさくさまぎれの逃亡劇。後ろから非難の声が聞こえてくるが非常事態の為無視だ。

若干のぼせ気味のネギをひきつれて、すぐに冷たい視線の中から離脱した。

「くっ、このワタシが遅れを取るとは！」

「目標は京都駅方面に進行中です、マスター」

ハクに連絡を取ったエヴァはすぐに敵の追跡を開始していた。結界内にまさか侵入されているなどと想像もしない。なぜなら。

「まさか最初から従業員に紛れ込んでいるなど！」

どれだけ魔力の痕跡をたどったところで、従業員にかけられた集団催眠は見破れなかった。認識を阻害されたまま、自分たちはままと敵のいる地で安全だと高をくくっていたのだ。

空を疾く疾く駆け抜ける。

ほぼ目標を肉薄する。

だが、魔法を放つにはもう少し距離が必要か。そう見定めた時だった。

「マスターっ！」

殺気を感じ取った瞬間、茶々丸の制止の声に魔力障壁を全力展開。鈍い無数の衝撃音が耳をつんざく。

それはすべて魔力障壁に阻まれて霞んで消えるが、エヴァの障壁を確かに揺るがした。

「さすが闇の福音、この程度の不意打ちでは仕留めきれないか」

同じ高度に投げかけられた声に振り向く。

「なるほど、ワタシを真祖ハイデライト・ウォーカーの吸血鬼と知っていたの妨害というわけか？」

目の前で自身を攻撃して見せた白髪の少年に向かって告げる。しかし少年は表情を変えないままエヴァをまっすぐに見つめる。

底が見えない暗い瞳。物怖じしないその雰囲気、ひるまずに攻撃を仕掛けてきた胆力、エヴァは得体のしれない何かを感じ取る。

「ええ、多少分が悪いですが、ぼくが相手をしなければいけないよ  
うなのでね」

エヴァを相手に言葉で言うほどの動揺を見せない。戦いで培われたエヴァの感がこいつは本物であると告げる。

『エヴァ！ 木乃香はっ！？』

仮契約カードの念話でハクの声が脳内に響いた。エヴァはカードを使うことなくそれに答える。

『近衛は京都駅方面に連れて行かれた。ワタシは少々遊んでからそちらに向かうことにする』

『……っ！ わかった、そっちは任せるぞエヴァ。何かあったらすぐに呼んでくれ』

『心配なんぞされんでも、手癖の悪いぼーやを調教してやるだけさ』

小さく鼻を鳴らして念話を切る。おそらくハクはエヴァと同等の力を持った敵と相対していることに気付いたのだらう。そういうところは無駄に鋭い。

(普段ももう少し気にかけてくれれば言うことないのだがな)

戦闘中にもかかわらずそんな戯言を思い浮かべた自分に可笑しくなった。

「ワタシもヤキが回ったかな」

「マスター、それは今更な発言ですよ」

相棒の言葉を聞き流しながら、目の前の相手を睨み据える。

魔力は充実している。

月光が降り注ぐ夜の中で、その高ぶりに酔いしれる。

「さあ、お仕置きの間だ」

闇の妖精が空を舞った。



急いで着替えたハク達が宿泊するホテルから、駅で三つほど行つたところに京都駅はある。しかし、真面目に駅で電車を待っている余裕などない。現に敵は木乃香を抱えてノンストップで駆けているのだ。よほど足に自身があるのか、はたまた移動用の浮遊魔法を使っているのかは判然としないが、現在、ネギの杖にまたがって全力疾走していた。

「京都駅……馬鹿な、俺たちを迎え撃つ気か？」

滑空しながら気付いたこと、それは現在時刻が八時を回った頃だと言つのに目的地付近に人の気配が全くない事だ。明らかに人払いの結界が張つてある。

そして、その中から魔力を感じ取れるということも確かだ。杖で疾走したまま構内に滑り込む。

やはり無人。伽藍堂となつた構内はやや不気味だ。

「お札さん、お札さん……うちを逃がしておくれやす……」

静かな構内に響く詠唱に咄嗟に反応する。

「ネギ、避けるっ！」

「うわああっ！」

思い切りネギを蹴り飛ばすと、自分たちがいた場所に大量の水が津波のように襲いかかる。ネギを蹴った勢いそのまま虚空を蹴って階

段の踊り場に着地すると、反対側で体勢を立て直したネギが着地するのは同時だった。

「ほお、今のを避けるとはなかなかやるやないか」

ハクたちがいる踊り場よりさらに二階ほど上に立つ女性。おそらく陰陽師であろう、肩を大きく露出した派手目な白い道着を身に纏っている。長い黒い髪と丸い眼鏡が特徴だ。

ハクは瞬時に視線を巡らし木乃香の姿を探す。見当たらない、ということとは。

「ツチ、おまえも囿、というわけか？」

「さあ、どうやるなあ？」

舌打ち混じりの悪態に答える姿は肯定のようにも取れる。いや、挑発させて時間を稼ぐのが目的なのだろう。事実、ハクは頭に血が上りかけていたが、すぐに自分を律する。

今からではどこに逃げられたのか闇雲に探しまわるわけにもいかない。

その厳然たる現実がハクの思考をクリアにする。

「荒事はあまり好きではない、だが」

敵は呪術者が一人。組み伏せるのならばハク一人で充分だ。身体の中の妖気を全身に行き渡らせる。

冷静な思考の中で、身体だけは熱く猛っていた。

「邪魔立てするなら、容赦はしない」

「なにっ!？」

冷たく言い放つと同時に、瞬動による奇襲をしかける。  
動揺した様子を見せる女に突き上げるように鋭い掌底を放つ。  
だが、それは空振りに終わった。突如として女の姿が掻き消えた、  
そんな異常を目の当たりにする。

「いきなりそれは酷いんじゃないかな？ 仮にも千草君は女性なんだよ？」

「おまえはっ！」

その男は千草と言う敵の術師をゆっくりと地面に降ろし、軽い口調で話しかけてきた。

いつの間にかハクとの距離も十メートルほど空いている。

（瞬間移動？ そんな馬鹿な）

たわいない買い物で終わるはずだったあのときのように、薄い笑みを張りつけた線の細い顔、癖のない金色の髪に黒い袴姿の飄々とした風貌。

先日、まんまと逃げられたあの男だった。

「ゲホゲホッ！ あんたはアホか！ どうして計画通りに動かへんのか！？」

「いやいや、だって予想外の攻撃に戸惑う千草君が危ういものだったからね。 ついつい助けたくなるのが人情と言うものでしょう？」

恐らく男の乱入は計画外だったのだろう。千草はむせながらも驚きと怒りが半々と言ったようで男を怒鳴りつけている。対する男の口から出てきた人情という言葉にハクはうすら寒さを覚えた。

「木乃香さんを攫ったのはあなたたちですか！」

「そうだよ、彼女は計画に必要でね。ほら、そこにいるだろう？」

ネギの怒声に変わらない調子で答える男。どういうわけか、先ほどハクが確認した時には見当たらなかったはずだが、木乃香はハクよりも更に一つ上の階の踊り場、その手すりにもたれかかるように気絶していた。

「なっ、一体どうやって!？」

「それは教えられないなあ、でもまあ君がこちら側に来たら教えてあげるかもね？」

「戯言をつ! 【霧島流、後の型 散弾掌!】」

完全に捕えた。

都合三十二発の暗く淡い光を放つ塊が男と千草に殺到する。

命中したかどうかを確認せずにハクはすぐに木乃香の場所まで駆けあがる。

「おいおい、そんなに慌てて行かなくてもいいだろうに」

(馬鹿な、このほんの一瞬で回りこんだと言うのか?)

ハクが心の中でその動揺を口にすると同時に、朗々と男が魔法を詠唱した。

「今度はこちらの番だよ。魔法の射手・連弾・闇の三十二矢」

「西洋魔術だど!？」

咄嗟に【流水の型】で受け流しの体勢を取る。

自身が放った数と同じ、黒い魔力の塊が形を為してハクに迫る。向かい来る距離が絶望的なまでに近い。

迎撃は間に合わない。

自身の魔力耐性がほとんど一般人と同じことが仇となる。

一撃でももらえば、それだけで必殺の一撃となりうるのだ。

(致命傷を避けることだけに集中する！)

ハクがその判断とともに腰を落としたとき。

フランス  
バリエース・アエリアリス  
「風花・風障壁！！！」

まるで見えない壁に阻まれるように次々と黒い光の矢が消滅していく。

「おっと、そういえば仲間がいたんだっただね」

「ああ、頼りになる相方になった！」

後方からの支援。

エヴァ戦以来のコンビネーションだが、付け焼刃にしては幾分かマシか。

魔法を撃った硬直。男の動きは確実に止まっている。

危機が好機に変わった、ハクはこの状況をそう捉えていた。

無傷のまま済んだハクはそのまま反撃にかかる。

「もう一撃でっ！」

決める、それを行動に移そうとした瞬間だった。

「駄目です！ ハクさん下がって！」

ネギの声が聞こえるのが耳に入った時、すでに体勢は構えに移行

していた。

男が初めて見せる歪んだ笑顔。

その言葉と男の笑みを理解した瞬間、視界の隅に移る千草が豊かな胸元から呪符を取りだす動作が見えて。

（くっ、そう簡単に技を止められるはずが　　）

「食らいなはれ！　三枚符術、京都大文字焼き！！」

すさまじい熱気とともに、赤い炎がハクの視界を埋め尽くした。

## 第二十八話 炎に消える

絶大ともいえる炎の巨大さ。

それがハクのいる踊り場を燃やし尽くし、階下すら呑み込むほどの規模となる。

「ハクさんっ！」

燃え盛る火炎が酸素を取り込み激しい轟音を奏でる。

障壁を張ったわずかな時間差によって、ネギは援護の魔法を唱えることが叶わなかった。

恐らく青年はあの炎獄とも言える高熱の中。

ネギにはもはや叫ぶことしかできない。

敵は一人だったはずだ、それが突然現れたもう一人の男の介入により、圧倒的かと思われたハクが翻弄される結果となった。

ネギはどこか頭の片隅でこう考えていたのかもしれない、ハクがいれば最悪どうともなる。

あのエヴァンジェリンすら退けることができたネギとハクならば、なんとかなる。

そんな慢心。

かつてエヴァが言っていたではないか、慢心が許されるのは強者のみ。

(ぼくは……なんて弱いんだ)

膝から崩れ落ちそうになる。

だが、それでもネギは目を見開いて現状を見つめた。

(ぼくにも、ぼくにだって何かできるはずだ……っ！)

駄目だと、諦めてはいけないと下半身に力を入れなおす。

儂く燃え散りゆく銀髪をその目にとどめながら、ネギは詠唱を開始した。

間に合わない。

頭の中で鳴らされる警鐘に身体が動かない。

自身を炎に焼かれる。

似たような経験なら数多く、乗り越えた死地もあった。

ならば、今度も可能なのか。

可能性はゼロに等しく、しかし無というわけではない。

そんな逡巡の間にも結論は出ていた。

知らず、構えは解かぬまま。

出力できる最大の力を練り上げ、あるモノに伝達させる。

「おぼ止め

“おぼ 眩きと同時、半球円状に展開される自信の武器であり盾である銀髪”。



燃え盛る炎を打ち消しながら、しかし役目を終えて徐々に本数も消えゆく。

相手のこめられた魔力量に、上乘せされた符術の力を上回るには絶対的に力が足りない。

否、質も悪ければ量も足りない。

それでもなお、轟音を立ててハクを呑み込もうとする炎に抗うのは意地か、意地か。

自分らしくない初歩的なミス。相手が複数であることを忘れ、突貫していくなど愚の骨頂。

あの場面で突き進むのは慢心だ。一度退いて体勢を立て直すべきだった。

顔を焼かれ、服のところどころが焼き切れていく。だがそれでも休むことなく力を注ぎこみ続ける。

「ラス・テル・マ・スキル・マジステル……」

唸りを上げ続ける豪炎の中でその声を確かに聞き取る。

「吹け、一陣の風、フランス風花・サルタテイオ・ブルウエレア風塵乱舞！！」

巻きあがる炎を瞬く間にかき消していく風の嵐が吹きぬけて行く。途端、ハクを覆っていた息苦しさは吹き払われる。

「なっ、この西洋魔術師がっ！！」

「本当にいいコンビのようだね」

千草の怒鳴り声と、冷静な男の声を聞いて意識を戻す。敵は木乃香の傍に立っている。引き離すにしてもこの場で戦うには、木乃香を巻き込んでしまいかもしれない。

「それにしても、まだ戦意を失わないなんてね。大分力を使ったんじゃないかな？」

「黙れ……」

事実、ハクは肩で息をしていた。後方で支援に徹していたネギはまだまだ余裕がありそうだ。なぜだか表情はほっとしている。

「ハクさん！ 良かった、僕……」

「そう簡単にはやられない。やられるわけにはいかないんでな」

ネギの言葉を遮ってハクは答えた。身体への負傷は少ないが、それでも消耗は大きい。妖気の損失というよりは無理して出力を上げていた負担が身体にかかっているのだ。

「でも、もう身体が……」

「わかってるさ、わかってる。だけどここで木乃香を見捨てるなんて俺にはできないんだ」

悲痛な叫びかもしれない、勝ち目の薄いこの場で正解は体勢を立て直すことに他ならない。それでも、そうしてしまえば何のためにここに来たのかわからない。

それはネギだって同じだ。だが、ここでハクが離脱してしまえばそれこそ勝ちはなくなってしまう。

「そんな身体でまだやろうというのかい？ 今日にはもう退いた方が

いいと思うけれど?」

「そっちは目的を達したつもりかもしれないが、こちらはまだ果たしていないんでな。さっさと木乃香を返してもらおうか」

「それができるといふのなら最初からさらいなどしないのだけれどね」

「……だろうな」

沈黙が場を支配する。

どう木乃香を助けだすのか考える。自分たちの手札は少ない。何より、ハクにとっての切り札に近い“銀髪”はさきほどの無理のおかげで塵となって消えた。もっとも、あれを出し惜しみしたら今頃ハクは灰になっていただろう。

硬直状態。しかしこちらよりも余裕があるのは向こうのようだ。

こちらの様子を窺いながらも、隙があればすぐに体勢を立て直して逃走を図るだろう。いや、もしかしたらすでににげる算段は整っているが敢えてそうしていないのか。

なぜかそんな直感が働く。

だが、それはこちらにとって好都合だ。

こうしている間にもエヴァが敵を倒して向かって来るだろう。

あいつが苦戦するほどの相手など、そうそういるものではないはず

「ああ、闇の福音ならもうしばらく来れないと思うけどね。だから時間稼ぎなら無駄だよ?」

「そんな、あのエヴァンジェリンさんが!??」

答えたのはネギ。だが、ハクも内心の動揺を悟られないようにすることで必死だった。

打つ手なし、そう思った。だがここでやるのはエヴァを待つことしかない。

無言で構える。幸い身体はまだ動く。

(時間を稼ぐくらいならば、まだ……！)

「これが最後通告、ぼくたちの仲間にならないかい？ 君はそいつらと一緒にいるべきではないんだ、こちら側の存在だ」

「……いったい何の話だ」

こちら側の存在。意味することは恐らくハクが“狐憑き”であるという点であるのだが。

「虐げられてきたはずだ、疎まれてきたはずだ、いつでもどこにも居場所なんてなかったはずだ」

「……さてな」

「君は大きな権力の中で飼い殺されているだけだ。僕たちと共に来い、僕たちは世界を変え得る存在なんだ」

男の言葉に妙な気持ち悪さを覚える。その声を聞くだけで耳をぐしゃぐしゃにかき回されるような嫌悪感。自身こそが救いの象徴であるといわんばかりの口調だ。

男の目的、初めて会ったときにも口にした勧誘。

ならば、こちらが洩る間は時間を引き延ばせるか、そう考える。しかし。

「あいにく俺は自分の意思でここにいる。お前らの仲間になることは、ない」

示す答えは拒絶。当たり前だ、今まで散々何をしてきたか、これから何をすべきなのか。想像するだけで悪事しか見えない。そんな行動の肩棒担ぐなど、ハクには考えられなかった。

だから本能のままにそう答えていた。

だが、その言葉に男の表情は一変する。

薄い笑みは消え去り、残るのは何も無い、無表情。

そうしている方がさも人間的、いや、何も表すことがない笑顔よりも感情を前面に押し出した表情と言えるかもしれない。

「言ったはずだよ、これが最後通告だと……。なにより、時間を稼がせるつもりは ないよ?」

「はっ、だったら最後まで戦うだけだ」

自身の意思を貫くまで、そう意思を込めた言葉をぶつける。最初からハクに寝返るなどと言う選択肢は存在しない、考える必要すらない。

しかし、それを答えた瞬間だった。

身体全体が地面に押しつけられるような圧迫感。周りの空気が重くなったのかと思うほどの息苦しさ。

それがすべて男から発せられる圧力と言うことに驚かされる。

「……これはっ」

「敵対するなら殺す。今からぼくが本当の炎と言うものを、魅せてあげるよ」

今度こそ、本当の笑みが男の顔に広がる。金髪は発せられる魔力の影響で浮き上がり、男を中心に熱風が巻き起こる。

それほどの力。

そのとき確かにハクは、ネギは、指の一つも動かさぬほどの緊張感を味わっていた。

「手に入らないのならば、すべて灰となれ」

両手に生み出される炎。

いや、炎の形をした生物のようにうねり猛り轟々と咆哮をあげる。

「こんな、こんな魔法みたことありません!!」

ネギがその尋常じゃない熱気と炎を見て取って動揺を露わにする。無理もない、ハクでさえこの炎熱に目を奪われている。

「ネギ、落ちつけよ」

「で、ですけど!」

「落ちつけ!!」

取り乱したネギに喝を入れる。

「酷な話だね、これを見て死を覚悟でもしたのかい?」

「さて、どうかな?」

男の余裕を見て取って、しかしハクは冷静に返した。

あまつさえ口角を釣り上げて笑って見せる。

状況は最悪だ、妖気はうまく纏えないし、援軍であるエヴァも間に合いそうにない。

おまけに相手がかなりの実力者であり、先手を打たれてこちらの力は削られているのだ。

だが、例え力で劣っても、絶望してもやらなければならない。

ああ、そうさ

どんな魔法だろうと、どんな仕掛けがあろうとも、やるべきことは一つだけだ。

男の後方で千草に抱えられて眠る少女を見る。  
ハクが生きていることを許され、刹那が護ろうとする標マウがそこにいる。  
だったら。

「助けただけだ。簡単なことだろう?」

気持ちだけは勝ると、そう見せつけるためにネギの前に仁王立ちする。

ネギはそんなハクの姿を見て、冷静さを取り戻したらしい。

「……ぼくが魔法で防ぎます。ハクさんは木乃香さんを!」

「馬鹿か、今俺があの子とやりあっても逃げられるだろう。ここは余力があるネギが行った方が確実だ。俺が引き留める、行け」

男を見据えたままネギに話しかける。ネギもその声に応えた。

「何か策があるんですね?」

「一か八かのな、木乃香を頼むぞ」

小さくため息が零れるのが聞こえてきた。信じます、そう小さく  
呟くのが聞こえた。

「作戦は決まったかい?」

先ほどよりも規模が大きくなった灼熱の炎を纏って問いかけられる。千草が放った炎術を遥かに凌ぐだろう。次はまともにやりあって防ぎきれぬ自信などない。

「作戦? ああ、木乃香を助けだすってことに変更はないぞ」

「冗談にしてはセンスがないね」

「ああ、冗談じゃないからな」

そのまま場は静けさを増し、炎が燃え盛る音だけが響いた。

一陣の風となったネギが動いた瞬間。

炎が爆ぜ空間を支配した。

炎に属する全ての粒子よ、我が糧に呼应し敵を喰らえ……

『インフェルノ  
地獄の火炎』

朗々と紡がれる詠唱。

従つように太い螺旋を描く炎がハクを喰らわんと襲う。

魔法の射程圏から逃れたネギに目もくれずにただハクめがけて迫る炎熱。

「どっつして無防備でっ！」

想像するのイメージは一つの道パス、左右対称鏡の如く……

ネギの悲痛な声を無視して集中する。

まっすぐに、素直なまでに愚直に向かつて来る炎に右腕を差し出す。

否、突きだした。

妖気を纏った右手の平から、右足を踏み込んだ体勢。

満足な量の妖気を纏えているとは到底思えないほど弱い。

「右腕の犠牲だけで止められると思うなっ！！」



男の声も耳には入らない。ハクにできるのは想像することのみ。

明鏡止水の境地に至る！

右腕に直撃するとき。

確かにネギはハクの身体にまとわりつき焼き尽くされる姿を幻視した。

【霧島流 後の型、天地灰塵】

詠唱の直後、炎はハクを貫く。

炎は先ほどの比ではない大きさにまで膨れ上がった。

「そのまま燃え尽きろ、『狐憑き』」

男は小さく呟いた。それほどまでにハクが生きていることを想像することなど無理があったのだ。

その炎は最早一人一人の身体を覆っている。

まさに勝利を確信した。

残るのは幼い西洋魔術師だが、今は千草の符術に苦戦して突破できずにいた。

この炎術はある特殊な術式によって増幅されている。この場を戦

いの際に選んだのは、ハクを仲間に引き入れる、その目的と同時に反抗されるのならばここで屠っておくと言う条件があったからだ。わざわざこの広い場を選んだのも、術式の発動率を大幅に引き上げる為であったわけだが、効果は半々であったということだろうか。

「まあ最終的に目的は達せられた、か」

いまだに燃え続ける人だったものから視線を外す。

「千草君、手加減なんてしなくても……」

なぜか違和感を覚える。

千草の方に加勢しようと、身体を逸らした瞬間だ。

「おいおい、まだ終わってないだろうに」「な、に？」

そこでありえない光景を目の当たりにする。なんでまだ炎は燃えているのか。聞こえてきた声はなんなのか。いや、それよりも先ほどよりも弱い炎の勢いは今にも消滅しそう  
だ。

馬鹿なありえない。

口に出さない動揺が心に広がる。

一際強い炎が上がったと同時に、完全に鎮火された。そこには裸同然の姿で、右腕を犠牲にする覚悟で向かってきたはずの霧島白の姿があったからだ。

「馬鹿な、なぜ」

「それを答える馬鹿がいるかね？」

身にまとった服の存在などどこ吹く風。大した負傷がなかったことから技の成功を示唆していた。

「千草君の技でかなりの魔力を消耗していたはずだというのに、ましてや炎の呪縛から耐えきっただと……！？」

それには答えず、不敵に笑って見せる。

瞬間、天から無数の氷爆が降り注ぎ、ガラス片が辺りに耳障りな音を鳴り響かせた。

降りてくる漆黒の小さな影とそれに伴う長身の影。

「たく、わたしが来てみればこの体たらくか。 って、なんで貴様は裸なんだ！？」

「マスター、これが今流行りの羞恥プレイというやつです」

「そうなのか…… ってそんなわけあるかっ！」

空からの襲撃により千草は動きを止め、男も驚愕の表情を露わにしてみせた。

緊張感を感じさせないやり取り、エヴァと茶々丸の姿だ。茶々丸ははやや戦闘による衣服の損傷が見られるだけだが、大事ではないだろう。エヴァに至っては傷一つない。

「時間稼ぎは成功ってやつかな？」

できるだけ余裕を見せた声で言う。実際はぎりぎりの賭けだったわけだが、相手に弱みを見せるわけにはいかない。気絶しそうなほどの痛みを顔に出さずに男に殺気を当てる。

「ふふ、ああどうやら君たちの勝ちのようだ、お嬢さんはお返ししておくでしょう。これ以上は藪蛇になるだろうしね」

その判断に不服を漏らしたのは千草だった。

「こんなことでみすみす逃していいわけ……!？」

「君と逃げ切ることは容易い、がもう一人増えたらあの空の化物に食い殺されるけど、どうだい？」

苦い顔をする千草を宥めて、男は優雅に礼をして見せた。

「セイラン、僕の名前だ」

覚えておけどでもいうように、セイランと千草は闇に溶け込むように消えた。転移術かその類かはわからない。後からエヴァにでも聞けばいいだろう。

急いで木乃香の元に駆け寄る。実際は痛む体を引きずってのろのろとした動きだったわけだが。

「木乃香……」

彼女の無事を確認した瞬間、意識が遠くかすんで消えた。



## 第二十八話 炎に消える（後書き）

さりげなく投稿……

期間が空きすぎてやばいです（汗

もし期待していた方がいたら（いないかもですが）本当に申し訳ありません。

ぼちぼちと更新していくつもりですがまた空いてしまうかも…

気長に待っていていただけると作者としてもありがたいです（汗

あまり納得できる出来になっていないのが心残りですが、先に進めて行こうと思います…

次回、技の説明とかを交え進めて行きます。

## 第二十九話 違える心

「つう……」

「目が覚めたか、あほうめ」

全身に鈍い痛みを覚えながらハクが身体を起こす。どうやらホテルに運び込まれたようだ。太陽が赤い輝きを放っていることからどうやら夜明けらしい。あれから随分眠ってしまったようだと思いを回転させる。

掛けられた布団から起き上がろうと腕を動かすが、右腕に反応がない。

（反動か、かなり重い枷だな）

自業自得ではあったものの、あそこで命を失くすよりはましだっただろうと心の中で決着をつける。

自己の分析を済ませ、声をかけてきた朝日の輝きを受ける金髪の少女に視線を向けた。

「エヴァ、状況は？」

「状況は馬鹿一名負傷、治す薬はない、以上だ」

「木乃香は無事か？」

「……はっ、だから言っただろうに、けが人は馬鹿一名だと」

その言葉に若干責めるようなものが含まれているのを感じ取る。表情はどこか拗ねるようなものだ。

「何か気に入らないことでもあったか？」

「別に。強いて言うのなら、裸の変態に助太刀してしまったこと

が人生の黒歴史になってしまったことだろうよ」

「……意図的に脱いだわけではない。あれこそまさに不可抗力だ」「どうだかな？ 追いつめられて気でも触れたんじゃないのか？」

「マスター、ですからあれが流行りの羞恥」

「おい茶々丸、余計なことは言わなくていいぞ。というかお前はどこからそんな知識を仕入れてきた!？」

部屋に控えていたらしい茶々丸が熱い緑茶を持って姿を現す。いきなりの発言を遮ったのは教育上まずいと思ったからだ。もっとも、傍で寝ているネギにその声が届くとは思えないが。

「ふう、まあいいさ。それで一体何があったんだ？」

エヴァが話を促す。あらましを語ると一つ頷いて返し、尋ねてきた。

「……そうか、相手の目的は近衛だったというわけか。ここで取り逃がしてしまったのはしょうがないとはいえ、なかなかの力量であつたんだ。まだしばらく用心しておくんだな」

「そうだな、俺も今はこんな状態だし」

「ん？ こんな状態と言うが大した負傷ではないだろう。お前くらの使い手ならばその程度の傷、わたしが調合した魔法薬でも飲んでおけば一発だ」

エヴァが疑問を投げかけてくる。エヴァには外傷しか見えていないのだった。もっとも、ハクのいう負傷と言うのは神経的な内部の部分であるため、致し方ないと言うこともあるわけだが。

「まあ、傷は大したことない。だが、右腕がたぶんしばらく使い物にならない」



「な、何を言っている?」

「だから言つたらう、ぎりぎりの賭けで命をもぎ取つたんだって」

そのときの状況、セイランという男の魔法が襲いかかつて来たときに使つた防御技。

いや、防御と言つには自身に犠牲が出過ぎてしまふ。強いて言うなら受け流しだらうか。

「天地灰塵、そういう防御の技の類だ。形としては受け流しに近いのだからうけど」

「ふむ……。してその天地灰塵という技はなんだ? お前の話を聞いているとその時妖気は出せない状況だったのだから?」

「ああ、そうだ。俺は確かにあのとき“外側”に妖気を放出するのはほとんど無理だった。その前にほとんど全力で瞬間的に出したのが身体にかなりの負担を与えたからな」

「ならば、どうやって技を繰り出したんだ?」

エヴァの疑問はもつともだ。自分でもそう何度も同じことをやるうとは思わない。

「相手の魔法に同調させて、無理やり術式に組み込まれる前の魔力に変換し、俺の体内の妖気で魔力を分解したつて言えばわかるか?」

「無茶苦茶過ぎてついていけないぞ……確かにお前の力で可能だったのだから、魔法を同調させるだと? 出来すぎだらうか」

「一歩間違えれば体内で分解されなかつた魔力が暴発しただらうな。だから危険な技だったわけだけど」

「そんな結果論が聞きたいわけじゃないわ! このどあほう!!」

冷静に返したつもりだったのだがものすごい怒鳴り声と剣幕にハクは驚愕した。

「すまん……でも助かるためにはそうするしかなかった。それに一応できる確信もあったんだ」

「……ふん、言ってみろ。ただしワタシが納得できるようにだ」

怒鳴ったことで幾分か落ちついたのか、エヴァが話を進めてくる。あの場で感じたこと、素直に直感で思ったことを口にする。

「セイラン、あの男が使った魔法の魔力が弱かった。……たぶん、それが確信につながったんだと思う」

「ひどく曖昧な答えだな……。で、それがどういう風に確信になったんだ？」

「ああ あいつの“魔法”は確かに“魔法”だった。あの炎の輝きも感じた熱も、唸りを上げて燃えあがる姿も何もかも確かに“本物”だった」

より大きな力の行使には、それに見合った対価となる魔力が必要となる。だというのに、セイランの魔法にはその絶対量は少なく、それよりも遥かに効率よく大きな力を引き出した魔法を行使していた。

「魔力が少ないと言うことはそれだけ精密なコントロールは必要ない。同調させるのはそれなりの環境が必要だったが、追いつめられていたからな、集中力は申し分なかった。それに……」

あの炎を見たとき、ハクは心が躍った気がした。状況が状況だというのに、一瞬だけ身惚れてしまうほどの勢いを持つ炎だった。

「炎には多少なりとも縁があるからな」

そう不敵に笑いながら答えた。

エヴァはその答えに大げさに手を額にあてて見せ、茶々丸はそんな主人の様子をじっと見つめている。

「だから同調しやすかった、とでもいうのだろうか。まあそれは後付けに過ぎないし、できると確信を持ったから実行したわけだが、いやはや、やつぱりまだ完全な技じゃなかったみたいで右腕が犠牲になったというわけだ」

と努めて軽く返してみるが、エヴァはジト目でハクを見ていた。

「お前、他にも動かない部分があるんだな？」

「え？」

「話から聞くに、その同調のパスが右腕だけで行われるわけはなからう。体全身を使って魔力が分解されるだけの道を疑似的に形成させるのだ。恐らく手っ取り早く長い道を作り、かつ体内でもっとも気が多いとされる心臓部……特に胴体を充分に使用するのは右腕から左足にかけての一直線、その箇所は今のお前には動かすのがかなりの手間、そうだろう？」

「……お見事、と言ったら？」

「黙って迷惑をかけようとしていた馬鹿を叩く」

エヴァがほとんど確信をついてしまったが、実際その通りだった。もっとも、一番被害が酷いのは直撃のための入り口となった右腕だ。だがそれよりも驚いたことがあった。

「まさか迷惑をかけられる仲間と違っていてくれたとはな、意外だ」  
「なっ、違うわ誰が仲間と言った！ 勝手にくれたばられてわたしの優雅な京都旅行が邪魔されるのが我慢ならなだけだ！ その為に働くおまえがいなくなったら厄介だからってそういう意味なわけだ」

から、勘違いはするなよ！」

「マスター。はいはい、つんでれつんでれ」

「ぶつとばされたいかこの馬鹿口ボっ！！」

朝だと言つのに元気な主従の喧嘩はしばらく続き、傍で寝ていたネギの寝起きは最低であった。

昨夜、近衛木乃香が何物かに誘拐された。

その事件は未然に防がれ相手の目論見はわからぬままに事態は収束した。

「　　というわけだ。　恐らく木乃香は気絶していたから覚えていないだろうし、無理に事の顛末を伝える必要はないと判断するが、どうだ？」

ハクは今までの現状を刹那と明日菜、それにネギとカモに話した。すでにエヴァと茶々丸には話をつけてあったので問題はないだろう。

「……問題はないでしょう。　そもそも、それを話したところで何が変わるわけでもない」

言葉を返したのは刹那だ。彼女と明日菜とカモは、念のためにホテルに残っていたわけだが、特に何事もなかったとのこと。精々クラスメートが騒ぎすぎて生活指導の新田先生に叱られるクラスメートを宥めていたくらいか。

もつとも、刹那は置いて行かれたことに大分腹を立てていたよう

だ。ハクが負傷していたこともその怒りに拍車をかけていることは疑いようもないだろう。

隣で苦笑して見せた明日菜が口を開く。

「そうだけど、もしもの時の為に木乃香も狙われてることを知ってた方がいいんじゃない？」

「そうはいうが、彼女にできることは精々逃げることだ。今からわざわざ不安にさせる必要はないだろう」

いざとなつたら適当に事情を説明して同行してもらえばいい、そう考える。

「とりあえず、今日の奈良での班行動。俺は各班を回ってみるつもりだが、エヴァと茶々丸は木乃香達と行動してくれないか？」

「はっ、ワタシにガキのお守りをしろとでも？」

途端、エヴァの機嫌が悪くなる。おそらく自由に見て回れなくなるのが嫌なのだろう。久しぶりの外でも束縛されてしまうからか。ハクが妥協案を出す前に、刹那が話に割り込んでくる。

「その役目はワタシが行うので充分でしょう。霧島先生は各生徒の護衛、エヴァンジェリンさんと、茶々丸さんには自由に動いてもらえる遊撃のような役割をしてもらえば問題ない。彼女たちならば移動速度もあるし、かなりの範囲をカバーできるでしょうし」

「いや、そうだが、しかし……」

「いいことを言うじゃないか桜咲。ワタシは自由にやらせてもらう方向で決定だ」

刹那のいうことは正論ではある。だが、どこか憂いを帯びているような、いつもの自信や冷静さから来る判断じゃないような、そん

な気をハクは感じ取った。

「勝手に決めるな幼女、やつらの逃げ足は何度も見ているだろうが。お前が到着するわずかな時間でもやつらにとっては十分な時間になる。そのとき木乃香がまた同じような目にあつたらどうするんだ？」

言ってしまったから、ハクはこれが失言で合つたことに気付いた。合理的に危険を想定して考えた結果ではあつたが、ものすごい視線でこちらを睨みつけてくる刹那に気付いたからだ。

「わたしでは時間稼ぎにもならない、と。そういうことですか？」  
「そういうことを言っているわけじゃなくてだな……」  
「信頼できないならば、そつだと一言言えば済む話です。そういうことなのでしょう？」

「落ちつけよ刹那。誰もお前のことを信頼していないとは言っていないだろう？」

「言外にそつ伝えているのと同じだとわたしは言っているのです」  
場に嫌な空気が流れる。刹那ははつとしてバツの悪そうな表情になる。ハクもなんともいえないこの空気に居心地の悪さを感じてしまふ。

「いい加減にしろ、話が進まないだろうが」  
「そ、そうですね。今はどうするかという話なんですから、ね？」

エヴァとネギの仲介によって幾分か軽くなるが、それでもこれ以上の話は難しそつだ。別に間違つたことを言っていたわけではないのだし、このままその案で通そつ。そつ考えたが。

「はあ、まったく。そんなに心配ならばお前が木乃香の班と行動しろ、ついでにぼーやもな。やつらの狙いは一般人の生徒たちではなさそうなのだし、ワタシと茶々丸が他の生徒たちを見ておけば問題もなからう」

「いいのか？」

いささか過剰防衛とも思える布陣であるが、いざというときに充分にその布陣ならば人員を割くことも可能か、そう考える。

エヴァのことだから観光巡りを付き合えとか、更に場を悪化させかねないわがまま発言をする可能性もあったのだが、どうやらそれは杞憂だったようだ。

「おい、何か今ものすごく失礼なこと考えなかったか？」

「何も。なら、エヴァと茶々丸に任せよう」

みなもそれでいいのか、納得したように首を縦に振る。刹那だけは先ほどの発言の手前特に反応はなかった。

「ふふふ、皆さんにはカメラ付き小型盗聴器を仕掛けておきましょう」

この案に一番嬉しそうなのはネジが外れた茶々丸だった。

現在、一行がいるのは奈良公園。

問題なく進行していくはずだったのだが、そうはうまく事は運ば

なかった。

まず、ネギが五班と同行すると言うことで朝食時にひと悶着あった。どうやら先生と言うのは普通平等に各班と見て回るものだから、そもそもこういった行事自体が初めてのハクにとって、そんな決まりがあつたなどと露と知らずにいたために、現在ネギは各班を行ったり来たりしているらしい。

副担任は例外なのか、特に文句も出なかったのが幸いなのか不幸なのかはこの際置いておこう。

というわけで、今はハク、刹那、明日菜、木乃香と行動を共にし、他の図書館組はなぜか途中から消えていた。というよりもネギにひつついて行ってしまったようだ。他の班でも似たようなやつらがいるようで、ネギのいる周りが随分と大所帯になっているので最早班行動云々など関係ないような気がするが今さらだろう。

当面の問題と言えはおそらく。

「せっちゃん、何か食べへん？」

「いえ、お構いなく」

「あ、刹那さんどこか見物したいところは？」

「以前来たことがあるので、わたしは特に構いません。みなさんで好きなところへ行けばいいかと」

そう、刹那の無愛想さがここにきてなぜか絶好調。

木乃香への対応もなぜかそつなく、いつもなら慌てているであろう場面ですら流している。明日菜の顔はひきつり、木乃香は木乃香で話せること自体が嬉しいのか、特に気にした様子がない。

「疲れる……」

思わずため息を零す。



「ため息なんかついて、どうしたん？」

（お前にも関係があることで悩んでんだよっ！）

とは言えず、元気に話しかけてきた木乃香にまたため息をついてしまう。

「せっかくの旅行なのに楽しまなきゃ損やん。ね、明日菜？」

「ふう、それもそうね。ほら、ネギの奴はどっか行っちゃったみたいだけど、私たちは私たちで楽しみましょ？ 刹那さんも、いつまでも仏頂面なんかしてないでさ！」

明日菜も木乃香に触発されて開き直ったのか、話題を刹那に振るが刹那の方は根が深いらしく軽く手を額に当てている。

「……少し一人にさせてくれませんか？」

「せっちゃん……」

一人歩き出した刹那に、どう接すればいいのかわからずハクはともかく、木乃香と明日菜もその場で立ち止まってしまう。

なぜかわからないが、昨日から刹那との距離は遠い。

今まではそれほどでもなかったはずなのに、ハクにもどうしていいのかわからない。

「やっぱり交友の仕方が下手なのか」

「ん、せっちゃんか？」

「あいつは……さあ、どうかな。少なくとも俺なんかよりはきつと、波風立てずにやれるんだろうっさ」

思えば、自分が長年接してきたのは師匠くらいだ。あとは手と足

の指で数えられるくらいの交流しかしていない。いや、そもそもそれすら数に入れていいのか怪しいものだ。

それが今までうまくやれてきたのは一重に麻帆良学園の生徒たちが明るい事が大きいのだろう。彼女らは人と接するのに大した距離を感じさせないところがある。

もっとも刹那のように気難しい者もいるが。

「そうかな……。うちには、せつちゃんとても苦しそうに見えるんよ」

木乃香が言葉を紡ぐ。今は黙って聞かなければいけない、そんな気がした。

「うち、昨日の夜のことなんやけど……。うっすらと覚えてるんよ」

「え？」

告げた真実に一瞬だけ思考が空転した。しかし木乃香が語るものはハクの知る真実とは異なるもの。

「うちが夜中に目が覚めたときな、せつちゃんが言ってたんや……。『護れなくて、ごめんなさい』って。でも、うち何の事だかわからなかった。身体も重くてそのまま起きることもできずにまた眠ってしもつたんやけど……」

「刹那が……。そうか」

彼女がどんな気持ちだったのか、今なら少しわかる。護ろうとしていたものを、今までかたくなに護ってきたものを、突然横から現れたやつが先導して、ないがしろにしたんだ。そこに彼女の体調が優れないからなどの理由があったにしろ、もつとやりようはあった

はず。

それを少しも考えていなかった。そういうことなのだろうか。

「うちな、今すぐくうれしいんや。どんなことでも今まですごく冷たくされてきたけど、今日のせつちゃんはいつもと違ってのらりくらりと逃げないし、仲良くなれるかもって思うんよ」

ただ黙って木乃香の言葉に耳を傾ける。今、自分に足りないものを探すように、静かに。

「だから、せつかだから、もっと楽しい時間を過ごしたい。お願い、せつちゃんの悩みを聞いてあげて、ハク」

自分に何ができるのだろうか。それはまだわからない。だけど、その木乃香の言葉を聞いて、少しでも力になってやろうと思わされる。いや、思った。

「私からもお願い、先生。桜咲さん、その、昨日のことで悩んだの。自分は足手まといとか、そういうことで」

明日菜も歯切れは悪いが、心配そうにハクに事情を話した。当たらずも遠からずのことを考えていたハクとしては、どうにかしなければならぬだろう。

「わかった、なんとかしてみよう」

うまく笑えたかはわからない。その言葉に二人は笑顔で頷いた。



## 第二十九話 違える心（後書き）

相変わらず技の説明が下手な作者です。  
疑問があつたら一言お願いします（汗

あと気になっているのですが、文章についても一言いただけるとありがたいです。読みにくいか…。具体的に言ってもらえたらなお助かります。

### 第三十話 裏切りの翼（前書き）

総合評価が600を超えました……

お気に入りに登録していただいた読者様、評価してくださった方、本当にありがとうございます。

250人の方が読んでくれているということに糧に頑張ります

### 第三十話 裏切りの翼

(一体わたしは何をしているのだろうか)

声には出さずに刹那は胸の内ですう呟く。

目に映る景色はうつろでその色すら褪せて見える。

いや、見えているようで視えていない。そんな表情。

刹那にとって最重要人物とも言える木乃香をハクに任せて、今は一人で広い公園を散策している。散策と言う表現もどこか違う。さまよっているとも、ただ歩を進めているだけとも言える。

今までの自身の行動、正確には旅行が始まってから何かがおかしくなり始めていた。

敵からの襲撃には見事にやられ、二度目の木乃香が攫われた際には言外に役立たずと言われ留守を任される。

しかも自分の不甲斐なさを棚にあげて他人に八つ当たりなどと、まさかこれほどまでに自分が未熟だったなどとは露とも知らなかった、刹那はそう思いたため息を零した。

感情に制御が効かない、未完成な自分。

ただ、木乃香を護るための剣であれと自身を戒めて、精進を続ける日々だった自分。

そんな自分の手元に実力無しの烙印が押されれば、そこに残るのは何だろうか。

それでも彼らは自分を必要な人材だと見てくれるのだろうか。

「まさか……使えないのならば、要らないじゃないか」

不意に影が落ちる。見上げた先にいるのは何者か。

白銀の髪を携えた青年の姿だ。かつちりと着こんだスーツが板についた姿で、もう見慣れたものとなっている。

その姿を見て、普段ならば安堵するはずなのに刹那の心はざわついた。自分ではどうしようもないほどに。だから、刹那は嫌悪感を隠そうともしなかった。

「一人になりたいと言ったはずです。それに、お嬢様の護衛はどうしたんですか？」

「それを刹那が言うか……。周りの気配を探って当面の安全を確保……。したつもりではいるが、なるべくなら早く戻った方がいいだろうな」

「ならなおさらどうして」

自分のことは棚にあげて言う刹那であったが、ハクは特にそのことに関して突っ込みを入れずに苦笑交じりにそう答えた。

「……みんなお前のことを心配してるんだよ、刹那。いろいろあったから、さ」

歯切れが悪く、ハクはつつかえながらも優しく声を掛ける。

「いろいろ、ですか。しかし、わたしは昨夜の件に関わっておりませんし、いうほどの事態には巻き込まれていませんが」

尚も刹那は辛辣に当たってしまふ。何が刹那をそうまで掻きたてるのかはわからないままにただ言葉をぶつけてしまふ。

「すまない。昨日の夜の事は、万全ではなかったからといって刹那を置いていくべきでは、なかったのかもしれない。それは俺の



判断ミスだったとも思う。　　けどな、決して刹那が実力不足で信用が置けないから連れて行かなかったんじゃないんだ」

（違う、言ったはずだ。わたしは信用されていなかった。それはこの間まで敵だったはずのエヴァンジェリンよりも、ということ）

「刹那には残って他の生徒たちのことも見ていて欲しかったというのも」

（別にそんな言葉が聞きたいわけじゃない、わたしはわたしの信念を通すために馳せ参じたかった）

溜まっていくのは負のストレス。どんな言葉も、今の刹那には心を抉る言葉となる。

この感情は理解できない。この思考は納得できない。  
心のどこかでそう叫んでいるのに止まらない、とめどなく溢れる罵詈雑言に耳を傾けてはいけないと自制しているはずなのに。

「　　だから、気にするな。　　俺が、刹那も木乃香も護るから」

何も耳に届かない、響く言葉は嬉しいはずなのに、今はそれがどこまでも空々しく響いた。

ああ、そうだ。わたしの手には何も無い、何も残らない、何も勝ちとれない。ならば、わたしのいるべき場所はここではない

『ぼくの元へおいで』

どこからか聞こえる甘美な声。それは聞くだけで“安心させる”、聞くだけで自分に“居場所を与えてくれる”。そんな気分にさせて

くれる。

何もなくなってしまうた刹那の抛り所に、それ以上の場所があるだろうか。

今度こそ刹那は心地よい声に身を任せた。

刹那はすぐに見つかった。ハク自身、刹那に何を言うべきなのか、何を伝えるべきなのかは漠然と決まっていたが、いざ声をかけようとなると尻込みしてしまうわけで、声を掛けるタイミングを窺っていた。

ちょうど、刹那が人目につかない場所まで来たからか、どうやらこちらに気づいて声を掛けてくる。それに合わせて会話を展開する。口下手なハクにとっては至難の技であったが、刹那は黙って聞いているばかりであり反応を返してこない。

「刹那？」

自分が話している傍ら、苦しそうに刹那が胸を抑え込み、今にも涙を零さんところえている姿を見てハクは絶句した。

それは体調不良とか、何かしらの怪我をした、病気であるといった原因とは皆無であると、なぜだか直感した。

頭の中では理解していたはずだった。刹那がどんな風にどんなことで悩んでいるのか。

答えは簡単なはずだった。ただ刹那にハクが考えていることを納

得してもらえればそれで終わりのはずだった。

だというのに、今の刹那はハクが見たことがないような姿をさらしている。

自分がただ馬鹿だったのだろうか、いやそうなのだろう。少なくとも刹那をたつたの一日で追いつめるほどに。

だから、優しく声を掛ける。自分のような無骨なものに絞りだせる言葉なんて高が知れている。

だけど、彼女をいたわらずにはいられなかった。自分の考えていることだけはわかって欲しかった。

「だから、気にするな。俺が、刹那も木乃香も護るから」

そう口にしたときだった。

「護る？ 実に面白いね、“護る”か」

「セイラン……」

現れたのはセイランと名乗った金髪の術師。たつた数度の邂逅を得て、ハクの中で着実に彼に対する嫌悪感が芽生えつつあった。

「それは何から彼女を“護る”というんだい？ 彼女を襲う脅威から？ 彼女を蔑にする者から？」

静かに対峙するその距離は遠い。瞬動を使った奇襲は成功しないだろう。あれは初見でも成功率は五分五分だ。すでに手の内を見せた後では厳しいものがある。

ハクはセイランが見せるであろう隙を待つ。

「刹那、しっかりしろ」

未だに立ち上がる気配さえ見せない刹那を背に庇うように動く。しかしセイランは攻撃を仕掛ける様子はない。

「君もいい加減現実を見たらどうだい？　こちら側の存在だと言うのに、君もぼくらを敵だと言う。なんとも矛盾だね」  
「黙れ」

短く告げる。この男の前で迂闊な会話を許してはいけないと、心の中で警鐘が鳴る。しかし、隙が出来ない以上、敵の懐に入るにはリスクが大きすぎた。

「彼女は悩んでいるよ、自分の立場に。人間の味方からも信用されず、妖の君からも信頼を置いてもらえない半端な存在として、ね」  
「……刹那に何をした」

ハクは自身を妖あやかしといったセイランに、警戒を強める。もともと正体を知っていることは予想の範囲内であったが、今は彼がどれほどの情報を持っているかは、関係ない。

暗い笑みを漏らしたセイランにハクは闘争心をむき出しにして言葉を放つ。

「何も、ただ彼女の“心の振れ幅”を大きくしただけ」  
「心の振れ幅？」  
「そ、負のベクトルに向けて大きくだけどね。本当は君にも掛けようとしていたのだけれど、異常なほどに君は抗魔力が高いみたいだね。効果のほどは現状を見れば明らか、さっぱりだったよ」

ふうと肩をすくめて見せるセイランにハクは後ろの刹那を振りかえる。

ハクに抗魔力などの加護がないことは自身で百も承知であるが、

今はそんなことよりも刹那がかかっていたという何かしらの“術”が気になった。

「刹那、正気を保つんだ」

「う、るさい」

声が、零れた。掠れた弱弱しい刹那らしくない声。

術の影響なのか、刹那は完全に動揺しているみたいだと考える。

「うるさいうるさいっ！」

一閃。鞘走りの加速を利用した居合い抜きが、先ほどまでハクが立っていた空間を切り裂く。咄嗟の殺気に後ろに飛んだのが幸いした。

(敵の術中にはまっているのか!?)

ハク自身どう対応すればよいのかもわからない。今まで味方に裏切られるような経験などなかったし、刹那が裏切るとは思ってもいなかった。

「はは、焦ってるね。彼女のこと信用してなかったんだろっ?」

「違う、今のはっ」

「ほら、彼女が斬ったのは君に当たるか当たらないかぎりぎりの範囲だよ。やっぱり君は信用していなかったみたいだね?」

言われて思考は停止する。

はたしてセイランの言うことが信頼の証立てとなるかと言われたらそんなことはないだろう。

だが、今の心理状況が危うい刹那からはセイランの言葉の方が大きく作用してしまう。  
それが心の向きを、負のベクトルに振れ幅を大きくする、ということならば。

「君はもつとも信頼を寄せていたはずの男に“裏切られたんだよ”、桜咲刹那」

「刹那っ、こいつの言葉を聞くな！」

咄嗟にできたのは叫ぶことだけだった。

醜く歪んだ笑みを浮かべるセイラン。その言葉は刹那の心を突き崩す引き金となる。

ハクにはセイランを止める余裕もなければ、刹那を正気に戻す言葉すら持ち合わせていなかった。

恩人であり、仲間であるはずなのに。

『ああああああああっ！！』

獣のように、猛々しい咆哮を上げるのは、ハクが護るべき人。神鳴流という剣の技を以て、人に仇名すモノを討滅する剣士。武芸の達人、されど、不器用な優しさを持った中学生の少女。

だが、そんな彼女の姿は人の姿を取りながらも別のモノとなる。どこまでも白く、陶磁のような翼。

背中からまるで殻を突き破るように二対の翼が刹那の背中から生え出した。

状況が違えば、それは天使の誕生に見えたかもしれない。だが、いまのハクにはそんなことを考える余裕はなかった。

「鳥族の翼？ そんな……どうして」

本来、鳥族の翼は漆黒。更に言えば、人間の姿であるものなどない。

「彼女は鳥族とのハーフで禁忌の子だよ。まさか、そんなことも知らなかったのかい？ それでよくもまあ仲間ごっこが出来ていたね」

仲間ごっこ、口の中でその言葉を繰り返す。

刹那は今もハクに刃を向けたまま。正気かどうかもわからない。何せ言葉も発せず、視点は定まらないままに、呼吸も荒い。

「あ……」

掛けるべき言葉は何なのか、正気になれとでも言えばいいのか。だが、心の動揺から未だにハクは抜け出せない。彼女が例え何者であろうとハク自身、妖あやかしの身である。

では何なのか、彼女に刃を向けられたことが、それを信賴せずに回避してしまったことが。

心につかえた何かが、ハクから言葉を奪う。

「さあ、共に行こう。時は近い」

ふわりと刹那の傍に舞い降りるセイラン。いまだに術の正体は掴めないが、この移動術は瞬動とも似つかない。

だが、刹那は一瞬身体を堅くし、セイランを追い払おうとする。

「大丈夫さ、前にも言ったろう？ 君とぼくは同じこちら側の存在

さ、臆することも、恥じることもない」

その言葉に、刹那はゆっくりとだが夕凧をしまった。  
それはセイランを認めるということ。  
それはハクを拒絶するということ。

「ぼくの元へおいで」

意識がはつきりしているとは思えない刹那の手を取り、セイランはこちらに笑みを向ける。

「行かせるわけにはっ、刹那！」

自分でも驚くほどの声を上げてハクは刹那に手を伸ばす。彼女に敵意も殺意もないと、わかっていたはずなのに。

だが、身体はそう思い通りには動いてくれない。言葉とは裏腹に右腕は動かなかった。

だから、走り寄り刹那の腕を掴もうと懸命に左腕を伸ばす。届かない。

セイランと共に消える刹那の顔だけがやけに鮮明に脳裏に焼きついた。

ただ一言、さようならと呟いた刹那の顔が。





第三十一話 定まる指針（前書き）

### 第三十一話 定まる指針

「それで、どうする気なんだ？」

エヴァの問いかけに何も答えられないまま、時が過ぎる。

刹那がセイランと共にいなくなってから、奈良観光は何の問題も起こさずに終わり、全員がホテルへと戻っていた。

ネギにも何かしらのトラブルがあつたらしく呆けていたり、明日菜に至ってはハクと共に戻らなかつた刹那を気にかけていたようである。ハクは刹那がいなくなったことを木乃香にも明日菜にも伝えるようなことはしなかつた。

そして、先日のようにハクとネギの部屋に関係者が集まつたところで今回起きたことを話した。

「刹那が、敵に連れ去られた」

“裏切つた”のではなく、“連れ去られた”。ハクはそう表現した。もしも裏切つたと皆に伝えてしまえば、それが事実になつてしまふ、そんな考え。

それはとても危険なことだつた。

考えてはならないと思ひながら、刹那がもしも裏切つていたのだとしたら、突然の不意打ちにあつたときにネギや明日菜は刹那とまともに戦うことはできないだろう。エヴァや茶々丸に限っては、一

瞬動きが止まるような動揺で済むかもしれないが。

「ちょっと待って！ それじゃ今日桜咲さんが戻ってこなかったの  
って……」

「……そういうことだ」

ハクはその言葉に顔をしかめるしかなかった。だが自身の不甲斐  
なさを呪っている場合でもない。

「そ、そんな、あの刹那さんが」

ネギは先ほどまでの呆けた顔から一転して暗い顔をする。

「僕が……呑気に観光なんてしていたから……」

「動揺するのはわかる、だからなるべく事態は早く動かなければな  
らない。明日はすぐに本家へと向かおう。クラスの引率は他の  
先生に任せる。幸い、明日は自由行動だから」

「待ちなさいよ！ それじゃ桜咲さんはどうするのよ！？ 助け  
るんじゃないの!?!」

明日菜が怒ったようにまくしたてる。それはそうだ、ハクが優先  
するのは救助ではなく、任務が先だったから。

「これでもし桜咲さんに何かあったら、私はあんたをっ!」

許さない、そう続くであろう言葉。

ハクの頭によぎるのは刹那の最後の言葉、表情。  
別に罵られようと、蔑まれようと構わない。

(俺のせいでこうなったようなものだからな……)

無論、ハクだけに非があったかはわからない。だが、現状である状況を打破できたのはハクしかいなかった。刹那が連れて行かれるのを防ぐ手立てなど、いくらでもあったかもしれない。

しかしすべては後の祭りだ。だから自身の失敗を誰かに責め立てられる方が楽だと、なんとも後ろ向きな考えばかりが浮かんでしまふ。

ハクは顔を上げて明日菜の顔を正面から見据える。その瞳は怒りにつり上がり、顔を泣きそうなほどに悲しそうに歪めていた。

「どこにいるのかもわからない、何の手がかりもないこの状態でのこのこ出て行って足元を掬われてみる、残る結果はしてやられた敗北だけだ」

「私が言いたいのはそんなことじゃなくてっ！」

ハクとて何もしなかったわけじゃない。すぐに周辺を探したり、魔力の痕跡を探ったりもした。見つかったのは、数枚の呪符のみ。それ以外の手がかりは皆無だった。

ハクが何かを言うのを遮って、今まで傍観していたエヴァが口をはさんだ。

「神楽坂、貴様が言うことは確かに至極当然なことなのだろう。

だがな、こいつが桜咲を連れ戻そうと、何もしなかったわけがあるまい？ そんなことお前とてよくわかってはいるはずだ」

「それは……そうかもしれないけど、でも」

「おまえが言っているのは、自分の思い通りにならない駄々をこねる子供のようなものだ。何かを成し遂げたいならまずは自分で動け」

明日菜は、エヴァのその言葉を受けて黙りこんだ。

「それに、やつが桜咲を連れ去ったと言うのなら、こちらとの交渉材料として桜咲が使われる可能性があるかもしれない。更に言うならば、やつらの目的は親書と近衛なのだろうから、まだ接触の機会はある」

エヴァが冷静に状況を伝えたことで明日菜の熱も冷めたようだ。畳の上に乱暴に座り込む。

「そうですね、エヴァンジェリンさんの言うとおりです。僕だって、桜咲さんが連れ去られた時、何も知らずに呑気に観光していて浮かれていました……。だから僕もハクさんを責めるようなことを言うつもりは、ないです」

どこか含みを持たせたネギの発言。拳を強く握りしめて、唇を噛みしめるネギ。言外にネギも明日菜のような意思があったのかもしれない。それを口に出さないあたり、ネギも成長しているのだろう。せめて悟らせないようにしてほしいと思うのは酷だろうか。

「すまない……。とにかく明日はこのメンバーに加えて、木乃香を連れて本家に向かおうと思う」

「ですが、旅行中に抜けても大丈夫でしょうか？ それに、明日菜さんや木乃香さんまで抜けたら班として成り立ちませんか」

「今日だって班行動していたわけじゃないだろうか？ あいつらなら大丈夫だ」

図書館組と呼ばれる面々を思い浮かべる。内気な性格かと思いきや、なかなか行動力があるのだ。彼女らは好きにいろいろとやるのではないだろうか。それに明日菜は残していくという選択肢もあるが、下手にこれだけ関わっているのだ。ハクの情報すら掴む敵側に、

関係者であることがばれていると考えて行動しておいた方がいいだろう。ちなみに、現状では刹那は急用で一度実家に帰っていると表側の理由になっている。

「一教師としては失格だろうがな。だが、他の生徒たちへの護衛はどうするんだ？」

「やつらの目的である親書と木乃香がこちらにいれば、嫌でも目はこちらに向くだろう。もっとも人質として生徒の身柄を拘束される可能性も否定できないが……」

「ふむ……ならワタシに任せておけ。良い伝手がある」

ニヤリと笑みを浮かべるエヴァ。

「それは信用できるのか？」

「ああ、多少値は張るが……まあこの際だろうし、致し方あるまい」

そう言つてエヴァは茶々丸と立ちあがる。これ以上話すことはない。自然と解散の流れとなった。

「さつきは、ごめんなさい。ちょっと頭に血が上ってたわ」  
「……気にするな」

明日菜の謝罪に、短く答える。

「でも、忘れないで。助けたいって思う気持ちと悔しいって気持ちはずごく強いつてこと」

ハクから視線を逸らさずに部屋から出て行くのを見届ける。とてもこの間、弱さを見せた少女とは思えないほどの意思の強さだった。それが彼女の芯の強さなのだろうか。

その明日菜を見ていたからか、やや控えめにネギが口を開いた。

「刹那さん、大丈夫ですよね？」

軽々しく肯定はできない。刹那の状態は、傍目に見ても良いものとは言えなかった。肉体的には問題ないだろうが、刹那の精神がどういう状態だったのかは窺えない。

負のベクトルに心の振れ幅を動かす。心に大きく作用させる催眠魔法の類なのだろうが、その効果範囲、発動条件など効力だけしかわかっていない。例え説明したとしても解決策は自分の意思を強く持つことだろうか。

そしてつい考えてしまう。

もしも、万が一にも刹那がその刃を向けてきたら。

こちら側の誰かを傷つけたのなら。

そのとき自分はどうすればいい、何をすべきか。

答えはわからない。わかる術がない。

「大丈夫じゃなかったら、どうする？」

思わずネギに問いかける。それはどういう意味で尋ねたのか、ハク自身にもわからない。ただ口から零れおちた、そんな無責任な言葉。

「怪我をしていたら治します。捕らわれているのなら助けだします、それが先生としての責任ですから」

そうか、と小さく返答する。ネギのまっすぐな瞳を見ていることに耐えられなくなる。

自分の迷いだけは晒してはいけなと思う。



「といっても、空回りばかりして、肝心な時に役に立っていないんですけどね」

「ややうつむいて続けるネギにかける言葉も見つからないまま、そっと頭に手をのせる。」

「大丈夫だ」

確信も何もない。ハクは希望的な考えをただ口にした。

真夜中に近い時刻、ハクは一人ホテルの屋上にいた。だんだんと温かくなる季節とはいえ、少々肌寒い。月を見上げながら、周りへの監視を続ける。

「良かったのか、本当のことを言わなくても」

「本当のことって？」

静かにふわりと舞い降りたエヴァに目もくれずにとぼけてみせる。

「はあ、別にワタシに隠すこともないだろう。……桜咲のことだ」

一瞬だけ眉をぴくりと動かしてしまふ。どうやら完全に誤魔化しきることはできそうにない。いや、もともとエヴァにはそれすらわかっている節はあったのだ。

「連れ去られた」のではなく、「向こう側へ行つた」のだろうか？  
それも自分の意思で、な」

「あいつが自分の意思で行くわけないだろう」

思わず低い声で反論してしまう。ハク自身、未だにあの衝撃から抜け出せずにいるのだ。セイランという術師がかけた術による洗脳、そう考えている。

「それはおまえの思い込みだとしてもか？」

「思いこみじゃない」

喉を鳴らすようにエヴァが笑った。確かに子供じみた反論だったかもしれないが、それ以外にハクには答えようがない。自分の出した結論を否定するためにはそれを信じないことくらいしかできない。

「おやおや、一番子供だったのはおまえだったのか。これは意外だな、とても神楽坂に説教垂れたのと同じ人物とは思えんな」

「……喧嘩を売りに来たんだつたら買う気はない。さつさと寝ろ」

「さて、何のために来たんだつたか？」

怒気を含んだハクの声に、やれやれと肩をすくめて見せるエヴァ。その小馬鹿にされたような態度にハクはなんとか苛立ちを顔に出さないように必死だった。

唐突に衝撃がハクの顔面に襲いかかった。無様に転げまわるハクを見下ろしているのはエヴァ。

「ああ、そうだったそうだった。何やら一人で勘違いしているやつがいるようだったので、一発ぶん殴るために来たんだつた」

突然のことでハクが問い返す間もなかった。口の中は不意打ちでぱっくりと切れて独特な血の味がする。

「どうだ、すっきりしたか？」

「殴られて良い気分になるやつがいるとしたら、そいつは真性の変態だろうよ」

言葉と同時にエヴァを見る。その顔はどこか、まるで人を心配するようなそんな表情。

「悩むのが悪いとは言わんがな、全部自分で背負いこむのはやめておけ。そのうちお前も“あいつ”のようになる」

あいつというのは誰のことか、今ハクの中で考えられるのは一人だった。

何もかもを一人で抱え込んで、拳句の果てに何を思ったのか突然消えてしまった一人の大馬鹿野郎。

立場が違えば、それがハクのことでもあったかもしれないと、そういうことだろう。

口の中の血を唾と共に吐き出し、少しだけ冷静になってエヴァに問う。

「それは経験か？ それともどっかからの受け売りか？」

「ふん、人生論だよ、“ぼーや”」

傲岸不遜に言い放つエヴァの姿には、威厳があり、そこには確かに長い年月で培われた重い何かがあった。

それを頭の中で理解し、エヴァがハクの事を気にかけていたことに思い当る。

どこかすつきりした頭で、その言葉を反芻しくつくつと笑みがこぼれた。

「なっ、何がおかしいっ!」

「いやいや、そんなお子様ボデイに言われてもな、ぷつくく」

「ええい、笑うな! せつかく人が励ましてやるうとだな……」

「励ますのにぶん殴るのもどうかと思うけどな、それにしてもあのエヴァが人を励まそうとねえ」

なぜだか空気は軽くなり、エヴァは先ほどまでの態度も自信もなくなつて顔を赤くする。

「う、うるさいっ! もう知らんわ!」

「はは、冗談だつて」

「だから知らんと……」。 はあ、もういい」

このまま続けてもからかわれ続けるだけだと気付いたのか、エヴァは諦めたようにため息を零した。

「ああ、それと護衛の問題は片付いた、それだけは感謝してもらつ」

拗ねたように闇夜に舞い上がる少女に、ハクは声をかける。

「ありがとう、と。」

刹那にも、こうして接することができるのだろうか。

一瞬だけ、そんな姿を想像する。それはなんとも楽しそうだとも。

「それで、どうする気なんだ?」

空を舞いながら、エヴァは何気なく尋ねてきた。

答えられないままに、過ぎる時。

そもそも最初から簡単だった。

何をこんなにくちやくちや考えていたのか、馬鹿らしささえ感じ  
てしまう。

ハクの中で答えは決まっている。

「連れ戻す」、それだけだろ」

### 第三十一話 定まる指針（後書き）

シリアス（笑）ばかりですね（汗）  
十二月中には修学旅行編も終わる…かもわからないから断言はしません

もしかしたらこの話自体が修学旅行編で終わるかも……  
一応学園祭くらいまではやるつもりで書き始めたんですが  
もしそうだったらそれはそれでご了承下さい

12/9 タイトル 第三十二話 第三十一話 に訂正しました  
（改）マークはあまりつけたくないのですが……

### 第三十二話 心中推し測る

翌朝、一つの懸念事項にハクは頭を悩ませることとなった。

一重に、この状況を木乃香に説明するか、である。

まず魔法の存在は悟らせない、当たり前。

木乃香の存在が敵対する何者かに狙われている、どうして一介の教師がそんなこと知っている、電波か。

うまく誤魔化すにしても、彼女は嘘などに関しては意外と敏感な部分がある。下手に取り繕うよりは素直に話した方がわかってくれるのでは。そんな風に考えて思考をやめて、進む歩みを止める。

ホテルの廊下で立ち止まったハクを、邪魔そうに他の客が避けて歩いて行く。

ハクの目に留まったのは一人の少女。

「……おはようございます」

朝だと言つのに顔を不機嫌そうに歪めた木乃香がいた。心なしか声も低い。ハクが挨拶を返すよりも早く、木乃香の方から更に話しかけてくる。

「せつちゃんは、結局どうなったん？」

昨日の顛末、表向きの事情では急用で実家に帰っているということ。それはつまり、木乃香の実家にいるということだ。

思えば、ハクも刹那に関して詳しい事情を知っているわけではな  
いことに気づく。

彼女の両親の話は、皮肉にも敵側からの情報しか知り得なかった。  
もっとも、元は孤児として詠春が引き取ったと言う話だけは耳にし

たことがあったが、現在の家族構成などは知ってはいない。  
知る機会もなかった。

いや、それには少し語弊がある。  
聞く必要がなかったのだ。

刹那はそこにいるのが当たり前だった。いつでも知ることができ  
る距離にいながら、ハクはそうしようとしなかった。

必要以上に近くにすることが躊躇われた。対等な扱いをしている  
ようで、自分から遠ざけてしまっていた。

そうすることが一番いいのだと、都合がいいからと。

その積み重ねの一つの結果として、現在いまがあるのかもしれない。

「……今日、近衛の実家に行く。そこでなら刹那に起こったこと  
を説明できるかもしれない。ついてきてもらえるかな？」

「かまへんよ。でも、きっちりと、一から十まで全部とは言わな  
いけど、教えて欲しい」

まっすぐなその瞳に貫かれる。もう彼女はほとんど気付いている  
のかもしれない。自分が何に巻き込まれているのか。

そして、ハクのこと。

それでもやはり最後まで、自分のスタンスは押し通すべきなのか。  
危険から遠ざけて遠ざけて、火の粉の届かぬ遠くで平和に暮らせ  
るように努力すべきなのか。

無意識ながらも遠ざけていた刹那のこと。それが今回の事につな  
がったと言うのなら、どうするのが最善なのだろうか。

じつとハクを見続ける意思の強い目に、視線を合わせることがで  
きずにハクは視線を逸らす。

「出来る限りは、な」



打算的なことしか考えられなくなった自分に嫌気が差しながら、ハクは答えを濁した。

不幸中の幸いというべきなのか、自由行動のおかげで随分と事はうまく運んだ。

最悪の場合、夜のうちに戻れる保証もないので刹那の様子を見てくると言う建前の元で一旦旅行から離れ、明日菜と木乃香は図書館組と別行動を取り現在、一行は本山へと向かっている。

木乃香にとって、エヴァと茶々丸の存在が疑念が生じたりもしたが、エヴァは黙殺し、茶々丸はどこから出てくるのか正当な理由らしきものをつらつらと並べ立ててうまく誤魔化したようだ。これからはそういった交渉事に茶々丸の力を借りるのも悪くはない、などと一瞬だけ思ってしまった。

途中、不穏な気配を感じつつも、エヴァの魔法によってこちらの向かっている場所とはまったく別の場所にその気配を誘導させている。仕掛けてくる気があるのか、というのは微妙なところだ。存在を意識させることにとどめているには何かしらの理由があるのだろうけど。

このままいけば、おそらく本山までは無難にいくであろうことが予想された。だが、こちらの目的地は悟られているだろうと言つてことを読むのが自然、というのが前提ではある。

「このワタシがついているのだ。 早々遅れを取るなどないだろつね」

そう自負してただけあって、実際何の問題もなく事は進んだ。エヴァという存在が最大の抑止力になっていると思うことにする。

無事にたどり着いた目的地。

ある意味ハクにとっては久しぶりというどこか懐かしさを感じるべき場所だが、感傷に浸っている間など存在しない。

「「「おかえりなさいませ、木乃香お嬢様」」」

出迎える複数の巫女服姿の女性たちに目を丸くする。

「うわ、すご！ 木乃香ってこんなにいいところのお嬢様だったのね！」

「いいinchよさんは洋風なお嬢様ですけど、木乃香さんは和風なお嬢様だったんですね！」

「ぼーや、その驚きは何か違う気が……いや、何も言つまい」

各々が感想を述べる中で木乃香だけがどこか居心地悪そうに頬を掻いていた。

「そ、それよりも、これからどうするん？」

「そうだな、まずは近衛の保護者にあいさつに伺いたいのだけれど」

木乃香の言葉にハクが対応する。まずは親書を渡し、刹那に関して救援を求めるのがいいだらう。個人では掴めない足取りも、組織となれば色々な情報が流れてくるはずだ。

だが、その中でもすでに刹那が敵の手に落ちたという情報も含ま

れている可能性も否定できない。

そうなったとき、詠春はどう動くのだろうか。

救出する価値があるとして助けを出すのか。

それとも。

敵として討て、そういふのだろうか。

そんなどうしようもない思考にハマリかけて、意識を戻す。木乃香の案内で屋敷の中を進んでいき、とうとう詠春がいるという広間に着いたのだ。

「ここからは、俺とネギ先生だけで」

「……わかりました、うちらはしばらく家の中に居ればいいん？」

「ああ、すまない。しばらくゆっくりしていてくれ」

「あはは、これじゃどっちが家の者なんかかわらんね」

言われてみてはたと気づく。確かにハクは教師として木乃香よりも上の立場であるが、家の中でまでこの言われようでは失礼ではなからうかと。いまからする話に比べ随分と平和なことを考えてしま

う。

「そうだな、悪い」

「気にせんでええって、それじゃ」ゆっくり

「そういつて下がって行く木乃香を見送ると、エヴァと茶々丸が目くばせしてくる。

「ワタシ達も問題ないだろう？」

「ああ、行こうか」

明日菜は木乃香と一緒にいった。彼女にもあまり深い話を

聞かせたいとは思っていなかったので丁度いい。

意を決して声を掛け、広間へと入って行くと、瘦身の眼鏡をかけた男性、近衛詠春が静かに座していた。

「ようこそ、東からの使者殿」

その体躯から発せられる言葉は確かに長にふさわしい威厳を携えている。幼いころに比べたらやや身体は衰えたのかもしれないが、彼が持つ雰囲気は年を経ても変わつたところがなく少しハクは安心した。

ネギは恭しく一礼すると、懐から親書を取り出す。

「今回、東の長、麻帆良学園学園長近衛近右衛門から、使者として遣わされたネギ・スプリングフィールドです。そしてこれが東の長から、西の長への親書です。どうぞお受け取りください」  
「確かに、承りました」

一通り親書に目を通す詠春。ふむ、と一言頷く。

「東の長の意を汲み、東西の仲互いの解消に尽力するとお伝えください。任務御苦労でした、ネギ・スプリングフィールド君」

「失礼ながら、西の長、近衛詠春殿。本日は親書の件とはもう一つ別の件で長にお伺いしたいがございます」

形式上のやりとりが終了すると、すぐにハクは詠春に窺いを立てた。それに対して、詠春は怒ることもなく先を促す。

この落ちつきようを見て、ハクはすでに刹那のことに關して詠春は知っているであろうということを予想した。

「長殿のお嬢様、木乃香様が、恐らく反西洋魔術師の集団に狙われ

ています。そして、それを護衛するはずだった神鳴流剣士、桜咲刹那が敵の元にいます」

瞬間、詠春は眉根を寄せて難しい顔をした。報告は出来る限りはつきりと伝えるべきところを、ハクは敢えてぼかした。

“敵の元にいる”

なんと微妙な表現だ。敵に連れ去られたとも取れるし、裏切ったとも取れる。その判断を下すのは詠春であるのはわかっているが、ハクの主観で連れ去られたと言いきってしまえば、そのせいで犠牲が出たときに目も当てられない。

いや、そんなことを言うのなら最初から裏切ってしまったこと前提で話を進めるべきなのだろうが、ハクにはどうしてもそれを裏付ける決定的なものは何もない。

詠春とて、きつとそうであろう。

幼いころから、娘と同じように接してきたのだから情は深いはずだ。

きつと切り捨てるなどという選択肢ではないはず。

ならば、どうするのか、その答えはハクの中ではわからないが少なくともそういった類の言葉の後に、協力を要請されるはず。東西が協力して事に当たったとなれば、しばらくは反西洋魔術師の派閥も表立って動きづらくなるだろう、ということも見越した上で。

だが、詠春はハクの予想を裏切った。

「……………そうですか。すでにこちらでもある程度の情報は掴んでいますが、それでもまだ不足しています。とりあえず、この本山の結界内では危険なこともないでしょう。本日はここに滞在し、明日本来の仕事に戻ってはとうですか？」

言外に詠春はこう言った。“この件に関わるな”と。

「待ってください、それは」

「ああ、そうですね、木乃香の方はしばらくこちらで預かるので安心してください。然るべき護衛を付けて、また麻帆良学園に戻します。もっとも、問題が解決するまでは迂闊に動けないので一週間ほどは戻れないでしょうけど」

「っ！ そういう問題じゃ」

「それで、貴様はどう対処するつもりなんだ？ 西の長よ」

今まで黙りこんでいたエヴァが唐突に口を開く。

「これはこれは、あなたが“あのバカ”以外に肩入れするとは驚きましたね」

「戯言はどうでもいい。桜咲は殺すのだろうか？ それが組織のトップとしての責任ならば、な」

やめてくれと懇願するようにハクはエヴァを見つめる。なぜ悪い方に事を動かそうとするのか、今のハクには理解できなかった。

違うか、理解できないわけじゃない。その理由は十二分にわかっているし、エヴァが言うことが正論であることも理解できている。ただ感情の部分が邪魔をして、ハクに納得させないようにしているだけ。

ハクは静かに唇をかんだ。

詠春は相変わらずのしかめつらのままで、口を閉ざしていた。

その表情にわずかながら苦渋の感情が目に移り、彼も悩んでいると言っことを窺わせる。

「組織のトップですか……。それを言われると動かざるを得ない」

詠春はただそういつと黙したまま目を閉じる。

場の空気がにわかには緊張を高めていく。ネギは先ほどから硬直したままだし、茶々丸が口をはさむこともない。エヴァは相変わらず腕を組んで詠春を値踏みするようにみている。

ハクは、ただじつと詠春を見据えている。

「霧島白」

廠かに、詠春は目を開きながらハクの名を呼ぶ。

「はい」

「麻帆良学園での仕事御苦労だった、報酬は後日支払うことにしましょう。それで、早速ですが次の仕事の依頼を申しつけます」

ハクはそのことに動揺した。

確かに元は詠春からの依頼で派遣されたのだが、現在の雇い主は学園長ではないのだろうか。いや、そんな瑣末なことなど気にしていられない。

詠春の目を見つめなおす。そこに何が映っているのか確かめる。強い意志を持った瞳で詠春を見つめるハクがいる。

「事の発端である、反西洋魔術師の集団を捕えよ。裁量はすべて現場の君に一任します」

それは、組織として動くよりも先に依頼として事を済ませようと  
言う配慮。

組織が動き出してからでは、刹那は殺されたとしてもおかしくない。そこをハクがどうにかできれば問題は生じない。

だが、万が一ハクがしくじったら？

敵の目的を遂げさせてしまったら？

恐らくそのとき一番に責任を被るのは近衛詠春。ここで下手を打てば、反西洋魔術師の派閥に呑み込まれてしまうことも考えられる。だが、それをハクに託した。

それほどの信頼を受けて答えられないのは最早人ではない。

いや、最初からこの身は人ではなかったな。

なれば、人の身である“ヤツら”を捕えることすら詮ない事だ。

「はい、その仕事、霧島の名にかけて完遂いたします」

詠春は刹那の事を見捨てたわけじゃなかったということを理解し、次に果たすべき目的を得たハクに気力が満ちて行く。暗闇に閉ざされかけた道に一筋の光が見えるように。

二度も、身体だけでなく心すらも救われる。

やはりこの人には敵わない、ハクはそう思う。

「とことん甘いな」

後ろでエヴァがそう呟いていたのが耳に入るが、詠春は苦笑しただけだった。

先ほどまでの雰囲気やウソのような、一瞬の和やかな空気。

しかしそれを打ち破るように、屋敷の中に悲鳴が響き渡った。





### 第三十三話 止まらぬ時

「それにしても、ほんと木乃香の家には驚いたわ〜」

「そうかな？ ……もしかして、明日菜ちよつと引いてしまったん？」

板張りの廊下を歩きながら、木乃香は少しだけ心配そうに言った。自分がお嬢様というだけで、一步線を引いて離れて行った者もいる。だから、明日菜にだけはそんな風になって欲しくなかったから。

「全然。むしろ木乃香だったらこのぐらい普通かもって思っちゃうし」

そういつて快活に明日菜は笑った。その笑顔につられて木乃香も淡く微笑む。

だがその笑顔も長く続かずに、整えられた庭に視線を流す。

「明日菜、何か隠してることあるんやろ？」  
「え？」

木乃香は視線を庭から動かさずに、明日菜に問う。素直な親友は恐らく誤魔化すことはわかりきっている。

それはあの人と同じ。何か、危険なことから自分を遠ざけようとしている。

傍から見ているだけでは気付かなかった。

だが、木乃香とて今までずっとこのうのうと学生をやっていたわけじゃない。

幼いころ、自分を護ると誓いを立てた少女が、麻帆良で学生にな

ると自分を遠ざけ始めたことが、きつと一つのきつかけだったと思う。

「や、いやいや、一体何の話……」

明日菜の慌てた言葉に、木乃香はやはりと笑う。小さく、ほんの小さな笑み。

でも、今回ばかりは引くことができない。

きつとあの人は真相を自分に話すことはないだろう。

なぜ刹那に程遠いようなエヴァンジェリンや茶々丸がここについてきたのか。

色々な理屈を並べ立てていたが不自然だ。

きつと何か関係があるはず。

好奇心や興味なんて感情はすでに通りこしてしまった。

ただ、事実を知る必要があると言う義務を感じる、それだけ。

「教えて、うちに明日菜のこと嫌いにさせないで」

「木乃香……」

卑怯だと、こんなやり方は駄目だとわかっている。だけど、こうでもしないと優しい明日菜やあの人は、きつと自分に何も語りはしないだろうと、相手の善意を逆手に取った尋問に近いやり方。

だけど知らねばならない。どうして刹那がいなくなったのか。それは自分にとっても関係のあることにしか思えない。

いつまでも自分が護られるだけの存在でいようとは思えない。だけど、それすらも心の中で否定する。

ついこの間、その事実を知ったばかりだと言うのに。

気付いたのは本当について最近。何か“得体のしれない力”を行使していた“あの人”。

護られるだけの存在、そんな一方的な立場じゃいやだ。そう考える自分の子供っぽい思考。

ただ、対等な関係でいたいだけなのだ。

刹那も知っていたのだろう。だから護ると、そう言っていた。

要するに、嫉妬なのだろう。

刹那は知っていて、自分は知らない。

だから知りたい。知って、力になりたい。

そして、どういう経緯か今いないもう一人の親友。

刹那にも帰ってきて欲しい。

ただ、三人で昔のように仲良くしていきたい。

「ごちゃごちゃ考えすぎなんよ、みんな……」

うちも、ね。そう小さく呟いて明日菜に振り返る。

なんとも複雑そうな顔をして、木乃香を見つめるオッドアイの瞳。いつもの柔和な木乃香の雰囲気はそこになく、ただただ儂い少女の顔がある。

「みんなで仲良くやっていきたいって思うのが、そんなに駄目なことなんか？」

そう言って、淡く笑う。明日菜も喉を引くつかせて何かを声に出そうとしている。

そしてその静寂を打ち破った。

「ええ、それは無理です。 お嬢様」

漏れた呟きを返すのは明日菜ではない、もう一人の親友。木乃香は庭に振り返り、明日菜はその姿に目を見開いた。

「さ、桜咲さん！」

「お迎えに上がりましたお嬢様、わたしと共に行きましょう」

優雅に、何事もなかったかのように刹那は木乃香に膝を折り、それは騎士のように木乃香に手を伸ばす。

「せつちゃん……一体何があったん？」

「何も。ただ、わたしは気付いただけです」

まるで天気の話をするくらいに気安く、淡々と。

何に、と誰かが返すことはなかった。

「ただわたしは、あなたのように幸せに生きたいだけなのだ」と

瞬間、刹那の姿がぶれる。それはほんの瞬きの間に起こった。

「明日菜アー!!」

その叫びは広い屋敷に反響される。

糸が切れた人形のようにその場に崩れ落ちた明日菜を見て、木乃香の悲鳴が響いたのだ。

だがそれとほぼ同時、木乃香の意識も暗く沈んでいった。

悲鳴。

ハクはその声を的確に聞き分けていた。

「木乃香っ!」

恐らく、この声を聞いて一番に動き出したのがハク、次いで詠春、エヴァ。

素早く立ち上がり出口に向かって駆け出そうと身体を動かす。

「危ない!」

そして、動き始めたなかでもいち早く危険に気付いたのは詠春だった。

突然とも言える忠告の声に、しかしハクは反応して見せる。

だが、目の前に迫る“何らかの魔法”を避けきることは叶わないと早々に見切った。

この間、ほんの一瞬のこと。

しかしその結果を覆したのもほんの一瞬。

詠春による体当たり。

手加減なんて微塵もない、ただハクの身体を覆いかぶさるような無様なものだ。

小さい舌打ち。

誰が、何を。

流れる思考はそのままに一撃を放つ。

【霧島流後の型 散弾掌】

牽制、とにかく確認できない脅威から身を遠ざけながら、詠春の身体を抱えて後ろへ。

現状、手札を切るのは惜しむべきでないと判断した結果の攻撃。

「さすが、というべきなのかな、ここは」

部屋の状況は半壊。もうもうと立ち込める木々の破片やらで、徐々に姿を現した白髪の少年。

「セイランの仲間か？」

「そうだとも、そうでないとも言える」

「おいおい、また痛い目に逢いに来たのか、ぼーや」

まるで人形のように、人間味のない声音で返答する少年に立ちふさがるのはエヴァンジェリン。

彼女がそういう反応を返すということは。

「先日の手強い相手、ってことか？」

「ふん、少々骨がある、と訂正してもらおうか」

あのエヴァンジェリン、闇の福音にそこまで言わせるということ  
は、かなりの実力者。なれば、ここにハクとネギがいることは邪魔  
になるだろう。ただでさえ狭い室内で魔法の打ち合いをするという  
のならなおさらだ。

それに。

「私のことは気にしないでいい、それよりも早く木乃香のところへ！」

詠春の叫びにも似た声。

しかし、だが。そんな言葉が思い浮かんだがすぐに打ち消す。

「助かりました、仕事は必ず」

「頼むよ、ハク君」

下半身が石化を始めてしまった詠春の身体を茶々丸に受け渡すと、すぐに出口に駆けだす。そのときネギの首根っこを掴むのを忘れずに、だ。

「ド阿呆が、この事態に何呆けている！」

「な、何が、長さんが！」

「いいから走れ、あとで治療してもらえば問題はない！」

その前に、粉々に殺されてしまわないことが前提ではあるが、そんな問題は考えるだけ無駄だ。

何しろ、エヴァンジェリンとその従者が残ったのだから。

「さて、こういつのを運命とか、そういう風にいえばいいのかな？」

「御託はどうでもいいんだよ。愛を語りたいのならば、そこらへんの花にでも呟いていればいい」

凶暴な笑みを浮かべるエヴァ。それに対して何の感情も見せない少年。



「マスター」

「お前はその役立たずを抱えて向こうを助けてやれ。こいつ程度、一人で相手にしてもお釣りがくる」

「了解です、御武運を」

「ふん、さっさと行け」

詠春を抱えて茶々丸も広間から出て行く。それに対して何事も行動を起こさずに少年はただ見送っていた。

もつとも、少年が動けばエヴァが手痛い一撃を見舞っていただろうことがわかっていて動けなかったのだが。

「さすがは真祖ハイデライト・ウォーカーの吸血鬼、大した自信だね」

それでも少年は敢えて挑発して見せる。

それにしても安っぽい、棒読みのような戯言。

「わざわざ残ってやったんだ、楽しませてくれるんだろう？」

「ええ、それはもちろん」

くつくつと笑いを零す。それをどう取ったのか、少年は問いかける。

「それにしても随分と“彼”に肩入れするようだけど、魔法世界で恐れられた君が、あんな化物に情でも移ったのかい？ おっと、少し語弊があるか。君も化物には変わりなかったね」

「黙れ、人形風情が」

それを一言で黙らせる。今はまだ夜ではない、正午を少し過ぎたあたりだろうか。

力は十二分ではない、だが満ちる魔力は以前に比べて充分すぎる。

「お前に許されるのは無様に床に這いつくばることだけだ」

悲鳴が上がった場所はそう遠くない。

屋敷を走り回りながら目的の場所を目指す。屋敷の中には詠春と同じように石化させられてしまった者たちの姿がある。

「エヴァですら気付かないうちにやられたというのかっ」

案外、あの少年が一番厄介な敵ではないか、そう考えるが、今はエヴァを信頼して任せねばならないだろう。

もの一分もかからぬうちに、廊下でうずくまる明日菜を発見した。

「明日菜さんっ！」

ネギが明日菜に駆け寄り声をかける。

ハクが見たところ、どこにも外傷はない。おそらく当て身か何かで気絶させられたのだろうが。

「うっ、ネギ、先生」

まだ焦点が定まらないままであろう瞳のまま、二人を見る明日菜。

「何があった、木乃香はどうした？」

一拍の呼吸を置いて、明日菜は重苦しげに答える。

「桜咲さんに、連れて行かれて……それで、私は」

悔しげに顔をゆがめる明日菜を見て取って、事態はかなり進行している判断する。

「刹那さんが……こんなことをしたと言うんですか」

ネギはどこか悲しげにそう呟く。

「さつきだって、殺すのなんなのって、違いますよ、そんなの絶対間違っています」

まっすぐに気持ちをぶつけてくる。どこまでも純粹で素直な言葉だ。

この子は先生として、人として何一つ間違ったことを言っていない。

ただ、冷静に物事を判断してきたハクにとって眩しすぎる。

世界は、綺麗ごとだけではやっていけない。そのことをハクはこれまでの人生経験で充分に知っていた。

そしてそれを知ってなお、道を示して見せたのが近衛詠春という男だ。

「ネギ、ここからは俺の判断で動く。事態は一刻を争う」

「待ってくださいっ！ 刹那さんはっ！」

「ああ、ちよーっとばかりお仕置きが必要だな、“一教師の判断”としては、ね」

そういつてネギに笑いかける。  
どこか気が抜けたようにネギも笑う。

さて、息抜きは充分だ。これから刹那の足取りを追わねばならぬ。できればエヴァが来るのが最善だが、あいつの足留めで恐らく精一杯であろうことが予想される。  
となると、だ。

「茶々丸、力を貸してくれないか」

「問題ありません、何なりと」

ふつと姿を現す茶々丸。目立った外傷もない、無事にあの場を脱したのだろう。エヴァもなかなかこちらの苦しい状況を分かってくれているようだ。

「茶々丸さん！ 長さんは？」

「……残念ながら、全身が石化してしまいました。彼の伝言通り救援部隊への連絡は取ることができましたが、今は出払っていて戻ってくるのは日付が変わる頃になるそうです」

戦況は大分悪い。相手の数を正確に把握していたわけではない。少なくとも三人、ないしそれ以上の数であると考えるのが妥当だろう。

そして、ここには見習い魔法使いが一人、一般人が一人、格闘のエキスパートであろうロボットが一人（一体）、そして自分。

戦力は実質三人と足枷が一人。

今はもう立ち上がれるだけにはなったようだが、ここに置いて行くわけにもいかない。

「まずは神楽坂をホテルに返す。ネギは神楽坂と一緒に戻ってくれ。おまえの滑空術ならすぐに俺たちに追い付けるはずだ。茶々丸、相手の足取りを追えるか？」

「現在、リーダーの範囲内に人間と思しき熱源を二つ感知していますが、もうすぐ私の知覚範囲外に抜けます」

「時間がない、急げ」

茶々丸の誘導に従って動きだそうとしたそのときだった。

「待つて、待つてよ」

「神楽坂、話を聞いてたろう？ 時間がないんだ」

聞く気はないと、切り捨てる。例えどんな理由があろうと、一般人の、それもついこの間まで日常で生きていたものを戦力として数えることなどできない。

「私を連れて行って」

「だから、それは」

「ぼくからもお願いします」

力強い、張りのある声でネギが言う。その意思の強さに開いた口をそのままに言葉を止めてしまう。

「何言ってる、神楽坂がどうなるかわからないんだぞ？」

「今が一刻を争う事態だと言うことの方が重要です。それに、明日菜さんだって無関係じゃないんです」

「もうそんなこと言っていられる場合じゃないんだ。……命がかかっている、わかっているのか？」

もしもここで生半可なことを言ってみせるようなら、ネギも明日

菜も連れて行くことなどできない。茶々丸に追跡させて安全な場所までハクが運ぶ羽目になる。そんな手間はかけたくない。  
だが。

「ぼくは偉大な魔法使いに、そして明日菜さんはその従者になる人です。こんなところで躓くつもりなんてありません！ 困っている人や助けを求める人の声を無視するなんてことは我慢できないんです！！」

明日菜も隣でこくつと頷く。横で茶々丸を見ると彼女もついてくることに同意のようだ。

思わず頭を抱えなくなる。まるで能天気すぎやしないか、と。

「たしかに私とネギじゃ頼りないかもしれないけど、一人でできることよりもきつとできることは広がる。足手まといなんかにはならないから、お願い、先生」

ふと、ハクは思う。

これが強さなんだろうか。

偉大な魔法使いとその従者。互いが互いを支え合い、護り合う。

そういった関係だったならば、こうはならなかったというのだろうか。

はあ、とため息を零し肩をすくめる。

決して落胆ではない、むしろ何かつかえが取れたような、そんなため息。

「わかった。お互いにパートナーというならば、仮契約は済ませただんだよな？ それだけで随分と違うが」

「はい、問題ありません」

「す、好きでやったわけじゃないからねっ！ あのオコジョに誑か

されたとかそういうわけでもないんだからっ！」

ネギは素直な少年の笑顔を、明日菜は年相応の照れが混じった顔で。

穏やかな空気。これだけは決して壊してはならない。

これからもそうであるために、今は動かなければいけない。

だから、心の中でカチリとスイッチを切りかえる。

これから向かうのは戦場。生きて帰れる保証もない。

「行くぞ」

さきほどの空気とは相反した曇天が立ち込めた空を見上げる。

なんとも幸先の悪い天気だと、そんなことを思う。

事態は加速していく。時が止まることのないように

### 第三十三話 止まらぬ時（後書き）

久しぶりに連日投稿です

結構話が進んでいきます。

どこかで無理が生じてしまっている気がぶんぶんしていますが……

あと自分で言うのも何ですが、気が向いたら感想のほうを残していただけたら嬉しいです。



### 第三十四話 信じる強さ

四人は疾駆する。

屋敷の裏手にある森を駆け抜けていく。

茶々丸を先頭に、ネギと明日菜は杖に跨り、殿としてハクの布陣。こういうとき、後ろを突かれては対処が難しい事もあり、ハクが後ろを務めている。今のところ目立った被害もなく、順調であるが、果たしてこの速度であの二人に追い付けているのか、それが気がかりだった。

(焦っても仕方がない。今は距離を詰めることだけを考えよう)

追いついた先が罠だったら笑えないが、おそらくそうなる羽目になるだろう。

刹那たちが向かっているのは、敵の本拠地か、またはそれに準ずる目的の場所なのだろうから。

全員の表情は自然と硬くなっている。

「前方に新たな熱源があります。　どうやら転移してきたようです」

「やはり一筋縄ではいかないよな」

「どうしますか？　二手に分かれますか？」

茶々丸の警告のあとネギが尋ねるが、この危うい戦力を更に分断させていいことなど一つもない。各個撃破されるのがオチだろう。

更に言うなら、正面から突破しなければ後々に敵の思うつぼになることも考えられる。救援が遅い事も考え、無事に木乃香と刹那を取り戻したとしてもその後の展望はかなり悪い。

「正面からだ、潰せる敵は今の内に潰すぞ」

冷え切った声でハクは指示を飛ばす。  
誰かが唾を飲み込む音が聞こえた。  
戦闘独特の空気がいやに懐かしい。ついこの間も相当な痛手を負  
う戦闘があつたばかりだというのに。

「全員気を引き締めろよ」

視界が開ける。

森を切り拓いたのか、それとも天然でそうだったかはわからない  
が、森の一部がぼつかりと草原に変わり、目立ったものと言えば大  
きく反り立つ岩壁が見えることだろうか。

そしてその岩壁の上に人影を見る。

「木乃香っ!!」

明日菜の叫びに近い声。

岩壁の上で並び立つ人影は五人。

ハクは小さく舌打ちした。新手がいる。

「久しぶりやなあ、魔法先生」

「この間の術士か」

ハクに貴重な手札を失わせた女術師千草。他にはまだ見たことが  
ない者たち、エヴァとタメを張るくらいのゴスロリファッションに  
不似合いな双剣を携えた眼鏡の少女、帽子を目深にかぶった黒髪の  
ネギくらいの少年。

そして、いつもの無愛想な表情でこちらを見下ろす刹那とその腕

に抱えられた木乃香だ。

その刹那の顔を見て、ハクは何も言わない。刹那も、こちらを感情のない瞳で見つめていた。

「木乃香を返しなさいよっ！」

「無理や。お嬢様にはこれから色々と役に立ってもらわなあかんからなあ」

いやらしい笑いを洩らしながら術者が言い放つ。

「お嬢様にはそれこそ天地も引っくり返るくらいの膨大な魔力があるんや。それを使わないのは宝の持ち腐れと言っもの、それをうちらが有効に使ってあげようと言っのだから感謝して欲しいもんやけどなあ」

「あんたらなんか木乃香が力を貸すわけないでしょっ!!！」

明日菜の呼びかけは虚しく響く。

「そうやなあ、うちに貸してくれなくても、大事な大事なナイト様には貸してくれるかもしれへんけどなあ？」

そういつて千草は刹那を見る。刹那はそれに何の反応も示さない。ただハクを見つめ続けている。

「もつとも、例えお嬢様が言うことを聞かなくても、聞かせる術なんてそれはもう腐るほどあるんやけどな」

「あんだ、木乃香に何かしてみなさい、ただじゃおかないわよ！」

桜咲さんも、もうこんなことやめて戻ってきてよ！　こんなに酷いこと言ってるやつらといるなんておかしいわよっ!!！」

言葉だけでは、想いだけではもう届かない。

ハクはこの一連のやり取りの中で刹那の心が壊れかけていることを悟る。

いや、もしかしたらもう壊れてしまったのかもしれない。

何の感情もなく、ただこちらを睥睨する刹那の瞳には何が映っている。

「神楽坂、今の刹那は少しだけ違う」

「先生まで何言ってるのよ、あれは桜咲さんでしょう!？」

目に涙を溜めて訴えかける明日菜を押し留める。やはり説明するべきだった。本来だったら明日菜はこの件に関わらないはずだったから余分な説明はしなかった。

それが仇となる、これ以上問答をしても明日菜が傷ついてしまうだけだ。

「今は正気じゃないだけなんだ、だけど大丈夫。絶対に元に戻して見せる」

断言。明日菜の気持ちを碎かない為。

自分の目的を、意思を、想いをはっきりと刻みこむために。

今の刹那の状態は、木乃香という本来刹那にとって大切だった存在がぎりぎりのところで繋ぎとめている。

刹那は木乃香をきつく腕に抱いている。何か、刹那が木乃香に固執する理由があるのだ。

心进行操作されても尚、木乃香に対する想いは変わらないのか。

「なあ、もうええやろ。おれ、もう我慢できないで、さっさと戦

「いたいんやあの銀髪の兄ちゃん」と

「ウチとて我慢しとるのに、小太郎君はずるいお方やなあ。目の前の強敵とはよう仕合いたいわ」

「月詠、小太郎、本来のうちの目的は……わかってるんやろな？」

月詠、小太郎と呼ばれた少女と少年は無邪気に笑って頷く。

ここで戦うと言うのなら、目的地はここではないということ。要は足止め。

まともに相手にしては刹那たちに逃げられてしまう、だが。

(この戦力をどう振り分ける)

どれが一番強敵か、恐らくあの双剣を携えた月詠という少女だろう。刹那と同等かそれ以上の使い手と見る。あの荒ぶる気は感情の高まりだけではないはず。

「茶々丸、行けるか？」

「勝率は五分といたところでしょうか、ですが、足止めならばいかようにもやりようはあります」

残りの二人、これを三人で打ち崩し月詠の相手に回れば。

そう考える。だが、誰かが負傷を余儀なくされるだろう、特にこの先重要な戦力である茶々丸がかなり酷い負傷を負うことは目に見えている。

ならば、相手を倒すのではなく注意を引きつける。

その隙について刹那を無力化し、木乃香を取り戻す。

ナンセンスだ。

刹那は木乃香を抱えて動けないとはいえ、戦闘の中で逃げられれば後を追うことなど難しい。

それにあいつの力は侮れない、半端な攻撃で無力化できることなどないだろう。となると、必然的に木乃香に被害が加わってしまう。

(どうするっ)

八方ふさがりだと思える事態に舌打ちする。

ハクのそんな想いを裏切るように、事態は進む。

「わたしは先にお嬢様を連れて行く」

「ああ、ここは任せときい」

「待て、刹那！ 木乃香！」

身をひるがえし、刹那は再び森の中に姿を消していく。

ハクの叫びも届かぬままに。

一瞬の迷いが、誰も欠けさせたくないという想いがハクの判断力を奪う。

どこか冷静な部分は告げている。その答えを知っている。知っていて見て見ぬふりをしている。

ハク一人が先に行って刹那を追い、残りがここに残って殲滅する。

それをするのが一番効率が良く、成功率も高い。

万が一失敗したとしても、本命のハクがすべてを終わらせれば“仕事”は終わるだろう。

だが、そのあとだ。

万が一ハクが成功したとして、殲滅が失敗したならば  
そんな誰かが不幸になる結末なんて後味が悪すぎる。

「さあて、時間稼ぎなんてそんなかつたるいことしなくても、こっちが勝負に勝てば問題ないんやろ、千草姉え？ その銀髪の兄ちゃん、おれと勝負せい！」

すでに小太郎はやる気にあふれている。指差してハクに勝負をけしかけてきた。

ここは戦場だ。そんな遊び感覚で勝負を挑まれ、あまつさえこの状況でそんな安っぽい感情に付き合ってやらねばならないことが立つ。

ああ、腹が立つ

これは遊びじゃない。死ぬか生きるか、取り戻すか奪われたままかの大きな分岐点。

そんなところに、何の覚悟もない奴が遊び半分に茶々入れしてくることに血液が湧きたつ。

悩んでる場合じゃない、こんなところで立ち止まってる場合でもない。

ならば、全力を以て敵を排除して向かえば

すつ、とハクが踏み出すよりも先に、小さい腕がハクの身体を抑える。

「ぼくは言いましたよね？ こんなところで躓くつもりはありません。ハクさんは先に行って刹那さんと木乃香さんを」

何を、と思う。あの少年はあんな態度を取ってはいるがかなり場

馴れしている。それをつい最近やっとまともになってきたネギが相手などできるのか。

顔に出ていたのだろうか、ハクの表情を見て取ってネギは苦笑を交えながら、されど芯に響く言葉を紡ぐ。

「たしかにぼくじゃ頼りないかもしれませんが。 だけど、ぼくはもう自分の意思で行動できるようになったと、そう思います。 これはぼくの自惚れでしょうか？」

それはかつて、ネギが自分の力を他人の意思で振るったときにハクが言った言葉だ。

それを受けてハクは苦笑する。

いつまでも、昔のままではないと言うことらしい。

「霧島先生、わたしがもう一人のあの女の人を相手にするわ」

「神楽坂っ、おまえまで何を」

「わたしだって今まで何もしてなかったわけじゃないのよ？ 魔法の事を知って、少しはネギと特訓してたんだから。 【来たれ<sup>アテアット</sup>】」

ネギとの仮契約で得たアーティファクトだろうか。明日菜の背丈とは釣り合わないような大剣。それが少しは様になっているということは、ある程度は使い慣れているとも見れる。

急場凌ぎでそのフリをしているとも取れる。

だが、ハクはその横顔に何かを感じ取る。

信じてもいいのだろうか。

「言ったでしょう？ 足手まといにはならないって。 それにわたしを巻き込んでおいてそう簡単に引き下がれるような性格じゃない



って、それくらい副担任なんだからわかっているでしょう？」

そう言って、魔法使いと従者は笑う。今から相對する相手が、自分たちに死に値する攻撃を仕掛けてくることすらわかっているはずなのに、その恐怖を押し殺してなお先に行けと促してくる。

明日菜は小さく震え、ネギですら既に冷や汗を流している。

だというのに、どうして彼らはこんなにもまっすぐな目で自分を見るのか。

「どうしますか、霧島先生。ここまでお膳立てが整ったと言うのに、ためらいがあたりですか？」

茶々丸が戦闘モードに移行したらしい。それはかつて大停電に戦った時のように、敵に回せば手強い、だが味方になればこんなにも頼もしい。

無表情ながらの後押し。相変わらずこいつの心情は読みにくいが、下手な人間より人間臭い。

「……そうだな。 だったら、かるーく行って連れ戻してくる」

口の端がハクの意味と反して釣り上がる。足に力を溜めて、一瞬の隙を探る。

「そここなくっちゃね」

「ハクさん、任せてくださいー！」

「『まったく、このヘタレめ』とマスターなら言っていると予想されます」

各々が言いたいことを言う。

誰かと一緒に戦うことが悪くない、そんな風に思える。  
少なくとも、ハクもネギの影響を受けたのか。

「誰ひとり、欠けるなよ」

肯定は頷きで。互いに空気で感じ取る。

「見送りは派手に行きますよっ！」

ネギの魔力が高まったのを見て取って、千草は防御の術式を展開、  
小太郎と月詠は撃たせまいと距離を詰める。

「行きがけの駄賃ってやつだ、とっておけっ！ 【霧島流後の型  
散弾掌】」

回避を余儀なくされた二人は、素早い動きで反転。千草の防壁の  
元へと下がる。

ハクは背中に高まる魔力を感じとってタイミングを測る。

『ヨウイス・テンベスター・フルグリエンス  
雷の暴風っ！！』

殺到する雷撃を尻目に、ハクは溜めた力を一気に放ち瞬動で姿を  
消した。



### 第三十五話 力の在り方

深い森の中を慣れた動きで疾走していく。

刹那の気配を追いながら、ハクは思考を巡らしていた。

「大見栄切ったものの、どうやって刹那を元に戻すか、だな」

方法にはすでに心当たりが幾つか。だが、一人でやるには少々難しい仕事になりすぎる。

少なくとも今やれることはやった、と言うしかないだろう。あとは本番でなんとかするしかない、そんな行き当たりばつたりの作戦など当てにもならないが、時間という制限がある以上どうにもならない。

「でもやるしかない、今やれるのは俺一人なんだからな」

独白にも似たセリフ。自分自身の気持ちは今、どこにあるのか、最後の確認の作業。

このほんのひと月の間に色々な出会いがあった。

新しい触れ合いはたしかにハクという存在に影響を与えた。

昔の関係は、昔のままではなく少し違った関係になった。

それは自分が変わったのか、周りが変わったのか、環境がそうさせたのか。

たぶんすべてが折り重なって変わった。

自分は何一つ変わっていないわけじゃない。

他人が何一つ変わらない道理などない。

環境はそこに生きる人々の手によって造りかえられていく。

そこに現在の自分がいて、そして過去の自分がいて、そして過去のまま変わらない想いを

抱いている自分がいる。

これがすべて自分だ。

それを否定してはいけない。悩んだことを忘れてはいけない。迷ったことを肯定していかねばならない、過ちを受け入れねばならない。

だけど、こんな考え方を誰かに理解させるのなんて途方もなく難解なんだと、頭の片隅で処理する。

「だけど、そろそろ目を覚ましてもらわないと、な」

森を抜けた先、先ほどの空間などちっぽけに過ぎないくらいに広大な湖。

その中心に向かって伸びている棧橋の中心に、刹那が立っている。そして、その奥にこの事態を引き起こしたであろう諸悪の根源。

「やっと来たね、待ちくたびれて欠伸びが出そうだったよ」

「セイラントッ！」

金髪の術師の姿を目に入ると同時に身体に力を奔らせる。

ハクの気迫が、妖気を通して具現化し湖を震わせ森を揺さぶった。

刹那は動揺も何もなく、揺るぎなくハクの行く手を阻む。

ただ、巻き起こされた風に結われていた髪がざわついた。

「わお、これだけ余力を残しているってことは他の三人は仲間任せってきたのかな？」

そんな妖気の余波を、刹那の後方で浴びながら目を細めるセイラント。

初めての邂逅から変わることのない軽薄な、それでいて人の神経を逆撫でする声。

「能書きはどうでもいい。刹那を元に戻して、おとなしく木乃香を引き渡せ」

「くっ、あはは、まさかこの期に及んでまだそんな交渉ごつこが通用すると思ってる？」

示された結果は拒否。最初からそんなことわかっていた。

だから一つ目の考えは没。もっとも一番期待していないプランだ。なれば、自分の力で解決すればいい。

「生意気だよ、その目。一人では何も出来ないくせに、達観してこちらを見下しているね？」

言つとおり、一人ではここまで来ることができたかは怪しいところだ。

集団でできることと、一人でできることの分くらい弁えているつもりではあるが。

「気に食わないか、別にいいさ。気に入られようなんて微塵も思っていないんだからな」

全身に妖気を浸透させる。それはほんのりと淡い発光となってハクの身体を覆っている。

「もとより交渉事の段階はとうに終わったんだ。あとは力づくで解決するしか残っていないんだらう？」

「おっと、誤解しないでくれよ。最初から交渉を破断させたのはそっちなんだからね」

あくまで軽い態度は崩さないのだろうか。それとも挑発の為にやっているのか。だとしたらなかなか策士だ。ハクはこんなにも自身の感情を抑えるのに苦労しているのだから。

「さて、こつちは召喚の準備で忙しいんだ。そろそろ君の相手はやめにするよ」

「召喚……やはり、か」

予想されていた最悪のケース。

湖の中心に鎮座する大岩、異様に高い魔力の溜まり場たるこの儀式場。そして、師匠から伝え聞いた“とある大鬼”の話。

“リヨウメンスクナノカミ”

それを木乃香の魔力で呼び出そうと言うのか。

「邪魔ものの排除は君に任せるよ、それが君にとっての幸せに近づくのだから」

「承知した」

だが今は、今だけはそのことを頭から除外せねばならない。そんな余計なことを考えていられる相手でもないのだから。

ハクの前に立ちふさがるのは刹那。何を想い、ハクの前にいるのか。ただ冷たく決然とした態度で夕凧を抜くその姿に、学園に赴任したあのときを重ねる。

「刹那、俺がわかるか？」

「無論です。 3 - Aの副担任、霧島白」

そこですつと息を吸った。夕風を正眼に構え、互いの視線がぶつかり合う。

「そして、わたしの敵だ」

あのバカはうまくやっているだろうか。

漆黒のマントを翼に見たて宙を滑りながら、エヴァは思考する。

すでに屋敷は半壊し、戦いの場所は山の奥地へと移っている。敵がどうやって結界を抜いてきたのかは定かではないが、自身をここまで手こずらせるのだ。やってやれないことはないのだろう。

おそらく、このためだけにかかなりの下準備をしてきたことと、それを総本山の術師や、あまつさえ詠春に気付かせることがなかったことから言えば、かなりの実力か、巨大な組織が裏についているのは疑いようがない。

繰り返す魔法弾をかわし、お返しとばかりにこちらも遠慮なく魔法を打ちこむ。

攻撃は命中しない。その事実<sup>サキタ・マキカ</sup>に舌打ちする。

相手にとってこの戦いは時間稼ぎなのか、それともエヴァをここで殲滅させることを目的としているのかは判然としない。

互いに魔法の射手で牽制しあい、中位魔法でその隙を攻撃。そしてそれを相殺し、また牽制に戻る。



そんなことを繰り返し続けて、互いに決定的と言えるほどのダメージを与えることもなく、ただ周りに被害を増やしていくだけ。それもただの魔法使い同士ならばこれほどの被害にならないだろうが、エヴァという大魔法使いといって差し支えない真祖の吸血鬼と、大魔法を使っていないとはいえ互角に持ち込むフェイトという少年はそれに肩を並べるくらいの術者だ。凡庸な魔法すら、かなりの威力に変わらない。

エヴァとてこんな状況はごめんこうむりたいところだが、いかにせん茶々丸と言うバツクアップがないだけに迂闊に大魔法を放つこともできない。そんな致命的な時間を相手が与えてくれるわけもなく、インファイトに持ち込まれたらいくら不死身とはいえなんらかの魔法で動きを封じられる可能性すらあるのだ。

「随分と慎重だね、闇の福音」  
「なあに、暴られるのは久しぶりでな、余興を楽しんでいるんだよ」

そうは言うが若干こちらが焦りを感じているのも向こうはわかっているはず。先に行った者たちが心配なのは、あの“バカ”がこの間の戦闘で負傷したことも無関係とはいえないだろう。

一定の戦いのリズムを刻みながら、互いにとって必勝の一撃を繰り出すための機会を待つ。

先日の戦いからある程度の攻撃パターンの予測は可能だが、やはり二対一のとくと一対一の場合ではややリズムが違う。こちらの流れに持つていくことは簡単だが、それで押し切れなければ、逆に隙を生み出すことになりかねない。相手がエヴァを確実に相手取れると判断しての“戦い”だとすれば、何らかの隠し玉を持っていることは確実なのだ。

それは確定的。

だが同時に、“時間稼ぎ”のみが目的だと言つのならば、その要素を排除しきることができる。

こちらが持つ“必勝の手札”によってこの無駄に時間だけを浪費する戦いを終わらせられるのだ。

『聞こえるか、エヴァ』

頭の中に響く何か。念話だ。

その声を聞いて、戦いに没頭していた顔に変化が生じる。

「なんだ、ワタシの声が恋しくなったか？」

『冗談はもっと女らしくなってから言うんだな。……その調子だとまだ終わってないみたいだな』

むっ、と思わずしかめつらをしてしまう。おもに前半の内容に關してだが。

会話だけに気を取られているわけにもいかず、反論はできなかつたのが何より悔しいが今は話を聞くのが先だ。

「状況は？」

『今俺が一人で追跡中だ。三人は足止めされていて、俺が先行している。出来ればすぐにあいつらの救援に向かつて欲しい……と言いたいところなんだがな』

妙に歯切れが悪い。戦いの我慢比べも後押しして、腹の底からイライラしてきた。

「何が言いたい、ワタシの気はそう長くはないぞ」

『……おまえに頼ってばかりで悪いんだが、さっさと終わらせてこっちに来てくれ。なるべく早くだ』

なるほど、自分に頼むのが気不味いからということか。

「ふん、詠春に大見栄切ったのはどこの誰だったかな」

『面目ないけどな……おまえの、エヴァの力が必要なんだ』

一瞬だけ、ほんの一瞬だけ顔が熱くなるのを自覚する。

咄嗟の温度変化を、顔を振ることで振り払った。

動揺を悟られないように声に威厳を持たせて言う。

「それで、用件はなんだ」

『それは』

用件は、確かにエヴァにとっては骨が折れるが、十分に可能であること。そして今のメンツの中でその条件を満たせるのが自分しかないものだった。

「これはまた厄介なことを」

あいつに頼られるのは別段不快ではない。それはエヴァが嫌う慣れ合いとはまた違った意味で。

信頼されている、という感覚だろうか。

思わずエヴァはその顔に笑みを浮かべてしまう。

「ワタシへの頼み事は高くつくことは、わかっているよな？」

『こんなときでも変わらない不遜な態度に、俺は尊敬の念を抱かずにはいられないよ』

「わかっているだろう？　ワタシがどんな性根をしているか、くらいはな」

『ごもつとも、まだまだそれでも浅いものだろうけど。　エヴァが

「どっただけお人よしかつてくらは……まあわかつてるつもりだ」  
「ばかか、ワタシはお人よしなんてそんな高尚なもんじゃない」

楽しげに、今までの焦りも何もかもを払うように笑う。

フェイトがエヴァから距離を取り、互いの間での牽制魔法が止んだ。

互いに悟っていた。もはやこれ以上の戦いに意味はなく、エヴァの急速な魔力の高まりに応じなければ呑み込まれるのはフェイト自身だと。

緊張が高まり、魔力が唸りを上げて紫電を纏わせるほどに空気を焼く。

何せワタシは、悪の魔法使いなんだからな

闇の吹雪が、曇天の空の元に新たな漆黒を生み出した。

踏み込みは疾風の如き速さ。

振るわれる力は豪快と言ってもいいほどに重い一撃。

ハクはその一撃を冷静に見極めて最小の動きでかわす。

刹那の視線を視る。

手首の返しによる可動範囲を予測。

足の踏み込みからの重心の動きから最適な攻撃箇所を探す。

そして気の流れを見ることで斬線を先読みする。

それらを冷静に、自身の経験から培われた実力と直感で判断する。

刹那の攻撃は一撃だけに留まらずに、ごくごく自然に連撃へと繋がって行く。

雪崩のような猛攻。

例え、刹那の心に何かしらの思いがあったとしても、積み重ねられた経験が、傍から見たら惚れ惚れするであろう美しい剣舞へと昇華させている。

もっとも、一撃でも身体に見舞ってしまえば容易く斬り伏せられてしまうほどの威力をもっているのだが。

「変わらない、何も変わっていないな」

その猛攻の中静かに、刹那にだけ聞こえるように呟く。

もう一人の術者のことは考えない。今は目の前の問題を解決しないことには先に進めない。

「変わっていない？ 違います、あなたが変わってしまったんです」  
「よ」

攻撃の手を休めることのない刹那。その口調はただ冷たい空気のように互いの間を抜けて行く。

「変わった、そう変わったかな、俺は。少なくとも、昔のままではいられなくなった」

そういつと刹那の剣圧にさらなる気が乗った。

避け続けるのにも限界はある。ハクは両の手に妖気を纏わせて、

剣線をずらし、いなし、防戦を続ける。

ときおり防戦の合間にカウンターを入れる。一瞬だけ刹那の動きが変わる。

流れのままに動いていた攻防がどこか一瞬だけ違和感を感じさせるものになった。

しかしそれはなかったかのように、事前に織り込み済みの攻撃なのか容易くかわされる。

隙を作って打ちこませようとしたのか、それとも何かしら他の策が

いずれにせよ問題はない。重要なのは攻撃を与えることではないのだから。

「そうですね。あなたは力を手に入れた。それはわたしの持つものよりも強いモノだ」

冷静に、ただ事実のみを述べる刹那。そこに何かしらの感情の变化は窺えない。

だが、それと相反するようにハクに襲いかかる攻撃は鋭さを増していく。

そんな無感情な戦いの中に、納得できない、理解できない、そんな理不尽な裏切りは許せないという想いがあるような気がした。

「関係ない。力の強さがどうか、そんなのは関係ない」

「そんなことあるわけがない。事実、あなたはわたしに自分の実力を見せつけたではありませんか。あなたがやってきたその日にお嬢様を護る力をみせつけたではないですか」

刹那から湧きあがる憎悪の感情に気が、今までは滞りなく機能を果たしていたソレは濁流のように湧きだし、その動きを鈍らせる。

その実、威力は格段に上がったようだが。

(予想以上の実力　読み違えたか?)

ハクは心の中で舌打ちした。

攻撃を流し続けていた両の手は問題ない、うっかり切り落とされないように少し過剰すぎるくらいに妖気を流しているのだ。

だが、鋭利な刃物のように莫大な気を夕凧の剣線から垂れ流すことで、攻撃を受け流すハクの身体に徐々に傷をつけていく。

それが決して致命傷になるわけではないが、このままではギリ貧。時間が経てば経つほど失血し、体力を削ぎ落とされてしまう。

この戦いでのハクの目的、それはセイランに掛けられた魔法を刹那から解除すること。

あいつの術が心の振れ幅をマイナスに大きく動かすと言うのなら、その根源を取り去ってやれば、問題ないはず

これも予測ではあるが、刹那が向こうに加担するのも、心の隙を突かれたマインドコントロールの類だと推測している。

それに今は会話が通じていること自体が奇跡に近い。操られていると言うのなら、それは向こうに都合が悪い会話の機能すら取り去ることが可能なのだろうか。

それともこうして会話できるのは、直接の原因をハク自身に抱えていて心が刺激されているのか。

しかし、その目論見もそううまくはいかないらしい。

「力が無い事は罪だ。わたしには何もできないと、何も残らないと、必要ともされないと理解させたのは他ならないハク、あなただ」

一瞬、心が動揺を露わす。  
すぐに打ち消し、また刹那の言葉に耳を傾ける。

「だったら、変えるしかない。何もかも、力を得るために動かし  
かない、必要とされる場所へ行くしかない。わたしの力を求める  
ところにしか、わたしの居場所はないんですから」

大振りの一撃。

ハクを両断しようとするその一撃をハクは冷たく見据える。

#### 【霧島流後の型 流水の構え】

振り下ろされる夕風を両手で挟み取った。力で押し切ろうとする  
その野太刀を受け止めて、拮抗した力で疑似的に互いに動きを止め  
る。

「……確かに俺は、師匠の元で強くなった。昔とは比べられない  
くらいに、刹那もだ」

まっすぐに視線を貫いて、その瞳の奥にある想いを読み取ろうと  
する。

無駄だとわかっていて、それでもなお他人の心の内を知りたいと、  
ハクは思った。

「ただど力だけ強くなっても、駄目なんだ。それだけじゃ誰かを  
護るなんてできない、使い方を誤れば護る者すら傷つけるんだ、最  
近知ったことだけだな」

それはネギと明日菜を見ていて思ったこと。力を持つが故に、そ



の方向性を間違ったネギの行為。護りたいが故に遠ざけようと、しかしそれすらも対象を傷つけてしまうことがあると、今更ながらに気付かされる。

自分はそこから何も学んでいなかった、いや学べなかった。

自分の考えに固執し、自己満足に浸って説教垂れて得意げになっていただけの幼稚な自分。

力ばかりが強くなって、心が成長できていなかった小さな自分。

「これが終わったら、木乃香にすべて話そうと思う。ただ遠ざけて、俺たちは護っていた気になっていたんだ」

「だが、それがお嬢様の平穩を護ることになっていたではないかっ！」

刹那の声に初めて感情が籠る。

自身の半生を否定されたからか、それとも自己満足だと気付いていたからか。

「例えそうだとしても、そこに木乃香の幸せがあつたかなんてわからない。そこに刹那の居場所がなかったら、それは結局自分たちの自己満足にしかないんだって」

「なら、何のための力だというっ！ 向かって来る敵を倒し、降りかかる火の粉を払うための剣となること以外にわたしに取り柄はない、そんな人間はどうすれば幸せになれるっ！ 誰かを護って自己満足の幸せに縋って何が悪いというっ！」

瞬間、刹那の強烈な蹴りがハクの横腹を直撃する。

小さく呻き声をあげてハクは湖に落ちる寸前まで吹き飛ばされる。

「わたしはこんな不器用な自分を変えることなんてできません。」

力がないのならば、わたしは、わたしの世界では生きていけないからです」

悲壮感、そう言えばいいのだろうか。

今の刹那にはそれが満ちている。

すべてに絶望して、失望して、それでもなお縋れるものを探して。最後に行き着いたのは木乃香だったのだろうか。

いや、そうではなかった。

あくまで刹那が固執したモノ、それは

「だから、この世界を“力”で変えます。　護るべきお嬢様の“力”を借りて」

そう言い放つ刹那の背後に、天を突く巨大な光の柱が立ち上った。耳障りな高笑いと共に。

## 最終話 理想、思想、砕ける

どこか遠いところで夢を視ている。

現実ではない、こことは違うどこか別の場所でわたしは戦っている。

その行為にどれほどの意味があるのか。

わからない

わたしの思想にどれほどの影響があるのか。

わからない

そもそもわたしは何のためにこの身体を動かすのか

わからない

およそ、自身がこのまどろみの中で理解に値する言葉はないのか  
もしれない。

だけど、それでもわたしには返す言葉がある。

想いの丈を吐きだすことを望んでいる。

言葉から感じられる念を受け止めることができる。

愚かだと理解しながらも止められないこの衝動に

どうかトドメを刺してくれないか

激しい戦闘がおこなわれる中、一度距離が開き、三人は対峙していた。

三人が三人ともどこかに負傷していた。

ネギならば左腕はだらんと力なく垂れ下がり、骨折を窺わせる状態。茶々丸ならば、関節部への負担が激しく、小さなスパークが起き始めている。一番軽傷なのは意外なことに明日菜だ、彼女は全身に細かい傷を作りながらも致命的な負傷を負っていない。

「みんな、大丈夫？」

それは一重に、ネギとの仮契約で得たアーティファクトの追加効果で魔力を打ち消すと言う代物のおかげである。直接的な殴り合いではなく、明日菜が接近し、それを牽制のために魔法で距離を取ろうと言う千草の攻撃を悉く打ち消し、互いに決定的な一撃を与えられなかったためである。

その点、他の両二名の月詠、小太郎は致命傷を負っていないものの、体力も気も削られてこれ以上の戦闘は難しい状態まで追い込まれていた。

予想以上の健闘。勝ちもなければ負けもないような泥沼の戦い。

「まだまだ、やれますよ」

ネギの魔法使いとしての未熟を補わせたのは、今までの数少ない戦いの経験であり、自身が言った言葉への責任、そして意地だった。例え、どんな一撃をもらったとしても、諦めることなく軽減させる術を駆使し、立ち上がる。その粘りが戦闘経験で大きく上回る小太郎と互角に持っていった要因だった。

「ですが、これ以上長引かせるのも限界です」

事実、茶々丸の機動力は最初の半分程度しかない。どれほど気力があるうとも、その身体の構造上、無理を利かせることができないのだ。

「……ぼくにすべてを賭けてくれませんか？」

苦肉の策。ネギが提案するのは、今撃てる中で最強の魔法で相手を確実に倒すこと。

三人同時に倒すのは困難かもしれないが、それで一人は確実に、二人巻き込めれば僥倖。そういった類のものだ。

しかし、その間に前衛となる茶々丸と明日菜がつぶれてしまっただけは成り立たない。

「あんたを信じるわよ、ネギ」

「霧島先生よりはうまくやれる自信はありませんが」

二人の返事に頷きで返す。

『契約執行・九十秒間！！　ネギの従者、神楽坂明日菜！！』

魔力の加護が切れかかっていた明日菜に、最後とばかりに力を込める。

それとほぼ同時、二人はすぐに距離を詰めに駆ける。

『ラス・テル・マ・ステル・マギステル！　来たれ雷精、風の精！』

これが成功すればこちらの勝ち、ネギはそう判断する。

千草と言われた術師は、小太郎と月詠の二人をバックアップして、

符術で援護している。ということは大技を繰り出すことはない。なれば、ネギの魔法が発動するかどうかがかギとなる。

こちらの前衛はその嫌がらせのような符術を致命傷を負わないようにやり過ごしながら、ぶつかり合い激しい攻防を繰り広げている。

『雷を纏いて、吹きすさべ南洋の嵐』

こちらの前衛が崩れるのが先か、ネギが魔法を唱え終わるのが先か。

時間との戦い。

一分一秒ですら惜しい。

目の前に意識を集中し、今まで戦った最強の魔法使い、エヴァンジェリンに届くくらいの威力を想像する。

(こんなところで躓くわけにはいかない！)

一際、ネギの身体に強い光が宿る。

「千草姉え、防壁を張るんや！！」

絶叫とも取れる怒鳴り声。

反撃の一撃を練るための防壁はじりじりと押されながらもその猛攻を耐え抜いた。

前衛の二人は急造にしては息の合ったコンビネーションを見せ、一撃をもらいながら離脱。

ヨウイス・テンベスターズ・フルゲリエンス

『雷の暴風！！』

耳をつんざくような轟音。

それは前衛として戦っていた二人の少年と少女を巻き込み、後方

で支援していた術師に雷撃の衝撃として喰らいつく。  
悲鳴も絶叫も聞こえない。

後に残るものは何もなく、ただ木々がなぎ倒され焦げくさくなつた大地のみ。

「終わった、の？」

明日菜が呆然と呟く。

両脇には明らかに致命傷を負った小太郎と月詠。

千草は防壁が間に合わなかったのか、直撃したのだろう。その姿はどこにもなかった。

「あれを」

茶々丸の声に反応する。

休む間もない、ネギが魔力切れを起こして目眩がするなか空を見上げる。

そこには曇天を貫く光の柱が突き立っていた。

魔人。

恐らくそう呼ぶのがふさわしいほどの巨軀に、迸る魔力の奔流が重圧となってハクの体を硬直させた。

大岩から立ち上る上半身はいまだに完全体ではないが、アレが完全に復活したら魔法使いのいない本山は壊滅し、西の勢力は大きく衰えるだろう。

「リヨウメンスクナノカミ……」

呆然と呟く。

呼び出される可能性があることは先ほどの会話から察していたし、その前は危惧もしていた。しかし、それはハクの計算よりもかなり早い。

並みの召喚ならば半日はかかるだろうに、木乃香の膨大な魔力がそうさせたのか、セイランが特殊な方法で召喚しているのかは定かではない。

少なくとも今わかることは完全体になるまではまだ時間を要すると言っこと。

「それで、おまえはこの力を使って、どう世界を変えるつもりだ」

目の前の、その力の巨大さを前に言葉を失った少女に問いかける。

「この力で、すべてを、すべての魔法使いを消せばいい」

「消してどうする？ 何をする、何が残る」

「誰からもお嬢様が狙われることがない優しい世界ができる、そうすれば、わたしは」

わたしも友達になれる

必要以上に遠ざけて、打ち解けることを諦めて。

見つけた答えはすべてを消して、護ることをせずに済む世界。

対等になるために選ぶのは、こちらがそちらの立場に落ちるといっこと。

「……そうか」



その考えが、例え敵に操られた一時のものであったとしても、ハクにはそうさせてはいけないと、やらせてはいけないという思考が占める。

被害者の中にはハクも良く知る者が含まれているから。

耳障りな高笑いが聞こえてくる。聞きたくなくてもそれは耳の中に流れ込んできた。

「くく、あははははっ！ ああ、そうだっ！ すべて壊せる、この力を以てすればすぐに終わる！ 君の思想は僕の理想通りに動いてくれる！ 君を選んで正解だった！！」

セイランを包むのは興奮。冷静な鉄面皮の表情は消え去り、目の前の力に溺れる男となった。

「黙れ、くずが。 すぐにお前の首を断ち切ってやる」

視線を向けることもなく、ただ淡々と呟く。そこになんの感情も起きることはない。

いや、憎悪の念くらいは湧いただろうか。

「はは、くく、この状況でそんな面白い事を言わないでくれ！ 今から君たちは元仲間同士でありながら殺し合う！ 最大の余興だ！ まさにこのスクナの復活にふさわしい血に塗れた最高の舞台じゃないか！ 存分に語らってくれよ、その殺し合いの血を捧げてくれ！！」

狂気に酔ったセイランの言葉に反応することはもうない。

あいつは完全にこちらの意図を理解していないし、理解できるも

のじゃないのだろう。

何も掛ける言葉がないままに、再び戦いは始まった。

互いに間合いを測り合いながら、一瞬の隙を窺う。

瞬間、轟というスクナの波動がきっかけとなる。

先に動いたのは刹那。

『神鳴流奥義、斬空閃！！』

気を纏った一振りの攻撃。

その気が刃を滑るように螺旋の渦となってハクに襲いかかる。

【霧島流、後の型 流水の構え】

地を踏みしめ螺旋を真つ向から受け止める。

両腕で円を描きながら猛る気を、妖気で攪拌し霧散させた。

戦いの流れは止まらない。

斬空閃によつて生まれた死角から刹那が現れる。

ハクは動きを止め、その姿に目を見開いた。

『神鳴流奥義、斬岩剣！！』

岩をも断ち切るといわれる剣技、威力は申し分ないが、速度を求められる戦いでは

「あまり使い勝手がいいものじゃない」

その剣筋は確かに速い。だが、あの流れるような剣舞のように洗

練された勢いのあるものとは違う。

故に、避けるのも容易い。

死を宿す刃をぎりぎりまで引きつけ、そしてかがむことでそれを回避する。

この勢いを利用して刹那の間合いの中に飛びこむ。

刹那は長い野太刀を器用に操りながら懐に入り込もうとするハクの侵入を防ぎ、ハクは野太刀をかわさずに受け流しながらインファイトに持ち込もうとする。

ほんの数瞬。

ハクの身体は野太刀では捌けない内側に入り込む。

さながら、それは槍にも矛にもあるいは剣にすら成り得る一撃。

【霧島流、先の型 無手槍撃】

左手から繰り出される掌底。

下半身のバネと体内で練り上げられた気を手に載せて放つ一撃。

「がつ！」

それに耐えきれぬ道理も無く、刹那は後方へと吹き飛ばされる。

更に追撃。

【霧島流、先の型 電光石火】

身体に瞬動を掛けて相手の軌道の上を位置取り、妖気でブーストした踵落として地面に叩きつける。

刹那の身体が大きく跳ねた。気でのガードですら突き破り、霧散

させた一撃はほとんど生身の肉体には堪えるだろう。

刹那の気が弱々しくなったのを感じとる。

もう身体に余計な気が入らないのか、負傷した部分に無意識に気を集めて治療を促している。

刹那の瞳はそれでもまだ明確な意思を見せない。

暴走した感情だけが宿ったままのように見える。

「……術を解けよ、セイラン。もう終わったんだ、刹那に使い道はないだろう」

刹那の状態を確認して、静かにその根源へと視線を向ける。

静かに、少し違う。

湧きあがって止むことのない殺意が嵐の前の静けさをあらわしているだけ。

「関係ないんだよ、関係ないんだ霧島白！ 僕の仲間になったんだ。あとはすべてこちらの思惑通りに動いてくれるように術式は組まれている！ どれだけ意思が強かろうと、この空間でそれを覆すことなんて不可能なんだよ！」

唾をまきちらし、普段からあったどこか冷静な一面はなりを潜め、醜く蔑み笑う男は言う。

この空間で、か

言質も取れた、最初の予測も粗方当たりだった。

なれば、そろそろこの件に関しては幕引き。

後ろに控える大物は、見せ場ということでもう一人に任せようではないか。

「仕事はそれこそ、まだ完遂されたわけじゃない」

裁量は現場のハクに任されている。だが、目的は木乃香の救出。ハクにとつて一番の懸念事項であった刹那を取り返すことで、本当にこの仕事の完遂できるという条件を満たしたことになる。

妖気の高まりによる衝撃。

それは森を揺さぶり、湖面を揺るがす波動となって円状に広がって行く。

刹那はその衝撃にもやはり動くことはない。

『やれやれ、やっと動いていいってわけか？』

「ああ、頼むぞ」

爆発音、それも湖を取り囲む周囲一帯から数え切れないほどの。

「なん、だと？」

瞬時に狂気にさらされていたセイランの顔に冷静さが舞い戻る。空に舞い降りた小さな霸王の姿をその瞳に認め、激怒に顔をゆがめた。

「エヴァンジェリンッ」

喉から出る限界の声を絞り出し、吠える。

「ふむ、都合108の周囲に展開されていた紙切れを目障りだったから排除したのだが……何か不都合でもあったのか？」

あくまで不敵に、白々しい限りの言葉。それはセイランの魔力を高める効果と共に、召喚の儀式の短縮作用、洗脳による強制力を高める役割を担っていた札のことだ。

だからどんなに霧島白が説得の言葉を投げかけようと反発する意思が生まれるシステムだった。

だというのに、それを破壊された。

どうやってそのことを、その位置を看破した？

「これで刹那は完全に元に戻る　とそういうことでいいのかな？」

口の端を歪めて笑う霧島。なんと邪悪な笑みだ、憎々しいまでに憎悪の念しか湧かない。

迂闊だった。

『どれだけ意思が強かろうと、この空間でそれを覆すことなんて不可能なんだよ！』

自身の失言に気付いて、心の中で焦りにも似た何か、感情の嵐が巻き起こる。

それは案に空間を形成する“何か”の存在を意味している。

だが偽装は完璧だったはず。例え一流の魔法使いであろうとこの短時間で見つけられるような代物ではない。フェイトに確かめさせたが見つけるのにかかりの時間を要したのだ、それは間違いない。

セイランが持つ技術の一つとしてある感情制御。認識を阻害させるという魔法使いなら誰でも使える術式を更にランクアップさせた技法による偽装だった。それにこんな不慣れな森の中で108を同時にセイランに気付かれないように爆散させることなど、それこそ常軌を逸している

形成は逆転する。

違う、まだ切り札は残っている。

あの刹那と言う少女にそれは取りつけられている。術式の安定を図るための魔道具。無意識化で大切に扱うように刷り込んである、問題ない。

人の心は変わり易い。それを情報として直接流し込むためにはアンテナとしての役割を持つ道具があれば安泰だ。継続的に術を掛け続ければそれは半永久的なものとなる。

実際、セイランの力だけでは一時の強制的な感情操作にしかならないのだから。

そう、一時しか制御できない。

裏を返せば、やつが油断している今がそのときだ。

ひやりと背中に汗が伝い落ちて行く。

「ああ、だけどまだそいつには役割がある　殺せ」

びくりとも刹那は動かない。

バカな、どれだけ負傷を負おうとも、脳から強制されているんだ。身体が二度と動けないほどに壊されていない限りは。

だが霧島白がそう簡単にアレを壊すはずがない。

「ああ、不思議がるのも無理はない　」

そういつて見せて刹那を、ハクは抱きかかえて起こす。

ふわりと流れ舞うのは漆黒の髪。

それを結いとめていた髪留めからは何の魔力も感じとれない。

催眠系の弱点とも言われる術のかりにくさという特性を読まれていた上での予測。

核となる何かがあることを把握していたとでも言うのか。

「わずかに刹那とは違う、違和感　匂いみたいなものを感じとってな」

次善の策。

保険。

念のためと施しておいたものがこうもあっさり無力化される。

腑に落ちない、どうやって気付いたのか。まさか本当に匂いだけで気付くわけがない。

化物、そう呼ぶにふさわしいのだろうか。

自身よりも遥かに奴は、霧島白という“モノ”は高みにいるのだろうか。

いや、過去となったことに固執するのはやめておくことにしよう。

「……かなり危機的状況みたいやないか、セイラン」

掛けられた言葉にいちいち驚くようなこともしないし、敵から視線を外すような愚かな真似もしない。ただその言葉を耳に入れる。

ぼろぼろになりながらふわりと傍に舞い降りるのは千草。渡しておいた転移符で戻ってきたのだろう。手持ちのコマの中ではそれなりに使えるが、今はフェイトクラスが欲しいところだった。



「召喚の方はあなたに任せます。半端ですが、あのエヴァンジェリンを潰すために多少はスクナの力を使役することを許可します」

指示はそれだけ。他にやらねばならないことがある。  
今はただ、そう。

「はは、あはは、そうか、なるほど理解した、いや納得したよ」

面白い、愉快だ。何事もなく成功したのでは達成感も乏しいものだ。

だが、この刹那を使った作戦自体はもともと成功しなければ別のプランが用意されていた。今、予備のプランにシフトしても大して影響が出るわけでもない。

札を破壊されたのは手痛いが、ここまできたらゴールは目前。  
計画を狂わすモノを完膚なきまでに壊す。

「全部、叩き壊してあげるよ」

この破壊衝動を満たして、やるべき理想を実現するまで。

腕の中でぐったりとしている刹那を後ろに飛び退ってゆっくりと横たえさせる。

「荒っぽいな、お前のやり方は。気付かれなかったから良かったものの」

「そうか？」

ハクが行ったのは単純だ。

事前に札を見つけていたこともあり、それがなんかしらの隠し玉であることを予測していた。実際、人の心を操るなんて代物は薬物でもない限り即効性はない。なれば、それに近い効果を引き出すために補助が必要だと考えたからだ。

魔力を持った札。

それを妖気の塊を衝撃波として飛ばすことで、妖気が打ち消された場所を探せばいい。

場所を探せばあとは簡単だ。ピンポイントで札だけを破壊しなくても、その周辺を破壊すれば防御能力のない札など一瞬で燃え散る。

一度目は大まかな場所を。二度目で討ち漏らすことがないように確認する。

「その髪留めについては？ ……まさか本当に匂いなどと言ったらおまえを見る目が少々変わるが」

エヴァの両腕で肩を抱く仕草に苦笑する。

「刹那と戦つてるときに不自然なまでに庇っていたんだ、少し観察力があれば嫌でも気付くさ。それを二度目の衝撃波で確認したつてもある。匂いと言うよりは魔力、ってやつだな」

最初は刹那が抱える心の隙を解消するための説得が目的だった。

だから攻撃を与える気はなかった。ただ闇雲に無難に反撃の姿勢を見せて牽制していただけだった。しかし、その中で違和感を覚えるほどに庇う仕草があったというだけ。

会話しながら、二人はセイランに対峙する。すぐそばにあの女術師がいることに目を見開く。

だがすぐにそれを思考の外に追い出す。

「まったく、それだけの仕事でワタシを呼びつけるとはな」

「おまえにしかできないだろう？ それに何かしらの次善策があった場合、一度に全部壊せないと怖かったからな」

エヴァに動揺を見せることなく、軽口をたたき合うことで冷静さを取り戻す。

セイランの表情はない。どんな感情を秘めているのか、何を思っているのか、伝わることはない。

いや、伝わる必要もない。

「全部、叩き壊してあげるよ」

最初から最後まで嫌悪感の塊だった。

それはこいつが発する術の影響だったのだろうか。

それともこいつの持ちうる何かが、ハクに嫌悪をもたらしたのか。

どうでもいい。そんな思考は不要。

「ふん、ワタシはあっちのでかい方に行くぞ。先ほどから不快な波動を受けてむかついていたんでな」

エヴァのその言葉に何の応対も返さない。万が一にはエヴァが担当する予定だった。むしろその役割すらハクにとっては織り込み済みの作戦。不服など何一つない。

セイランとハク。

二人、互いに語らうことなど何も無い。

弾けるようにセイランに突撃。

もつとも自分の中で練度の高い一撃を見舞う。

掌底を与えた感触を……得られない。

横合いから見舞われた回し蹴りに頭を強く打たれる。

「別に僕が弱いわけじゃないんだ。ただ策を弄すれば楽に事態が進められる、それだけだよ？」

だから勘違いするなどでも言いたいのか。

口の中にじわりと湧いた鉄の味。それを唾と共に吐き捨てる。

「ずるがしこいな」

「ずるがしこいのは狐の特権だろう？　ぼくは違う」

催眠系魔法の延長、存在の認識をすり替えている　そう予測を立てる。

騙されている、脳が。

だったらやりようはいくらでもある。

ほざけ、口の中で呟きながら、練りあげた妖気。

複数の弾丸として散弾掌を展開させる。目を覆うほどの光をセイランに向かって殺到させる。

「遠距離から仕留めようってこと？　だったら決め手に欠けるよ！」

「魔法の射手での迎撃。」

サキタ・マギカ

障壁を展開させるのが理想だったが、それも手の内の一つに過ぎない。

すでにこの身は次の展開に動き出しているのだから。

「目くらましか！」

「砕ける」

叩きこもうとした一撃は棧橋を盛大に砕き水柱を上げる。水の飛沫が盛大に上がる中、セイランはハクの姿を探す。

一瞬、セイランの目の前に影が落ちる。

それに気付いた瞬間、手痛い一撃を見舞わせる反撃の構えを取る。

「それも目くらましだ」

声。どこから？

早く動けともどかしいながら振り返ろうとする。

迎撃の態勢を整えることは不可。

【霧島流、先の型 影縫い】

背後、背骨を貫く勢いで渾身の一撃を見舞われる。

隙がなければ造る。造れなければ何度でも。

「化かし合いは得意なんだ」

重い一撃を見舞われてもなお、セイランは地面に膝をつくことはない。

瞳は揺れ、支える足もどこか頼りない。それほどまでにダメージ

は大きい。

むしろ立っている方が奇跡。人体の急所だ、意地なのか頑強なのか、譲れない何かがセイランを倒れさせないのか。

「ふ、くく、ああバカらしいな」

口元の血を拭いながら、セイランは口角を釣り上げる。

それは笑ったのか、嘲ったのか、どちらにせよ自嘲的な笑みだった。

「バカらしいっいたらありはしない。無様だ、無様すぎて笑えてくるよ」

「……………」

返す言葉は何もない。

今までと同じ、ただ冷酷に敵を仕留めるだけ。ハクが手を出さないのは、何か仕掛けてくるかもしれないと言う、漠然とした勘を働かせているからにすぎない。

「これ以上長引かせるのも時間の無駄だからさ、次で決めないか？」

畏か。しかしこちらもあり長引かせられるほど余力があるわけではない。まだスクナという大物が残っている。

「炎だ、すべてを焼き尽し、すべてを呑み込む、現世に置いてこれ以上破壊に適した魔法なんて存在しない。そうだろう？ 一度は君も炎に包まれて死を覚悟したはずだ、思い出してごらんよ」

炎。そうだ、自分は確かにセイランの炎の中で決死の覚悟をした。あれがもう一度、放たれるということ。

おそらく、彼の中で必殺とも取れる一撃。

「言っただけでなかったか、炎には少なからず縁があると」

恐怖がないというのは嘘だ。あの火炎の檻に呑み込まれればただでは済まない。

だが、最初から覚悟が決まっていればやれる選択肢など自然と狭まる。

右腕を掲げて見せる。

「また右腕を犠牲にする、と。今度はそう簡単に行くかな？ 君は灼熱に焼かれて頭を両腕を、胴を足を内臓を、およそ君の体のすべてを焼き尽くされる」

セイランの炎、いや、魔法か。その性質は大体理解していた。それは一度自身の体内に通して分解したからこそ言える。

それがなければ、とんでもない大馬鹿か、人の話を信じないくらいに自分に自信を持ったやつでない限り、かなりの手痛い一撃を見舞われるだろう。

だが。

「まさか、俺はただ、それ以上に凄い炎を知っているっただけだ」

視線が交錯し、絡まり合う。

セイランの魔力が異様に高まる。それはあのおよそ以上の量だ。

「炎に属する全ての粒子よ、我が糧に呼应し敵を喰らえ……」

ハクも負けじと身体に集められるおよそ最大の出力で妖気を掻き

集める。

自身の技を具現化するには、ただの妖気の塊と言っただけではまだ足りない。

それはイメージなんて生易しいもので形成できる技ではない。

視る、触る、嗅ぐ、感じとれるくらいに精密な経験がなければ為し得ることができない。

熱が集まる、形を為す

それは掲げられた右腕に収束していく。バラバラに掻き集められたものが一つの方向性をもって集う。

具現を過ぎ超え、世界に映す

右腕は赤銅色に鈍く光り、痛めていたはずの右腕の感覚はなくなっていく。

いや、最初から神経など不要。それほどの威力を秘めるのに代償がないということなどあり得ない。

炎に対するは炎。

互いの炎が呑み込み込みあい喰らいあう姿を、両術者共に感じとる。魔力の奔流ではなく、空気の熱によって肌をチリチリと焼く。

それは霧島流ではない、ただハクとしての技。

爆ぜる

【狐火・焰】  
きつねび・ほむら



『インフェルノ地獄の火炎！！』

ハクの右腕から閃光にも似た量の蒼炎が噴き出す。形を持たないものでありながら、蒼炎は獣のように猛りその勢いを増す。

対象を喰らいつくすために、確かな意思とベクトルをもってセイランに舞い向かった。

迎え撃たれる炎は確かに蒼炎と向き合い、混じり合い、その身を喰い合う。

瞬きの間の拮抗。

だがそれもほんの一瞬に過ぎない。

ハクはこの結果を理解していた。

セイランも予測はしていた。

蒼炎が紅い業火を蹂躪する。

セイランの魔法は、感情に働きかけるといふその特質を持った術でブーストされている。

魔法を受ける本人がより強いものを想像すれば、その想像の通りの現象が反映されて、少ない魔力で奇跡すら具現できうる。

ハクが喚起されたモノはおよそ自身の炎には及ばないという確信。

「知っていて……知っていたから勝負を挑んできたのか」

独白に似た呟き。諦念という想いが籠っている。

“相手に負けをイメージさせる”、それさえできればかなりの確

率で勝利を得られる。

だが仕掛けがわかれば、それはこんなにも簡単に圧倒的な力にねじ伏せられる。

「喰らえ」

それに応えることはなく、ただハクの蒼炎は意思に従って一人の男を飲み干した。

何を躍起になることがあるのか。

事態はほぼ完了。

ハクは必ずあのいけすかない術師を倒すだろうし、桜咲に掛けられていたであろう術も解呪されただろう。

問題は桜咲が今までのことを覚えていたら、という場合くらいか。裁量がこちらにあるとはいえ、傍から見ても義務感と使命感で生きていたあの娘が素直にこちら側に戻ってくるとは考えにくい。

「しかし、それを今考えてもいたしかたない、か」

目の前にいるのは“リョウメンスクナノカミ”。かつて千の呪文<sup>サウザンドゥーム</sup>の男と謳われた男が封印したという伝説の鬼神<sup>スター</sup>。

「おいおい、どう見ても手加減して封印してやったって感じだろうに」

まだ半身しか出ていないとはいえ、その力はある<sup>アラルブラ</sup>の紅き翼のメンバ

「であれば、余力を残したままでも充分十全に塵に還すことも可能だったろう。」

「ワタシの仕事は再度封印すればよいか、もつともこの半端な状態で倒すと言うよりはまた封印に押しこむ方が手間が省ける。」

「はっ、闇の福音といえど、このスクナの前では」

耳に入れる価値のない情報は切り捨てる。

肩元に近衛と見られる少女、それにスクナの主導権を女術師が持っているらしいが。

「くだらない」

「な、に」

影から影への転移魔法。近衛を抱きかかえ、すぐに離脱。

その姿を認めたスクナによる暴力的な魔力の塊がエヴァに向かって放たれる。

「ワタシに刃向かうのならば」

ただ手のひらをかざす。少々見栄を張った仕草だが、魔力は全開だ。

その一撃はあえなく障壁に阻まれるが、かなりの衝撃にエヴァも吹き飛ばされそうになるがこらえた。

「あの“バカ”を千人くらい持ってこい!!」

全ての命ある者に等しき死を

其は安らぎ也

久しぶりの全力。先ほどの戦いの比ではないほどに高ぶった魔力。それをぶつける快感、放てる喜び。それは一重に、一人の男のおかげだということ。

おわるせかい

かざした手をそのままに、先ほどの衝撃を振り払うように優雅に操る。

「永遠に封印の狭間で」

噴出する冷氣。それは渦を巻き鬼神の身体へとまとわりつく。絶対零度、それは魔力で覆われた強靱な肉体ですら細胞単位で氷漬けにし、巨大な氷のオブジェを作り出す。

「眠れ」

パチンツと夢から覚めるような小さな音。それを合図にするかのように鬼神と謳われた半身は、小さな巨人の前に為すすべもなく砕け散った。

長い、長い一日が終わった。

ほんの数日間に、激動のような時を過ごした。

まだ休む時ではない。少なくとも、今はまだ。

気絶していた刹那が目を開け、そしてそれを覗き込んでいるハクの姿を見る。

互いに何も口には出さない。

だが、このままではいけないとハクはわかった。

わかってから気付いた。自分はいつもこんな感じだな、と。

「やっと目が覚めたか、大馬鹿野郎」

「……あ、え？」

視線は泳いだまま、声にならない声を上げる。

セイランに操られていた時のような攻撃的な意思はないらしい。

いや、あつては困る。

しかし根本的な、刹那の心の問題は解決できていない、と思った。

「少しはやんちゃした自覚、あるだろ？」

「……わたしは」

ぼろぼろの身体になりながら、目に涙を浮かべている。  
それは消え入りそうな、とても儂い声だ。

「愚か者だ」

ぽつりと、零れた声を拾い上げるようにそつと抱きしめた。  
ハク自身が傷つけた身体ではあるが、いたわるように優しさを込めて。

片腕が使えないことがこんなにももどかしいと思っただことはない。

「また、一人で勝手に暴走して、迷惑をかけた。化物の身でありながら、なんと浮ついたことを」

友達などと。

「どこにも居場所はないというのに」

「ある」

刹那の嘆きが虚空に消える前に想いを吐きだす。

居場所はある。きつく、力を込めて抱く。

「俺が、木乃香が必要としてるから、だから」

「だから、また三人で」

仲良く、やっつけていけばいい



## エピローグ 狐に化かされた！

「次はあつち見にいきたいわ〜」

「ちよ、このちゃん、待って！」

小さくため息を零す。

両腕の小さな重さに引きづられるように、このバカ騒ぎの中を歩いて行く。

すれ違う者たちはみな、動物やらマスコットやら浮かれた格好をしている。

そんなわけでハクも堂々と狐耳やら尻尾やらを晒す……わけにはいかずに適当に犬の耳をつけたりなどしている。

麻帆良祭。

そんな中で仲良く三人は闊歩しているわけだが。

「あんまり引つ張るなって木乃香。あたた、刹那、うで！折れるから！強く引つ張りすぎて折れるから！」

「そんな簡単に折れるようでは仕事は務まりませんよ？」

「そうやそうや、仮にもうちの護衛、つてわけなんやからきちんと護ってもらわんと給料出してあげへんからね〜」

「なっ、横暴だぞそれは！労働組合に訴える……っつうそ！ほんとうそだから、お願いだからそこで野太刀とか引つ張り出さないで刹那さん！」

木乃香はくすくすと楽しそうに、それは本当に幸せそうに頬を緩める。



刹那もどこまでが冗談かわからないようなことをしては真面目くさって「冗談です」なんて言っていて笑う。

それにつられてハクも笑う。本当に、それは温かい穏やかな一幕。

あれから色々な問題が山積みだった。

ハクの右腕は、治療魔法のエキスパートを以てしても全開には至らずに繋ぎとめることだけには成功し、長いリハビリの末にようやく動きが今のものについてこれるようになった。

ネギたちは特に問題はなかったが、茶々丸の破損について生みの親という科学者の卵が学園長に破損請求をしたらしい。

「次は飛行船やなつ、空の上から街を見下ろすのってすごいんやでえ」

ね？と刹那にウィンクして見せる木乃香。刹那も刹那で困ったような、けどまんざらじゃない笑顔を浮かべている。

最大の敵、セイラン率いる反関西呪術協会勢力の一部を取り逃したが、そのリーダーであるセイランはこの手で屠ったということ。スクナはエヴァがその膨大な魔力で殲滅したらしいが、その姿をハクは直接おがんだわけではない。

自身における最大で本当の切り札を切ったあとはほとんど意識が飛びかけていた。意識がはっきりとするころにはスクナは粉々に砕けて再封印を施されていたのだから。

そのことを言ったらエヴァに散々ぐちぐち言われたのは御愛嬌。

あれからエヴァは気ままに旅に出るなんて言っただきりなかなか連絡を寄こさない。たまの連絡では世界中あちこちの絵葉書を送ってくるのだが、毎回最後の文に遊びに来いと誘われている。

世界各地を巡ってるやつに会いに行くには少々時間が足りないかな。

「刹那、あんまり人目があるところで木乃香を空に連れて行くなよ？」

「わ、わたしとてそうそうそんな迂闊なことはしません」

「目が泳いでるけどな……まあいいけど」

一番厄介だったと言うのは、やはり刹那の処遇だろうか。

しかし、内々に問題を処理できたこともあり、その事實は詠春の手練手管の情報操作によってすべて抹消された。本人は笑いながら「こんなことばかり得意になるとどこかの狸のようになってしまいますけどね」とか言っていたが、詠春さんとあの爺さんでは詠春さんの方が数倍マシな気がしないでもない。

刹那自身、木乃香の護衛を辞退するかと思われていたが、実際は違った。

むしろもう一度自分から志願して、そして今現在こうして過ごしている。

そこに至る過程は、記さなくてもいいだろう。

「ハク、いつまで待たせる気なん？」

「ん、ああ悪い。ついぼーっとしてた」

「最近多いですね、そういうこと」

「いろいろと考えごとを、ね」

「むーっと眉間に皺寄せると、すぐに年取るんとちやうど？」

「はは、仮にも俺は」

狐憑きだ、そろそろ年を取ることなんてないぞ。

二十年来の学園祭で、三人は年がいなくはしゃいで回ったぞ。

## エピローグ 狐に化かされた！（後書き）

### エピローグ

まああれから紆余曲折あってこんな感じになりましたという。  
もっとタイトル通りのことが出来れば良かったんですが、思い浮かぶのがバッドエンドくらいのもので（汗

とにもかくにも、

今まで読んでくださって、本当にありがとうございました！

適当に書き散らしを始めたのが三カ月前。

精々小説のいろはをかじっていただけの作者にとって、始まりからどこに収束させて終わらせるのが皆目見当もつかないという現状のまま、気の向くまま時間の許すままに書き続けていました。

本当に最初は気まぐれで、プロットとかそういうものは一切なくてただハク君が麻帆良に行って何かするくらいしか考えてませんでした（汗

ようやく形になったのはエヴァと戦うくらいから、でしょうか。作者的にはですが。

というか、修学旅行編がgggg過ぎて少々笑えないことになり、描写は足りてないし、だけどこれ以上詰めると話進まないし、という負の連鎖に陥りました・・

修学旅行編……ここがかなり鬼門でした。

セイラン……なんで出てきたし。。

かなり無理がある設定を連発したせいで、読者の皆様が強い反感を

抱かれたのではないかと戦々恐々としながら筆を走らせ（タイピングですが）続けて、あれやこれやと纏めるために四苦八苦し、なんとか形になったようなならないようなという状態で完結させました。

もしかしたら、これで完結？台無しwって思う方もいるかもしれませんが平にご容赦を……

ですが、物申したいことがあれば感想の方でお願いします。

もし次回筆を取ることがあれば、まずプロットを組もうと…そう思いました。

文章力は、取り敢えず書いたり読んだりしないと無理と言うことなので地道に（汗）書くならシリアス路線まっしぐらなレギオス辺りに手をつけ出すかもしれません。。

最後に、こんな拙い作品でしたが、見捨てないで読んでくださった読者の皆様、一度でも読んでくださったすべての読者の皆様に感謝を

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9284n/>

---

狐に化かされた！

2010年12月25日03時20分発行